

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XII

西 部 遺 跡 I

2005

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XII

せいぶ いせき I

2005

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海東北自動車道は、新潟市を起点とし、山形県を経て秋田県に至る高速自動車道です。新潟県内では平成14年度に北蒲原郡中条町の中条インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海東北自動車道の中条一朝日間は、日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。しかし、公団の民営化に伴い、整備の優先順位付けに「採算性」がより重視され、同区間の完成がさらに遅れる事態となることも懸念されています。

同区間は、この地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等の「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この高速自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「西部遺跡」の調査報告書です。調査の結果、平安時代（古代）から江戸時代（近世）にかけての集落跡であることがわかりました。遺構は、井戸、溝、土坑、掘立柱建物、ドット、凹地遺構、畑跡が検出されました。井戸は底面に石を敷いたものもありました。遺物は、中世では、珠洲焼や輸入陶磁器などのほか、漆椀、槽などの木製品も出土しています。古代では、土師器、須恵器が出土しています。

本県における沖積地の発掘調査は、まだその端についたばかりです。今回の調査結果が、考古学研究者だけではなく、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々や地元区長並びに神林村教育委員会には、多大なご協力とご援助をいただきました。また、日本道路公団北陸支社および村上工事事務所をはじめとして、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成17年7月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例　　言

- 1 本書は新潟県岩船郡神林村大字牛屋字西部 1192 番地ほかに所在する西部遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、日本海東北自動車道（以下、日東道）建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託したもので、新潟県教育委員会が財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を委託し、埋文事業団の管理・監督のもと有限会社山武考古学研究所（以下、山武考古学研究所）が実施した。調査年度・調査体制については第Ⅰ章に記した。
- 3 整理及び報告書作成にかかる作業は埋文事業団の指導のもと山武考古学研究所が行った。整理年度・整理体制については第Ⅰ章に記した。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料は新潟県埋蔵文化財センターに保管している。注記は西部遺跡を示す記号として、「西フ」を記し、その後に出土地点及び層位を併記した。
- 5 本書で示す方位はすべて真北である。作製した図面のうち既成の地図を使用したものについては、それぞれに出典を記した。
- 6 遺物番号は通し番号とし、観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 7 自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 8 木製品については山田昌久氏（東京都立大学）のご教示を得た。
- 9 引用文献は著者及び発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし第VI章については、文末にまとめた。
- 10 本書の記述は鈴木俊成（埋文事業団調査課課長代理）、折原洋一（山武考古学研究所調査研究室係長）近江屋成陽（山武考古学研究所調査研究室調査研究員）、間宮政光（山武考古学研究所調査研究室調査研究員）、千葉孝之（山武考古学研究所調査研究室調査研究員）が分担執筆したもので、分担の内容は以下の通りである。このほか、自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。本書の編集は折原、近江屋が行った。
第Ⅰ章 1・2 C(鈴木)、2 A(千葉)、2 R(近江屋)
第Ⅱ章 (近江屋)
第Ⅲ章 1(間宮)、2・3(近江屋)
第Ⅳ章 (近江屋)
第Ⅴ章 (折原)
第VI章 (パリノ・サーヴェイ株式会社)
第VII章 貢構(近江屋)、遺物(折原)
- 11 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・助言を得た。厚く御礼を申し上げる（敬称略、順不同）。
岩瀬 由美　　金子 拓男　　小嶋 芳孝　　小林 昌二　　小林 弘　　高濱 信行
田中 真吾　　田辺 早苗　　鶴巻 康志　　藤田 邦雄　　水澤 幸一　　向井 裕知
八重樫忠朗　　矢田 俊文　　山田 昌久　　山本 信夫　　横山 勝栄　　吉岡 康暢
荒川沿岸土地改良区　　神林村教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整埋作業	2
A 確認調査	2
B 本発掘調査・整理作業	4
C 調査・整理体制	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	11
1 グリッドの設定	11
2 基本層序	11
3 造構・遺物の検出状況	13
第Ⅳ章 遺 構	14
1 基本方針	14
2 遺構各説	15
A 古代	15
1) 概要	15
2) IX層相当の遺構	15
3) VII層相当の遺構	17
B 中世	22
1) 横糞	22
2) 検出された遺構	22
C 近世	35
1) 概要	35
2) 検出された遺構	35
第Ⅴ章 遺 物	37
1 概要と基本方針	37
2 遺物各説	37
A 古代	37
1) 分類と記述方法	37
2) IX層相当の遺物	38
3) VII層相当の遺物	39
B 中世	40
1) 記述の方法	40
2) 出土遺物	40
C 近世	48
1) 出土遺物	48

第VI章 自然科学分析	49
1 試料	49
A 土層観察及び試料採取	49
B 分析試料	50
1) 古環境復元 (堆積環境・古植生)	50
2 分析方法	52
A 放射性炭素年代測定	52
B 硅藻分析	52
C 花粉分析	52
D 植物珪酸体分析	53
E 微細物分析	53
F 樹種同定	53
G 土壤理化学分析	53
3 結果	54
A 放射性炭素年代測定	54
B 硅藻分析	54
C 花粉分析	57
D 植物珪酸体分析	59
E 微細物分析	59
F 樹種同定	63
G 土壤理化学分析	65
H 岩石肉眼鑑定	66
4 考察	66
A SD521の堆積環境	66
B 古植生	66
C 栽培植物の検証	68
D 植物資源利用	69
E SK1043の用途及び内容物	70
F 石材利用	70

第VII章 ま　と　め

1 古代	75
A IX層相当の遺構・遺物	75
B VI層相当の遺構・遺物	76
2 中世	76
A 中世の遺構・遺物	76
3 近世	79
A 近世の遺構・遺物	79
《要 約》	81
《引用・参考文献》	82
《観察表》	84

挿図目次

第1図	確認トレーニング位置図(1)	3	第10図	遺物分布図	13
第2図	確認トレーニング位置図(2)	3	第11図	中世井戸規模グラフ	24
第3図	確認トレーニング位置図(3)	3	第12図	1・6地点の模式柱状図	51
第4図	痕跡周辺の地形概念図	6	第13図	主要珪藻化石群集	57
第5図	漁師郡絵図	7	第14図	主要花粉化石群集の層位分布	57
第6図	周辺の地形	9	第15図	植物珪酸体群集の層位分布と珪化組織の産状	60
第7図	周辺の遺跡分布図	10	第16図	自然科学分析写真(1)	73
第8図	グリッド設定図	11	第17図	自然科学分析写真(2)	74
第9図	基本土層柱状図	12			

表目次

第1表	放射性炭素年代測定結果	54	第8表	樹種同定結果(1)	64
第2表	曆年乾正結果	54	第9表	樹種同定結果(2)	64
第3表	珪藻分析結果(1)	55	第10表	土壤理化学分析結果	66
第4表	珪藻分析結果(2)	56	第11表	石材鑑定結果	66
第5表	花粉分析結果	58	第12表	器種別石材組成	66
第6表	植物珪酸体分析結果	60	第13表	中國輸入陶磁器時期別表	78
第7表	微生物分析結果	61	第14表	造構別出土遺物時期別表	78

観察表目次

別表1	古代(Ⅸ層)土坑観察表	84	別表11	中世土坑観察表(2)	87
別表2	古代(Ⅸ層)溝観察表	84	別表12	中世溝観察表	87
別表3	古代(Ⅷ層)土坑観察表	84	別表13	近世井戸観察表	87
別表4	中世掘立柱建物観察表(1)	84	別表14	近世集落遺構観察表	87
別表5	中世掘立柱建物観察表(2)	85	別表15	近世溝観察表	87
別表6	中世掘立柱建物観察表(3)	85	別表16	近世凹地遺構観察表	87
別表7	中世掘立柱建物観察表(4)	85	別表17	土器・上製品観察表	88
別表8	中世掘立柱建物観察表(5)	85	別表18	石製品・金属製品観察表	94
別表9	中世井戸観察表	86	別表19	木製品観察表	95
別表10	中世土坑観察表(1)	86			

図版目次

図版 1	南北区遺構全体配置図	古代区・堀層相当	図版 2b	遺構個別図(6)SK1032・1033・1036・1037・1039 SK1041・1042・1043・1047・1048
図版 2	南北区遺構全体配置図	中世・近世	図版 26	遺構個別図(7)SB528
図版 3	北区遺構全体配置図	中世・近世	図版 27	遺構個別図(8)SB529・530
図版 4	南北区	古代区層相当遺構分割図(1)	図版 28	遺構個別図(9)SB531・532
図版 5	南北区	古代区層相当遺構分割図(2)	図版 29	遺構個別図(10)SE017・019・021・040
図版 6	南北区	古代堀層相当遺構分割図	図版 30	遺構個別図(11)SE046・047・052・053・055
図版 7	南北区	中世遺構分割図(1)	図版 31	遺構個別図(12)SE057・062・064
図版 8	南北区	中世遺構分割図(2)	図版 32	遺構個別図(13)SE068・070・071, SK107
図版 9	南北区	中世遺構分割図(3)	図版 33	遺構個別図(14)SE077・081~084・095
図版 10	南北区	近世遺構分割図(1)	図版 34	遺構個別図(15)SE085・094・097
図版 11	南北区	近世遺構分割図(2)	図版 35	遺構個別図(16)SE102・104・110・161・229
図版 12	北区	中・近世遺構分割図(1)	図版 36	遺構個別図(17)SE262・437・511
図版 13	北区	中・近世遺構分割図(2)	図版 37	遺構個別図(18)SK002・003・005・009・014・020 SK034・043
図版 14	北区	中・近世遺構分割図(3)	図版 38	遺構個別図(19)SK054・SE059・SK066・069・066 SK098
図版 15	北区	中・近世遺構分割図(4)	図版 39	遺構個別図(20)SK108・486, SD024~028・041 SD042・049・078・109・474
図版 16	北区	中・近世遺構分割図(5)	図版 40	遺構個別図(21)SD109・159・190・515・521, SK508
図版 17	北区	中・近世遺構分割図(6)	図版 41	遺構個別図(22)溝内遺物出土状況SD024~027 SU041・049・109
図版 18	北区	中・近世遺構分割図(7)	図版 42	遺構個別図(23)SE090, SX099
図版 19	北区	中・近世遺構分割図(8)	図版 43	遺構個別図(24)SE092, SX100
図版 20	横横断面図(1)	SK1058・1065・1066・1068・1069		
図版 21	遺構個別図(2)	SK1070・1071, SD1052・1055		
図版 22	遺構個別図(3)	SK1001~1009		
図版 23	遺構個別図(4)	SK1010・1011・1014~1017・1020		
図版 24	遺構個別図(5)	SK1021・1023・1025・1028~1031・1040		

- 図版 44 遺構個別図(25)SK001・004・010・023・520
図版 45 遺物(1)SD1062(1)・古代Ⅷ層相当遺構外(2～36)
図版 46 遺物(2)古代Ⅸ層相当遺構外(27～29)、
SK1003(30・31)・1005(32・33)・1008(34)
SK1009(36)・1010(37)・1011(38)
SK1017(39・40)・1036(41～45)
古代Ⅹ層相当遺構外(46～51)
図版 47 遺物(3)SB529(52)・531(53～55)、SE017(56)
SE019(57)・021(58・59)・040(60)
SE046(61～71)
図版 48 遺物(4)SE046(72～77)・047(78)・052(79)
SE053(80)・055(81)
図版 49 漢物(5)SE037(82～88)・062(89・90)
SE064(91・92)・068(93～96)
図版 50 遺物(6)SE068(97)・071(98～101)
SE077(102～105)・083(106～111)
図版 51 遺物(7)SE094(112～123)
図版 52 遺物(8)SE094(124～129)
図版 53 遺物(9)SE097(130～133)・104(134・135)
SE110(136)・262(137～140)
SE437(141)・SK005(142～145)
図版 54 遺物(10)SK005(146・147)・014(148)
SK020(149)・034(150)
SK043(151～153)
SK054(154)・SE059(155・156)
SK066(157)・069(158)
SK086(159)・098(160)
図版 55 遺物(11)SK108(161～169)・486(170)、
SD006(171～174)・016(175)
SD024(176～183)
図版 56 遺物(12)SD024(184～199)
図版 57 遺物(13)SD024(200～202)・025(203・204)
SD026(205・206)・027(208～210)
図版 58 遺物(14)SD027(211～213)・041(214・215)
SD049(216～219)・109(220)
SD490(221～228)
図版 59 遺物(15)SD490(229～234)・515(235・236)
SD521(237～239)・中世遺構外(240～263)
図版 60 遺物(16)中世遺構外(264～272)・SX001(273)
SK010(274)・023(275)
SE090(276～279)
図版 61 遺物(17)SX099(280～282)・100(283～308)
近世遺構外(309～312)
図版 62 遺跡の位置
図版 63 調査区遠景・全景 中・近世
図版 64 南区古代理・Ⅸ層相当全景
図版 65 漢構個別写真(1)SK1058・1065・1066・1068・1069
図版 66 遺構個別写真(2)SK1069・1070・1071、
GD1052・1055・SK1001
図版 67 遺構個別写真(3)SK1002・1003～1006・1037
図版 68 遺構個別写真(4)SK1007～1011
図版 69 遺構個別写真(5)SK1014～1017
図版 70 遺構個別写真(6)SK1018 1020 1021 1023 1025
SK1040
図版 71 遺構個別写真(7)SK1020・1028～1031・1040
図版 72 遺構個別写真(8)SK1032・1033・1036・1039・1041
図版 73 遺構個別写真(9)SK1041・1043 1047 1048
図版 74 遺構個別写真(10)SB528・529
図版 75 遺構個別写真(11)SB530・531・532
図版 76 遺構個別写真(12)SE017・019・021
図版 77 遺構個別写真(13)SE040・046・047
図版 78 遺構個別写真(14)SE052・053・055・057
図版 79 遺構個別写真(15)SE062・064・068
図版 80 遺構個別写真(16)SE070・071・077・081・SK107
図版 81 遺構個別写真(17)SE082・083・084・085・094・095
図版 82 遺構個別写真(18)SE094・097・102・104
図版 83 遺構個別写真(19)SE110・181・229・262・437
図版 84 遺構個別写真(20)SE511・SK002・003・005
図版 85 遺構個別写真(21)SK009・014・020・034・043
図版 86 遺構個別写真(22)SK054・066・069・SE059
図版 87 遺構個別写真(23)SK086・098・108・486、
SD006・016
図版 88 遺構個別写真(24)SD024～028・041
図版 89 遺構個別写真(25)SD041・042・109・490
図版 90 遺構個別写真(26)SD521・SE090・092・SK099
図版 91 遺構個別写真(27)SE090・SK520・100
図版 92 遺物(1)SD1052(1)・古代Ⅷ層相当遺構外(2～26)
図版 93 遺物(2)古代Ⅸ層相当遺構外(27～29)、
SK1003(30・31)・1005(32・33)
SK1008(34・35)・1009(36)
SK1010(37)・1011(38)・1017(39・40)
SK1036(41～45)、
古代Ⅹ層相当遺構外(46～51)、
SE059(52)・SE051(53～55)
図版 94 遺物(3)SE017(56)・019(57)・021(58・59)
SE046(61～71)
図版 95 遺物(4)SE046(72～77)・047(78)・052(79)
SE053(80)・055(81)・057(82～87)
SE062(88・90)・064(91・92)
図版 96 遺物(5)SE068(93～97)・071(98～103)・077(104)
SE083(106～109)
図版 97 漢物(6)SE094(112～122)・097(130～133)・
SE101(134)・110(136)・262(137～140)
SE437(141)
図版 98 遺物(7)SK005(142～147)・014(148)・020(149)
SK034(150)・043(151～153)・054(154)、
SE059(155・156)・SK066(157)・069(158)
SK086(159)・098(160)
図版 99 遺物(8)SK108(161～169)・486(170)、
SD006(171～174)・016(175)
SD024(176～179)
図版 100 遺物(9)SD024(180～195)
図版 101 遺物(10)SD024(196～202)・025(203・204)
SD026(205・206)・027(207～209)
図版 102 遺物(11)SD027(211～213)・041(214・215)
SD049(216～219)・109(220)
SD490(221～228)
図版 103 遺物(12)SD490(229～234)・515(235・236)
SD521(237・238)、
中世遺構外(240～259)
図版 104 遺物(13)中世遺構外(260～272)・SK001(273)
SK010(274)
SK023(275)・099(280～282)、
近世遺構外(309～312)
図版 105 遺物(14)漆紙 木製品・SE040(60)・057(66)・077(105)
SE083(110・111)・094(123～129)
図版 106 遺物(15)木製品・一字一石経・SE104(135)・SD521(239)、
SE090(276～279)・SK100(283～308)
図版 107 遺物(16)SE017出土青磁

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

日本海東北自動車道（以下、日東道）は新潟市から秋田県小坂ジャンクションに至る総延長322kmの高速自動車道である。新潟県側は新潟空港・中条インター間が平成14年に完成している。中条インター以北は朝日インターまで平成元年および平成3年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条・朝日インター間の第13次区間は、平成10年12月に施工命令が出された。これを受け、道路公団北陸支社（以下、道路公団）と新潟県教育委員会（以下、県教委）の間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

分布調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成11年度に中条・朝日インター間で実施した。調査の結果、神林村以北では道路法線上に5か所の遺跡（新発見も含む）と15か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。本遺跡は平成2年に県教委が実施した遺跡詳細分布調査で発見されたもので、後述する確認調査を経て、遺跡範囲が拡大した。

確認調査は、平成13年4月16日から4月26日と平成14年10月15日から11月15日の2回に分けて実施した。調査対象面積は93,920m²で、91か所の試掘坑を設定し、合計3,211m²を調査した。調査方法は車機（バックホー）を用い、地表から最深3.5m前後まで掘り下げ、その間、人力で遺構・遺物の有無を精査し、土層の堆積状況も記録した。調査の結果、対象範囲に西部遺跡のほか、新たに縄文時代から弥生時代の遺跡を確認し、小字名から中部北遺跡として登録した。

本遺跡では中世と古代の2枚の生活面を確認した。中世は耕作十直下に遺物包含層ないし遺構確認面が存在し、遺物（珠洲焼・土師器・陶磁器・砥石など）・遺構（井戸・土坑・ピット・溝など）を検出した。古代（9世紀末～10世紀）の遺物包含層は中世面下50cm前後に存在するシルト層で、遺物（土師器・黒色土器・須恵器など）が出た。遺構確認面では十坑・ピット・溝などを検出した。

確認調査の結果、西部遺跡の本発掘調査面積を47,060m²（中世14,500m²・古代32,560m²）としたが、その後（平成14年）、高速自動車道早期供用のため、当面は暫定2車線部分に調査範囲を限定することが決定され、この部分の30,800m²（中世10,000m²+古代20,800m²）が本発掘調査対象となった。

平成15年10月1日の道路公団・県教委および埋文事業団との二者協議で道路公団が示した平成16年度の調査要望は膨大なものであった。しかし、この調査要望も「民営化」や「事業の見直し」などの諸問題をかかえる道路公団にあっては確定的なものではなかった。10月8日、県教委と埋文事業団は平成16年度の受託事業について協議を行った。そして、日東道建設が決定し要望どおりの調査量が提示された場合、現調査体制ではこれに対応できることから、専門職員の増員を求めるが、それが望めない時は、日東道の調査に限って民間調査機関に全面委託するという方針が出された。翌年の1月8日、国土開発幹線自動車道建設会議が終了し、日東道は道路公団で建設することが可能になった旨が県教委に伝えられた。2月20日に最終的な三者協議が開催され、西部遺跡は平成16年4月から本発掘調査することになり、調査は埋文事業団職員の管理・監督のもとに民間の調査機関に全面委託することになった。調査範囲は工事工程に合わせ、遺跡南側の10,800m²（中世5,400m²+古代5,400m²）とし、残りは次年度以降の調査となつた。

2 調査と整理作業

A 確認調査

確認調査は前述した平成13・14年に実施したもののはか、平成16年度の本発掘調査で得られた成果（第1章2-B）を基に、西部遺跡の北側を対象に下層に対する確認調査を平成16年10月に実施している（第1図）。ここでは平成16年度の本発掘調査範囲に関わる平成13年の確認調査の概要について記す。

調査期間

平成13年4月16～20日、23～26日（9日間）に実施した。

調査方法

調査対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機（バックホー）及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。

調査結果（Tはトレンチの略である。）

西部遺跡は中世と平安時代の2枚の遺物包含層が確認され、遺物・遺構ともに良好な遺跡であることがわかった。上層（II層）は中世の遺物包含層で、珠洲焼が主体を占める。中世土師器・中世陶磁器・砥石が少量出土した。下層（IV層）は平安時代の遺物包含層で、土師器が主体を占め、須恵器・黒色土器が少量出土した。遺物の年代は9世紀末～10世紀が主体と考えられる。遺構は中世では1～1Tから溝1条、1～5Tから溝1条、1～7Tからピット1基、1～9Tから井戸1基、1～20Tからピット2基、溝6条、2～1Tからピット2基、土坑1基、2～3Tから土坑2基、2～4Tからピット1基、溝1条、2～6Tからピット3基、土坑2基、2～7Tから溝2条、土坑1基、2～8Tから溝2条が検出された。また、平安時代では1～7Tからピット1基、1～17Tから溝3条、土坑1基、2～5Tから土坑1基が検出された（第2図）。

基本層序は以下の通り観察された。

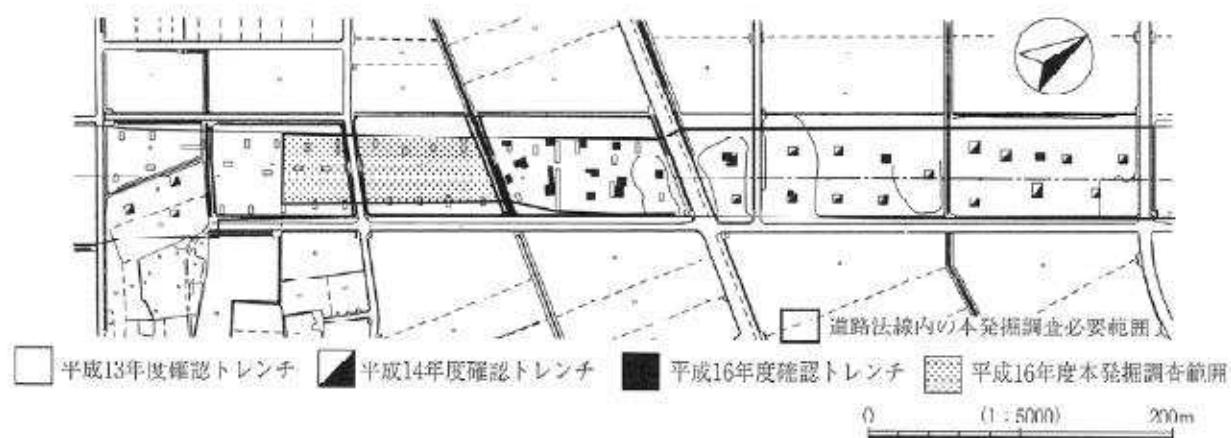
I層	耕作土
II層	茶灰色シルト（上層 中世遺物包含層）
III-1層	黄灰色シルト
III-2層	明青灰色シルト
IV層	暗青灰色粘質土 炭化物を多量に含む（下層 古代遺物包含層）
V層	暗青灰色粘質土
VI層	暗灰色粘質土 十 腐植土層

まとめ

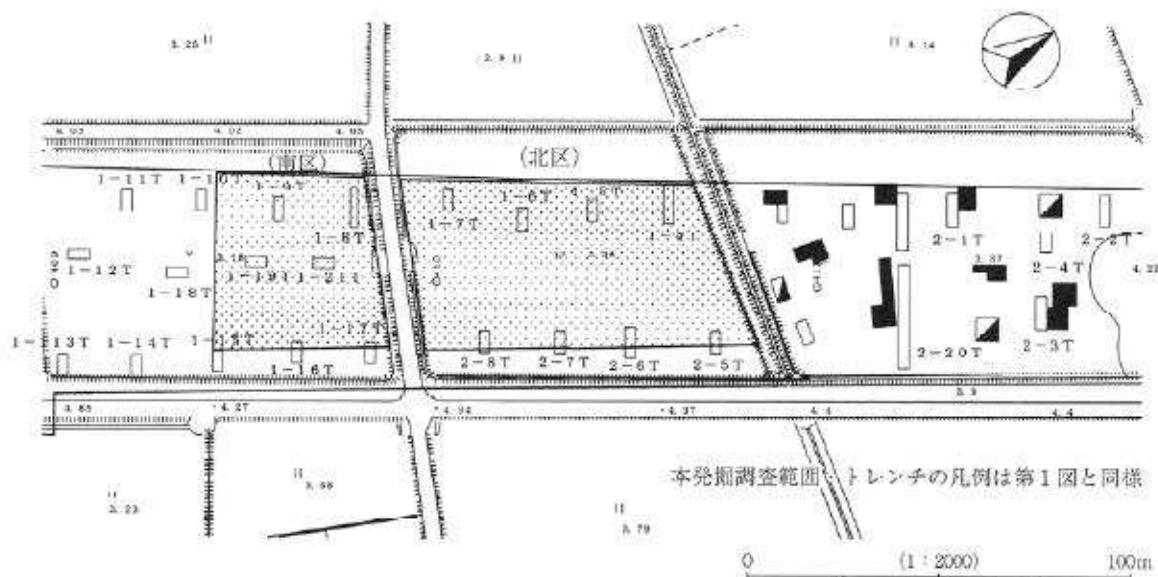
西部遺跡は確認調査の結果、STANo.409 + 40より北側（付上側）の範囲で上下2枚の遺物包含層が確認された。上層は中世の包含層、間層を挟んで下層は平安時代の包含層であり、遺構確認面も2枚となる。地形は南東側が高く、南西に向かって緩やかに低くなっている。中世の遺物包含層は南側や東側の一部が耕作により削平され、確認できない部分もあるが、遺構・遺物はほぼ全範囲にわたり広がっていると予想される。平安時代の遺物は遺跡の東側半分が濃密で、西側が若干希薄になる。特にSTANo.409 + 80～STANo.411の範囲が、平安時代における遺跡の中心部と考えられる。

なお、平安時代の遺物包含層より0.5～1.5m程下に、木の葉などを含む腐植土層が存在する。精査の結果、遺物は検出されなかった。

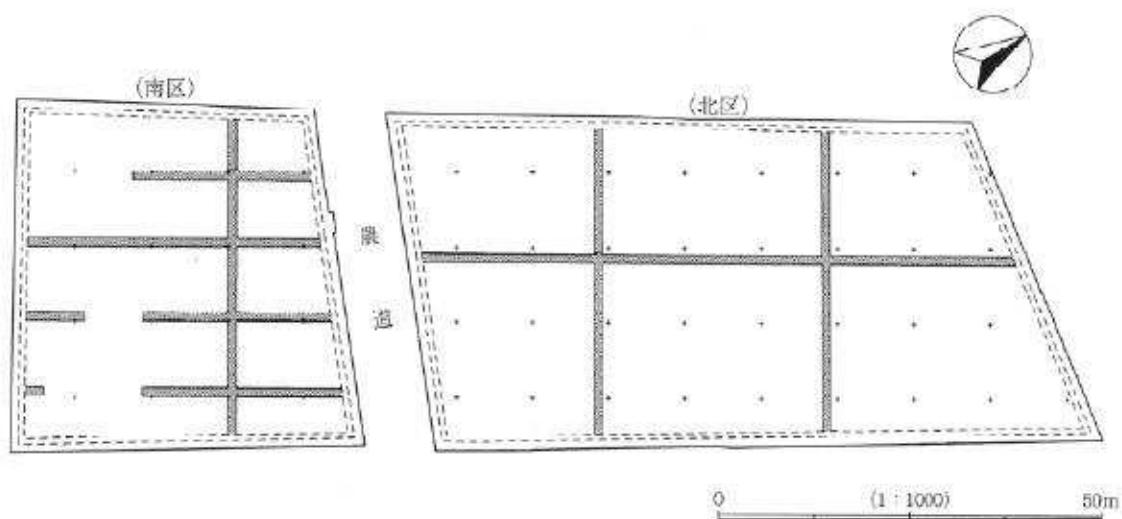
（西部遺跡一次調査報告書に一部加筆）



第1図 確認トレンチ位置図（1）－西部道路全体－



第2図 確認トレンチ位置図（2）－平成 10 年度本発掘調査周辺－



第3図 確認トレンチ位置図（3）－古代面トレンチ調査位置図－

B 本発掘調査・整理作業

木発掘調査

本発掘調査は平成16年4月7日～12月22日に実施した。調査区は農道を挟んで北と南に別れているため、北区、南区と呼称した（第2図）。4月14日～16日に発掘準備及び現況の地形測量を実施し、4月19日～5月13日に雨水対策として、暗渠埋設工事を実施した。並行して5月10日からバックホーによる表土除去作業を南区より開始し、5月20日に終了した。人力による掘削作業は5月17日から開始した。遺跡の基本層序を把握するため、試掘トレンチの掘り付けから開始した。

5月の下旬から遺構の確認作業を開始し、北区の北側に存在する近世所産の凹地遺構から精査を行った。6月上旬より凹地遺構の調査と並行して中世の遺構調査を開始し、井戸、土坑、溝、ピットを多数検出した。溝はピット群を囲むものと、それを切って横断するものが検出された。遺物も遺構から多数出土し、SE017 覆土中からは完形に近い龍泉窯系の青磁碗も出土した。8月31日にV層上面で確認された中・近世の遺構調査を終了し、9月1日に県教委による終了確認を受けた。9月4日、現地説明会を実施する。9月5日、中・近世面（V層上面）の航空写真撮影を実施した。

9月6日から古代面の調査を南区より開始する。並行して古代面下の基本層序把握のため、北区、南区にトレンチを入れる（第3図）。その結果、北区を中心に調査範囲内に古代の文化層が複数存在することを確認した。確認調査（平成13年度）の結果より遺物包含層が多いことが判明し、年度内に報告書も含め、全工程を終了させることができず、不可能となってしまった。その後、トレンチ調査の結果を基に、道路公团、県教委、埋文事業団で今後の調査工程の見直しを行い、平成16年度は南区を全面終了、北区はV層上面で確認された遺構調査を終了させ、V層以下の調査を次年度以降とした（第2図）。また、北区の中世遺構は確認面V層と遺構覆土の識別が困難なものもあることから、未検出遺構の存在も否定できなかった。そこで、遺構内に遺構ラベルと山砂を埋め、次年度以降の古代面調査時に、今年度調査した遺構を容易に識別できるようにし、未調査の中世遺構があった場合には、次年度以降の調査報告書で報告することとした。

10月は引き続き南区の古代面IX層相当上面の遺構調査を継続し、11月8日に終了。11月10日に航空写真撮影を実施した。11月11日～20日、古代面2枚目の遺物包含層（IX層相当）及び遺構（X層相当上面）の調査を行い、11月23日、この面の航空写真撮影を実施した。11月24日からさらに下層の遺構、遺物の有無を確認するため、試掘トレンチ及び2m×2mのテストピットの掘り下げを人力で行った。その結果、遺構・遺物が検出されなかったため、調査は12月2日に終了した。そして12月3日、県教委の調査終了の確認を受けた。12月7日～21日、残務整理、後片付け、機材・プレハブの撤収を行う。12月22日、南区を道路公團に引渡し、平成16年度の現地調査の全てを終了した。

整理作業

遺構図面の基礎整理及び出土遺物の洗浄・注記・接合・復元作業は、調査現場及び山武考古学研究所群馬支店で現地調査と並行して行った。遺構の図版収集、原稿及び遺物実測・トレス・写真撮影等は平成16年12月から平成17年3月にかけて新潟市の山武考古学研究所新潟支店で実施した。

C 調査・整理体制

[確認調査]

調査期間 平成13年4月16日～4月26日・平成14年10月15日～11月15日
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）
 調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越麟一）
 管 理 須田 益輝（財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長）平成13年度
 黒井 幸一（ 同 専務理事・事務局長）平成14年度
 長谷川司郎（ 同 総務課長）
 岡本 郁栄（ 同 調査課長）
 施 務 離谷 久雄（ 同 総務課主任）平成13年度
 高野 正司（ 同 総務課主任）平成14年度
 調査指導 寺崎 裕助（ 同 調査課公団担当課長代理）
 平成13年度 調査担当 小田由美子（ 同 調査課主任調査員）
 調査員 小林 芳安（ 同 調査課主任調査員）
 加藤 龍隆（ 同 調査課主任調査員）
 栗林 冒明（ 同 調査課主任調査員）
 右川 智紀（ 同 調査課主任調査員）
 内藤 真一（ 同 調査課主任調査員）
 鈴木 秀人（ 同 調査課主任調査員）
 平成14年度 調査担当 澤田 敦（ 同 調査課主任調査員）
 調査員 佐藤 優一（ 同 調査課主任調査員）
 後藤 孝（ 同 調査課主任調査員）
 阿部 友晴（ 同 調査課文化財調査員）
 石川 智紀（ 同 調査課主任調査員）
 片桐 千恵（ 同 調査課嘱託員）

[本発掘調査・整理作業]

調査期間 本発掘調査 平成 16 年 4 月 7 日～12 月 22 日
 整 理 作 業 平成 16 年 12 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）
 調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越麟一）
 管 理 黒井 幸一（財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長）
 長谷川二三男（ 同 総務課長）
 藤巻 正信（ 同 調査課長）
 監 督 鈴木 俊成（ 同 調査課日東道担当課長代理）
 佐藤 優一（ 同 調査課日東道担当主任調査員）
 施 務 高野 正司（ 同 総務課主任）
 調査組織 有限会社 山武考古学研究所
 現場代理人 長谷川晴男（有限会社山武考古学研究所 管理部技術員）
 現場世話人 猿田 晴男（ 同 技術員）平成 16 年 4 月 7 日～7 月 26 日
 中条 義之（ 同 技術員）平成 16 年 7 月 26 日～12 月 22 日
 調査担当 折原 洋一（ 同 調査研究室係長）
 調 査 員 近江屋成陽（ 同 調査研究室調査研究員）
 間宮 政光（ 同 調査研究室調査研究員）
 千葉 孝之（ 同 調査研究室調査研究員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

遺跡の位置する神林村は、新潟県最北端である岩船郡に属し新潟平野の北端にあたる。西側は日本海に面し、北側は浦田山丘陵で村上市と境を接し、南側は荒川で荒川町と境を接し、東側は低位山地を挟んで関川村と境を接する。村内の地形を大別すると東側から標高 200 ~ 300m の低位山地、それに連なる丘陵、水田の広がる沖積地、南北方向に延びる海岸線に沿った砂丘列の 4 つに分かれ、その西側は日本海に面する。山地は北部の大平山（標高 560.8m）、南部の要害山（標高 287m）は高度からみて 600m 未満で、背後にそびえる飯豊山や朝日連峰の前山的山地である（第 4 図）。

丘陵部分には東から西側に流れる多くの小河川がみられ、その河川を形成した河岸段丘上には旧石器時代から縄文時代の古い遺跡と城館跡などの中世の遺跡が存在する（第 7 図）。

沖積地には、明治・大正期のは場整備とさらに戦後のは場整備によって、現在は水田が広がっている。現在の荒川は砂丘を分断して直接日本海に進んでいるが、過去にはこの砂丘に流れが阻まれ、現在の村上市と神林村に広がっていた旧岩船潟に流れ込んでいたとする推測もある。荒川が砂丘を分断し日本海に放水した時期を示す文献は見つかっていないが、金子拓男氏によると現河口部周辺の砂丘の規模が幅約 1,500m、高さが最高点 30m であることなどから、自然の力だけでは荒川の河口を形成することは不可能で、当河口の形成は人為的なものと推定している。また、砂丘の規模や古代・中世遺跡の立地のあり方から『日本書紀』の大化元（645）年「越国泰上」を分析し、荒川の放水は大化 4（648）年の磐舟柵造営に伴う古代の砂丘開墾工事の一環であろうと結論付けていいる〔金子 1996〕。ただし、これまでのところ、それを示す具体的な考古資料はない。

本遺跡は神林村の南西端に位置し、荒川が幾度となく氾濫を繰り返し、変化した流れにより形成された自然堤防上に立地する。標高は 25m 前後、調査前の現況は水田である。



第 4 図 遺跡周辺の地形概念図

2 歴史的環境

神林村周辺の古代に関する文献資料は少なく、個別の遺跡について触ることはできない。「日本書紀」には大化 4（648）年に「磐舟柵」を越と信濃の民で造営したことが記載されている。さらに「続日本紀」には文武元（698）年に初めて「越後」の名が登場し、文武 2 年と 4 年には越後の國に「石船柵」を修理させた記事が記載されている。磐舟柵の所在地は定かではないが、神林村の北部、七瀬・下助瀬・湯端・岩船町に囲まれた旧岩船潟周辺に存在したと推定されている。残念ながら、村内には現在のところ磐舟柵造営期の遺跡は見つかっていない（第 6 図）。

平安時代の後半、11 世紀末～12 世紀の中ごろには、現在の岩船郡をほぼ網羅する小泉荘が立荘された（荒川左岸は荒河保という国衙領が存在した）。荘園領主は、藤原家の傍流中御門家である。小泉荘は、立荘以前から直属する「木荘」と荘園領主と国衙の両方に属する「加納」に分かれていた。有明周辺を境に北が

「本荘」、南が「加納」である。阿部氏によると当地の開発領主は不明であるが、12世紀初めに阿賀北地域は越後城氏の勢力が及んでいた。城永基の孫にあたる助永は小泉荘の現地支配にかかわっていたと推定されている。当時の城氏の軍事力は大きく、在庁官人が簡単に捕縛できるような相手ではなかった。京都の荘園領主も、このような城氏に現地支配を委ねることで、国衙側の妨害から荘園を守り、年貢を確保したと考えられている。壇ノ浦の戦いで平氏が滅んだ文治元（1185）年頃には秩父季長が小泉荘の地頭にな



第5図 瀬波郡絵図（トレス図）—2019年10月補記
東京大学史料編纂所 1985「越後国郡絵図二瀬波郡」東京大学出版会に一部加筆

ったと推定されている。鎌倉時代初期（建永元（1206）年）には季長は嫡子行長に本荘を庶子為長に加納の地頭職を譲渡している。以後行長の系譜は「本荘」を名乗り、為長の系譜は色部の条へ居を構え「色部」を名乗るようになる〔阿部 1987〕。

加納とされた所領のひとつには、荒川育りに牛屋郷があった。1206年頃、色部氏の領地は、初代色部為永の譲り状によると、嫡子公長に色部・栗島を、庶子資長に牛屋の地頭職を譲渡している。後に資長は牛屋氏を称し、現在の下牛屋集落に館を構えている。牛屋郷と荒河保は国衙領であるが、牛屋郷は小泉井の加納でもあったという複雑な様相を示し、かつ荒川の氾濫により流路が変わることで、色部一族と荒河保の地頭河村氏との間で境界争いが絶えなかった。

以上のように神林村に関する中世の文献資料は「色部史料集」〔井上 1968〕などにまとめられ、比較的豊富に残っている。中でも、慶長2（1597）年の「瀬波郡絵図」（第5図）には当時存在した集落が描かれた集落遺跡を考えるには貴重な資料である。

周辺の遺跡（第7図）

神林村の遺跡数は218以上にのぼる。この中には、ひとつつの遺跡で様々な時代の遺物が見つかっているものもあり、半数以上の遺跡で古代～中世の遺物が出土または表面採取されている。村内の発掘調査例は、近年の県営ほ場整備事業、宅地造成、今回の日東道建設事業などの諸開発で、増加している。以下本遺跡に関連する奈良・平安時代以降について概観する。

本遺跡は旧荒川の流れによってできた微高地、自然堤防上にあり、周辺には奈良・平安時代以降の遺跡が数多く分布する。古代では当該地は磐船郡と記され、それを含めた阿賀野川以北の地は古代より「阿賀北地方」と言われ、越後の中でも区別されている。古代においても、沼垂郡と佐渡、蒲原郡の窯製品の組み合わせ方や割合等、阿賀野川以南の地域とは異なる様相を示している〔吉井 2002〕。

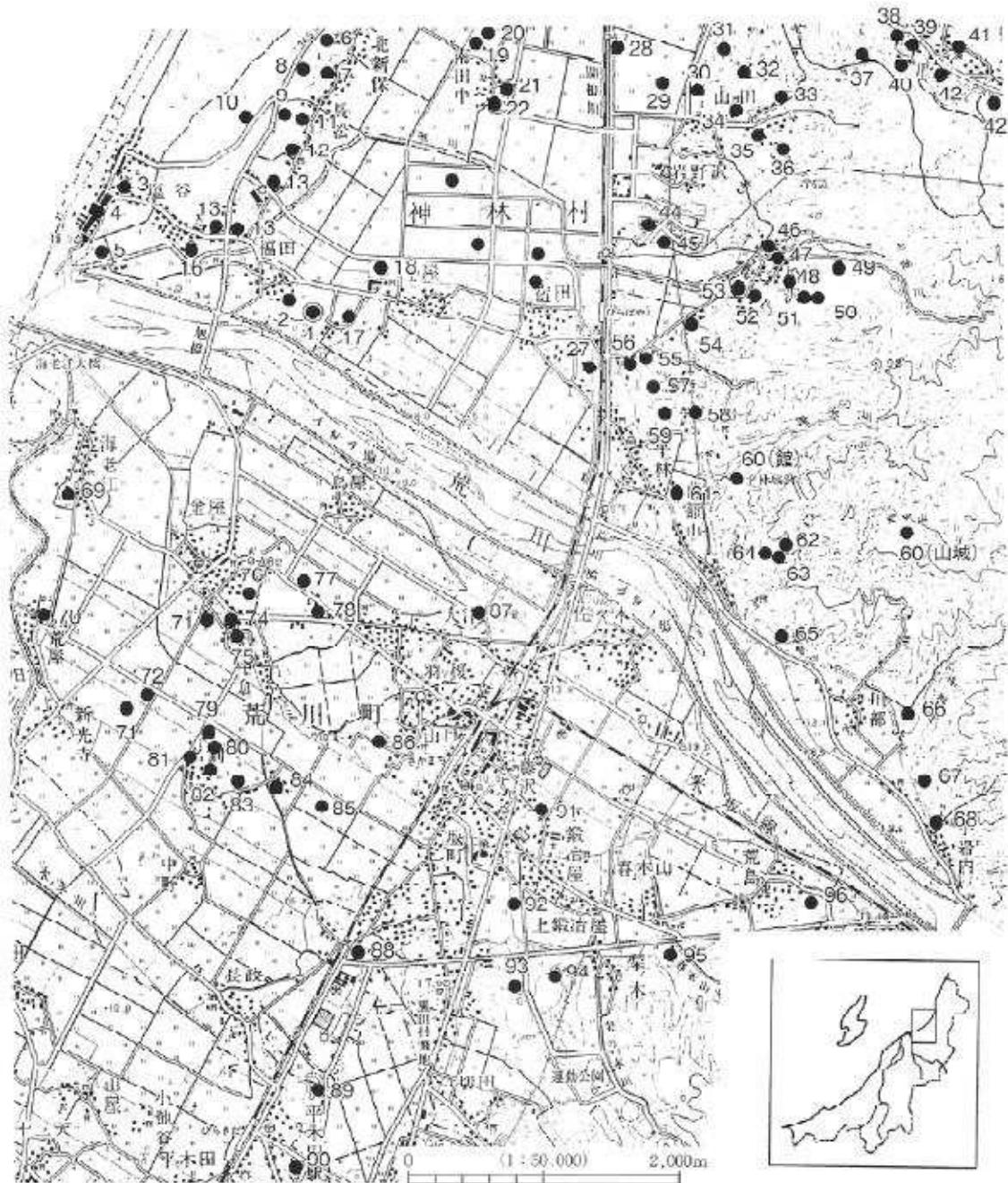
沖積低地の遺跡では本遺跡の北東約2kmに衣田遺跡があり、土坑2基が検出され、9世紀～10世紀前半頃の須恵器、土師器が出土している。須恵器の中には「土」、「山」か、「五」、「江」の墨書きされたものが出土している。また、衣田遺跡の南約300mに位置する道上遺跡では、小区画溝や土坑、小ビット、溝が検出され、8世紀末～10世紀前半の須恵器、土師器が出土している。特筆される遺物として、刻書「道」のある須恵器蓋がある。両遺跡共に須恵器は阿賀野川以北の磐船窯跡群を代表とする胎土に特徴をもつ阿賀北産のものと、佐渡小泊窯跡産の製品や產地不明品が出土している〔田辺ほか 2001〕。

荒川左岸の荒川町では本遺跡の南約3kmに位置する鳴侍遺跡から同一建物軸の掘立柱建物群8棟が検出され、そのうち1棟は周間に小溝が巡り、片面に庇の付く入母屋建物であった。この建物内部や溝から9世紀中葉の遺物が出土し、ほかに円面鏡、風字鏡等が出土している〔吉井 2002〕。田畠遺跡では10世紀代の竪穴住居跡から、数個体分の縦軸陶器・灰軸陶器や土師器が出土し、本地域ではほとんど検出されなかつた当該期の資料として注目される〔吉井 2001〕。

中世の遺跡では、本遺跡の東側に牛屋館跡の伝承地がある。現況は耕地整理によって、地形が変わり、館全体の大きさや掘跡は確認できないが、東側には荒川が蛇行して流れた跡があり、西側には幅3m、高さ約2mの土壘の一部が残っている。敷地内は現在、神社と無住の寺院が建っている。また、北東約5kmの標高25mの丘陵上に宿田城跡の伝承地があり、現在では土壘と曲輪の一部が残存する。村内の南東に位置する国指定の平林城跡は色部氏の居城である。居館と山城からなる。曲輪や土壘、堀跡等の遺構が遺存良く数多く残っている。昭和49年には仮橋建設に先立ち、殿屋敷跡の土壘、空堀・虎口を発掘調査し、空堀から橋脚跡とともに、多数の木簡と16世紀の越前焼が出土している〔闇ほか 1983〕。



第6図 周辺の地形（明治44年測図 大日本帝国陸地測量図一部改変）
旧岩船潟は「山三賀Ⅱ遺跡報告書」所収図面を参考として作成



国土地理院平成13年12月1日発行五万分の一「中条」

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	四郎	平・中・近	17	牛廻館	中	33	坂下	平	49	筋野	繩	65	湯の瀬	繩
2	応慶寺板碑群	中	18	中部	中	34	山田赤谷	平	50	吉田天王神社	中	66	川部	平
3	四福寺石造	中	19	川越Ⅰ	中	35	吉野家石縫塗	中	51	六四井干塗村跡	中	67	下山	平
4	源古屋敷	甲	20	川越Ⅱ	中	36	山田了丁		52	寺田	绳古	68	小岩内(区溝)	平
5	古屋敷	半	21	菊田中板塗	中	37	桃川古城	中	53	下谷地東	绳・古	69	延敷塗	中
6	大地工	平	22	板越	平	38	桃川	平・中・近	54	下谷地西	中	70	行塙	奈・平
7	砂山Ⅱ		23	寺田	繩・古・奈	20	ゾノ内	鷹	55	喜田城	中	71	寺田	奈・平
8	砂山Ⅲ		24	道上	平	40	吉祥寺石仏	中	56	神上り	繩	72	鶴井	半
9	砂山五輪塔	中	25	道上東	中	41	野地山	繩	57	向山	平	73	赤井	奈・平・中
10	砂山Ⅰ	劣	26	家ノ後	甲	42	大門平	中	58	小丸山	中	74	馬場跡	中
11	長松石仏	中	27	大曾根板塗	中	43	翻出	繩・古・中	59	千眼寺板塗	中	75	ゾノ原	中
12	正樹院屋敷	中	28	中沢	中	44	栗田B	繩・平	60	平林城跡	中	76	宮分	平
13	豊松酒跡		29	泰行松	平	45	里田A	繩・平	61	葛鎧山板塗	中	77	石橋B	中
14	口市	中	30	新岡赤谷A	繩	46	松沢扇敷塗	平	62	山添塙群1号		78	石橋A	奈・平
15	福田伝古跡		31	篠	繩・平	47	隧道	繩・古・中	63	山添塙群2号		79	金屋小谷地	半
16	長三郎山	中	32	新岡赤谷B	繩・平	48	松沢館	中	64	山添塙群3号		80	小谷地A	平
												81	菅原宮ノ腰	奈・平
												82	名割小谷地	平
												83	名割	平
												84	板町宮ノ腰	平
												85	菅本山城跡	中
												86	荒島能跡	中

時代：繩（縄文時代）・赤（弥生時代）・古（古墳時代）・奈（奈良時代）・平（平安時代）・中（中世）・近（近世）

第7図 周辺の遺跡分布図

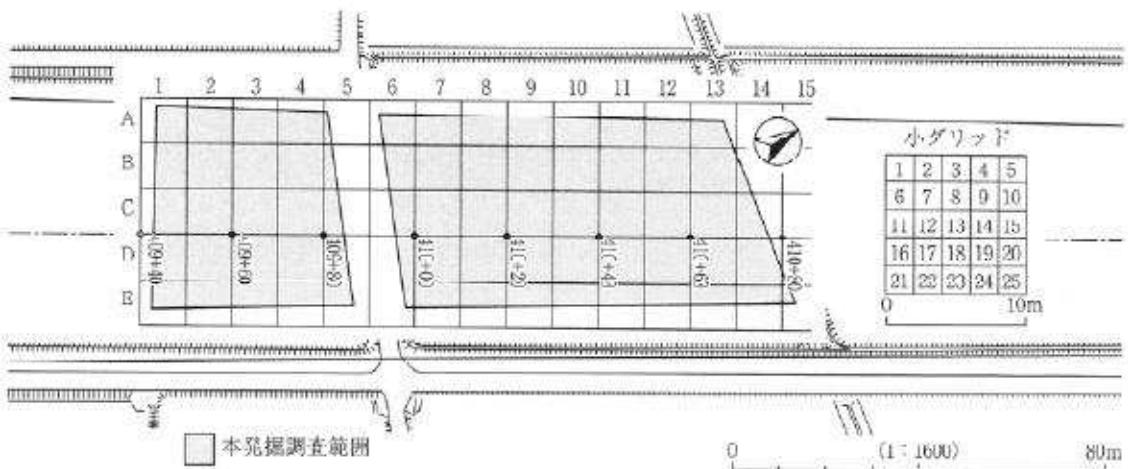
第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定 (第8図)

グリッドは調査区の現況に合わせて設定した。設定にあたっては、高速道路法線杭 STA410+00 (X=238695.820, Y=82110.428) と STA410+60 (X=238661.701, Y=82089.549) をもとに座標計算を行い、グリッド主軸の2点 P1、P2 を定めた。本報告書で示す北は国家座標第VII系の X 軸方向を指し、グリッドの主軸は真北から約 31 度 27 分 50 秒東偏する。

10m 方眼を大グリッドとし、南北方向は南から算用数字を付し、東西方向は西からアルファベットを付して、「IA」のように組み合わせて大グリッド名とした。大グリッドは南西隅に打設した。なお、グリッド主軸の P1、P2 はそれぞれ 7D 杭、13D 杭に対応する。

大グリッドを 2m 方眼に 25 分割したものを小グリッドとし、1 ~ 25 の算用数字を付し、大グリッド表示に続けて「IA1」のように表記した。



第8図 グリッド設定図

2 基本層序 (第9図)

遺跡は幾度かの荒川の氾濫により、複雑な堆積状況を示し、地山面の様相は一様ではない。また、地山より上位についても小河川の埋没や人为的な地形改変を受けて、場所によっては異なる堆積状況を示していた。特に農道を挟み、調査区の北側と南側では異なる様相を示す。次年度以降農道下の調査が予定されているため、北側と南側の層序の関係が、明確になると思われる。本年度の調査では農道を挟み層のつながりが明確でないため、南側では、北側の層位に対応すると推測される層名を付け「○層相当」と呼称した。

トレンチ調査(第3図)の結果、遺物の出土した層や遺構の掘り込み面から中世以外では 4 枚(VII・IX・XI・ XIII 層)の遺物包含層の存在が想定される。時期はいずれも古代であるが、遺物は少なく詳細な時期が判明しないものもある。なお、VII・VIII 層を切り V・VI 層が覆土となる遺構がトレンチの断面で確認されている。現在のところ V・VI 層から遺物は出土していないが、中世段階でもう 1 枚、文化層が存在する可能性がある。また、XIII 層については、土師器細片がわずか 1 点出土したのみで、洪水等による流れ込みも考えられ

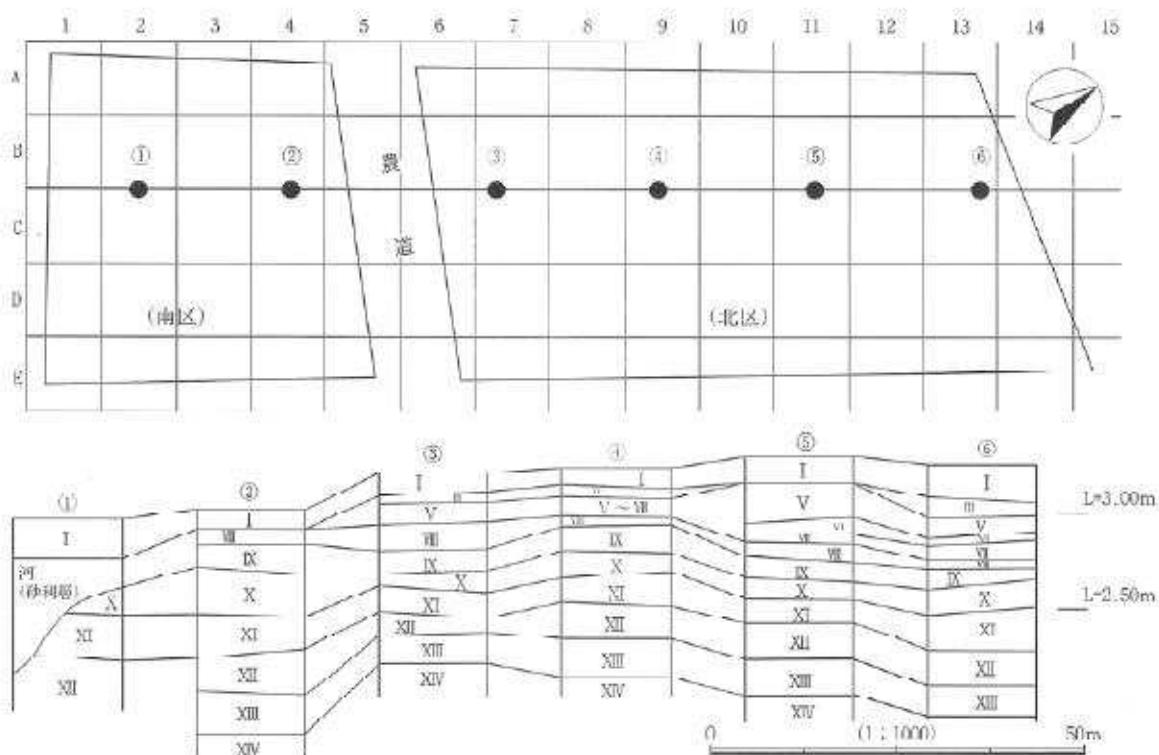
るが、上下層や層厚が比較的安定していることから現時点では遺物包含層と考えたい。次年度以降の調査でこれらについて検証していきたい。

北区

I層	暗灰色土	現代の水田耕作土
II層	暗灰色土	耕作土と近世凹地遺構覆土の混合土。
III層	灰色土	凹地遺構の覆土、酸化鉄を少量含む。
IV層	中世遺物包含層	(今回の調査区では残存していない)
V層	黄色シルト質土	中世遺構確認面、黄色細砂を少量含む。
VI層	茶灰色土	炭化物を多量に含む。
VII層	黃色シルト質土	炭化物を微量に含む。
VIII層	茶灰色土	炭化物を多量に含む。10世紀の遺物包含層。
IX層	暗青灰色(黄色)粘質土	炭化物を少量含む。黄色細砂を少量含む。9世紀の遺物包含層か。
X層	青灰色(黄色)粘質土	
XI層	青灰色(黄色)粘質土	砂を少量含む。炭化物を少量含む。土師器細片が出土。古代の遺物包含層。詳細な時期不明。
XII層	青灰色砂質土	
XIII層	明青灰色粘質土	炭化物を少量含む。土師器細片1点が出土。古代の遺物包含層の可能性がある。詳細な時期は不明。
XIV層	暗灰色粘質土	植物遺体を含む腐植土層。

南区

I層	暗灰色土	現代の水田耕作土
VII層相当	茶灰色粘質土	炭化物を多量に含む。10世紀の遺物包含層。
IX層相当	黄色粘質土	炭化物を少量含む。9世紀の遺物包含層、10世紀の遺構確認面。
X層相当	青灰色砂質土	無遺物層、灰色細砂を多量に含む。9世紀の遺構確認面。
XI層相当	青灰色粘質土	砂を少量含む。北区の状況から古代の遺物包含層と考えられるが、遺構・遺物は検出されなかった。
XII層相当	青灰色砂質土	
XIII層相当	明青灰色粘質土	炭化物を少量含む。北区の状況から古代の遺物包含層と考えるが、遺構・遺物は検出されなかった。
XIV層相当	暗灰色粘質土	植物遺体を含む腐植土層。



第9図 基本土層柱状図

3 遺構・遺物の検出状況（第10図、図版1・2・3）

古代 今年度は南区のみの調査にとどまったため、本報告では、南区について報告する。

遺物包含層はIX層相当とV層相当で、遺構はX層相当とIX層相当のそれぞれ上面で確認された。

IX層相当に包含される9世紀の土器類は南区北側の微高地上から出土した。特に4B・Cグリッドを中心として200点以上出土し、他の地区は大幅に少ない。出土点数は40点以下である。

10世紀の土器類は南区の北東側に位置する土坑群から集中して出土した。遺物包含層（V層相当）からの出土は少なく、土坑覆土からのものが多い。その他、5Bグリッドと2Dグリッドにやや多く見受けられる。これ以外の場所は中世以降の削平により、遺物の出土は極端に少ない。

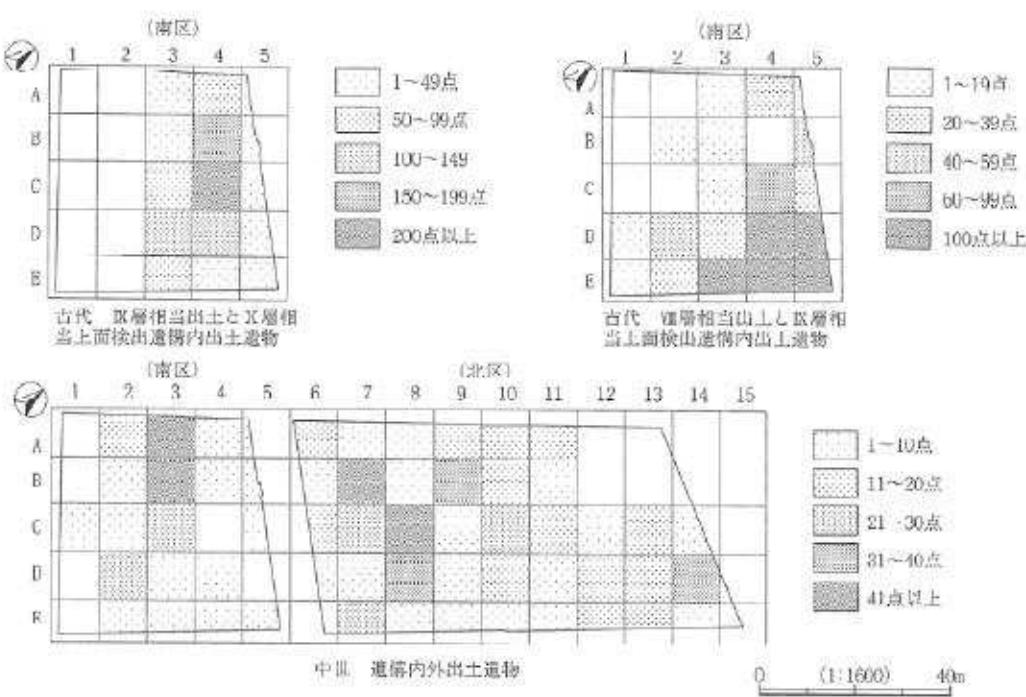
X層相当上面で確認された遺構は3グリッドラインより北側の微高地上に存在し、遺構には溝、土坑が検出された。いずれも散在していた。IX層相当上面で確認された遺構は北東側にまとまって検出されている。なかでも土坑は調査区の北東隅に集中する傾向が著しい。

中世 今年度は南区・北区の全域を調査した。中世の旧地形は3グリッドラインを境界とし、南側は河跡（自然流路）、北側は微高地となっている。遺構は微高地上のほぼ全域に存在し、区画溝、掘立柱建物、ピット、土坑、井戸が検出されている。

遺物は調査区のほぼ全域から出土した。土器類は、3A、3B、7B、8Cグリッド内に集中し、人骨が溝や井戸からの出土である。特に濃厚に出土した遺構はSD027・490である。

今回報告する遺構群は主にV層上面で確認されたものである。北区では下層においての念押し調査はしていないため、来年度以降の調査により遺構が追加される可能性がある。また、現段階で検出した建物のピットは不ぞろいのものが多く、地山（V層）と識別困難なピットが存在する可能性もある。

近世 遺構は北区北側に凹地遺構が、南区では井戸、集石遺構、畠状遺構が南寄りに検出された。遺物は遺構内及び遺構確認面から僅かに出土した。特に南区の遺構の周辺からは集中して出土している。



第10図 遺物分布図

第IV章 遺構

1 基本方針

調査では、古代2面と中・近世上面に遺構が検出された。古代は南区からX層相当とIX層相当上面の2面で遺構が検出された。内訳はX層相当上面では土坑7基、溝4条、ピット5基、IX層相当上面では土坑40基、ピット6基である。X層相当上面で確認される遺構とIX層から出土した遺物は「IX層相当の遺構・遺物」、IX層相当上面で確認される遺構とⅧ層から出土した遺物は「Ⅷ層相当の遺構・遺物」として報告する。

中世は北区でV層上面から、南区でⅦ層相当上面（Ⅱ～Ⅶ層が削平されていると考えられる）から、掘立柱建物5棟、井戸38基、土坑63基、溝23条、ピット363基が検出された。

近世は北区の北側で中世同様V層上面から凹地状遺構7基が、南区の河埋没後の平坦面と北側微高地に向かう斜面で井戸2基、集石2基、溝1条、畝状遺構23条が検出された。

遺構の名称および記述の方法等については以下のとおりである。

掘立柱建物 現地の調査で建物と判別できたのは1棟のみで、その他は平面図作製後に図上で確認した。また、後世の削平等により柱穴が足りないものについては、溝の方向や柱穴の並び等を考慮に入れ復元的な組み合わせをした。掘立柱建物の各柱の呼称については、整埋調査の段階で北東隅の柱穴を1として、時計回りで1、2、3……とした。なお柱建物については、時計回りで外側から「の」を描くように番号を付した。なお現地で付した番号（旧番号）は遺構観察表（別表4～8）に掲載した。

井戸 平面形は円形を基本とし、深度1m前後のもの、覆土に炭層やゴミ層がみられるものを井戸として報告する。形状が井戸に似ているが、深度が浅く、覆土にゴミ層が見られないものについては土坑として報告する。

土坑 平面形は円形、楕円形に大別される。長軸、短軸50cm以上のものを土坑とした。

溝 溝には南北・東西方向に走る区画溝と南北に貫流する溝の二種に大別される。それらの溝を総称して溝として報告する。

集石 磚を入れたものや意図的に並べられたものを集石とした。それぞれ遺構の性格は異なるものの、ほかに名称が見つからないため、総称して集石遺構として報告する。

凹地遺構 断面が浅い皿状を呈する遺構で、平面がL字形やコの字形そして方形など、遺構面積が大きいものを凹地遺構として報告する。形状から近世所産の「掘込み田」の可能性が考えられる。

畝状遺構 長さ7m、幅60cm前後の溝状の遺構が並列して検出された。この遺構群を畝状遺構と呼称した。畝跡の可能性が考えられる。

ピット 径50cm以下の穴をピットと呼称した。尚、径50cm以上のものでも、柱痕が検出されたものはピットとして扱った。ほとんどが区画溝の内側に存在する。

記述の方法 遺構の略号については、掘立柱建物SB、井戸SE、土坑SK、溝SD、性格不明遺構（集石、凹地遺構、畝状遺構）SX、掘立柱建物の柱穴・ピットPとして、遺構の種別を表記した。尚、後世の削平や崩落の影響を受けやすい遺構上場については本来の形状を示すとは限らないため、規模や平面形は遺構観察表（別表1～16）に示し、本文中には当時の平面形や規模をとどめている底面を中心に記述した。また個別図が掲載できなかった遺構についても遺構観察表（別表1～16）に示した。

2 遺構各説

A 古代

1) 概要

先述のとおり、古代では南区のX層相当とIX層相当上面の2面に遺構が検出された。X層相当上面では南区の北西と北東寄りに土坑とピットが散在し、東寄りに並行して走る溝が検出された。IX層相当上面では、調査区の北東寄りに土坑が集中して検出された。特に4D18グリッドから東の4E18グリッドを境に北東側へ集中していることが顕著にみられる。また、そのほかの土坑は北西側へ散在して検出されている。

2) IX層相当の遺構

・土坑

SK1058 (図版1・4・20・65)

4C19・20グリッドに位置する土坑である。南区で検出された土坑の中では北側の中央部に位置する。底面の形状は長径46cm×短径38cmの不整円形を呈し、標高は2.41mを測る。本遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で立ち上がる。覆土はほぼ水平に堆積しており、3層に分層される。炭化物の量は全体に少ない。遺物の出土はみられなかった。

SK1065 (図版1・4・20・65)

5E4グリッドに位置する土坑である。南区の北東隅寄りに位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、長径93cmで、楕円形を呈するものと推測される。標高は2.27mを測る。本遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに立ち上がるが、壁面と底面の境が明瞭である。覆土はレンズ状に堆積する。2層に分層される。炭化物は全体的に少ないが、特に1層中に集中する。遺物の出土はみられなかった。

SK1066 (図版1・4・20・65)

5E6・7グリッドに位置する土坑である。南区の北東隅に位置する。底面の形状は長軸150cm×短軸148cmで、方形に近い不整形である。標高は2.20mを測る。本遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに立ち上がるが、壁面と底面の境が明瞭である。遺構の北東部はIX層相当上面で検出されたSK1032に切られる。覆土は、南北ベルトを観察するとほぼレンズ状に堆積している。4層に分層される。炭化物の量は全体に少ない。遺物は1層から2層にかけて土師器、須恵器の細片が、合わせて5点散在して出土した。

SK1068 (図版1・5・20・65)

4A16グリッドに位置する土坑である。南区の北西寄りに位置する。底面の形状はSE097(中世所産の井戸)に切られ、不明であるが、長径133cmで、上場の形状からはば円形と推定される。底面の標高は2.00mを測る。本遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は急角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。

覆土は上部と下部の堆積の方向が異なる。人為的な埋め戻し土である。上部はSE097の覆土である。覆土は11層に分層される。遺物は1層中から土師器の細片が3点出土した。

SK1069 (図版1・5・20・65・66)

3B14・15・19・20グリッドに位置する土坑である。南区の中央部よりやや北西部寄りに位置する。底

面の形状は長径 268 cm × 短径 113 cm の橢円形である。標高は 2.20m を測る。本遺構は XI 層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに立ち上がる。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は 2 層に分層され、レンズ状堆積を呈する。炭化物は全体的に少ない。2 層には砂が混入する。遺物の出土はみられなかった。

SK1070 (図版 1・5・21・66)

4B1・6 グリッドに位置する土坑である。南区の北西部寄りに位置する。底面の形状は長径 92 cm × 短径 62 cm の不整椭円形である。標高は 2.34m を測る。本遺構は XII 層相当まで掘り込まれる。壁面は急角度で立ち上がる。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は単層である。炭化物は少ない。遺物の出土はみられなかった。

SK1071 (図版 1・4・21・66)

5E3・8 グリッドに位置する土坑である。南区の北東隅に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明である、上場の形状から短径が 61 cm の橢円形であると推定される。底面の標高は 2.27m を測る。本遺構は XII 層相当まで掘り込まれる。壁面は急角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は単層である。炭化物は多量に含まれる。遺物は土師器細片が散在していた。

・溝

SD1052 (図版 1・4・21・66)

5C22・23、5D2・7 グリッドに位置する溝である。底面は幅が約 40 cm、標高は 2.62m を測る。北から南へ緩やかに傾斜する。本遺構は XII 層相当まで掘り込まれる。壁面は急角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土はほぼレンズ状堆積である。4 層に分層される。炭化物は 1 層と 4 層に多く含まれる。遺物は遺構の北寄りの 4 層中から須恵器の無台杯が正位の状態で 1 個体 (1) 出土した。

SD1053 (図版 1・4・21・66)

5C17・22、5D2・7 グリッドに位置する溝である。底面は幅が約 40 cm、標高は 2.66m を測る。北から南へ緩やかに傾斜する。本遺構は XII 層相当まで掘り込まれる。壁面は急角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は単層で、炭化物は少ない。遺物の出土はみられなかった。

SD1054 (図版 1・4・21・66)

5C・5D・4E グリッドに位置する溝である。SD1055 と並走する。底面は幅が約 26 cm、標高は 2.72m を測る。北から南へ緩やかに傾斜する。本遺構は X 層相当から XII 層相当に掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面との境は明瞭である。覆土は 2 層に分層され、レンズ状に堆積する。炭化物は 1 層に多く含まれ、2 層は微量である。新旧関係は P1057 に切られる。遺物は北寄りと中央部付近より土師器の細片が 2 点出土した。

SD1055 (図版 1・4・21・66)

5C・4D・4E グリッドに位置する溝である。SD1054 と並走する。底面は幅が約 21 cm ~ 26 cm、標高は 2.86m を測る。北から南へ緩やかに傾斜する。本遺構は XII 層相当に掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土はレンズ状に堆積し、単層及び 2 層に分層される。炭化物は 1 層に少量含まれる。遺物は南寄りに砾が 2 点出土した。

3) VII層相当の遺構

・土坑

SK1001 (図版1・6・22・6b)

3E15、4E11 グリッドに位置する土坑である。土坑群の集中部分より少し離れ、南東側に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部分の形状から推測して円形になるものと思われ、直径 56 cm、底面の標高は 2.60m を測る。本遺構は X 層相当まで掘り込まれる。壁面は急角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 3 層に分層され、ほぼ水平堆積である。炭化物は 1 層に多量に含まれ、2 層以下は少ない。遺物は 1 層中の北東寄りに土師器の細片が 4 点出土した。

SK1002 (図版1・6・22・67)

5D22 グリッドに位置する土坑である。土坑群の集中部分の北寄りに位置する。底面の形状は長径 73 cm × 短径 54 cm のほぼ円形を呈し、標高は 2.30m を測る。本遺構は XI 层相当まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土はレンズ状にもみられるが、ほぼ水平堆積に近い。3 层に分層される。炭化物は 1・2 層に多量に含まれ、3 層は少ない。遺物は 1 層から 3 層にかけて土師器の細片が散在して出土した。南西方向からの流れ込みが観察される。

SK1003 (図版1・6・22・67)

5E1・2 グリッドに位置する土坑である。土坑群の集中部分のほぼ中央に位置する。底面の形状は長径 90 cm × 短径 47 cm の梢円形を呈し、底面の標高は 2.18m を測る。本遺構は XII 层相当まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 4 層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は 1・2 層に多量に含まれ、3 層以下は少なくなる。遺物は 1 层から 3 層にかけて土師器細片がまとまって出土した。南側からの流れ込みが観察される。

SK1004 (図版1・6・22・67)

4D21・4E4 グリッドに位置する土坑である。土坑群の南西寄りに位置する。底面の形状は長径 95 cm × 短径 93 cm の不整円形を呈し、標高は 2.68m を測る。本遺構は IX 层相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに立ち上がる。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は単層である。炭化物は少ない。遺物は土師器の細片が、やや北寄りに散在して覆土中から出土した。西側と東側の 2 方向からの流れ込みが観察される。

SK1005 (図版1・6・22・67)

5D16 グリッドに位置する十坑である。十坑群の南西寄りに位置する。底面の形状は長径 40 cm × 短径 38 cm の不整梢円形を呈し、底面の標高は 2.20m を測る。本遺構は IX 层相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 3 层に分層され、ほぼレンズ状堆積である。炭化物は 1・3 層に多く含まれる。遺物は 1 层から 2 層にかけて土師器の細片が多量に出土した。流れ込みの方向は北側から観察される。

SK1006 (図版1・6・22・67)

5D24 グリッドに位置する十坑である。十坑群の北西隅寄りに位置する。底面の形状は長径 35 cm × 短径 34 cm のほぼ円形を呈する。標高は 2.61m を測る。本遺構は IX 层相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は 2 层に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は 1 層に多く含まれ、2 層は少ない。遺物は土師器の細片が北寄りに集中して、1 层から 2 層にかけて出土した。北側からの流れ込みである。

SK1007 (図版1・6・22・68)

4E8 グリッドに位置する土坑である。土坑群の南端に位置する。底面の形状は長径 111 cm × 短径 66 cm の梢円形を呈し、標高は 2.61m を測る。本遺構はⅩ層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土はほぼレンズ状堆積である。2 層に分層される。炭化物は全体に多く含まれる。遺物は 1・2 層にかけて土師器の細片が南寄りに散在して出土した。

SK1008 (図版1・6・22・68)

5D17 グリッドに位置する焼土土坑である。土坑群の北西部に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に北側を切られ不明であるが、残存部分の形状から、径 44 cm の円形であると推定される。標高は 2.60m を測る。本遺構はⅩ層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は 1 層が被熱により焼土化している。2 層が炭化物を多量に含んだ灰層である。炉的な性格が考えられる。遺物は土師器の細片が、2 層中からまとめて出土した。

SK1009 (図版1・6・22・68)

5D18 グリッドに位置する土坑である。土坑群の北端部に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ、不明であるが、残存部分の形状から径 38 cm のほぼ円形を呈するものと考えられる。底面標高は 2.19m を測る。本遺構はⅩ層相当まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 4 層に分層される。柱の痕跡と考えられる炭化物を多量に含む 1 層が確認され、2 層以下はレンズ状に堆積する。柱痕が見られることから、柱穴の可能性がある。炭化物は 1 層から 3 層に多く含まれる。4 層は少ない。遺物は土師器の細片がやや西側に片寄って、1 层から 3 層中に出土した。遺物の流れ込みの方向は、南側からである。

SK1010 (図版1・6・23・68)

5D21、5E1 グリッドに位置する土坑である。土坑群のほぼ中央より西側寄りに位置する。SK1011 と重複する。底面の形状は長径 94 cm × 短径 45 cm の梢円形を呈し、標高は 2.85m を測る。遺構はⅩ層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土はほぼレンズ状に堆積する。2 層に分層される。炭化物は全体的に多く含まれる。新旧関係は SK1011 を切る。遺物の出土はみられなかった。

SK1011 (図版1・6・23・68)

5D21 グリッドに位置する土坑である。土坑群のほぼ中央より西側寄りに位置する。SK1010 と重複する。底面の形状は長径 52 cm × 短径 39 cm の梢円形を呈し、標高は 2.12m を測る。本遺構はⅩ層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 3 層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は 1 層中に多く含まれ、他の層は少ない。新旧関係は SK1010 に切られる。遺物は 1 層から 3 層にかけて土師器の細片が散在して出土した。遺物の流れ込み方向は北側からと南側の 2 方向がみられる。

SK1014 (図版1・6・23・69)

4E8・9・13・14 グリッドに位置する土坑である。土坑群の南端に位置する。底面の形状は長径 88 cm × 短径 80 cm のほぼ円形を呈し、標高は 2.64m を測る。本遺構はⅩ層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は単層である。地山ブロックを多量に含む人為的な埋め戻し土である。遺物の出土はみられなかった。

SK1015 (図版 1・6・23・69)

4D20・25 グリッドに位置する土坑である。土坑群の西端部に位置する。底面の形状は長径 44 cm × 短径 22 cm の楕円形を呈し、標高は 2.47m を測る。本遺構は X 層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。炭化物は 1 層に多く含まれ、2 層は少ない。遺物の出土はみられなかった。

SK1016 (図版 1・6・23・69)

4E3・4・8・9 グリッドに位置する土坑である。土坑群の南端部寄りに位置する。底面の形状は長径 168 cm × 短径 104 cm の不整形を呈し、標高は 2.48m を測る。遺構は XI 層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は東側を除き明瞭である。覆土は 5 層に分層され、1 層が水平堆積をなし、2 層以下は東側から流れこむように堆積する。炭化物は 1 层に多く含まれ、2 層以下は少ない。遺物は土師器の細片が、北西隅寄りと北東隅寄りの 2 か所に集中して、1 層から 5 層にかけて出土した。遺物の流れ込みの方向は北西側と北東側の 2 方向からがみられる。

SK1017 (図版 1・6・23・69)

4E9・10 グリッドに位置する土坑である。土坑群の南端部寄りに位置する。SK1020 と重複する。底面の形状は長径 142 cm × 短径 126 cm のほぼ円形を呈し、標高は 2.63m を測る。遺構は XII 層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境はほぼ明瞭である。覆土は単層である。炭化物は少ない。新旧関係は SK1020 を切る。遺物は土師器の細片がやや北側寄りと西側寄りに散在して覆土中より出土した。遺物の流れ込みの方向は北側と南西側の 2 方向から観察される。

SK1018 (図版 1・6・23・70)

4E5 グリッドに位置する土坑である。土坑群のはば中央部に位置する。サブトレンチに切られる。底面の形状は径 24 cm のほぼ円形を呈するものと推測され、標高は 2.46m を測る。遺構は IX 層相当まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 2 層に分層され、レンズ状に堆積する。炭化物は 1 層に多く含まれる。遺物の出土はみられなかった。

SK1020 (図版 1・6・23・70)

4E10・15、5E6・11 グリッドに位置する土坑である。土坑群の東端部寄りに位置する。SK1017 と重複する。底面の形状は長径 94 cm × 短径 76 cm の不整形を呈し、標高は 2.24m を測る。遺構は XI 層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境はほぼ明瞭である。覆土は 10 層に分層され、上部がレンズ状堆積をなし、下部はブロック状に堆積する。炭化物は 1・2 層に多く含まれる。遺物は土師器の細片が 1 層から 10 層にかけて西側、北側、南側の縦寄りに散在して出土した。遺物の流れ込みの方向は南側と北側の 2 方向がみられる。

SK1021 (図版 1・6・24・70)

4E5 グリッドに位置する土坑である。土坑群の西端部寄りに位置する。底面の形状は長径 28 m × 短径 20 cm の楕円形を呈し、標高は 2.43m を測る。遺構は XII 層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境はほぼ明瞭である。覆土は単層である。炭化物は少ない。遺物は土師器の細片が北寄りに覆土中より出土した。

SK1023 (図版 1・6・24・70)

5E1 グリッドに位置する。土坑群の西端部寄りに位置する。底面の形状は長径 59 cm × 短径 36 cm の楕円形を呈し、標高は 2.13m を測る。遺構は XIII 層相当まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁

面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、1層が水平に堆積し、2層以下はレンズ状に堆積する。炭化物は全体的に少ない。遺物は1・5層から土師器の細片が南西壁寄りと北壁寄りに1点ずつ出土した。

SK1025 (図版1・6・24・70)

5E14 グリッドに位置する土坑である。土坑群の東端部寄りに位置する。底面の形状は長径74cm×短径66cmのほぼ円形を呈し、標高は2.12mを測る。遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面の境はほぼ明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多量に含まれ、2層以下は少ない。遺物は1・2・4層に土師器の細片がやや北寄りに集中して出土した。遺物の流れ込みの方向は北側からである。

SK1028 (図版1・6・24・71)

4D8・9・13・14 グリッドに位置する。土坑群の南西端からやや離れて位置する。底面の形状は長径54cm×短径48cmのほぼ円形を呈し、標高は2.06mである。遺構はXI層相当まで掘り込まれる。壁面はほぼ中央部まで垂直に立ち上がり、上部は西壁側がやや外傾し、その他は漏斗状に大きく外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は6層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は少ない。遺物は1・5層中から出土した。遺物の流れ込み方向は遺物が少ないため、不明瞭であるが、やや南寄りに集中している。

SK1029 (図版1・6・24・71)

4D14 グリッドに位置する十坑である。十坑群の南西端からやや離れて位置する。底面の形状は長径53cm×短径49cmの円形を呈し、標高は2.10mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は全体的に少ない。遺物は土師器の細片が2・5層中より散存して出土した。

SK1030 (図版1・6・24・71)

4E15、5E11 グリッドに位置する土坑である。土坑群の東端部に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部分から、径148cmの楕円形であると推測される。標高は2.56mを測る。遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は3層に分層され、ほぼ水平に堆積する。炭化物は全体的に少ない。遺物は土師器の細片が散在して1・2層中より出土した。遺物の流れ込み方向は遺構の約2分の1以上が暗渠排水溝に切られ不明瞭であるが、遺物の集中が2か所に分かれるため、少なくとも、2方向の可能性が推測される。

SK1031 (図版1・6・24・71)

5C1 グリッド11に位置する土坑である。土坑群から北西側約12m離れて位置する。底面の形状は長径73cm×短径70cmのほぼ円形を呈し、標高は2.05mを測る。遺構はXII層上面まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は6層に分層され、1層から3層がレンズ状堆積で、4・5層が水平堆積となる。炭化物は全体的に少ない。遺物は土師器の細片が東壁寄りと西壁寄りに分かれて、1層と2層中よりそれぞれ1点ずつ出土した。

SK1032 (図版1・6・25・72)

5E7 グリッドに位置する土坑である。土坑群の中央よりやや東寄りに位置する。底面の形状は長径58cm×短径28cmの楕円形を呈し、標高は2.35mを測る。遺構はXI層相当まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は3層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多く含まれる。2層以下は少ない。遺物は土師器の細片が1層と3層より出土した。特に、1層か

らは多量に出土した。遺物の流れ込みは2時期に分かれ、1・3層ともに、南側からである。

SK1033 (図版1・6・25・72)

5E8グリッドに位置する土坑である。土坑群のほぼ中央部に位置する。底面の形状は長径30cm×短径24cmのほぼ円形を呈し、標高は2.20mを測る。遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は3層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多く含まれる。2層以下は少ない。遺物は土師器の細片が東側の壁際に集中して2層中より出土した。遺物の流れ込み方向は東側であると推測される。

SK1036 (図版1・6・25・72)

5E2・3グリッドに位置する土坑である。土坑群のほぼ中央部に位置する。底面の形状は長径64cm×短径48cmの不整方形を呈し、標高は2.37mを測る。遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は4層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多く含まれ、2層以下は少ない。遺物は土師器の細片が北西壁際寄りと北東壁際寄りの2か所に分かれ、集中して1層から2層にかけて出土した。遺物の流れ込み方向はほぼ時間的な差はないと思われるが、2つのブロックに分かれ、北側からである。

SK1037 (図版1・6・25)

4E4グリッドに位置する土坑である。土坑群の西端部寄りに位置する。底面の形状は長径45cm×短径28cmの不整梢円形を呈し、標高は2.47mを測る。遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は3層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は全体的に少ない。遺物の出土は見られなかった。

SK1039 (図版1・6・25・72)

5E11・12グリッドに位置する。土坑群の東端部寄りに位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部分の形状から径97cm前後のほぼ円形を呈するものと推測される。標高は2.28mである。遺構はX層相当に掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は7層に分層され、上部がレンズ状に堆積し、下部の3層以下は北方向から斜めに堆積している。炭化物は1層に多く含まれ、2層以下は少ない。遺物は土師器の細片が散在して1・2層中より出土した。遺物の流れ込み方向は北側からである。

SK1041 (図版1・6・25・72・73)

4E14・15グリッドに位置する土坑である。土坑群の南東部に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明である。東西径119cm、底面の標高は2.59mを測る。遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度でやや外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は3層に分層され、1層が水平堆積、2層以下はレンズ状に堆積する。炭化物は1層に多く含まれる。2層以下は少ない。遺物は1・3層中より土師器の細片が南東側の壁寄りに集中して出土した。

SK1042 (図版1・6・25・73)

4E20、5E16グリッドに位置する土坑である。土坑群の南東部に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部分の形状から、径134cm前後のほぼ円形を呈すると考えられる。標高は2.62mを測る。遺構はX層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は3層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多く含まれ、2層以下は少ない。遺物は1層から3層にかけて土師器の細片が散在して出土した。

SK1043 (図版1・6・25・73)

5E11・12グリッドに位置する土坑である。土坑群の東端部に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部の形状から径38cm前後のほぼ円形を呈するものと推測される。標高は2.34mを測る。遺構はXI層相当まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は3層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は全体的に少ない。遺物は土師器の細片が南側の壁寄りに出土した。出土層位は1層中である。遺物の流れ込み方向は南側からと推測される。

SK1047 (図版1・6・25・73)

5D18・23・24グリッドに位置する土坑である。土坑群の北端部に位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られて不明であるが、残存部の形状から径112cm前後のほぼ円形を呈するものと推測される。標高は2.40mを測る。遺構はXI層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多く含まれ、2層以下は少ない。遺物は土師器の細片が散在して、1・4層中より出土した。遺物の流れ込みの方向は南側を暗渠排水溝に切られているため、不明である。

SK1048 (図版1・6・25・73)

5D23グリッドに位置する土坑である。土坑群の北部寄りに位置する。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部の形状から径113cmのほぼ円形を呈するものと推測される。標高は2.67mを測る。遺構はIX層相当まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は単層で、炭化物を多量に含む。遺物は土師器の細片が北寄りに覆土中から出土した。

B 中 世

1) 概 要

中世の遺構は北区において基本層序V層上面が遺構確認面となるが、南区では後世の耕作や削平等によりV層～IV層に相当する土層が消滅しているため、北区のⅣ層ないし、Ⅲ層に相当する層上面が中世の遺構確認面となる。

遺構は南区の南側を除きほぼ全域から、区画溝、多数のピットや井戸、土坑が検出された。なお、南区では中世の中でも新しい時期（15世紀）の遺構・遺物が集中する傾向がある。

2) 検出された遺構

・掘立柱建物

SB528・529・530で検出された建物の柱穴は現在、不揃いである。V層上面で確認困難な柱穴の存在が考えられ、次年度以降の調査により柱穴が追加される可能性が大きい。

SB528 (図版3・19・26・74)

12D、12E、13D、13Eグリッドに位置する。SD006・016に囲まれた内部に位置し、この溝は本遺構に付随するものと推測される。また、SE017はSD016を避けるように構築されていることから、同時期に構築されたと推測され、本遺構に付随する施設の可能性がある。柱穴と溝の一部を東側のSX001や近・現代の暗渠排水溝により切られる。そのため、柱穴の遺存状態が極めて悪く、建物の規模は不明である。区画された溝の形状から南北棟であることが推測される。また、残存する柱の並びから庇付の縦柱建物と考えられる。柱穴の規模は20cm～50cmの円形で、深さは40cm前後である。遺物は柱穴内から出土しなかった。尚、SD006・016、SE017についての規模、遺物の出土状況については各々の各説で記す。

SB529 (図版3・16・27・74)

11D グリッド内に位置する。SD041 と重複する。桁行き 4 間 (6.3m) × 梁行き 3 間 (3.2m) の東西棟で側柱建物である。桁行きの柱間は平均 2.2m。梁行きは平均 1.5m を測る。柱穴は径 38 cm～48 cm の円形で、深さは 18 cm～38 cm である。P2・7・10・12 から柱痕が検出された。遺物は P3 より白磁壺 (52) の破片が出土した。SD041 との新旧関係は柱穴同志の切り合いがないため、不明である。

SB530 (図版3・15・27・75)

10C, 10D グリッド内に位置する。区画溝と考えられる SD041・061 に囲まれた内部に位置する。SK043・044・045 と重複する。後世の削平により、南側の柱穴が浅くなる。本遺構は消滅した柱穴も考慮に入れ、復元的に組み合わせを試みた。桁行き 3 間 (5.9m) × 梁行き 2 間 (3.5m) の東西棟で側柱建物である。桁行きの柱間は平均 1.90m である。梁間は残存しない柱穴もあるため、不明であるが、平均 1.8m 前後と推測される。柱穴は径 22 cm～48 cm の円形及び楕円形で、深さは 16 cm～34 cm である。P3 より柱痕が検出された。遺物の出土は見られなかった。

SB531 (図版3・12・28・75)

6A, 6B グリッド内に位置する。北区の南西隅に位置する。SB532 と重複する。桁行き 2 間 (5.10m) × 梁行き 2 間 (4.20m) の西側に庇が付く縦柱建物である。桁行きの柱間は 2.60m、梁行きは平均 2.20m、庇の部分は桁行きが 64 cm、梁行きが 1.20m を測る。遺構は桁行きの規模からさらに調査区外の南側へ広がる可能性がある。柱穴は径 24 cm～54 cm の円形及び楕円形で、深さは 24 cm～45 cm である。P1・P2・P3・P4・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P14・P15 から柱痕が検出された。新旧関係は SE047 を P6 が切る。SB532 との柱穴の切り合いはみられなかった。遺物は P6 より青磁の皿 (56) 1 点、P8・P15・P16 より白磁の碗 (53・54) が出土した。

SB532 (図版3・12・28・75)

6A, 6B グリッド内に位置する。北区の南西隅に位置する。SB531 と重複する。桁行き 2 間 (4.60m) × 梁行き 2 間 (4.60m) の側縦柱建物である。桁行きの柱間の平均は 2.20m、梁行きは平均 2.10m、庇の部分は桁行きが 1.7m、梁行きが 1.5m を測る。柱穴は径 28 cm～54 cm の円形及び楕円形で、深さは 14cm～32 cm である。P1・P9・P10 から柱痕が検出された。遺物の出土はみられなかった。

・井戸

中世の井戸は総計 36 基検出されている。すべて素掘りの井戸である。うち底面に石を敷いたものが 1 基検出されている。平面形は円形 34 基、楕円形 1 基、方形 1 基である。断面形は台形 18 基、箱形 8 基、階段状 7 基、漏斗状 2 基、不明 1 基である。井戸の大きさは長径 180 cm 以上が 13 基、180 cm 未満が 20 基、深さは 200 cm 以上が 1 基、110 cm 以上 180 cm 以下が 20 基、110 cm 未満が 13 基である。これを長径と深さの関係でみると、長径 180 cm 未満、深さ 160 cm 未満を A 類型、長径が 180 cm 以上 300 cm 未満、深さ 180 cm 以下を B 類型、長径 180 cm 以上 200 cm 未満、深さ 180 cm 以下を C 類型、長径 180 cm 以上、深さ 200 cm 以上を D 類型の 4 つの類型にまとまる (第 10 図)。覆土の堆積状況は I 類が黒色系を基調として下層が地山とほぼ大差のないもの、II 類は上層が地山とほぼ大差のないもので下層に黒色系の覆土が堆積しているものの、III 類は地山とほぼ大差のない覆土が下層まで堆積しているものの 3 つの類型に分かれる。I, II 類は遺物が出土している。III 類は出土遺物が碎のみで土器、木製品等の出土が皆無に近いが、あるいは出土遺物が全くみられない傾向にある。井戸としての機能が終了した際、一度期に埋め戻したものと推測される。また、各々は時期差よりも井戸としての機能が終了した後の、埋没過程の違いにより、覆土の状況が異なる。

るものと推測される。

覆土中より出土した遺物については、人為的な廃棄か自然の流れ込みかは定かではない。

各説では「流れ込み」の用語で統一した。ただし、砾等の重量のあるものは、明らかに人為的な行為がないと、遺構内に入らない。これらについては「流れ込み」では適切でないため、明確に「投げ込み」の用語を使用した。

SE017 (図版 3・19・29・76)

13E7・8 グリッドに位置する井戸である。本遺構は SB028と共に付随する遺構であると推測される。規模の類型は A 類である。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部分の形状から径 131 cm 前後のはば円形を呈するものと推測される。標高は 180m を測る。遺構は IX 層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 5 層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は全体的に少ない。1 層は黒色を基調とし、2 層以下は地山に近い色調を呈し、覆土の類型は I 類である。遺物は 4 層中より青磁の碗 (56) がほぼ完形に近い形で正位の状態で出土した。また、2 層から 5 層にかけて径 5 cm の砾が散在して出土した。遺物は共に北側から流れ込んだ状況が観察される。

SE019 (図版 3・17・29・76)

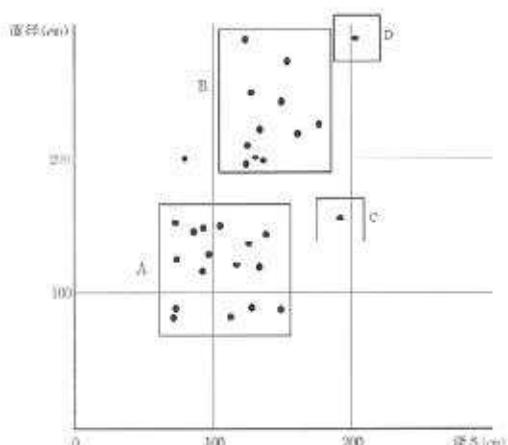
11B16・17・21・22 グリッドに位置する井戸である。SD109 と重複する。規模の類型は B 類である。底面の形状は長径 125 cm × 短径 109 cm のはば円形を呈し、標高は 255m を測る。遺構は XI 層まで掘り込まれている。壁面は下部から中部にかけて垂直に立ち上がり、上部は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 21 層に分層され、上部 14 層までがアロノケ状に堆積し、下部はほぼ水平堆積である。覆土の類型は III 類である。炭化物は全体的に少ない。覆土の堆積状態が異なるため、上部は別遺構の可能性が考えられるが、井戸を埋め戻す際の儀式的なものとも考えられ、判然としない。新旧関係は SD109 を切っている。遺物は 14 層中に大小さまざまな大きさの砾が西側から投げ込まれた状態で出土した。さらにその上の南西壁際に砾が集積された状態で出土している。

SE021 (図版 3・17・29・76)

10B8・13 グリッドに位置する井戸である。SD041 と重複する。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 40 cm × 短径 38 cm の円形を呈する、底面の標高は 230m を測る。遺構は XII 層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 5 層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型は II 類である。炭化物は 2・3 層に多く含まれ、他は少ない。新旧関係は南側を SD041 に切られている。遺物は 5 層中から、北側から白磁の破片、珠洲焼片口鉢 (59) や砾が出土した。

SE040 (図版 3・19・29・77)

12E2・3・7・8 グリッドに位置する井戸である。SX001 と重複する。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 85 cm × 短径 83 cm の円形を呈し、標高は 225m を測る。遺構は XIII 層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 7 層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型は II 類である。炭化物は 5 層が灰層で、他は少ない。新旧関係は SX001 に東側約半分の上部を切られる。遺物は中央よりやや東寄りの 2 層から 7 層中に砾がまとめて出土した。その中に混在



第 11 図 中世井戸規模グラフ

して珠洲焼甕の胸部細片が出土した。さらに、7層中からは礫の下敷きになる形で漆紙(60)が出土した。

SE046 (図版3・14・30・77)

7B24・25グリッドに位置する井戸である。SK056と重複する。規模の類型はA類である。底面の形状は長径130cm×短径84cmの梢円形を呈し、底面の標高は1.71mを測る。遺構は30層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上部で緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は11層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はII類である。炭化物は全体的に少ない。

新旧関係はSK056に切られる。遺物は礫が1から10層中にまとまって出土した。廃棄方向は最初に東側から、さらに西側からと2時期にわたって廃棄されていることが観察される。特に西側壁寄りには礫が集中する。また、珠洲焼甕、壺、片口鉢の破片、山茶碗、磁石が6層中より東側からの流れ込みの状態で出土した。

SE047 (図版3・12・30・77)

6B10、7B6グリッドに位置する井戸である。SB532と重複する。規模の類型はA類である。底面の形状は長径73cm×短径66cmのはぼ円形、底面の標高は2.07mを測る。遺構は30層まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がり上部で緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土はレンズ状堆積である。9層に分層される。覆土の類型はIII類である。炭化物は2・6層に多く含まれる。他は少ない。遺物は礫が6・8層に散在して出土した。さらに混在して、7層中から珠洲焼の壺の破片(78)が僅かに出土した。全体に西側からの流れ込みが観察される。

SE052 (図版3・16・30・78)

10D24・10E4グリッドに位置する井戸である。規模の類型はB類である。底面の形状は長径80cm×短径65cmの梢円形を呈し、標高は2.35mを測る。遺構は30層まで掘り込まれる。壁面は中位まで垂直に立ち上がり上部は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、上部がレンズ状堆積をなし、覆土の類型はIII類である。炭化物は1・5層に多く含まれる。他は少ない。遺構中央の1層から3層と5層に礫が集中して出土した。さらに、珠洲焼甕、常滑焼甕(79)の破片は1層中から出土した。遺物は北側からの流れ込みが観察される。

SE053 (図版3・16・30・78)

10E5・10グリッドに位置する井戸である。規模の類型はA類である。底面の形状は長径48cm×短径35cmの梢円形を呈し、標高は2.23mを測る。遺構は30層まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がり中位で階段状に段をなし、上部はやや外傾気味に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は6層に分層され、レンズ状堆積で、最下層はほぼ水平に堆積する。覆土の類型はII類である。炭化物は1・3層に多く含まれ、3層が炭層である。他は少ない。遺物は2層から6層にかけて礫が散在して出土した。また珠洲焼甕の破片、土製羽口(80)の破片が出土した。遺物は東側からの流れ込みが観察される。

SE055 (図版3・16・30・78)

11C8・9・13・14グリッドに位置する井戸である。SX023と重複する。規模の類型はA類である。底面の形状は長径54cm×短径53cmの円形を呈し、標高は1.82mを測る。遺構は30層中に掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。また北側に段をもつ。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はII類である。炭化物は全体的に少ない。遺物は1層から3層にかけて、礫がまとまって出土し、1層中から、珠洲焼片口鉢の破片が若干量出土した。遺物は西側からの流れ込みが観察される。また、4層以下の下層からは遺物の出土はみられなかった。

SE057 (図版3・14・31・78)

8C4・5・9・10 グリッドに位置する井戸である。規模の類型はB類である。底面の形状は長径127cm×短径109cmのほぼ円形を呈し、標高は147mを測る。造構はXV層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上部で緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は15層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はII類である。炭化物は全体的に少ない。遺物は1層から9層にかけて礫がまとまって出土し、1層から4層にかけて、青磁碗、瓦質十器、珠洲焼片口鉢の破片、砥石が出た。また、8層から15層にかけても礫が比較的まとまって出土し、その間の11層から直物側板が出土した。遺物は上層と下層の2時期のまとまりに分かれ、上層は北東側、下層が南西側からの流れ込みが観察される。

SE059 (図版3・12・38・86)

7B2・3 グリッドに位置する井戸である。北区の南西部に位置する。SB531・SB532周囲のピット群と隣接する。規模の類型はA類である。底面の形状は長径84cm×短径68cmの梢円形を呈し、標高は182mを測る。造構はXX層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、西側にテラスをもつ。壁面と底面の境は明瞭である。覆土の状況はレンズ状堆積である。7層に分層される。炭化物は全体的に少ない。覆土の類型はII類である。遺物は1層から4層にかけて礫がやや西側寄りに集中して出土した。また1層中から白磁碗の破片と粘土塊が出土した。

SE062 (図版3・13・31・79)

7D18・19・20・23・24・25 グリッドに位置する井戸である。SD105と重複する。規模の類型はB類である。底面の形状は長径144cm×短径75cmの梢円形を呈し、標高は1.39mを測る。造構はXIV層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をもつ。上部は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は西側を除き明瞭である。覆土は14層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はII類である。4層と6層が炭層である。他の層は炭化物が少ない。新旧関係はSD105を切る。遺物は1層から14層にかけて礫がまとまって出土した。特に西側寄りに集中する。の中には砥石(90)として使用された物も含まれていた。これらの礫に混在して12層中から珠洲焼壺(89)の破片が僅かに出土した。遺物は最初に北側からの流れ込みとその後、南側からの流れ込みの2時期が観察される。

SE064 (図版3・12・31・79)

6C20・25 グリッドに位置する井戸である。規模の類型はA類である。底面の形状は径54cmの円形を呈し、標高は1.92mを測る。造構はXX層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は8層に分層され、5層までがレンズ状堆積、5層以下は西側からの斜めの堆積である。覆土の類型はI類である。炭化物は1層に多く含まれる。4層が炭層である。他の層は炭化物が少ない。遺物は白磁碗の破片、珠洲焼片口鉢(92)が散在して1層中から出土した。礫は1層から8層にかけて散在して出土した。遺物は北側からの流れ込みが観察された。

SE068 (図版3・16・32・79)

11C20・25 グリッドに位置する井戸である。規模の類型はB類である。底面の形状は長径248cm×短径246cmの円形を呈し、標高は1.39mを測る。造構はXX層中に掘り込まれる。壁面は急な角度でやや外傾する。底面と壁面の境は明瞭である。覆土は6層に分層され、1層から3層までが、レンズ状に堆積し、5層以下は水平堆積である。覆土の類型はII類である。炭化物は3層に多く含まれる。また、3層中に一部植物の腐植土が混入する。遺物は1層から3層にかけて礫がまとまって出土し、珠洲焼(93)が2層から3層にかけて出土した。遺物の流れ込みの方向は北側からである。

SE070 (図版 3・12・32・80)

7C11・12 グリッドに位置する井戸である。規模の類型はA類である。底面の形状は長径 66 cm × 短径 61 cm の円形を呈し、標高は 2.03m である。遺構は XIII 層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 10 層に分層され、1 層から 6 層まで、交互に堆積し、6 層以下はレンズ状堆積である。覆土の類型は I 類である。炭化物は 1 層にやや多く含まれ、8 層は炭層で、他の層は少ない。遺物は蝶が 1・9・10 層に散在して出土した。遺物の流れ込みの方向は東側から 1 層と 9・10 層の 2 回が観察される。

SE071 (図版 3・12・32・80)

7C21 グリッドに位置する井戸である。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 79 cm × 短径 78 cm の円形を呈し、標高は 1.85m である。遺構は XIII 層に掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 19 層に分層され、ほぼレンズ状堆積である。覆土の類型は II 類である。炭化物は各層とも少ない。遺物は 1 層から 14 層にかけて、蝶が散在して出土し、4 層中から青磁碗、珠洲焼片口鉢の破片、1 層から砥石 (102)、6 層から鉄津 (100) が出土した。北側からの流れ込みが観察される。

SE077 (図版 3・12・33・80)

6C14・15・19・20 グリッドに位置する井戸である。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 70 cm × 短径 58 cm の楕円形を呈し、標高は 1.92m を測る。遺構は XIII 層まで掘り込まれる。底面には蝶が敷かれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 7 層に分層され、ほぼレンズ状堆積である。覆土の類型は III 類である。炭化物は全体的に少ない。遺物は 2 層と 5 層から 7 層にかけて蝶が散在して出土。また、珠洲焼片口鉢 (104) の破片、木製品 (105) は 6 層中から出土した。遺物の流れ込みの方向は 1 層が西側と東側から、5 層から 7 層のものは西側からである。

SE081 (図版 2・8・33・80)

5C21・22 グリッドに位置する井戸である。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 55 cm × 短径 45 cm の円形を呈する。底面の標高は 2.17m を測る。遺構は第 XIII 層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 6 層に分層され、レンズ状をなしているが、やや水平堆積に近い。覆土の類型は II 類である。炭化物は全体的に少ない。遺物の出土はみられなかった。

SE082 (図版 2・8・33・81)

5C22、5D2 グリッドに位置する井戸である。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 56 cm × 短径 46 cm の円形を呈し、標高は 2.18m を測る。遺構は XIII 層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 6 層に分層され、1 層から 4 層までが水平堆積をし、5 層以下がレンズ状に堆積をする。覆土の類型は II 類である。炭化物は 1 層に多く含まれる。3 層が炭層である。遺物は 1 層から 4 層にかけて蝶が散在して出土し、1 层中から珠洲焼窯の頸部の細片が出土した。西側からの流れ込みが観察された。

SE003 (図版 2・7・33・81)

4B15・20、5B11・16 グリッドに位置する井戸である。SE095 と重複する。規模の類型は R 類である。底面の形状は長径 86 cm × 短径 64 cm の楕円形を呈し、標高は 1.53m を測る。遺構は XIII 層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 7 層に分層され、1 層から 4 層までがほぼ水平に堆積し、5 層以下はレンズ状堆積である。覆土の類型は II 類である。新旧関係は

SE095 を切る。遺物は疊が1層から6層に散在して出土した。特に、第5層中から多く出土した。また、4・5層には青磁碗(106)の破片、珠洲焼片口鉢(107)の破片、曲物底板(110・111)が出土した。遺物の分布は1層から4層にかけての一群と5層から6層にかけての一群に分かれる。いずれも南側からの流れ込みが観察される。

SE084 (図版2・7・33・81)

4B14・15グリッドに位置する井戸である。SK096と重複する。規模の類型はA類である。底面の形状は長径66cm×短径54cmのほぼ円形を呈し、標高は1.75mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状ではあるが、水平堆積に近い。覆土の類型はⅢ類である。炭化物は全体的に少ない。遺物の出土はみられなかった。

SE085 (図版2・7・34・81)

4B25・5A21・5B1グリッドに位置する井戸である。規模の類型はB類である。底面の形状は長径178cm×短径167cmの円形を呈し、標高は1.52mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は7層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はⅢ類である。炭化物は全体的に少ない。2層から6層に疊が散在して出土した。遺物は西側からの投げ込みが観察される。

SE094 (図版2・7・34・81・82)

5B11・12・16・17グリッドに位置する井戸である。規模の類型はB類である。底面の形状は暗渠排水溝に切られ、不明であるが、残存部の形状から径144cm前後の円形を呈するものと推測される。標高は1.85mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり上部で緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はⅠ類である。遺物は1層から3層にかけて、疊が多く出土した。その中には磁石として、使用されたものも含まれていた。また、1層・2層から青磁碗、皿、白磁皿、常滑焼壺、珠洲焼壺、片口鉢、2層から漆椀、硯の破片が、3層から5層にかけて、自然木、檜、建築材等の木製品が出土した。四方からの投げ込みや流れ込みが観察される。

SE095 (図版2・7・33・81)

4B15・5B10・11・16グリッドに位置する井戸である。SE083と重複する。規模の類型はB類である。底面の形状はSE083に切られ不明であるが、残存部の形状から径148cm前後のほぼ円形を呈するものと推測される。標高は2.06mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は2層に分層され、水平堆積である。覆土の類型はⅢ類である。炭化物は全体的に少ない。SE083構築の際、一度期に埋め戻されたものと推測される。遺物の山上はみられなかった。

SE097 (図版2・7・34・82)

4A16・17・21・22グリッドに位置する井戸である。規模の類型はB類である。底面の形状は長径114cm×短径112cmのほぼ円形を呈し、標高は1.50mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面は段をもち垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はⅢ類である。炭層は3層である。他の層は炭化物が少ない。遺物は1層から5層にかけて疊が散在して出土した。疊の中には磁石として使用された物が含まれていた。また、4・5層中より、珠洲焼壺、須恵器系中世陶器壺の破片が出土した。遺物の分布は1層から4層までの一群と5層の一群に分けられ、いずれも西側からの流れ込みが観察される。

SE102 (図版3・12・35・82)

6A22・23、6B2・3グリッドに位置する井戸である。規模の類型はB類である。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部分の形状から径120cm前後の楕円形を呈するものと推測される。標高は1.76mである。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土はレンズ状堆積である。15層に分層される。覆土の類型はIII類である。炭層は7層である。他の層は炭化物が少ない。遺物の出土はみられなかった。

SE104 (図版3・12・35・82)

6C8・13グリッドに位置する井戸である。規模の類型はA類である。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部分の形状から、径93cm前後の楕円形を呈するものと推測される。標高は1.87mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は20層に分層され、17層までがレンズ状に堆積し、18・19層が西側からの斜位の堆積、20層は水平堆積である。覆土の類型はII類である。炭層は3層と7層である。また、炭化物は4・5層に多く含まれ、他の層は少ない。遺物は砾が1層と20層に出土し、1層から白磁碗の破片、20層から曲物底板が出土した。1層の遺物は流れ込みの方向が不明であるが、20層は西側からの流れ込みが観察される。

SE110 (図版3・15・35・83)

10D11・15・11D11・16グリッドに位置する井戸である。規模の類型はA類である。底面の形状は長径78cm×短径66cmの楕円形を呈する。標高は2.35mを測る。遺構はXI層まで掘り込まれる。壁面は中位まで垂直に立ち上がり、上部は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はIII類である。炭層は3層である。他の層は炭化物が少ない。遺物は砾が1層から5層にかけて散在して出土し、1層中から、常滑焼窓部破片、珠洲焼窓部細片、片口鉢破片、3層中から木片が出土した。北側からの流れ込みが観察される。

SE181 (図版2・35・83)

5E4グリッドに位置する井戸である。規模の類型はA類である。底面の形状は長径46cm×短径42cmの円形を呈し、標高は1.17mを測る。遺構はXI層に掘り込まれる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は3層に分層され、レンズ状に堆積する。覆土の類型はIII類である。炭化物は2層に多く含まれ、他の層は少ない。自然砾が1層中から出土した。

SE229 (図版3・13・35・83)

7E13・18グリッドに位置する井戸である。規模の類型はA類である。底面の形状は暗渠排水溝に切られ、不明であるが、残存部の形状より径65cm前後と推測され、標高は1.78mを測る。遺構はXII層まで掘り込まれる。壁面だけが垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は9層に分層され、上層がレンズ状に堆積し、7層以下がブロック状に堆積する。覆土の類型はIII類である。炭化物は7層に多く含まれる。他の層は少ない。遺物の出土はみられなかった。

SE262 (図版3・16・36・83)

10E13・14・18・19グリッドに位置する井戸である。道路際であったため、崩壊の危険性があり、底面まで掘り上げていない。したがって、底面の形状及び標高は不明である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上部で緩やかに外傾するものと推測される。覆土はレンズ状堆積である。調査した範囲では14層に分層される。覆土の類型はII類である。5層が炭層である。他の層は炭化物が少ない。遺物は1層から6層にかけて砾が散在し、3層から珠洲焼片口鉢が、11層から青磁が出土した。北側からの流れ込みが観察される。

SE437 (図版3・17・36・83)

10E18・19・23・24 グリッドに位置する井戸である。規模の類型はⅠ類である。底面の形状は長径 102 cm × 短径 69 cm の橈円形を呈し、標高は 0.97m を測る。遺構は XIV 層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は 18 層に分層され、ブロック状に堆積する。覆土の類型はⅡ類である。炭層は 12 層である。他の層は炭化物が少ない。遺物は 8 層から 9 層にかけて礫が散在して出土した。また覆土中から鉄滓が出土した。遺物の流れ込みの方向は東側からと観察される。

SC511 (図版2・7・36・84)

3A13、18 グリッドに位置する井戸である。規模の類型はⅢ類である。底面の形状は長軸 102 cm × 短軸 86 cm のほぼ隅丸方形を呈し、標高は 0.45m を測る。遺構は XII 層まで掘り込まれている。壁面は垂直に立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 15 層に分層され、ブロック状に堆積する。覆土の類型はⅢ類である。炭化物は全体的に少ない。遺物の出土はみられなかった。

・土坑

中世の土坑は北区の全域と南区の 3 グリッドライン以北から計 74 基が検出された。掘立柱建物の周辺やピット群の周辺に多く分布する。平面形態は円形・橈円形のものが大半である。長径と深さを基準に規模法量の分布を見ると、長径 1.10m 以下で深さ 1.00m 以下のもの、長径 1.10m ~ 2.10m、深さ 1.00m 以下のもの、長径 2.5m ~ 3.20m、深さ 1.00m 以下という 3 つの類型に分かれる。それぞれ先述のものから A 類から C 類型と呼称する。A 類型は 54 基検出され、本類型が圧倒的に多く、全体の 73% を占める。B 類型は 17 基であり、全体の 23% を、C 類型は 3 基で、全体の 4% を占める。覆土の状況はⅠ類からⅢ類の 3 類型に分けられる。Ⅰ類は上層が黒色系を基調とし、下層が地山と人差のないもので、炭化物を少量含むもの。Ⅱ類は上層が地山と大差なく、下層は黒色系を基調とするもの。Ⅲ類は地山とほぼ大差のないもの。本項では遺物の出土した土坑、遺存の良好な土坑についてのみ報告する。

SK002 (図版3・19・37・84)

12D20・25 グリッドに位置する土坑である。SB528 に接する。また区画溝である SD006・016 の内側に位置することから付随する遺構と考えられる。規模の類型はⅢ類である。底面の形状は長径 64 cm × 短径 62 cm の円形を呈し、標高は 2.44m を測る。遺構は XI 層上面まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 5 層に分層され、1 層から 3 層までが北側からの斜位の堆積で、4 層以下は水平堆積である。全体的に地山のブロックが多く混入し、人為的に埋められたものと思われる。炭化物は 2 層から 5 層にかけて多く含まれる。覆土の類型はⅢ類である。遺物の出土はみられなかった。

SK003 (図版3・19・37・84)

13D6・7・11・12 グリッドに位置する土坑である。区画溝である SD006 の外側に位置する。規模の類型は B 類である。底面の形状は長径 79 cm × 短径 64 cm の橈円形を呈し、標高は 2.98m を測る。遺構は VII 層まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は 2 層に分層され、レンズ状堆積である。覆土の類型はⅠ類である。遺物は 1 層中から、珠洲焼窯の胴部細片が南極寄りに出土したのみであった。

SK005 (図版3・19・37・84)

14D13・14・18・19 グリッドに位置する土坑である。北区の北東端に位置する。規模の類型は B 類である。底面の形状は長径 143 cm × 短径 117 cm の橈円形を呈し、標高は 2.61m を測る。遺構は VII 層まで掘り

込まれる。壁面は北側が緩やかに外傾する。壁面と底面の境は東側と西側が明瞭である。西側は階段状に段をなす。また、東側と南側はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は4層に分層され、1層がレンズ状、2層以下が西側からの斜位の堆積である。覆土の類型はI類である。炭化物は2層以下に多く含まれる。4層は炭層である。遺物は1層から3層にかけて、南側から廃棄されたかのような分布状態で白磁碗の底部破片、珠洲焼片口鉢、四耳壺、壺、甕の破片、礫がまとまって出土した。

SK009 (図版3・18・37・85)

13C14・15・19・20グリッドに位置する土坑である。北区の北部中央に位置する。規模の類型はD類である。底面の形状は長径128cm×短径54cmの楕円形を呈し、標高は2.97mを測る。遺構はⅦ層まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は単層である。炭化物は少ない。覆土の類型はⅢ類である。遺物の出土はみられなかった。

SK014 (図版3・18・37・85)

13C14グリッドに位置する土坑である。北区の北部中央に位置する。規模の類型はB類である。底面の形状は長径95cm×短径89cmのほぼ円形を呈し、標高は2.85mを測る。遺構はⅨ層まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は単層である。炭化物を多く含む。覆土の類型はⅢ類である。遺物は珠洲焼片口鉢の破片と礫がやや北寄りに集中して出土した。

SK020 (図版3・17・37・85)

11D15・20グリッドに位置する土坑である。北区の中央部よりやや西側に位置する。規模の類型はB類である。底面の形状は長径113cm×短径73cmのほぼ楕円形を呈し、標高は2.95mを測る。遺構はⅩ層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は4層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は2層に多く含まれ、他の層は少ない。覆土の類型はⅢ類である。遺物は1層から3層にかけて、珠洲焼四耳壺、片口鉢の破片と礫が散在して出土した。遺物の流れ込みの方向は西側からである。

SK034 (図版3・17・37・85)

10A24、10B4グリッドに位置する土坑である。北区の中央部から西寄りに位置する。規模の類型はB類である。底面の形状は長径37cm×短径26cmの楕円形を呈し、標高は2.75mを測る。遺構はⅧ層まで掘り込まれる。壁面は段をもち、緩やかな角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は3層に分層され、レンズ状を呈するが、やや水平堆積に近い。炭化物は全体的に少ない。覆土の類型はⅢ類である。遺物は覆土中から常滑焼甕、珠洲焼甕の破片、自然礫が散在して出土した。流れ込みの方向は遺物が少ないと認められるが、遺物の分布から西側及び東側の両方向の流れ込みが推測される。

SK043 (図版3・16・37・85)

10C17・18・22・23グリッドに位置する土坑である。北区のはば中央部に位置する。SK044と重複する。規模の類型はC類である。底面の形状は長径253cm×短径128cmの楕円形を呈し、標高は中央部2.87m、東側のピット状掘り込み部は2.79mを測る。遺構はⅨ層まで掘り込まれている。壁面は急な角度で立ち上がる。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は3層に分層され、見水平堆積に見えるが、堆積状況を細かく観察するとレンズ状を呈している。炭化物は1層に多く含まれる。覆土の類型はI類である。新旧關係はSK044を本遺構が切る。遺物は1・2層中から、珠洲焼片口鉢、四耳壺破片、鉄滓、礫がやや北西寄りに集中し、東側へ散在して出土した。

SK054 (図版3・16・38・86)

11E7・8・12・13 グリッドに位置する土坑である。北区の中央部の東寄りに位置する。規模の類型は A 類である。底面の形状は暗渠排水溝に切られ不明であるが、残存部の形状から梢円形を呈するものと推測される。底面の標高は 2.86m を測る。遺構はⅧ層まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土の状況は暗渠排水溝に切られ、明確ではないが、残存部の土層の観察から西側からの斜位の堆積である。炭化物は全体的に多く含まれる。覆土の類型はⅢ類である。遺物は 1 層から 2 層にかけて礫が散在し、1 層中から銅津が 1 点出土した。遺物の流れ込みの方向は西側からである。

SK066 (図版 3・13・38・86)

8D11・12・16・17 グリッドに位置する土坑である。北区の南東部に位置する。SD024・027・061 に囲まれ、SD078 とは隣接する。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 79cm × 短径 67cm のほぼ円形を呈し、標高は 2.79m ~ 2.85m を測る。底面は平坦でなく、凹凸が見られる。遺構はⅧ層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 2 層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は全体的に少ない。覆土の類型はⅢ類である。遺物は 1 層から 2 層にかけて、自然礫が出土し、2 层中から珠洲焼窯底部の破片が出土した。遺物の流れ込みの方向は西側からである。

SK069 (図版 3・12・38・86)

7C11 グリッドに位置する土坑である。北区の南端部寄りに位置する。SE070 と近接する。規模の類型は A 類である。底面の形状は長径 30cm × 短径 29cm の円形を呈し、標高は 2.45m を測る。遺構はⅦ層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は 5 層に分層され、1 層が水平堆積、2 層以下が東側からの斜位の堆積である。炭化物は 2・3 層に多く出土し、5 層が炭層である。覆土の類型はⅡ類である。遺物は 2 層中から、青磁碗の破片が出土した。

SK086 (図版 2・7・38・87)

4A3・4・8 グリッドに位置する土坑である。南区の北西隅に位置する。遺構は調査区外西側へ広がる。規模の類型は検出部分から B 類であると推測される。底面の形状は検出された部分から径 166cm 前後のほぼ円形を呈するものと推測される。標高は 2.53m を測る。遺構はⅦ層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 2 層に分層される。西側と東側からの斜位の堆積である。炭化物は 1 層に多く含まれる。覆土の類型はⅡ類である。遺物は 1 層中から、珠洲焼片口鉢の破片、礫が散在して出土した。

SK098 (図版 2・7・8・38・87)

3B23・24 グリッドに位置する土坑である。南区の中央部よりやや北寄りに位置する。東側はリブトレンチで切られる。SK174 と重複する。規模の類型は残存部分から見て、A 類であると推測される。底面の形状は残存部分より径 45cm 前後の梢円形を呈し、標高は 2.54m を測る。遺構はⅦ層まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は 2 層に分層され、レンズ状に堆積する。炭化物は 2 層に多く含まれる。覆土の類型はⅠ類である。遺物は石鉢の破片が 1 層中から出土した。

SK107 (図版 3・12・32・80)

7C21・22、7D1・2 グリッドに位置する土坑である。北区の南寄りに位置する。規模の類型は B 類である。底面の形状は SE071 に南西側を切られ、不明な部分もあるが径 192cm 前後のほぼ円形を呈するものと、推測される。標高は 2.42m を測る。遺構はⅦ層まで掘り込まれる。壁面は垂直に立ち上がり、中間部より上部にかけて緩やかに外反する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は 18 層に分層され、上部がレンズ状に堆積し、下部は水平に堆積する。炭化物は全体的に少ない。覆土の類型はⅡ類である。遺物は 1 層

から18層にかけて自然礫が散在して出土しているが、12層から15層にやや集中する。

SK108 (図版3・13・30・87)

7E8・9・10・13・14・15グリッドに位置する土坑である。北区の南東部に位置する。SD027、SK106とSE229が近接する。規模の類型はC類である。本土坑は特別に規模が大きい。同類の土坑は検出されていない。底面の形状は長径230cm×短径113cmの楕円形を呈し、標高は2.41mを測る。遺構はX層まで掘り込まれる。壁面は緩やかに外傾する。壁面と底面の境は不明瞭である。覆土は5層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は3層に多い。覆土の類型はII類である。遺物は礫が1層から5層にかけて、まとめて出土した。その中には砥石として使用されたものがみられた。また、青磁碗、皿、古瀬戸鉢、珠洲焼片口鉢、壺が1層から5層にかけて出土した。青磁碗の破片は約56m北側のSE017出土の青磁碗(56)と接合している。

SK486 (図版2・39・87)

3D25グリッドに位置する土坑である。南区の中央よりやや東寄りに位置する。規模の類型はA類である。底面の形状は長径48cm×短径42cmの円形を呈し、標高は2.38mを測る。遺構はX層まで掘り込まれる。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は単層である。炭化物は少ない。覆土の類型はIII類である。遺物は覆土中から、珠洲焼片口鉢の破片が一点出土したのみであった。尚この破片は東約8mに位置するSD490の破片と接合した。

・溝

溝は計画的に区画した溝と南北に員流する溝の2種類がある。本項では遺物の出土した溝について報告し、その他の溝についてけ巻末に表で掲載した。

SD00G (図版3・19・26・87)

12D～13Dグリッドに位置する区画溝である。SB528をL字状に囲む。SX001に切られ分断されるが、SD016とは同一の遺構と考えられる。底面は幅60cm、標高は2.90m～3.07mを測る。底面はやや北側が高い。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は4層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多く含まれる。遺物は1層から4層にかけて礫が散在して出土した。その中には砥石として使用されたものが含まれていた。また、1層中には白磁碗、珠洲焼甕の破片が若干出土した。

SD016 (図版3・19・26・87)

13E3～5・8～10グリッドに位置する区画溝である。SE017を挟んで南北に2つに分かれる溝であるが、方向、幅、規模共に同一であるため、同一遺構扱いとした。これはSE017を意識して避けて構築されたためと考えられる。本遺構はSE017と共にSB528に付随する遺構と考えられる。底面は幅82cm、標高は2.94mを測る。底面はほぼ平坦であるが、南端において段をもち、低くなる。覆土は2層に分層され、レンズ状堆積である。炭化物は1層に多く含まれる。遺物は1層中から、遺構全体に礫が散在して出土しており、中でも北端と南端部寄りに集中がみられる。また礫の間に混在して珠洲焼甕の破片が1点出土した。

SD024 (図版3・13～15・17・39・41・88)

8A～11Aグリッドにかけて南北方向に弧を描いて走行する溝である。区画溝であるSD041と重複し、SD041を切る。遺物は1層から2層にかけて礫が9B19グリッドから南側に集中して出土した。礫の中には砥石として使用されたものも含まれていた。また、白磁碗、青磁碗、常滑焼甕、珠洲焼壺・甕の破片が出土した。

SD025 (図版3・14・17・39・41・88)

8A～10B、10A～11A グリッドにかけて南北方向に直線的に走行する溝である。SD041 と重複する。新旧関係は SD041 を切る。遺物は礫が1層から散在して出土した。礫の中には砥石として使用されたものも見られた。

SD026 (図版 3・17・39・41・88)

9B～11A グリッドにかけて南北方向に直線的に走行する溝である。SD041 と重複する。新旧関係は SD041 を切る。遺物は覆土中に、礫が散在し、その間に常滑焼壺、珠洲焼片口鉢の破片が出土した。尚、常滑焼壺の破片は、本遺構より南東側約 11m に位置する SE057 の出土遺物と接合した。

SD027 (図版 3・13・14・39・41・88)

7B～7D、8A、8B、9A、10A グリッドにかけて南北方向から東西方向へ走行する溝である。南北から東西方向に屈折する角度は 65° を測る。7B グリッド内で一度切れ、7C グリッド内から東にかけて再び走向する。7D グリッドで互い違いになりさらに東へ定向する。本遺構は途中で切れたり、互い違いになるが、近接し、走行方向が同一で出土遺物がほぼ同時期であるため、機能的に一連のものと考え、同一遺構扱いとした。一部分、SD41 と重複するが新旧関係は不明である。遺物は1層～2層にかけて珠洲焼の破片や礫が散在し、礫の中には砥石として使用されたものも含まれていた。

SD041 (図版 3・15・17・39・41・88・89)

10A～D グリッドにかけて東西方向に走行、さらに 7～10C グリッドにかけて南北方向に走行する区画溝である。7～10C グリッドにかけては緩やかに西側へ曲がる。東西方向の溝は 11D1 と 11D11 グリッドの 2 か所がとぎれる。東端はほぼ直角に南側へ曲がり、11E2 グリッドで切れる。後世の削平を受けているため、本来は南北に続いていた可能性がある。新旧関係は SD024・025・026・040、SE021・437 に切られる。また、SD042・109 を切る。遺物は1層から2層にかけて、礫が散在し、その中には砥石として使用されたものも含まれていた。さらに、1層中から珠洲焼壺の破片が出土した。

SD049 (図版 3・17・30・41)

9A25～10A グリッドにかけて南北に走行する溝である。SD041 と重複する。新旧関係は SD041 を切る。遺物は覆土中に、礫が散在し、その間から常滑焼壺の破片、珠洲焼の破片が出土している。

SD109 (図版 3・15・17・39・40・41・89)

10D～10E、11A～11C グリッドにかけて東西をわずかに蛇行しながら走行する溝である。SX010、SD041、SE019・053、P414 と重複し、これらの遺構にすべて切られる。覆土は地山に似た人為的な埋土である。覆土には礫が散在していた。また、白磁皿の口縁部の細片と珠洲焼壺胴部の細片が 11C11 グリッドから出土した。

SD490 (図版 2・7・8・40・89)

南区中央の 2C～2E、3A～C グリッドにかけて東西に弧を描いて貰流する溝である。SK426・508 と重複する。新旧関係は両遺構とともに切られる。遺物は1層から4層にかけて礫が多量に全域で出土した。また、1・2層中から白磁碗、青磁碗、珠洲焼片口鉢・四耳壺・壺、須恵器系中世陶器壺、土師質土器鉢・壺の破片が散在して出土した。

SD515 (図版 2・7・40)

南区の北西部に位置する 3A グリッドから調査区外北側へ走行する溝である。SD490 と並走する。調査区の範囲内では SD490 との切り合いは認められなかった。遺物は覆土中から礫がまとまって出土し、その間から、青磁碗、珠洲焼片口鉢が出土している。遺物は SD490 より新しい。

SD521 (図版2・9・40・90)

2A グリッドに位置する溝で、東から西へ傾斜する。東側は新しい時期の自然流路により切られる。底面は紗利層である。溝の西側には長さ約55cm～80cmの木の枝を利用し、杭列状に15本打ち、約55cm～110cmの枝材を横に置き固定する遺構が存在する。「しがらみ」的な性格の遺構と推測される。遺物は溝の覆土中から青磁碗破片、珠洲焼片口鉢破片、曲物側板、碟が出土した。

C 近世**1) 概要**

近世の遺構は井戸2基、集石遺構2か所、凹地遺構7基、畝状遺構23基、溝2条が検出された。遺構確認面は中世の状況と同様である。井戸、集石遺構は南区の西側、凹地遺構は北区の北側寄り、畝状遺構、溝は南区の南側寄りからそれぞれ検出された。

2) 検出された遺構**・井戸**

近世の井戸は石組みのものと、素掘りの2形態が検出された。

SE090 (図版2・10・42・90・91)

3A22・23、3B2・3グリッドに位置する石組みの井戸である。上部は後世の開墾により削平される。残存部の深さ243cmを測る。石積み内方の形状は上面が円形、下部が方形を呈する。井戸底は幅8cm～11cm×長さ約70cmの板材が組み手接の二枚組接という手法で方形に組まれている。この上に石が積まれている。底面には碟が敷かれる。底面の掘形の規模は直径54cm。底面の標高は0.31mを測る。石組内覆土は水平に近い堆積をしていた。裏込めは灰色系を呈する土層と黒褐色土が互層を成して埋め戻されている。覆土中には井戸上部に組まれていた碟が崩れ落ちていたほか、出土遺物はない。

SE092 (図版2・10・43・90)

2A16・24に位置する素掘りの井戸である。底面の形状はほぼ円形を呈する。底面の規模は長径164cm×短径160cm、標高は1.69mを測る。本遺構はSD521の覆土上面を切る。壁面は急な角度で外傾する。壁面と底面の境は明瞭である。覆土は6層に分層され、ほぼレンズ状堆積である。炭化物は3層に多く含まれる。遺物は1層から2層にかけて、碟が散在して出土した。1層中には混入する形で珠洲焼片口鉢、甕の胴部の破片が若干量出土した。

・集石遺構

集石遺構は2基で、石組みの井戸であるSE090の周辺から検出されている。

SX099 (図版2・10・42・90)

3B2グリッドに位置する集石遺構である。SE090と近接する。SE090に付随する排水施設と推定される。長軸140cm、幅約32cm。標高は2.50m～2.68mを測る。南側に遺構は続いていると推定されるが、後世の耕作等の削平により消滅している。全体に崩壊しているため不明な点が多いが、残存部を見ると周囲の石材よりも一段高く、列状となる側右状部(図版42スクリーントーン部分)とその西側に接して石材を平に置いた底面状の部分が認められる。遺物は北寄りに石臼の破片が3点出土した。

SX100 (図版2・10・43・91)

3A19・24グリッドに位置する集石遺構である。掘形は隅丸の長方形を呈する。南北方向が長軸である。

底面の規模は長軸 256cm × 短軸 78cm、標高は 2.39 ~ 2.51m を測る。遺構は中世所産の SD490 の覆土を切る。掘形の覆土は最下層が層厚約 10cm ではば水平に堆積し、その上に小礫が配され、集石の範囲は長軸 246cm、短軸 88cm、隣層の厚さ 22cm を測る。炭化物は少ない。遺物は小礫が縦点数 10,618 点出土した。その中には梵字や漢字の墨書きが見られる経石が出土した。

・凹地遺構

北区の北側から 8 基検出された。断面が浅い皿状を呈する遺構で、平面が L 字形やフの字形、方形など、遺構面積が大きいものを凹地遺構として報告する。

SX001 (図版 3・19・44)

12 ~ 14E、13 ~ 14D グリッドにかけて調査区外北側と南側に広がる凹地遺構である。南側で SX023 と合流する。断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は 2.95m ~ 3.03m を測る。南側から北側へ緩やかに傾斜する。覆土は単層である。炭化物は少ない。遺物は 13E グリッドの覆土中から、染付け碗細片と銅製煙管の雁首が出土した。

SX004 (図版 3・19・44)

12 ~ 14C、12 ~ 14D グリッドに位置する溝状の凹地遺構である。南側で SX023 と合流する。断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は 2.94m ~ 3.12m を測る。南側から北側へ緩やかに傾斜する。覆土は単層である。炭化物は少ない。遺物は珠洲焼甕の細片が覆土中から出土した。

SX010 (図版 3・17・44)

11A・B、12A・B に位置する凹地遺構である。東側の SX023 とは畦状の高まりで分断される。断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は 2.94m ~ 3.12m を測る。覆土は単層である。炭化物は少ない。遺物は覆土中から肥前系の染付け碗の細片と土裂の人形が僅かに出土した。

SX023 (図版 3・17・18・44)

11B ~ E、12B ~ E グリッドに位置する溝状の凹地遺構である。東側で SX001・004 と合流する。断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は 2.93m ~ 3.13m を測る。東側から西側へ傾斜する。覆土は単層である。炭化物は少ない。遺物は覆土中から肥前系の染付け碗の細片と石製硯の破片が僅かに出土した。

SX538 (図版 3)

13A グリッドに位置し、調査区外北西側に広がる凹地遺構である。断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は 3.11m を測る。覆土は単層である。炭化物は少ない。栽培植物の検証分析では、ほかの凹地遺構に比べイネ属の機動細胞珪酸体の产出が顕著であった。

・畠状遺構

SX520 (図版 2 11 19 44 91)

2C ~ H グリッドに位置する畠状の遺構である。本遺構は 23 余の掘り込みが検出された。約 60 cm の間隔で規則的に配列している。長さは様々であるが、現状を観察すると長いもので、約 7.4m。平均して 6m 前後である。しかし、部分的に短い畠が重複しており、数度に渡る耕作の結果と考えられ、本来は 3.5 m ~ 4 m の短い畠が一つの単位で形成されていた可能性がある。遺構は北東から南西にかけて長軸をもつ。溝の幅は約 60 cm ~ 70 cm、深さは 8 cm ~ 10 cm を測る。断面形はすべて皿状である。2D17 ~ 19 グリッドの間は層位確認のための試掘トレンドにより消滅している。遺物の出土はみられなかった。本遺構は耕作による畠跡と推測される。

第V章 遺物

1 概要と基本方針

平成16年度の発掘調査では、古代から近世にかけての遺物が平箱（54×34×10cm）にして約260箱分出土している。内訳は古代が土器約30箱分、中世が土器約20箱分・石製品約10箱分・木製品少量・鐵入穀200箱分となる。古代では、Ⅸ層相当とⅩ層相当から遺物が出土し、前者からは須恵器を主体に9世紀代の遺物が、後者からは土師器を主体に10世紀前半の遺物が出土している。中世の遺物は包含層が消失しているため遺構覆土及び凹地遺構の覆土となるⅢ層から出土している。時期的には12世紀後半～13世紀前半、14世紀後半～15世紀後半の2時期が認められ、13世紀後半～14世紀前半にかけて空白となっている。12世紀後半～13世紀前半にかけての遺物群は、中世の遺物群の主体を占めており、今回調査した範囲のほぼ全域から出土している。14世紀後半～15世紀後半にかけての遺物量は少なく、今回調査した範囲の中でも南区に集中して出土している。近世の遺物は調査区全域に散布している。報告する遺物は遺構出土遺物を土としたが、古代のⅨ層相当については遺構出土遺物が微量のため包含層出土遺物を中心となっている。遺物説明は古代・中世・近世の順に記すが、古代はⅨ層相当とⅩ層相当の時期が存在するため各時期単位に説明する。

2 遺物各説

A 古代

1) 分類と記述方法

遺物は、須恵器・土師器が出土している。須恵器・土師器に関しては資料点数の多い器種及び胎土について類型を設定し、それを基に記述する。

須恵器 須恵器には無台坏・有台坏・蓋・長頸壺・横瓶・甕が存在し、この内の無台坏と有台坏は資料点数もやや多く、細分が可能である。無台坏及び有台坏に関して次のように分類する。

無台坏 無台坏は断面形状により4類型に細分できる。

I類（図版45-2～6） 底部は平底で、体部との境がやや不明瞭である。体部は丸みをもって立ち上がる。

II類（図版45-7～11） 底部は上げ底で、体部との境は明瞭である。体部は直線的に立ち上がる。

III類（図版45-1） 底部は上げ底で、体部との境は明瞭である。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部で外反する。

IV類（図版45-12） 底部は平底で、体部との境がやや不明瞭である。底径に対して器高が高い。

有台坏 断面形状と法量により4類型に細分できる。

I類 折縁坏の退化した形態で、口縁部端が玉縁状に肥厚する有台坏である。口縁部形状から細分できる。

a類（図版45-13） 口縁部の肥厚は著しくなく、一般的な口縁部との差は微妙なものとなるが、内面に沈線状の段を有している。

b類（図版45-14） 口縁部は肥厚し、内面には浅い凹線が認められる。

II類（図版45-15） 体部が直線的に立ち上がり、口径108mm前後で、器肩に比して口径の小さな有台坏である。

III類（図版45-16・17） 体部が直線的に立ち上がり、口径134mm前後、底径80～84mm、器高67～62mmとなる。

IV類（図版45-18・19） 体部が直線的に立ち上がり、口径152～156mm、底径84～88mm、器高72～82mmとなる大型の有台杯である。

土師器 土師器は胎土の特徴と資料点数の多い無台碗について類型を設定する。

無台碗の分類 ロクロ整形で、回転糸切りにより製作されており、断面形狀及び口径等の法量値により3類型に細分できる。

I類（図版46-30～33・36・37・39～49） 体部は小さな底部から大きく開きながら立ち上がり、口縁部で外反する。口径が115～135mm、底径が44～64mm、器高が39～53mmとなる。

II類（図版46-34・35・50・51） 体部は小さな底部から大きく開きながら立ち上がり、口縁部で外反する。口径が160～175mm、底径が65mm前後、器高が54mmとなる。外面体部下半に回転ハラクズリを施す。

III類（図版46-28） 底部は小さく、体部から口縁部は内湾気味に立ち上がる。銅鏡のような形狀を呈する。

胎土の分類 土師器の胎土に含まれる海面骨針と金雲母によりA～D類に分けられる。

A類 海綿骨針を含むが、金雲母は無い。

B類 海綿骨針と金雲母を含む。

C類 金雲母を含むが、海面骨針は無い。

D類 海綿骨針・金雲母を含まない。

2) IX層相当の遺物

遺物の多くは包含層中の出土で、遺構からはSD1052より須恵器と土師器がそれぞれ1点出土したに過ぎない。遺物の種別としては須恵器と土師器があり、須恵器の量が多い。

遺構出土遺物

SD1052（図版45・92）

本遺構け1の須恵器1点と土師器の細片1点が出土しているだけである。1は須恵器無台杯のIII類で、口縁部は外反し、底部は回転ヘラ切り、焼成は不良である。底面に「丁」の墨書が見られる。

遺構外出土遺物（図版45・46・92・93）

2～6は須恵器無台杯I類で、ロクロの回転方向は2・4・5が右、6は左で、3は不明である。胎土は2に黒色吹出物が含まれ、3～6は疊を含む。口縁部は2～4が端部を尖り気味に仕上げており、5・6は端部を丸く收めている。7～11は須恵器無台杯II類で、ロクロ回転方向は7・8が左、10・11が右、9は不明である。胎土は8・9・12に疊が含まれ、7・10・11は比較的精製されている。口縁部はいずれも端部を丸く收めている。器厚は8がやや厚く、7・9～11は薄い。11の底部には「人」の墨書が見られる。12は須恵器無台杯IV類で、胎土に疊を含み、器高が高い。13は須恵器有台杯Ia類で、ロクロ回転方向は右で、口縁部は小さな玉縁状となり、胎土に疊を含む。14は須恵器有台杯Ib類で、ロクロ回転方向は不明で、口縁部が大きな玉縁状となり、胎土に疊を含む。15は須恵器有台杯II類で、ロクロ回転方向は不明で、口縁部に対し器高が高く、胎土に疊を含む。16・17は須恵器有台杯III類で、ロクロ回転方向は17が左で、16は不明で、共に高台は外端を接地面とする。18・19は須恵器有台杯IV類で、ロクロ回転方

向は18が右で、19は不明で、共に口縁部はやや外反する。20～23は須恵器蓋で、20はつまみ中央部が縁よりも突出し、21～23はつまみ中央が突出しない形状と思われる。24は須恵器長頸壺の口縁部片で、口縁部端部は受け口状に屈折し、直立する。25は須恵器長頸壺の胴部で、高台の端面は水平で、底部の切り離しは糸切りとなる。26は須恵器横瓶で、胴部の閉塞部がやや丸味を有し、外面に節目のある叩きを施す。27は土師器の有台の鉢で、口縁部は外反し、内端が面となる。28は土師器無台碗Ⅱ類で、銅鏡のような形状を呈し、底部は回転糸切りである。29は土師器甕で、ロクロ整形、口縁端が内方へ屈折する。

3) VIII層相当の遺物

土師器と須恵器が出土しているが、土師器が大多数を占め、須恵器は極微量である。遺物はほとんどの遺構で出土しているが、実測不可能な細片が多く、実測可能な遺物が出土した遺構は少ない。

遺構出土遺物

SK1003 (図版 46・93)

土師器が100点前後出土しており、そのほとんどが碗の細片である。30・31は土師器無台碗Ⅰ類である。30は器厚が薄く、ロクロ目が顕著、胎土はD類である。31は器厚が厚く、ロクロ目が体部下半で不明瞭となり、胎土はA類となる。

SK1005 (図版 46・93)

土師器が140点前後出土しており、そのほとんどが碗の細片である。32・33は土師器無台碗Ⅰ類である。32は器厚がやや厚く、胎土はC類である。33は器厚がやや薄く、口縁部端部は直下に沈線状の凹線が巡り、外反する。胎土はC類である。

SK1008 (図版 46・93)

土師器が20点前後出土しており、そのほとんどが碗の細片である。34・35は土師器無台碗Ⅱ類である。34は器厚が薄く、ロクロ目は顕著、胎土はD類である。35は内面が黒色処理され、口縁部端部が丸く収められており、ロクロ目は顕著、胎土はB類である。

SK1009 (図版 46・93)

土師器が7点出土しており、そのほとんどが碗の細片である。36は土師器無台碗Ⅰ類で、器厚が薄く、胎土はD類である。

SK1010 (図版 46・93)

土師器無台碗1点が出土している。37はI類で、器厚が薄く、ロクロ目は顕著、胎土はD類である。

SK1011 (図版 46・93)

十師器が20点前後、須恵器が1点出土しているが、土師器はそのほとんどが碗で、また実測不能な細片である。ここでは須恵器の甕を報告する。38は須恵器甕の口縁部片で、胴部外面に叩き目が施される。

SK1017 (図版 46・93)

十師器が20点前後出土しており、そのほとんどが碗の細片である。39・40は土師器無台碗Ⅰ類と思われ、39は器厚が薄く、胎土はC類である。40は器厚が薄く、胎土はD類である。

SK1036 (図版 46・93)

土師器が60点前後出土しており、そのほとんどが碗の細片である。41～45は土師器無台碗Ⅰ類である。41は口縁部が丸く収められている。42は器厚が厚めである。43は器厚が薄い。44は口縁部が僅かに外反する。45はロクロ目が顕著で、口縁部が鋭く外反する。胎土は41・44がD類、42がC類、43・45

がA類である。

遺構出土遺物（図版46・93）

46～49は土師器無台碗I類である。46は内面が黒色処理される。47は器厚が厚く、口縁部は大きく外反する。48は器厚がやや厚めで、口縁部が僅かに外反する。49はロクロ目が顕著である。50・51は土師器無台碗II類である。50は内面が黒色処理され、器厚は薄く、口縁部は接合できないが同一個体と思われる破片を見ると外反している。51は口縁部が僅かに外反する。胎土は46・49がA類、47がC類、48・50・51がD類である。

B 中世

1) 記述の方法

中世では珠洲焼・中国輸入陶磁器・常滑焼・山茶碗・古瀬戸・木製品・石製品が出土している。これらの遺物は多くの先学により蓄積された研究成果があり、本報告においてもそれらの成果を用いて記述する。利用する研究及び留意点について以下に記す。

珠洲焼 編年及び器種の分類や用語については、吉岡康鶴氏[1994]の成果を参考として記述する。また、詳しくみると胎土に骨針を含む例や黒色吹出物を多く含む例など異なる特徴が観察され、珠洲以外の在地産が存在する可能性も否定できない。そこで、観察表の胎土の項に特徴的な含有物を示し、生産地を推測する資料として提示する。また、在地産の可能性の高い例は本文中に示している。これについては新潟県内の資料の増加をもって解決されるべき問題で、今後の課題である。

中国輸入陶磁器 中国輸入陶磁器全般については横田賀次郎氏・森田勉氏[1978]及び山本信夫氏[1995]、14世紀以降の白磁については森田勉氏[1982]、14世紀以降の青磁については上田秀夫氏[1982]、10～11世紀代の白磁については山本信夫氏[1988]の成果を参考として記述する。

常滑焼 常滑焼の編年については、中野晴久氏[1995]の成果を参考として記述する。

山茶碗 山茶碗の経年的編年については、藤沢良祐氏[1996]の成果を参考として記述する。

古瀬戸 古瀬戸の編年については、藤沢良祐氏[1991]の成果を参考として記述する。

石製品 石製品は砥石・砥石類・不明石製品が存在する。砥石類とは磨ったような光沢をもち、砥石とは異なる用途の可能性も考えられるものを一括した。

搬入礫 人為的に遺跡内に持ち込まれたと考えられる跡を示す。然を受けた痕跡や近隣の河川では採取できない大型のものもある。

2) 出土遺物

遺構出土遺物

SB529（図版47・93）

P3から出土した白磁片1点のみである。内外面施釉されており、白磁壺III類の可能性がある。

SB531（図版47・93）

P2・P12・P14から白磁、P11から青磁が出土している。53は白磁碗の口縁部片で、口縁外端面が面取りされている。白磁碗V-1類もしくはVII類と考えられるが、後者の可能性が高い。54は大型の玉縁口縁部をもつ白磁碗IV類の口縁部片である。隣接するP12とP14から出土した破片が接合している。55は同安窯系青磁壺I-1b類で、体部内面から内底見込みに櫛目による雷状文と沈線による十字状文が施文される。本青磁は本遺構から南東へ約40m離れた3C21グリッドII層出土遺物と接合している。輸入陶

器の組み合わせは12世紀後半代を示している。

SE017 (図版 47・94・107)

青磁1点・珠洲焼3点・搬入碟1点が出土しているが、珠洲焼はR種壺の細片が3点のみである。ここでは青磁のみ報告する。搬入碟は1点のみである。56は龍泉窯系青磁碗I-2a類で、割花文が内底に1単位、体部内面に3単位施文される。本青磁は本遺構より南へ約56m離れたSK108出土遺物と接合している。

SE019 (図版 47・94)

白磁1点・珠洲焼1点・搬入碟約100点・木片数点が出土しているが、珠洲焼は細片1点のみである。ここでは白磁と搬入碟について報告する。搬入碟に関しては覆土中から大きな輪郭の描いた碟が意図的に廻収されたような出土状況が認められた。碟は長さ4~11cm×幅2.5~5cm×厚さ1.5~3cm、重量が40~180gに集中する法量分布を有し、棒状の自然碟が多く、意図的に選択されて集められていると思われる。57は白磁皿VI類で、釉が黄色味を帯び、体部内面に沈線あるいは段を有している。

SE021 (図版 47・94)

白磁1点・珠洲焼数点・搬入碟1点が出土している。珠洲焼はT種壺と片口が存在する。58は白磁碗の破片と思われ、広東系の白磁で、山本編年C期の所産と考えられる。59は珠洲焼I期の片口である。口縁部は端面をほぼ水平にとり、外端がやや水平方向につまみ出された方頭状を呈する。珠洲焼と白磁は時期的関係においてほぼ一致している。

SE040 (図版 47・105)

漆紙1点・珠洲焼6点・搬入碟20点前後が出土しているが、珠洲焼はT種壺とR種壺の細片が数点出土したのみである。ここでは漆紙について報告する。60の漆紙は二つ折りにされ、全体に漆が染み込み、樹皮のようになっている。赤外線による觀察では文字等は見られない無地の紙である。

SE046 (図版 47・48・91・95)

山茶碗1点・珠洲焼約30点・石製品6点・搬入碟約110点が出土している。珠洲焼はT種壺・壺類の破片が全量の約6割と多く、R種壺と片口はそれぞれ約2割と少量である。61は山茶碗で、胎土が精良な均質手であること、初殻痕を有す低い三角形の高台であることより第5型式の束濃型と思われる。62~65は珠洲焼II期の片口である。62は口縁部端面を外にとり、内端を爪状に仕上げている。63は8日の印し目が施されている。64は体部が丸みを帯びやや古い様相を示すが、口縁部が端面を外にとり、内端が爪状となることからII期と考える。65は幅広の片口をもち、口縁部は端面をやや外に取り、内端が爪状に仕上げられている。66は珠洲焼R種壺の胴部片で、櫛目波状文が施文され、II期以前の所産と思われる。67~69は珠洲焼R種壺である。67は底部に板状痕が見られる。68は底部が静止糸切りである。69は内外面に漆捺付着物が見られる。70は珠洲焼T種壺で、口縁部端面に櫛目波状文が施文され、頸部直下に意味不明の刻文を有す。71~72は珠洲焼壺片で、71は平行叩き、72は平行叩き目を格子状に施している。73は珠洲焼I期の壺で、端部が嘴頭状となる長頸の「コ」の字状口縁部である。74~77は砥石である。74は砥面が2面あり、刃痕や削痕が存在するが、使用面の摩耗は弱い。75は砥面が2面で、側面に削痕が見られる。76は砥面が1面で、刃痕が多く、側面にも刃痕が見られる。77は砥面が3面で、全体に刃痕が多く見られ、割れた部分にも少量の刃痕が認められる。本遺構では珠洲焼のI・II期が混在しているが、これは本遺構が珠洲焼I期の所産であるSD027を切ったために混入したと考えられる。

SE047 (図版 48・95)

珠洲焼数点と搬入砾約20点が出土している。珠洲焼はT種壺・壺類が数点出土しただけである。78は珠洲焼I期のT種壺と思われ、頸部から一段下がった部位より叩き打ちされている。

SE052 (図版48・96)

常滑焼1点・珠洲焼数点・搬入砾約100点が出土しているが、珠洲焼はT種壺の細片が出土したのみである。ここでは常滑焼について報告する。79は常滑焼の壺胴部上位片で、胴部はやや丸みをもつて立ち上がり、器厚は薄い。

SE053 (図版48・95)

羽口1点・珠洲焼数点・搬入砾約10点が出土しているが、珠洲焼はT種壺の細片が出土したのみである。ここでは羽口について報告する。80は十製羽口片で、先端部は融解が著しく、その範囲から見た壁への挿入角度は水平を基準として30°である。

SE055 (図版48・95)

常滑焼が出土している。81は常滑焼壺の胴部片で、外面に縦状の押印が見られる。

SE057 (図版49・95・105)

青磁1点・珠洲焼約20点・瓦質土器1点・石製品1点・木製品1点・搬入砾約50点が出土している。珠洲焼は数点の片口の破片を除き、あとは全てT種壺・壺類である。82は龍泉窯系青磁碗I-2類と思われ、片切彫と獅目により施文されており、破片の文様は花の中央部分と思われる。83は珠洲焼I期の片口で、口縁部は端部水平に面をとる方頭である。84は珠洲焼の片口で、胎土は砂質、焼成はやや不良で、鉢し目は密であることよりVI期と思われる。85は珠洲焼IあるいはII期のT種壺で、口縁部は外反し、端部は嘴頭状となり、外方へと延びている。86は瓦質土器の鉢で、内外面が赤彩されている。87は砥石である。底面は3面で、破砕面と底面の角は丸く磨耗している。88は曲物側板である。本遺構の珠洲焼はI期とVI期が混在しているが、84は遺構確認面で出土していることから基本土層Ⅲ層に伴う可能性がある。

SE062 (図版49・95)

珠洲焼4点・石製品1点・木片微量・搬入砾約30点が出土している。珠洲焼はT種壺の破片が出土している。89は珠洲焼壺の底部片で、砂底である。90は砥石で、底面は比較的平滑であるが刃痕はない。

SE064 (図版49・95)

白磁1点・珠洲焼5点・搬入砾5点が出土している。珠洲焼はT種壺の破片が多い。91は白磁碗の体部片で、外面は削りが施され、下部が露胎となり、内面に沈線を有することより碗IV類と推測される。92は珠洲焼I期の片口基部片で、口縁部は端面を水平にとる方頭である。珠洲焼と白磁は時期的関係においてほぼ一致している。

SE068 (図版49・50・96)

珠洲焼9点・石製品5点・搬入砾約60点が出土している。珠洲焼はT種壺の破片が多い。93は珠洲焼R種壺の胴部片である。94は砥石で、1面が平滑となり、刃痕状の条線が見られる。95~97は砥石類である。95は光沢のある面を有し、その面はやや曲面となる。96は刃痕が少量見られるだけで、底面となるような平滑な面は無い。97も光沢のある面を有している。

SE071 (図版50・96)

青磁1点・珠洲焼約10点・石製品1点・鐵錠1点・搬入砾約40点が出土している。珠洲焼はT種壺の破片が多い。98は龍泉窯系青磁碗I-4類で、内面に区画文と区画された中に別の文様が施文されている。99~101は珠洲焼II期の片口である。99・100は同一個体と考えられ、鉢し目は曲線と波状が施さ

れ、口縁部は端部が外方に面をとる方頭である。101は鉢し目が直線的となる。102は砥石で、端面に溝と切込みが認められる。103は炉内滓で、鉄分は微量である。珠洲焼と青磁は時期的関係において離隔が見られる。

SE077 (図版 50・96)

珠洲焼数点・本製品1点・搬入蝶約100点が出土している。104は珠洲焼Ⅰ期の片口で、口縁部は端面をほぼ水平にとる方頭となる。105は弾幕材を再利用し、ほぞ穴のある端部を再加工して尖らせている。

SE083 (図版 50・96・106)

青磁1点・珠洲焼5点・本製品2点・搬入蝶約10点が出土している。珠洲焼はT種甕・壺類2点と片口3点が存在する。106は龍泉窯系青磁碗I~5b類で、幅広の錦蓮弁文が施文される。107~109は珠洲焼V期の片口である。107は三角頭の内傾口縁部で、内端面は無文である。107・108は使用痕が顕著である。109は見込み中央に摩滅痕が認められ、破損後漆で修復している。110・111は曲物底板で、110の側面には釘孔が残存している。

SE094 (図版 51・52・97・105)

青磁2点・白磁1点・常滑焼1点・珠洲焼7点・土製品1点・石製品5点・木製品7点・搬入蝶約200点・木片多量が出土している。珠洲焼はT種甕・壺類4点・片口3点が存在する。112は青磁盤もしくは皿で、外底の袖を輪状にカキトリしており、14世紀後半以降の所産と考える。113は青磁碗で、体部内外面に幅広の蓮弁文、見込みに草木と「金」の字のスタンプ文が見られ、上田編年のC2類もしくはB2類と考えられる。114は白磁皿で、森田編年のD群である。115は常滑焼で、外面に籠状の押印が施文される。116は珠洲焼Ⅱ期の片口で、鉢し目は直線的である。117は珠洲焼甕の胴部片である。118は土製埴堀と思われ、全体に崩解・変色が著しい。119・120は硯で、119は小型品で、全体に漆が付着し、硯としてやや疑問点がある。121・122は砥石である。121は砥面3面と微量の刃痕のある側面が見られ、裏面は欠損する。122は方形断面の石の1面を砥面としている。123~129は木製品である。123は総黒色漆器椀で、高台は内方が削りだされており、15世紀代の所産である。124は把手と考えられ、本来は左右対称の形状を呈し、欠損部にもほぞ状の突起が存在したと推測される。125は鎌の柄で、「く」の字状に屈折する柄尻部の破片である。126~128は屋根材等の押さえにした材の破片と思われ、いずれも釘孔部分より折損しており、本来はもっと長かったと推測される。126・127の釘孔の痕跡は中央部と両端部の計3孔、128は両端部2孔が確認できる。129は檜で、半乾した丸木材を列りぬいて作成されている。本遺構の遺物は115~116のような12世紀後半~13世紀前半の遺物群と112~114のような15世紀代の遺物群が混在しているが、前者は混入した遺物群で、後者が本遺構に伴う遺物と考えられる。

SE097 (図版 53・97)

珠洲焼8点・石製品2点・搬入蝶約70点が出土している。珠洲焼はT種甕・壺類が多い。130は珠洲焼R種壺で、柳目文が施文されている。131は珠洲焼系の中世須恵器の縁口縁部片である。焼成不良で、器厚も厚く、珠洲焼とは考え難く、別の生産地の製品と思われるが、口縁部がやや「コ」の字状を呈し、内端面に凹線は入る等から珠洲焼Ⅰ期に併行する時期の所産と考える。132は珠洲焼Ⅰ期のT種壺で、頭部より一段トがった部位から叩きが開始されている。133は砥石類で、円盤状の自然礫の一面に砥面があり、その裏面に磨耗痕が見られる。

SE104 (図版 53・97・106)

白磁1点・本製品1点・搬入蝶3点が出土している。134は白磁碗IV類で、大きな干縁口縁を有し、口

縁部の断面中央には折り返しの痕跡である小さな隙間が認められる。135は曲物の底板で、側面に釘孔が存在する。

SE110 (図版 53・97)

常滑焼 1 点・木片少量・搬入碟 16 点が出土している。136は常滑焼の甕で、簾状押印が施文されている。

SE262 (図版 53・97)

青磁 1 点・珠洲焼 5 点・石製品 1 点・搬入碟 9 点が出土している。珠洲焼は T 種甕・壺類 2 点、R 種壺 1 点、片口 2 点が存在する。137は龍泉窯系青磁碗 I 類で、外底高台の内方に墨痕が見られる。138・139は珠洲焼 II 期の片口で、同一個体と考えられ、卸し目はやや弧を描いて施される。140は石製品で、孔部中央から欠損するため全体像は不明だが、偏在した位置に穴が存在する。孔部には明確な加工痕が無く、自然縫の可能性もある。性格・機能は不明である。珠洲焼と青磁は時期的関係において齟齬が生じている。

SE437 (図版 53・97)

鉄滓 4 点・搬入碟 3 点が出土している。141は鉄滓で、鉄分は微量である。

SK005 (図版 53・54・98)

白磁 1 点・珠洲焼約 20 点・搬入碟約 40 点が出土している。珠洲焼は T 種甕・壺類が約 7 割を占め、R 種壺は 1 点、片口は 3 点と少量である。142は白磁碗 IV 類の底部片、低い削り出し高台である。143は珠洲焼の片口と思われ、底部は静止糸切りである。144は珠洲焼 I 期の四耳壺であるが、胎土中に礫をやや多く含むことから別の生産地かもしれない。把手は横位の橋状を呈し、胴部に櫛目文が施文される。145は珠洲焼 I 期 T 種壺で、頸部より一段下がった部位より叩きが開始されている。146・147は珠洲焼甕で、共に砂底である。本遺構の輸入陶磁器と珠洲焼は時期的には一致すると言える。

SK014 (図版 54・98)

珠洲焼 2 点・搬入碟 1 点が出土している。珠洲焼は T 種甕と片口が存在する。148は珠洲焼 I 期の片口で、口縁部は端面をほぼ水平とする方頭で、体部は丸みをもって立ち上がる。

SK020 (図版 54・98)

珠洲焼 1 点・搬入碟 4 点が出土している。珠洲焼は T 種甕・壺類と R 種壺が存在する。149は珠洲焼 I ~ II 期の四耳壺であるが、胎土中に礫がやや多く含まれているため珠洲焼ではなく、別の生産地の可能性も考えられる。把手は横位の橋状を呈すると思われ、把手の脇に抽象的な刻文が施文される。

SK034 (図版 54・98)

常滑焼 1 点・珠洲焼 1 点・搬入碟 1 点が出土しているが、珠洲焼は T 種甕の細片のみである。ここでは常滑焼について報告する。150は常滑焼甕の胴部下位の破片で、器厚は薄く、外面に簾状の押印が施文されている。

SK043 (図版 54・98)

珠洲焼約 10 点・鉄滓 1 点・搬入碟約 20 点が出土している。珠洲焼は T 種甕・壺類が半分を占め、R 種壺・片口は少量である。151は珠洲焼 I ~ II 期の片口で、口縁部はやや外方に面をとる方頭である。152は珠洲焼 I ~ II 期の四耳壺で、把手は横位の橋状を呈すると思われ、胴部には櫛目文が施文される。153は伊内津で、鉄分は微量である。

SK054 (図版 54・98)

鉄滓 1 点・搬入碟約 10 点が出土している。154は鉄滓で、鉄分は微量である。

SK059 (図版 54・98)

白磁 1 点・土製品 1 点・搬入磚 7 点が出土している。155 は白磁碗で、外面体部下位は削りが施され、露胎となる。山本編年の C・D 期と思われる。156 は焼成された粘土塊で、性格不明である。

SK066 (図版 54・98)

珠洲焼 1 点・搬入磚 3 点が出土している。157 は珠洲焼壺の底部片で、砂底である。

SK069 (図版 54・98)

青磁 1 点が出土している。158 は龍泉窯系青磁碗 I もしくは II 類で、高台が方形となる。

SK086 (図版 54・98)

珠洲焼 1 点が出土している。159 は珠洲焼 II 期の片口で、鉢目は入り組み技法により施される。

SK098 (図版 54・98)

石製品 1 点が出土している。160 は石鉢で、全体に粗い造りとなり、外面は縦から斜位の盤痕が認められ、口縁部上端から内面はやや平滑に仕上げられている。破損後然を受けており、割れ口等に煤が付着している。時期的には近世井戸 SE90 周辺から出土しているため近世の可能性もある。

SK108 (図版 55・99)

青磁 2 点・占領戸 1 点・珠洲焼約 20 点・石製品 3 点・搬入磚約 150 点が出土している。珠洲焼は T 種壺・壺頃が約 7 割を占め、R 種壺と片口は少量である。161 は青磁碗で、底径が小さく、外底の中央が山形に突出していることより同安窯系青磁碗 I 類の可能性が考えられる。162 は同安窯系青磁皿 I 類で、体部中位が「く」の字状に屈折する。163 は古瀬戸鉢皿で、後期様式の所産と思われ、混入したと考えられる。164～166 は珠洲焼片口で、164・166 は口縁部が端面を外方にとることから II 期、165 は I あるいは II 期のいずれかの時期と考えられる。167 は珠洲焼 II 期の T 種壺で、口縁部が大きく外反し、頸部直下より叩きが開始される。168 は砥石片である。砥面は 1 面で、刃痕が見られる。169 は砥石類で、僅かな刃痕と光沢を持つ使用面が 2 面あり、1 面は割れた面を利用している。本遺構では輸入陶磁器が 12 世紀後半代の時期を示すのに対して、珠洲焼 13 世紀代前半時期を示し、両者の間に僅かながら時期的な齟齬が認められる。

SK486 (図版 55・99)

珠洲焼 1 点が出土しているだけである。170 は珠洲焼 I 期の片口で、ロクロ目が明瞭で、丸みの強い体部である。本遺構の南へ約 8 m に位置する SD490 の遺物と接合する。

SD006 (図版 55・99)

白磁 1 点・珠洲焼約 10 点・石製品 1 点・搬入磚約 30 点が出土している。珠洲焼は T 種壺・壺類 7 点、R 種壺が 1 点、片口が 2 点存在する。171 は白磁碗 IV 類で、大きな玉縁口縁部を有し、口縁部の断面中央には折り返しによる小さな隙間が認められる。172 は珠洲焼 I 期の片口で、口縁部端面を水平にとっている。173 は珠洲焼 R 種壺で、御目文が施文される。174 は棒状の自然礫を用いた砥石で、砥面は 1 面で、一部に削り痕が認められる。本遺構の動入陶磁器と珠洲焼は時期的な関係がほぼ一致していると言える。

SD016 (図版 55・99)

珠洲焼 5 点・搬入磚約 20 点が出土している。珠洲焼は T 種壺 4 点と R 種壺 1 点が存在する。175 は珠洲焼 I 期の壺で、「コ」の字状口縁部を有すると考えられる。本遺構は配置的に SD006 と関係すると思われ、遺物においても 12 世紀後半代と一致することから同一の遺構として考えるべきかもしれない。

SD024 (図版 55～57・99～101)

白磁 1 点・青磁 1 点・常滑焼 14 点・珠洲焼約 60 点・石製品 3 点・搬入磚約 200 点が出土している。珠

洲焼はT種甕・壺類が約7割を占め、R種壺と片口は少量である。176は白磁碗IV-1-a類で、低い削り出し高台を有している。177は龍泉窯系青磁碗1類で、内面に劃花文が施文され、焼成はたいへん不良である。178～190は常滑焼で、1～数個休分と思われる。178は口縁部で大きく外反する。179～188まで胴部上位の破片で、いずれも釉が掛かり、187～188は外面に簾状の押印が施文されている。189・190は胴部下位片で、外面に簾状の押印が施文される。191～193は珠洲焼II期の片口で、191は直線的で雑な鉢目が、193は直線及び雷状の鉢目が施される。192は内面がかなり摩滅している。194は珠洲焼R種壺で、櫛目文が施文される。195は珠洲焼II期の四耳壺で、縦位の環状把手が付く。196は珠洲焼R種壺である。197は還元焰の壺だが、口縁部が三角形状に肥厚した特殊な形を呈し、珠洲焼かは不明である。198は珠洲焼I期甕の口縁部片で、大きく外反し、内端が凹線となる。199は珠洲焼甕で、砂底である。200～202は砾石である。200は砾面がやや凹状となり、刃痕・削痕がやや多く存在する。201は棒状の砾の1面を砥面とし、砥面は半滑である。202は破碎砾の1面を砥面とし、砥面には微細な刃痕が長軸方向に沿って少数見られる。本遺構は12世紀後半～13世紀前半の遺物が混在して出土しているが、珠洲焼においては13世紀前半代が主になると思われ、輸入陶磁器や常滑焼との時期的関係に齟齬が生じている。

SD025 (図版57・101)

珠洲焼4点・石製品1点・搬入砾約20点が出土している。珠洲焼はT種甕・壺類が2点、片口が2点出土している。203は珠洲焼II期の片口で、口縁部は端面を外方にとる方頭状である。204は不整形の自然砾を用いた砾石で、砥面は3面が砾の片側に偏在し、刃痕が多く見られる。

SD026 (図版57・101)

常滑焼1点・珠洲焼約10点・搬入砾約10点が出土している。珠洲焼は片口1点を除き、全てT種甕である。205は常滑焼の肩部片で、本遺構から南東へ約11mに位置するSE057出土遺物と接合する。206は珠洲焼II期の片口で、口縁部は端面を水平にとる方頭状である。

SD027 (図版57・58・101・102)

本遺構は常滑焼1点・珠洲焼約50点・石製品1点・搬入砾約80点が出土している。珠洲焼はT種甕・壺類が約7割を占め、R種壺が約2割弱、片口が1割強となる。207は常滑焼甕で、外面に簾状の押印が施文される。208は珠洲焼I期の片口で、回転糸切りである。209・210は珠洲焼R種壺で、静止糸切りである。211は珠洲焼I期の甕で、長頸で大きく外反する。210は珠洲焼甕で、砂底である。213は砾石で、砥面は3面あり、凹状を成す面が最も平滑で、その裏面は比較的平滑で刃痕が多く、側面は使用頻度が少ないため凹凸が見られる。常滑焼と珠洲焼の時期的関係はほぼ一致すると見える。

SD041 (図版58・102)

珠洲焼約10点・石製品1点・搬入砾約50点が出土している。珠洲焼はT種甕が9点、R種壺が1点である。214は珠洲焼IもしくはII期の甕である。215は砥石で、砥面は2面有り、主要な使用面には刃痕が多く見られる。

SD049 (図版58・102)

常滑焼3点・珠洲焼7点・搬入砾約30点が出土している。珠洲焼はT種甕6点と片口1点が存在する。216～218は常滑焼で、216・217には外面に簾状の押印が施文される。219は珠洲焼I期の片口で、口縁部は端面が水平で、外端が嘴頭状に突出する。

SD109 (図版58・102)

白磁1点・珠洲焼数点・搬入砾約20点が出土しているが、珠洲焼は細片だけである。ここでは白磁に

について報告する。220は白磁碗あるいは皿で、山本編乍のC・D期の所産と考えられる。

SD490 (図版 58・59・102・103)

白磁1点・青磁1点・珠洲焼約110点・瓦質土器数点・搬入罐約500点が出土している。珠洲焼はT種壺・壺類が約7割を占め、R種壺が1割弱、片口が2割強存在する。221は白磁碗IV類で、大きな玉縁口縁を有し、折返し痕が認められる。222は龍泉窯系青磁碗I-2あるいは3類で、内面に劃花文が施文される。223は龍泉窯系青磁碗I類である。224-226は珠洲焼II期の片口で、224は雷状の鉢し目が、225は直線の鉢し目と円文が施されている。227・228は珠洲焼IあるいはII期の四耳壺で、横位の橋状把手が付着していたと考えられる。229は珠洲焼I期のR種壺で、回転糸切りである。230は珠洲焼II期のT種壺で、口縁部端面に櫛目文を有している。231は牛產地不明の中世須恵器で、山形の押印が施され、胎土に礫を多く含む。232・233は瓦質土器の鉢と思われる。234は瓦質土器の壺で、砂底である。

SD515 (図版 59・103)

青磁1点・珠洲焼約6点・搬入罐約20点が出土している。珠洲焼はT種壺2点、R種壺1点、片口3点が存在する。235は龍泉窯系青磁碗I-5b類で、鐵蓮介文の鍋がやや不明瞭である。236は珠洲焼の片口で、口縁部内端面に櫛目波状文が施文される等の新しい要素が見られるが、口縁部はほぼ水平に端面を取り、あまり肥厚しないなど古い要素が残存するためIV期もしくはV期のいずれかの時期と思われる。本遺構出土の青磁と珠洲焼は時期的関係においてやや齟齬をきたしている。

SD521 (図版 59・103)

青磁1点・珠洲焼4点・木製品1点が出土している。珠洲焼はT種壺2点、片口2点が存在する。237は青磁碗で、高台外面が大きく面取りされ、疊付まで施釉、高台内面から露胎となることから14世紀後半以降の所産と考える。238は珠洲焼VI期の片口で、口縁部内面の稜は消失している。239は曲物側板である。本遺構出土の珠洲焼と青磁は時期的関係においてほぼ一致していると言える。

遺構外出土遺物 (図版 59-60・103・104)

240-250は白磁である。240は白磁碗VI類で、小さな玉縁口縁をもつ、良質な製品である。241・242は白磁碗IV類で、大きな玉縁口縁を有している。243は白磁碗V-4b類で、細長い高台をもち、見込みに櫛目文を施文する。244は白磁碗V類で、見込みの釉カキトリ部分から破損している。245は白磁碗V類で、見込みの釉がカキ取られている。246は白磁碗の体部下位の破片で、外面下位は露胎、内面下端に釉のカキトリの段らしき部位が存在することより碗V類と思われる。247・248は非広東系と思われる山本編乍のC・D期の白磁碗である。247は体部片で、外面はケズリが施され、露胎となる。248は体部上位の破片で、上端に弱い稜線が見られる。249は白磁碗のV-4類あるいはV類で、口縁部端部が水平になるまで外反させている。250は白磁碗V類で、口縁部は口禿となる。251-256は青磁である。251は龍泉窯系青磁碗I-2もしくは3類で、内面に櫛目文が施文される。252・253は内面に劃花文が施文されており、龍泉窯系青磁碗I-2-3類と思われる。254は同安窯系青磁碗I類で、外面底部中央が山形に突出する。255は青磁碗で、詳細な時期は不明だが、13世紀以降の所産と考えられる。256は青磁香炉で、14世紀後半以降の所産と思われる。257は青白磁の型物と思われ、内面は露胎である。258は古瀬戸梅瓶で、後期IV期と思われる。259-260は常滑焼である。259・260は胴部上位の破片で、259は外面に輪状の押印が施文される。261-265は胴部下位の破片で、262-265は外面に筆状の押印が施文される。266-269は珠洲焼である。266はVI期の片口で、口縁部は端面を内面にとり、櫛目波状文が施文される。267-268はIもしくはII期の四耳壺で、把手は横位の橋状を呈したと思われる。269はII期の壺で、口縁

部はやや短頸化しており、大きく外反する。270は中世須志器で、隕が多く含まれ、焼成も不良である。内外面に漆状付着物が認められる。271は酸化焰焼成の片口で、生産地は不明である。272は古瀬戸後期IV期新段階～大窯期の小皿である。

C 近世

1) 出土遺物

遺構出土遺物

SX001 (図版 60・104)

銅製品・陶磁器類が出土している。ここでは銅製品について触れる。273は銅製煙管の雁首で、火口が欠損し、上面に管を成形した接合痕が認められる。

SX010 (図版 60・104)

土製品・陶磁器類が出土している。ここでは土製品について触れる。274は型成形・素焼きの大黒様で、底面に孔が存在する。

SX023 (図版 60・104)

硯・陶磁器類が出土している。ここでは硯について触れる。275は石製硯で、表側表面が剥落した破片である。製作時期は不明である。

SX090 (図版 60・106)

構築材となる石材と木枠が出土しており、加工等が存在するのは木枠だけである。276～279は木枠で、割り材のこぼを削り、形を整え、小口ははぞ・はぞ穴等を削りだしている。

SX099 (図版 61・104)

石臼が出土している。280～282は粉挽臼の下臼である。280は摺面が光沢の出るほど使用され、磨耗により日が消失している。281・282は同一個体で、摺面は使用による光沢が認められる。

SX100 (図版 61・106)

総数 10,618 点の礫が出土しており、この内、墨痕らしき痕跡のある礫は 1,938 点で、明らかに墨痕のある石は 174 点、文字が判読できる点数が 54 点である。判読された文字は漢字と梵字で、圧倒的に梵字の量が多く主体を占めている。この他に遺構外に散在する経石およびその可能性のある礫が 74 点存在する。判読された文字の種類と数量は漢字が「南無」2 点・「南」2 点・「經」1 点・「金」カ 1 点、梵字が「キャラバア」1 点・「キャ」8 点・「カ」5 点・「ラ」6 点・「パン」12 点・「キリーグ」5 点・「アーンク」1 点・「ウン」4 点・「ヂク」6 点である。283・284は「南無」、285・286は「南」、287は「經」、288は「金」カ、289は「キャラバア」、290・294は「キャ」、295が「カ」、296は「ラ」、297～300は「パン」、301～303は「キリーグ」、304は「アーンク」、305・306は「ウン」、307・308は「ヂク」である。

遺構外出土遺物 (図版 61・104)

309は鉄釘で、折り曲げて頭部としている。310・311は寛永通宝である。312は古錢で、文字の判読は不能である。

第VI章 自然科学分析

パリノ・サーヴィ 株式会社

はじめに

本報告では、発掘調査成果及びその所見から、1) 本遺跡の古環境（堆積環境、古植生）、2) 耕作植物検証及び植物資源利用、3) 土坑の用途・内容物、4) 石材利用、の4点が課題とされたことから、自然科学的手法を用いて、これらの課題を検討する。

1 試 料

A 土層観察及び試料採取

本遺跡では、上述した古環境変遷を検討するため、調査区壁面及びトレンチ壁面の土層観察及び試料採取を行っている。以下に、各地点の土層観察所見及び採取試料の概要を記し、第12図には1地点及び6地点の模式柱状図を示す。

・深掘りトレンチ (1地点)

南区北側の深掘りトレンチ東壁 (2A グリッド) である。発掘調査所見によれば、下位よりXIV～X・IV層相当の6層に分層され、XIV層相当は本遺跡の基盤層で無遺物層、XIII・XI・IX・IV層相当は遺物包含層、XII・X層相当は、砂を主体とする無遺物層と推測されている。層相観察の結果、最下部のXIV層は褐～黒灰色粘土からなり、植物遺体層が3枚挟在する。また、植物遺体層下位には木片等の大型植物化石を多量に含む灰色シルトが認められる。XIII層は灰色シルト～粘土で、炭化物が含まれる。当上層上部は管状酸化鉄が認められる。XII層相当は、このトレンチ内では厚く堆積しているため、XIIa～XIIc層相当に細分されているが、ほかでは薄い堆積であるため細分は不可能であった。XIIc層相当は灰色極細粒砂でシルトブロックを含み、下位のXII・XIV層相当を削剥し堆積する。XIIb層は灰色シルトであり、下位のXIIc層からの上方が細粒化することから、一連の堆積物と推測される。XIIa層相当は灰色中粒砂である。XI層相当は暗灰色シルト質極細粒砂からなり、炭化物を含む。XIa～XI層相当は上方が細粒化することから、一連の堆積物の可能性がある。X層相当は細粒～中粒砂の薄層を挟在する灰色極細粒～細粒砂からなり、XI層相当上位に不整合に堆積する。最上位のIV層は暗灰色細粒砂で、炭化物や径5～10mm前後のブロックを含み、発掘調査所見によれば、中世の土坑覆土とされている。

試料は、IV～XIIc層相当は各層1点を基準としたが、層厚のある土層については適宜採取を行い、IV層から1点 (試料番号1)、XI層相当から2点 (試料番号2・3)、XII層から7点 (試料番号4-10) を採取し、XII層以深では厚さ5cm連続で下位に向かい土壌18点 (試料番号11-28) を採取していることから、計38点の土壤からなる。

・畠状道横 (SX520) 地点セクションベルト (4地点)

本地点は南区南東部、SX520東側 (2E～3E グリッド) に相当する。15世紀から近世の河道内埋積物が認められ、最下層は河床礫と思われる円礫層及び砂礫層で、下部に認められる円礫最大径は約15cmである。下部は礫支持で堆積し、上部は粗粒砂～細礫が主体となる。その上位は暗褐色シルト～極細粒砂と青灰色細粒砂の互層、ラミナが顕著に発達した細粒～中粒砂が不整合に累重する。なお、砂層は上方細粒化の傾向が認められ、最上部ではシルト～極細粒砂となる。

1 試料

試料は、砂礫層上位の暗褐色シルト～極細粒砂と青灰色細粒砂の互層より各層1～2点を層位毎に採取した土壌7点（試料番号1～7）である。

・畝状遺構（SX520）（5地点）

本地点は4地点西側（2C～Eグリッド）に相当する。南北方向に伸びる畝状遺構（SX520）が東西に並列する状況が確認されており、発掘調査所見では、15世紀から近世頃の遺構と推定されている。畝状遺構は、4地点の暗褐色シルト～極細粒砂と青灰色細粒砂の互層上部に構築され、遺構は上位の砂層を除去した際に検出されている。なお、耕土と想定される暗褐色シルトには明瞭な擾乱は認められず、肉眼観察では、植物遺体や炭化物等も認められなかった。

試料は、畝状遺構の耕土と推定されている暗褐色シルトを対象とし、畝及び畝間に相当するか所から採取した土壌3点（試料番号1～3）である。

・SD521 地点（6地点）

深掘りトレンチ（1地点）南西側の発掘調査区西壁（2Aグリッド）に相当し、河跡堆積物及び溝状溝構（SD521）・凹地遺構の土層が認められる地点である。最下部は褐色を呈する細粒～中粒砂が主体であり、部分的に粗粒砂や灰色シルトなどが含まれ、河跡堆積物の可能性がある。当層を掘削し、溝状溝構（SD521）が構築され、当溝構中には丸木を方形に組んだ木枠状の溝構が検出されており、発掘調査所見では、14世紀から15世紀の遺構と推定されている。最下部の砂層及び溝状溝構上位は、細粒砂及び灰色シルトからなる氾濫等による堆積物が不整合に堆積する。これらの堆積物の上位はやや腐植質で疊や炭化物が含まれる。さらに、上位にはシルト質の土壌が堆積し、上部はやや砂質化する。管状酸化鉄及びマンガンが顕著であり、シルトブロックが含まれる。発掘調査所見によれば、これらの土層は近世と考えられる。

試料は、表土下位の近世の土層より、厚さ5cm連続で下位に向かって採取した土壌13点（試料番号1～13）、溝状溝構（SD521）及びトレンチの堆積物より採取した土壌4点（試料番号14～18）、溝状溝構（SD521）構築以前の堆積物より採取した土壌2点（試料番号19・20）、さらに、溝状溝構（SD521）内の木枠状遺構内側に認められた暗褐色シルト1点（以下、木枠内）と溝状溝構（SD521）最下層の土壌1点の、計22点である。

・北区凹地遺構（SX538）

北区北西の西壁（13Aグリッド）に相当する。壁に凹地遺構の土層が確認され、試料は凹地遺構とされる土層上部から厚さ5cm連続で下位に向かって採取した土壌4点（試料番号1～4）である。

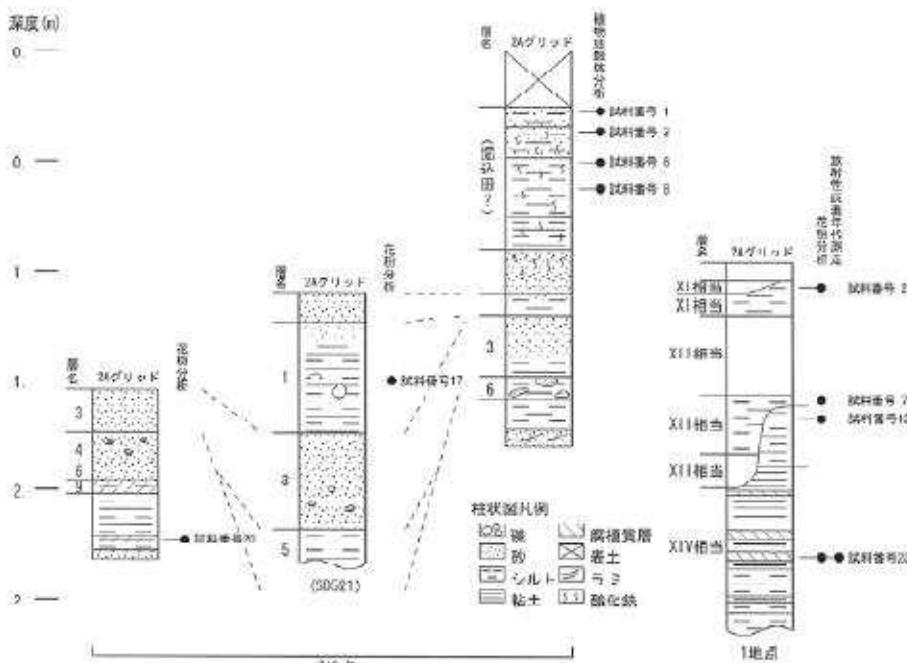
・SK1043

南区東壁付近（5Eグリッド）から検出された用途不明の土坑である。平面形は不整円形を呈し、深さ約40cmを測る。試料は、土坑覆土上位の土層より1点（試料番号1）、土坑覆土上部（試料番号2）と下部（試料番号3）より2点、土坑底部より下位の地山（試料番号4）より採取した土壌4点である。

B 分析試料

1) 古環境変遷（堆積環境、古植生）

今年度の調査は、中世から近世を中心に実施されたことから、当該期及びその前後の堆積環境及び古植生の検討を行う。分析試料は、1地点のXIV層に認められた植物遺体層（1地点23）と、上位のXIII～XI層の各十層より各1点（1地点12・7・2）、4地点の砂礫層上位に認められる暗褐色シルト～極細粒砂（4地点2）、6地点のSD521構築以前の土層（6地点20）とSD521埋没過程の堆積物（6地点17）の計7点である。これらの試料を対象に花粉分析を行い、1地点23は微細物分析を合せて行い大型植物化石の産状も検討する。また、



第12図 1・6地点の模式柱状図 (図中のローマ数字は基本土層名、アラビア数字はSERZI内土層名)

XIV層の形成年代を検討するため、同層から出土した木材を対象に放射性炭素年代測定を行う。

堆積環境は、上述したSD521内及び同溝内から横出された木枠状の遺構内の差異を検証する。分析試料は、SD521最下層及び木枠内から採取された土壌2点である。

2) 栽培植物検証及び植物資源利用

・栽培植物検証

本遺跡では、近世の凹地遺構や15世紀から近世と考えられる畝状遺構が検出されていることから、これらの遺構における栽培植物の検証を行う。分析試料は、6地点の凹地遺構と想定される土層から採取した試料4点(6地点1・3・6・8)と、5地点の畝状遺構(SX520)の耕土とされる暗褐色シルト～極細粒砂1点(5地点1)、北区凹地遺構から採取した試料3点(SX538 1-3)の計8点である。これらの試料を対象に植物珪酸体分析を行う。

・植物資源利用

本遺跡で検出された中世から近世の井戸跡では構築材が残存し、井戸跡内からは木製品や炭化物を含む土壌が認められている。ここでは、木製品(構築材や部材を含む)や微細植物(有用植物)の調査を行い、当時の植物資源利用を検討する。分析試料は、3基の井戸跡から採取された土壌3点(SE046.7層・SE077.6層・SE094.4層)と発掘調査時に出土した木製品等36点である。井戸跡内から採取された土壌については微細物分析、木製品等については樹種同定を行う。SE090は遺構の年代観も課題とされたことから、同遺構の井戸枠277の木材を用いて放射性炭素年代も合せて行う。

3) 石材利用

本遺跡では、上述した木製品等とともに石製品が多数出土しており、砥石や硯、砥石類、石臼等の製品や、絆石等の遺物も出土している。ここでは、前者の石製品を対象として、岩石の種類や产地等に関する検討を行う。分析試料は、石製品30点である。

4) 遺構の用途推定

南区北東隅に検出された10世紀前半の土坑群の性格を知るためにSK1043の、土壌中の理化学成分及

び微細物の産状の調査を行う。分析試料は、土坑覆土下部（試料番号3）及び地山（試料番号4）を対象に腐植（炭素）含量・リン酸含量調査を行い、土坑覆土上・下部（試料番号3・4）を対象に微細物分析を行う。

2 分析方法

A 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行う。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。測定年代の補正に用いたδ¹³Cの値は、加速器を用いて試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、標準試料PDB(白亜紀のペレムナイト類の化石)の測定値を基準として、それからの差を計算し、千分偏差(‰:パーミル)で表したものである。また、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

B 硅藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、硅藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、硅藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか(1990)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率20%以上の主要な種類について、主要硅藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性か判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉[1988]、淡水生種については安藤[1990]、陸生硅藻については伊藤・堀内[1991]、汚濁耐性については、Asai & Watanabe[1995]の環境指標種を参考とする。

C 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9、濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のヒルコースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に500個体以上同定・計数する(化石の少ない試料ではこの限りではない)。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる炭片量の割合も求める。炭片は20μm以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。炭片量の割合は、植物遺体(花粉、胞子、植物片、炭片)の総数を基数として百分率で示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

D 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬〔1986〕の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生などについて検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化している。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

E 微細物分析

土壤試料500g程度を水に一晩液浸し、泥化を促す。0.5mm目の篩を通して水洗し、残渣を粒径別にシャレに集めた後、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子、葉などの大型植物遺体と2mm角以上の炭化材を抽出する。

大型植物遺体の形態的特徴を、所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑〔石川1994〕、日本植物種子図鑑〔中山ほか2000〕等と比較し、種類を同定し個数を求める。微細片を含み数字以上の個数が推定される分類群は、「数字+」と示す。炭化材や不明炭化物、動物遺存体などの微細片を含む種類は、70°C 48時間乾燥後の重量を表示する。

分析後の種実遺体等は、種類毎にピンに詰め、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。不明炭化物、動物遺存体は、乾燥剤を入れて保存する。Ⅲ層（1地点23）から検出された木材の一部は、年代測定対象試料とし、SE046（7層）、SE077（6層）、SE091（4層）、SK1043（試料番号2・3）から検出された炭化材のうち、遺存状況の良好なものを抽出し、樹種同定対象試料としている。

F 樹種同定

・木材

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

・炭化材

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

G 土壤理化学分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法〔土壤養分測定法委員会1981、土壤標準分析・測定法委員会1986〕による。以下に各項目の操作工程を示す。

・リン酸含量

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色

3. 結果

液を加えて分光光度計によりリン酸 (P_2O_5) 濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 ($P_2O_5\text{mg/g}$) を求める。

・腐植含量

風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mm の篩いを全通させる（粉碎土試料）。粉碎土試料 0.100 ~ 0.500 g を100ml 三角フラスコに正確に計りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200°C の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2% フェノールアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土 %) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

H 岩石肉眼鑑定

野外用のルーペおよび実体顕微鏡を用いて構成試物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。なお、個々の石材の正確な岩石名を調査するためには、薄片の鏡下観察や全岩化学分析等を併用することが望まれる。

3 結 果

A 放射性炭素年代測定

結果を第1表、曆年較正結果を第2表に示す。試料の年代（補正年代）は、1 地点XIV層から出土した木材は 2960BP、SE090 の井戸枠 1 は 260BP の値を示す。なお、各試料の曆年較正年代のうち、確からしさを示す相対比の大きい年代範囲に着目すると、1 地点XIV層出土木材は 3172~3075calBP、SE090 の井戸枠 (277) は 315~284calBP (1635~1666calAD) を示す。

B 珪藻分析

地点名	試料名	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1地点	XIV層相当	生材	ハシノキ原木	2960±40	-28.51±0.71	3020±30	IAAA-41615
SE090	井戸枠1	生材	エノキ属	260±30	-28.30±0.69	310±30	IAAA-41588

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5668 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第1表 放射性炭素年代測定結果

地点名	試料名	補正年代 (BP)	曆年較正年代(cal)				相対比	Code No.
			cal DC 1,200	cal DC 1,226	cal DF 3,210	3,178		
1地点	XIV層 相当	2950±36	cal BC 1,222	- cal BC 1,125	cal BP 3,172	- 3,075	0.222	IAAA-41615
			cal BC 1,118	- cal BC 1,114	cal BP 3,068	- 3,064	0.759	
			cal BC 1,095	- cal BC 1,094	cal BP 3,045	- 3,044	0.014	
							0.004	
SE090	井戸枠 (277)	258±32	cal AD 1,531	- cal AD 1,515	cal BP 419	- 405	0.154	IAAA-41588
			cal AD 1,635	- cal AD 1,600	cal DP 315	284	0.735	
			cal AD 1,783	- cal AD 1,792	cal BP 167	- 158	0.111	

1) RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1988-2002 M Stuiver and P Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第2表 曆年較正結果

結果を第3・4表、第13図に示す。2試料とも珪藻化石が豊富に産出し、保存状態も良好である。完形殻の出現率は70%前後であり、産出分類群数は合計で22属100分類群である。

SD521 木枠内は、淡水域に生育する水生珪藻と陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が混在する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不完全性種（少量の塩分には耐えられる種）、pH 不完全性種（pH7.0付近の中性水域に最もよく生育する種）と真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不完全性種（流水域にも

種類	生態性			環境指標種	SD521	
	區分	pH	流水		木枠内	最下層
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	1	14
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	5	2
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	4	1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller	Ogh-Meh	al-il	ind		2	1
<i>Achnanthes convergens</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T		1
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Dreb.) Grunow	Ogh-ind	Ind	r-ph	K,T	1	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	3
<i>Amphora montana</i> Kraeske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	1
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	I	1	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	3	1
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		2	2
<i>Ceratoneis arcus</i> var. <i>hattoriiana</i> Meister	Ogh-ind	ind	r-bi	T,J	1	-
<i>Cocconeis placenta</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerewald	Ogh-ind	ind	ind	O	1	1
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	2	-
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	1	1
<i>Cymhella tumida</i> (Breh. ex Kuetz.) V. Heuck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>nipponica</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	i-ph	T	1	1
<i>Diatoma mesodon</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	i-ph	K,T	-	1
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-
<i>Eunotia fallax</i> A. Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	1	-
<i>Eunotia formica</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	i-bi		1	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	2	2
<i>Fragilaria exigua</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	i-ph		1	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	1
<i>Fragilaria vaucheriae</i> var. <i>capitellata</i> (Grun.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>amphileuroides</i> (Grun.) De Toni	Ogh-hob	ac-il	i-ph		1	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaite) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	2
<i>Comphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	19	23
<i>Gomphonema parvulum</i> var. <i>lagena</i> (Kuetzing) Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	1
<i>Gomphonema productum</i> (Grun.) Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
<i>Gomphonema punctum</i> (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	2
<i>Gomphonema sarcophagus</i> Gregory	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
<i>Gomphonema sphaerophorum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	6	4
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-hob	al-bi	r-ph	K,T	1	1
<i>Meridion circulae</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs) V. Heuck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1	1
<i>Navicula cohnii</i> (Hilse) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	1
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	-	1
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	2
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnott) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	7	3
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	2
<i>Navicula decussata</i> Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	1
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	4	2
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>cuneata</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	2
<i>Navicula hambergii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	8	6
<i>Navicula notha</i> Wallace	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-
<i>Navicula paramutica</i> Bock	Ogh-ind	Ind	ind	RB	1	1
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	31
<i>Navicula seminulum</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	1	-
<i>Navicula senjoensis</i> H. Kobayasi	Ogh-unk	unk	unk		2	-
<i>Navicula venerabilis</i> Hohn & Hellerman	Ogh-ind	al-il	i-ph	K,U	1	-
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	2	3
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> Skv.	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
<i>Neidium affine</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ind	i-bi		1	-
<i>Nodium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	5	1
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	i-ph		-	1
<i>Nitzschia angustata</i> (W. Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	i-bi		-	1

第3表 硅藻分析結果(1)

種類	生態性			環境指標種	SD521	
	塩分	pH	流水		木枠内	最下層
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	2
<i>Nitzschia debilis</i> (Arnott) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	2	1
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	1
<i>Nitzschia permixta</i> (Grun.) Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1
<i>Nitzschia tubicola</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	10
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	I-ph	O	1	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	1
<i>Pinnularia brebissonii</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>decrescens</i> (Grun.) Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	12	7
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1
<i>Pinnularia hemiptera</i> (Kuetz.) Cleve	Ogl-hob	ind	I-ph		1	1
<i>Pinnularia lundii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	I-ph		-	1
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Rhr.) W. Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	3	4
<i>Pinnularia ncomajor</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	I-bi	T	1	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	I-ph	O	4	7
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Kianner	Ogl-ind	ind	ind	RI	19	11
<i>Pinnularia schroedeni</i> (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	7	3
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	5	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	I-ph	O,U,RB	7	1
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	I-ph		-	1
<i>Pinnularia viridia</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	3	2
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschikowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	4	4
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	3	3
<i>Stauroneis lauenburgiana</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
<i>Stauroneis nobilis</i> Schumann	Ogl-hob	ac-il	ind		2	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	I-ph	O	3	2
<i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	3	6
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	4	4
<i>Surirella tenera</i> Gregory	Ogl-hob	ind	I-bi		1	1
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	0
淡水～汽水生種					12	18
淡水生種					196	196
珪藻化石総数					208	214

凡例

HR:塩分優度に対する適応性

pH:水素イオン濃度に対する適応性

CR:淡水に対する適応性

Ogh-Mel:淡水～汽水生種

al-m:需水ノルカリ性種

I-bi:寡止水性種

Ogh-hab:貧塩好塩性種

al-l:好アーノリ性種

I-ph:好止水性種

Ogh-ind:貧塩不定性種

ind:pH不定性種

I-ph:淡水不定性種

Ogh-hob:貧塩耐塩性種

ao-il:好酸性種

r-ph:好海水性種

Ogh-unk:貧塩不明種

ao-bi:真酸性種

r-bi:真淡水性種

unk:pH不明種

unk:海水不明種

環境指標種群

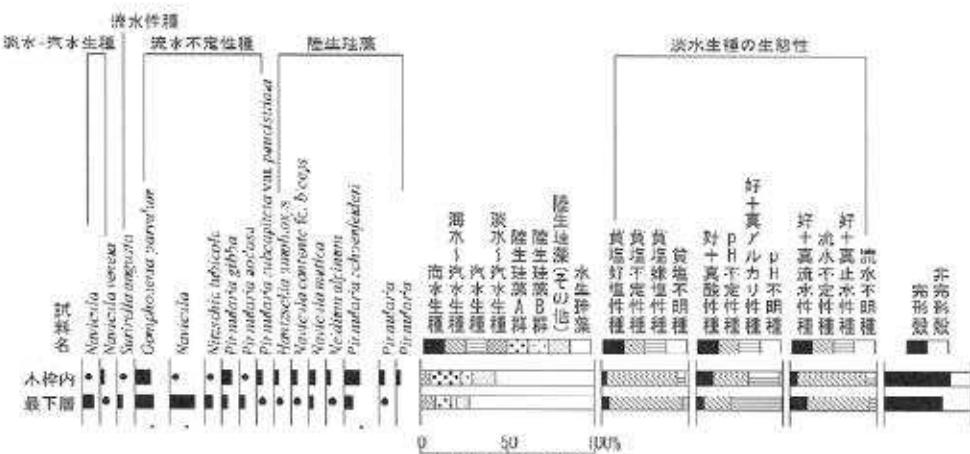
I:上流件河川指標種、K中～下流件河川指標種、O沿沢湿地付着生種群(以上は安藤 1990)

S:好汽溶性種、H:広域適応種、T:好海水性種(以上はArai and Watanabe, 1995)

R:陸生種群(RA:A群、RB:B群、RI:未区分、伊藤・堀内 1991)

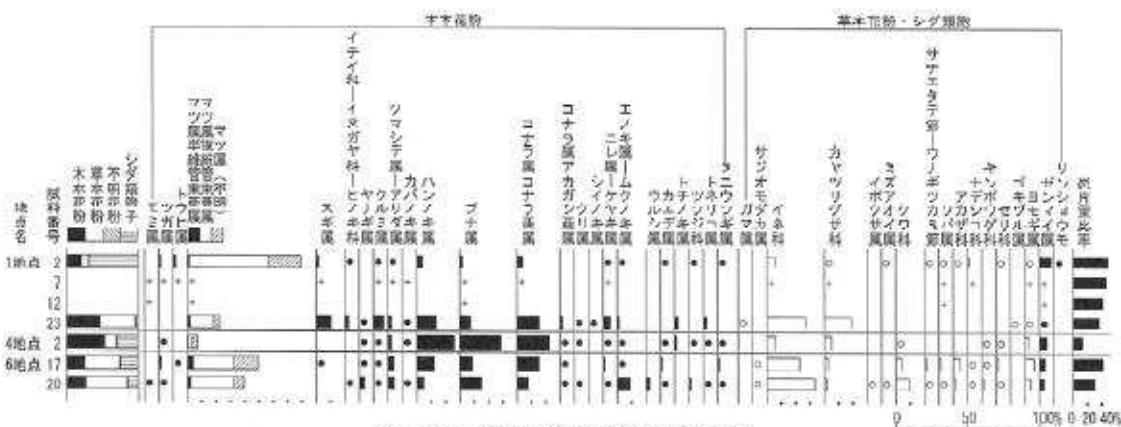
第4表 珪藻分析結果(2)

止水域にも普通に生育する種)が優占、或は、多産する。主要種は、流水不定性の *Comphonocma parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群〔安藤 1990〕の *Pinnularia gibba* 等である。沼沢湿地付着生種群とは、沼よりも浅く水深が 1m 前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢を出現の見られることから、その環境を指標することができる種群とされている〔安藤 1990〕。陸生珪藻では、乾湿に対する適応度合いが不明な未区分陸生珪藻の *Pinnularia schoenfelderi*、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Neidium alpinum* 等が産出する。



第13図 主要珪藻化石群集

海水-汽水-淡水生種出率・各種混出率・完形混出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は2%未満の産出を示す。



第14図 主要花粉化石群集の層位分布

山現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草木花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について抽出した種類を示す。

SD521 最下層では、淡水域に生育する水生珪藻が約80%と優占する。淡水性種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）と真+好流水性種（流水域に最もよく生育する種）が優占、或は、多産する。主要種は、流水不定性の *Navicula rhynchocephala*、*Gomphonema parvulum*、が10-15%産出し。塩分や塩類の豊富な水域に生育する淡水～汽水生の *Navicula capitata*、真流水性の *Surirella angusta*、流水不定性の *Nitzschia tubicola*、流水不定性で沼澤湿地付着生種群の *Pinnularia gibba*、*Pinnularia nodosa* 等を伴う。

C 花粉分析

結果を第5表、第14図に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。また、本試料からは第三紀絶滅種である花粉化石が産出したが、産出状況の記載に留め、結果表及び図中からは除いている。以下に、各地点の産状を示す。

・1 地点

試料番号23は花粉化石の保存状態は良好であり、木本花粉と草本花粉がほぼ同数で検出される。木本花粉では、マツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ属などが多く検出され、クルミ属、ブナ属、アレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科の2分類群により占められてお

種類	試料番号	1地点			4地点		6地点	
		3	7	13	23	3	17	30
木本花粉		-	-	-	1	-	-	-
マキ属		-	2	2	-	-	-	1
モミ属		3	2	-	-	1	4	1
ツガ属		4	6	-	-	-	1	-
トウヒ属		5	-	-	5	9	9	5
マツ属単球管束属		6	-	-	-	-	-	-
マツ属複球管束属	116	10	-	42	4	62	69	-
マツ属(不明)	49	11	4	11	10	38	17	-
コウヤマキ属		-	-	-	2	1	-	-
スギ属		4	5	-	27	-	1	-
イチイ科=イヌガヤ科=ヒノキ科		2	-	-	7	-	1	2
ヤナギ属		3	-	-	1	1	1	9
クルミ属		4	-	-	19	2	1	2
クマシデ属=アサダ属		2	3	-	7	6	9	10
ハシバミ属		1	-	-	1	1	1	-
カバノキ属		8	-	-	35	61	26	11
ブナ属		4	3	5	20	67	19	35
コナラ属コナラ属		3	-	-	40	52	34	18
コナラ属アカガシ属		1	-	-	5	1	1	2
クリ属		1	-	-	1	2	-	1
シイノキ属		2	-	-	1	4	-	2
ニレ属=ケヤキ属		3	-	-	13	1	-	-
エノキ属=ムクノキ属		2	-	-	3	2	-	20
カツラ属		1	-	-	1	-	-	-
イヌザンショウ属		1	-	-	-	-	-	3
キハダ属		1	-	-	1	-	-	1
ワルン属		1	-	-	1	-	-	6
モチノキ属		1	-	-	-	1	-	1
ガエテ属		1	-	-	-	2	3	2
トテノキ属		1	-	-	-	7	3	-
クロウメモドキ科		1	-	-	5	5	-	-
ブドウ属		1	-	-	1	-	-	-
シナノキ属		1	-	-	1	-	-	-
ウコギ科		1	-	-	-	1	-	3
ソソジ科		1	-	-	-	1	-	1
ハイノキ属		1	-	-	-	-	-	-
ヒノキ属		1	-	-	0	2	-	1
トネリコ属		1	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属		2	-	-	-	2	3	2
ターキング属		2	-	-	-	3	2	-
草本花粉		-	-	-	-	-	-	-
ガマ属		1	-	-	5	-	1	-
サンオホグサ属		1	-	-	-	1	-	1
イネ科	59	10	-	152	27	198	279	-
カヤツリグサ科	1	4	-	103	22	23	14	-
イボクナ属		-	-	-	-	-	1	-
ミズアサイ属		1	-	-	-	-	7	-
クワ科		-	-	-	1	35	78	-
ギシギシ属		-	-	-	-	1	-	-
サナエクデ属=ウナギツカニ節	1	-	1	1	-	11	3	-
タデ属		-	-	-	-	1	1	4
ゾバ属		2	1	1	-	14	1	-
アカザ科		2	-	-	-	43	14	-
スベリヒニ属		-	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	12	3	-	-	-	8	7	-
キンポウゲ科		-	-	-	-	3	4	11
アブラナ科	10	-	-	-	-	2	2	-
アズキ属		-	-	-	-	1	-	-
ヤメ科	1	-	-	-	2	-	-	-
ツリフネソウ属		-	-	-	-	-	-	2
ホカシグサ属		-	-	-	-	1	-	-
ヤリ科	1	-	-	-	-	15	3	-
オナシカズラ属		-	-	-	-	1	-	2
オオバコ属		-	-	-	-	-	-	5
ゴキヅル属		-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	3	-	-	-	5	14	56	95
オナモノ属		-	-	-	-	1	-	3
キク科	1	-	-	-	1	1	2	3
タンポポ属	9	-	-	-	-	2	-	-
不明花粉	3	1	-	6	9	7	12	-
シダ類孢子		-	-	-	-	-	-	-
ヒカゲノカズラ属	9	6	-	-	-	-	-	-
ゼンマイ属	83	118	44	1	22	32	24	-
イノモトソウ属	1	-	1	-	-	-	-	-
サンショウモ	2	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	624	952	140	21	109	192	103	-
合計		212	50	7	258	233	221	230
木本花粉		103	19	1	271	70	421	475
草本花粉		3	1	0	6	9	7	12
不明花粉		712	1076	185	22	131	224	127
シダ類孢子		1027	1145	193	551	434	866	832
総計(不明を除く)		49.2	46.0	41.1	38.5	33.2	41.6	39.4
留出量比(%)		-	-	-	-	-	-	-

第5表 花粉分析結果

り、その他ではヨモギ属等のほか、湿地などに生育するガマ属、ゴヤヅル属なども認められる。

試料番号 12・7 は、花粉の産出状況が不良で、定量解析可能な個体数は得られなかった。木本花粉ではマツ属、トウヒ属、コナラ亜属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科などが検出される。ゼンマイ属をはじめとするシダ類胞子が多産し、再堆積と考えられる第三紀絶滅種等がわずかに検出される。

試料番号 2 は、保存状態はやや不良で、シダ類胞子が多産する。木本花粉ではマツ属が優占し、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、ナデシコ科、アブラナ科などを伴う。この他に、第三紀絶滅種の花粉化石が検出される。

炭片量比率は、試料番号 2 は 49.6%、試料番号 7 は 46.0%、試料番号 12 は 41.1%、試料番号 23 は 36.5% である。

・4 地点

試料番号 2 は、木本花粉の割合が高く、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属が多く検出される。その他ではマツ属、クマシデ属-アサガ属、トチノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが認められる。分析残渣中には未分解の微細植物片が多く認められ、その結果、炭片量比率は 13.2% である。

・6 地点

試料番号 20・17 は、いずれも類似した花粉化石群集を示し、草本花粉の割合が高い。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、ヨモギ属などを伴う。また、わずかではあるが、サジオモガカ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの水生植物に由来する花粉も認められる。木本花粉ではマツ属が最も多く産出し、クマシデ属-アサガ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ属などを伴う。炭片量比率は、試料番号 17 は 41.6%、試料番号 20 は 29.9% である。

D 植物珪酸体分析

結果を第 6 表、第 15 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点の産状を示す。

・5 地点

試料番号 1 は検出個数が少なく、栽培植物のイネ属やクマザサ属がわずかに認められるのみである。

・6 地点

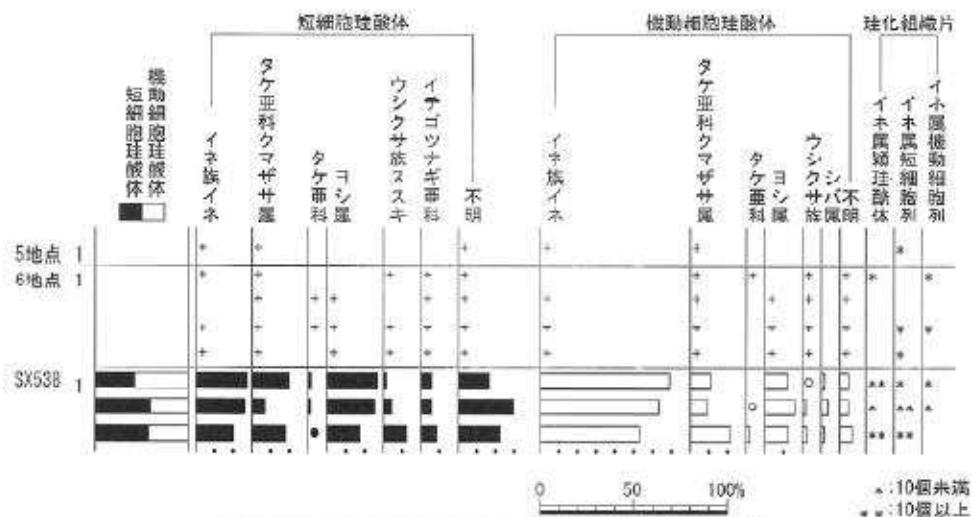
4 試料とも検出個数は少なく、栽培植物のイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウンクサ族、イチゴツナギ亜科などが僅かに認められるのみである。なお、イネ属の穀殻に形成される頸珪酸体、葉部に形成される短細胞列、或は、機動細胞列が僅かに検出される。

・北区堀込田 (3X530)

3 試料からは、6 地点と同様にイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出され、検出個数も顕著である。特に、イネ属の機動細胞珪酸体の産出が目立ち、その他に頸珪酸体や短細胞列、機動細胞列も検出される。

E 微細物分析

結果を第 7 表に示す。木本 7 分類群 18+ 個、草本 14 分類群 407 個、計 425+ 個の種実や葉が検出される。その他に、木材、炭化材、部位・種類共に由来不明の炭化物、土器、昆虫遺骸の破片なども確認される。各試料の産状をみると、第 1 層 (1 地点 23) からは、木本 1 分類群 (エゴノキ属) 2 個、草本 1 分類



第15図 植物珪酸体群集の層位分布と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満の種類を示す。また、珪化組織片の形態を▲で示す。

種類	試料番号	5地点			6地点			SX538		
		1	1	3	6	3	1	2	3	
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	1	2	-	1	5	33	41	32		
タケ亜科クマザサ属	4	3	6	3	2	24	11	29		
タケ亜科	-	-	1	2	-	2	2	1		
ヨシ属	-	-	3	3	1	32	40	28		
ウシクサ族ススキ属	-	1	-	1	2	2	7	20		
イチゴソナギサ属	-	1	3	8	10	7	9	14		
不明キビ型	2	4	3	4	5	16	43	28		
不明ヒゲンバ型	-	-	2	-	-	-	1	1		
不明ダンチク型	-	1	1	-	1	4	3	7		
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	1	-	2	6	1	112	67	64		
タケ亜科クマザサ属	3	4	2	5	8	18	10	20		
タケ亜科	-	3	-	-	-	-	1	2		
ヨシ属	-	-	1	1	3	20	17	15		
ウシクサ族	-	2	4	2	1	1	2	3		
シバ属	-	-	-	-	-	3	4	2		
不明	-	4	1	1	2	8	5	8		
合計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	7	12	19	22	26	120	157	160		
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4	13	7	15	15	162	106	120		
総計	11	25	26	37	41	282	263	280		
珪化組織片										
イネ属珪酸体	-	1	-	-	-	14	6	12		
イネ属短細胞列	1	-	-	1	3	7	13	15		
イネ属機動細胞列	-	1	-	1	-	4	1	-		

第6表 植物珪酸体分析結果

群（カヤツリグサ科）27個が検出される。SE046（7層）からは栽培植物のみの草本3分類群（イネ、アワヒエ、マメ類）18個、SE077（6層）から木本2分類群（ヤマガワ、キイチゴ属）3個、草本10分類群（イネ、アワヒエ、ムギ類、カヤツリグサ科、イボクサ、アサ、アカザ科、ナデシコ科、エノキグサ、ナス科）159個、SE094（4層）からは木本5分類群（マツ属根管東虫属、ハンノキ属ハンノキ虫属、ハンノキ属、ヤマガワ、ニワトコ）13+個、草本（イネ、カヤツリグサ科、サナエタケ近似種、アカザ科、ナデシコ科、カタバミ属、オトギリソウ属）202個が検出される。SK1043では、試料番号2から草本1分類群（栽培植物のアワヒエ）1個が検出されたのみで、試料番号3からは全く検出されない。

科名	属名	分類群	学名	部位	土壤分析						総計	
					XIV層	SE46	SE77	SS94	SH1943	2	3	
マツ科	マツ属	マツ属複雑管束亞属	<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	木部	-	-	-	-	-	14	-	14
カバノキ科	ハンノキ属	ハンノキ属・ハンノキ亜属	<i>Alnus subgen. Alnus</i>	木部	-	-	-	13	-	-	-	13
木クワ科	クワ属	ヤマクワ	<i>Morus australis</i> Poiret	木部	-	-	-	7	-	-	-	7
木バラ科	カイチゴ属	カイチゴ属	<i>Rubus</i>	種子	-	-	1	13	-	-	-	13
ヘノキ科	ヘノキ属	ヘノキ属	<i>Styrax</i>	種子	-	-	2	-	-	-	-	2
スイカズラ科	ニワトコ属	ニワトコ	<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. s. <i>leboldiana</i> (Miq.) Hara	枝	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	イネ属	イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	胚乳	-	7	6	13	-	-	-	16
		アリーヒエ	<i>Setaria faberii</i> (L.) P. Beauvois	胚乳	-	6	36	31	-	-	-	43
		ムギ類	<i>Gramineae</i>	胚乳	-	-	2	-	-	-	-	2
ガヤツリクサ科	ガヤツリクサ属	ガヤツリクサ	<i>Opercularia</i>	果実	23	-	9	180	-	-	-	23
ムクドリ科	ムクドリ属	ムクドリ	<i>Antennaria</i> <i>grevillei</i> Winkl.	種子	-	-	2	-	-	-	-	2
松タク科	アサ属	アサ	<i>Cunninghamia</i> <i>zebra</i> L.	種子	-	-	9	-	-	-	-	9
木クデ科	タデ属	サウエタデ近似種	<i>Polygonum cf. Janathelium</i> L.	果実	-	-	1	-	-	-	-	1
アカマツ科	アカマツ属	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	種子	-	-	71	2	-	-	-	73
ノラシード科	ノラシード属	ノラシード	<i>Leptospermum</i>	種子	-	-	12	13	-	-	-	25
コメ科	コメ属	コメ	<i>Gramineae</i>	種子	-	1	-	-	-	-	-	1
カタバミ科	カタバミ属	カタバミ	<i>Ostrya</i>	種子	-	-	2	-	-	-	-	2
トウダイグサ科	エノキダケ属	エノキダケ	<i>Acalypha australis</i> L.	種子	-	-	1	-	-	-	-	1
オトギリソウ科	オトギリソウ属	オトギリソウ	<i>Dioscorea</i>	種子	-	-	-	4	-	-	-	4
ナラ科	ナラ属	ナラ	<i>Quercus</i>	種子	-	-	21	-	-	-	-	21
木本					10-	-	-	-	-	-	-	-
炭化材					<0.1g	0.26	0.26	50.1g	39.1g	40.1g		
木部炭化率					<0.1g	<0.1g	<0.1g	<0.1g	<0.1g	<0.1g		
木部					-	-	-	-	-	2		
根系					-	-	-	-	-	-		
根系遺物					-	-	16	-	-	-		
					土壤分析量	595.3g	599.4g	499.6g	517g	150.1g	120g	

注)「数字」は、微鉢片を含み数字以上の個数が推定される分類群を示す。

第7表 微細物分析結果

検出された種実遺体のうち、イネ、アワ、ヒエ、ムギ類、アリ、マメ類は栽培植物であり、遺存状態は栽培植物のイネ、アリーヒエ、ムギ類、マメ類が炭化している点を除けば、比較的良好である。以下に、同定された種実や葉の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

<木本>

- マツ属複雑管束亞属 (*Pinus subgen. Diploxyylon*) マツ科

針葉が検出された。茶褐色、針状。長さ5mm以上、径1mm程度。横断面は半円形で、中心部に2つの維管束がある。3~11の樹脂道が下表皮に接在する、アカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.) が確認された。

- ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus subgen. Alnus*) カバノキ科

果実が検出された。黒褐色、広倒卵形~卵状円形で偏平。長さ4~5mm、幅3~4mm程度。縁に薄い翼がある。頂部には2化粧が残存する個体もみられる。

- ハンノキ属 (*Alnus*) カバノキ科

果序を構成する果鱗が検出された。黒褐色で木質。果序が完形ならば卵状楕円体。果鱗は扁形で背面に深い縦溝が目立つ。径5~6mm程度。基部はやや薄く楔形、頂部はやや厚く反りかえるように突出し、3~5つに分かれて開く。

- ヤマクワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

種子が検出された。黒褐色で三角状広倒卵形、一側面は錐倒卵形で、他方は棱になりやや薄い。長さ2.2mm、径1.5mm程度。一边が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

- キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡黄褐色、半円形~三日月形。長さ2mm、幅15mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には人きな凹みが分布し網目模様をなす。

- エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子が検出された。黒褐色で卵形で表面には3本程度の縦溝が走る。長さ10mm、径8mm程度。基部には灰褐色でざらつく着点がある。種皮は厚く硬く、表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

- ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. s. *leboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、広倒卵形でやや偏平、長さ2.5 mm、幅1.3 mm程度。基部はやや尖り、背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

〈草本〉

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と胚乳を包む穎（果）の破片が検出された。胚乳は炭化しており黒色を呈す。長楕円形でやや偏平。長さ4～6 mm、幅2.5 mm、厚さ1.5 mm程度。胚乳は一端に胚が脱落した凹部があり、両面はやや平滑で2～3本の縦溝が確認される。また、胚乳表面に穎が付着する個体がみられた（SE077 6層）。穎は淡褐色、炭化個体は黒色。基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。穎は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。蒸したり炊いたりなどし過ぎて「おこげ」となった場合には、このように明瞭に胚乳の形をとどめることはないと考えられ、牛糞の状態で火を受けたことが推定される。ただし、穎は炭化すると脆く壊れやすい性質であり、初の状態で被熱し、穎が脱落して胚乳のみが残った可能性もある。

・アワヒエ (*Setaria italica* (L.) P.Beauv.- *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。広楕円体でやや偏平。径1.5 mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部に胚の凹みがある。表面には穎が付着している個体がみられた（SE046 7層）。アワ、ヒエの区別は、走査型電子顕微鏡下による内外穎の観察により可能である〔松谷1980-2000〕。本遺跡で検出された個体も、遺存状態が良好なものに限り、走査型電子顕微鏡下の観察で種類が特定される可能性がある。

・ムギ類 (Gramineae)

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。完形ならば楕円～紡錘状長楕円体。破片の大きさ3 mm程度。腹面は1本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。オオムギ属オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) またはコムギ属コムギ (*Triticum aestivum* L.) のいずれかと思われるが、頂部を欠損し判別が難しいため、ハギ類にとどめた。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。淡～茶褐色。三棱またはレンズ状倒卵形。径1～1.5 mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。スゲ属 (*Carex*) と思われる個体を含む。

・イボクサ (*Anelasma keissak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。赤みがかった灰褐色で半横長楕円体。径2～3 mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

・アサ (*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

種子が検出された。灰褐色、三角状広倒卵状楕円体。長さ4 mm、幅3 mm、厚さ2.5 mm程度。縦方向に一周する後に沿って半分に割れた個体がみられる。基部には人さな淡褐色、楕円形の臍点がある。種皮表面には繊維状細目模様がある。

・サナエタデ近似種 (*Polygonum cf. lapathifolium* L.) タデ科タデ属

果実の破片が検出された。黒褐色、円形で偏平な二面体。径2 mm程度。両面中央はやや凹む。先端部はやや尖り、2花柱が残存する個体もみられる。基部からは花被の脈が伸び、花被の先は2つに分かれ反りかえる。果実表面は平滑で光沢がある。

・アカザ科 (*Chenopodiaceae*)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科 (*Caryophyllaceae*)

種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径0.9mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・マメ類 (*Leguminosae*) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色を呈す。長楕円体で長さ5.2mm、径3mm程度。腹面中央の子葉の合わせ目上にある臍を欠損する。種皮表面はやや平滑で光沢がある。

遺跡出土の炭化マメ類は、子葉内面の幼痕や初生葉の形態から、ササゲ、アズキ、リョクトウなどを判別する試みが行われている〔吉崎1992〕。一方、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいとされている〔南木1991、南木・中川2000など〕が、近年では、DNA分析による判別法も開発されつつある〔矢野2002〕。今回検出されたマメ類は、遺存状態が不良であったことから、本分析では形態のみによる種類の特定は控えている。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で偏平。長さ1.5mm、幅1mm程度。基部は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4~7列の肋骨状横隆条が並び、わらじ状を呈す。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科 ノキグサ属

種子の破片が検出された。黒褐色、倒卵形で径1.5mm程度。基部はやや尖り、Y字状の筋に沿って割れている。種皮は薄く硬く、表面は細かな粒状の滝みが配列しそうつく。

・オトギリソウ属 (*Hypericum*) オトギリソウ科

種子が検出された。黒褐色、線状長楕円体。両端は短い突起状。長さ1mm、径0.5mm程度。種皮は微細で横長の凹点による網目模様が配列する。

・ナス科 (*Solanaceae*)

種子が検出された。淡褐色、歪な腎臓形で偏平。径3~3.5mm程度。種皮は薄く柔らかい。側面のくびれた部分に臍があり、表面は臍を中心として同心円状に星型状網目模様が発達する。網目模様は微細で網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

F 樹種同定

結果を第8・9表に示す。試料は、針葉樹5種類（マツ属複維管束亞属、マツ属單維管束亞属、マツ属・スギ、ヒノキ）、広葉樹7種類（ヤナギ属、ブナ属、クリ、エノキ属、ウツギ属、ウルシ、トネリコ属）とイネ科クケ亞科に同定された。なお、SE057の88は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であったが、保存状態が悪く種類の同定には至らない。また、SE094の整理No.203は樹皮であり、種類の同定は困難である。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

輻方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急～やや緩やかで、晚材部の幅は広い。放射組織は、柔組織、仮道管、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

報告番号	遺構	地区	整理No.	層位	器種その他	年代観	樹種	備考
	北	105		木		13世紀	スギ	
SE019	北	一括	最下層	木			スギ	板目板状
88	SE057	北	91	11	曲物底板	13世紀	スギ	側板縫目
	北	105	10	木			広葉樹(散孔材)	丸棒、先端加工
	SE062	北	1	木		-	クリ	
105	SE077	北	49	木			クリ	
	北	1	6	加工材		12~13世紀	スギ	
	北	3	6	木			マツ属複維管束亞属	
	北	一括		木			マツ属	丸棒、先端加工
135	SE104	北	6	20	曲物底板	13世紀	スギ	板目板
110		南	13	5	曲物底板		スギ	板目
110	SE083	南	14	5	曲物底板	15世紀	スギ	板目
111		南	24	5	曲物底板		スギ	板目
276		南		井戸桿4			ニノキ属	
277		南		井戸桿1			ニノキ属	
278	SE090	南		井戸桿2		近世	ニノキ属	
279		南		井戸桿3			ニノキ属	
		南	一括	最下層	木		イネ科タケ亜科	
124		南	290	3	把手		スギ	板状
125		南	280	3	籠の柄		ヤナギ属	板目
126		南	287	3	桟		マツ属複維管束亞属	板目板状
126		南	289	3	棧		マツ属果維管束亞属	板目板状
127		南	268	3	桟		マツ属複維管束亞属	板目板状
127		南	286	3	桟		マツ属複維管束亞属	板目板状
128		南	269	3	桟		マツ属複維管束亞属	板目板状
129		南	298	3	桟		マツ属複維管束亞属	板目板状
133	SE094	南	140	2	漆器椀	15世紀	ノリコ属	横木取(底面柾目)、内・外黒漆
		南	203	3	樹皮		樹皮	
		南	274	3	木製品		マツ属複維管束亞属	板目板状
		南	291	3	木		ウルシ	
		南	292	3	木		クリ	
		南	293	3	木		マツ属複維管束亞属	
		南	294	3	木		トネリコ属	株状
		南	303	3	木		マツ属複維管束亞属	株状、表面一部炭化
		南	一括	3	曲物側板		ウツギ属	丸棒状
239	SD521	南	20	11	木製品	14~15世紀	ヒノキ	側板

第8表 樹種同定結果(1)

遺構名	層位・試料名	試料	年代観	樹種	備考
SE046	7層	炭化物	12~13世紀	針葉樹(3) ブナ属(2)	
SE077	6層	炭化物	12~13世紀	コナラ属コナラ属 カヤ属(散孔材)(3) 広葉樹(若年枝)(1)	
SE094	4層	炭化物	15世紀	針葉樹(1) 広葉樹(2) 不明(2)	
SK1043	試料番号2 (覆土上部)	炭化物	10世紀	針葉樹(1) クヌギ(1) 広葉樹(散孔材)(3)	
	試料番号3 (覆土下部)	炭化物		広葉樹(散孔材)(4) 広葉樹(1)	

*年代観は、参考文献等に基づく

第9表 樹種同定結果(2)

・マツ属単維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Haploxylotron*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、柔組織、仮道管、水平樹脂道、エビヤリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁は平滑で鋸歯状の突起は認められない。放射組織は単列、1~15細胞高。

・マツ属 (*Pinus*) マツ科

垂直樹脂道を有し、分野壁孔が窓状となる特徴から、上記複維管束亞属か単維管束亞属のいずれかである。しかし、保存状態が悪く、放射仮道管内壁の様子が観察できなかったため、分類することができず、マツ属とした。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。横脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔組織のみで構成され、柔組織の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は、單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) フナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は2～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのも、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圈部は2～3列、孔圈外への移行はやや急～緩やかで、年輪界付近では塊状に複合して接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～10細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は大型の異性で、1～4細胞幅、100細胞高以上となり、鞘細胞が認められる。

・ウルシ (*Rhus verniciflua* Stockes) ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外への移行は緩やかで、小道管は年輪界に向かって漸減しながら単独または2～4個が放射方向に複合して配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・イネ科タケモチ科 (Gramineae subfam. Graminoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱が認められ、放射組織は認められない。

なお、炭化材は微細片で観察範囲が限られるため、ほとんどの試料は種類の同定に至らなかつたが、広葉樹でアガマ科、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリの3種類が認められた。

G 土壤理化学分析

結果を第10表に示す。腐植含量は、試料番号3は0.54%、試料番号4は0.52%を示す。一方、リン酸含量は試料番号3は $3.34\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、試料番号4は $2.52\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を示す。

遺構名	試料番号	層準	土性	土色	腐植含量(%)	P2O5(mg/g)
SK1043	3	覆土下層	LiC	5Y5/2 灰オリーブ	0.54	3.34
	4	地山	LiC	7.5Y5/2 灰オリーブ	0.52	2.52

注 (1)土色・マンセル表色系に準じた新版標準土色誌(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2)土性:土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇親会編、1984)の野外土性による。

LiC…粘土土(粘土25~45%, カルト0~45%, 砂10~55%)

第10表 土壤理化分析結果

H 岩石肉眼鑑定

鑑定結果を第11表に、器種毎の集計結果を第12表に示す。肉眼観察の結果、火山岩類として流紋岩19点、多孔質安山岩1点および輝石安山岩2点、堆積岩類として砂岩1点および頁岩1点、変成岩類として董青石ホルンフェルス1点および粘板岩3点、変質岩類として変質流紋岩2点が同定された。

4 考 察

A SD521 の堆積環境

14世紀~15世紀とされるSD521 最下層からは、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、真流水性種を伴い、止水環境を指標する真+好止水性種は少なかった。このことから、溝内は流水の影響を受けていたことが推測される。一方、SD521 の木枠内土壤からは、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種と陸生珪藻が混在していた。したがって、木枠内は、當時水が存在するが、周囲の乾いた陸上から陸生珪藻も頻繁に混入した、或は、廃絶後に氾濫堆積物など陸生珪藻を含む土壤により埋積された可能性がある。

B 古植生

XIV層から出土した木片(ハンノキ亜属)は、曆年較正年代では約3100~3200年前頃の年代を示した。同層準の花粉分析結果(試料番号23)では、木本類ではマツ属、スキ属、クルミ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属ニレ亜属等が認められ、微細物分析では落葉高木のエゴノキ属の種子が検出された。このうち、ブナ属、コナラ亜属は冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、ハンノキ属、クルミ属、ニレ属ニレ亜属等は、ヤナギ属、クマシテ属クマシテ亜属、トチノキ属、トネリコ属等とともに、溪谷や河畔沿い、低湿地などに林分を形成する種群である。したがって、当該期の周辺丘陵や後背山地には、アソ属、コトブキ属などの落葉樹林が存在し、部分的にマツ属、スキ属などの針葉樹も林分を形成していたと推測され、僅ながらコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹も存在し、林縁にはエゴノキ属等も生育していたと考えられる。また、荒川等の河川沿いの

遺構番号	遺構名	器種	岩石名
165	SE262	不明	流紋岩
168	SK168	砾石	砂岩
170	SE46	砾石	流紋岩
171	SE68	砾石類	董青石ホルンフェルス
172	SD27	砾石	流紋岩
173	SE94	砾石	流紋岩
175	SE46	砾石	流紋岩
176	SD46	砾石	流紋岩
177	SE57	砾石	流紋岩
180	SD6	砾石	流紋岩
181	SE68	砾石類	流紋岩
183	SE68	砾石類	頁岩
185	SK168	砾石	流紋岩
186	SE94	砾石	流紋岩
188	SE62	砾石	流紋岩
191	SD41	砾石	流紋岩
196	SD24	砾石	流紋岩
205	SD25	砾石	流紋岩
261	SE94	砾石	粘板岩
262	SX23	砾石	粘板岩
263	SX99	石臼	多孔質安山岩
264	SX99	石臼	輝石安山岩
265	SX99	石臼	輝石安山岩
266	SE94	観	粘板岩
281	SE97	砾石	流紋岩
287	SE46	砾石	流紋岩
290	SE71	砾石	麥質流紋岩
291	SD24	砾石	麥質流紋岩
293	SE68	砾石?	流紋岩
294	SD24	砾石	流紋岩

第11表 石材鑑定結果

岩石名/器種	砾石類	石臼	砾石	観	不明	合計
流紋岩	1		17		1	19
多孔質安山岩		1				1
輝石安山岩		2				2
砂岩			1			1
頁岩		1				1
董青石ホルンフェルス	1					1
粘板岩			3			3
麦質流紋岩			3			3
計	3	3	20	9	1	40

第12表 器種別石材組成

河畔や低湿地にはハンノキ属、クルミ属などが生育していたと考えられる。

草本類ではイネ科、カヤツリグサ科の花粉化石が多産し、カヤツリグサ科の果実も検出された。僅かであるが、河畔や湿地に生育するガマ属、ゴキヅル属等の花粉化石も認められた。イネ科やカヤツリグサ科には、ヨシ、スゲ、ホタルイなど適湿地を好む種類も含まれることや、分析試料はⅩⅢ層の植物遺体層を対象としていることを考慮すると、本地点及びその周辺は湿地状であった可能性がある。

その上位のⅩⅣ層相当や不整合で上位に堆積するⅩⅤ層相当（1地点試料番号12・7）では、花粉化石の産出状況は不良であった。ただし、産出する花粉化石はⅩⅢ層で多産する種類が認められることから、大きな植生の変化はなかったと推測される。なお、栽培種のソバ属の花粉が僅かに産出することから、遺跡周辺でソバ栽培の行われていたと考えられ、ⅩⅣ層以降に堆積したと考えられる土層からも産出することから、継続的に栽培されていた可能性がある。

ⅩⅤ層相当（1地点試料番号2）では、木本類ではマツ属が優占し、その他にスキ属やハンノキ属、ブナ属、コナラ属等が認められた。このことから、ⅩⅣ～ⅩⅤ層相当と同様の植生が認められたと考えられる。草本類ではイネ科、チデシ科、アブラナ科、ヨモギ属、ソバ属などが検出された。これらは開けた明るい場所を好む人里植物を含む分類群であることから、ⅩⅤ層堆積時には草地が増加した可能性がある。また、本層ではゼンマイ属をはじめとするシダ類胞子が多産した。一般的に、花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉に比べ、針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子は酸化に対する抵抗性が高いとされている〔中村1967、徳永・山内1971〕。また、花粉化石の保存状態がやや不良であることや、草本群集の特徴から堆積場が好気的環境へ変化した可能性があることを考慮すると、風化に強いシダ類胞子が相対的に多く認められたと推測される。同様に多産したマツ属は、亞属まで同定できた大部分は複雑管束型マツ属（いわゆるニヨウマツ類）である。マツ属複雑管束型マツ属は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿潤周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類とされる。なお、マツ属の急増は日本各地で知られており、二次林や植林の増加といった自然干渉がその要因とされている〔波田1987〕。炭片量比率をみると、ⅩⅣ層相当は約35%程度であるのに対し、ⅩⅤ層では約50%を示す。炭片は人間活動と密接に関係しているとされ、鳥浜貝塚（福井県）では6000年前から炭片量が増加することから、山野を焼き払っていたことが推測されている〔安田1987〕。また、このような微粒炭は黒ボク土中にも多量に含まれる〔山野井1996、井上ほか2002〕ことから、黒ボク土の成因の一つとして、火入れによるイネ科草本類を主とする草原の維持が推定されている〔松井・近藤1992〕。本遺跡内のみで判断することはできないが、前述したソバ属等の産出や、後述するイネ、アワーレエ、ムギ類、マメ類などの栽培植物の種実等が井戸跡内から検出されたことなどを考慮すると、周辺地域におけるこれらの栽培が推測され、ⅩⅤ層相当と比較して炭片量比率が増加する傾向はこのような人為活動を反映している可能性がある。

ところで、SD521構築以前の河道堆積物（6地点17）は、1地点の層相観察結果を考慮するとⅩⅣ層相当を削除するⅩⅢ層相当と一連の堆積物の可能性がある。また、上位にSD521が構築されることから、ⅩⅤ層相当堆積以降、14世紀～15世紀以前の堆積物と判断される。一方、SD521上部の堆積物（6地点試料番号20）は、14世紀～15世紀及びそれ以後の堆積物と考えられる。これらの試料間では、花粉化石群集に大きな差異は認められないことから、SD521構築前後を通じ、周辺植生に大きな変化はなかったと推測される。木本花粉では、ⅩⅤ層と同様にマツ属が多産し、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属などが検

山された。このことから、後背の丘陵・山地にはブナ属やコナラ属コナラ亜属等の落葉広葉樹が、河畔などにはハンノキ属等の河畔林・湿地林、丘陵縁辺部などにはマツ属の一次林などが存在したと考えられる。また、これらの試料におけるマツ属の産出状況を考慮すると、Ⅺ層相当（1地点試料番号2）におけるマツ属の多産は腐植や酸化に対する抵抗性の影響もあるが、マツ属が多産する状況が示唆され、Ⅺ層堆積時前後よりマツ属の2次林が増加した、あるいは、遺跡周辺にマツ属が増加したことが推測される。

なお、2試料とも草木類の占める割合が高く、イネ科、クワ科、ヨモギ属等が認められた。これらは人里植物に属する種類であることから、調査区付近に生育していたものに由来すると考えられる。また、水生植物であるサジオモダカ属、イボクサ属、ミスアオイ属等の花粉化石も検出されることから、河道中や周辺の河川などに生育していたものに由来すると考えられる。

15世紀から近世と考えられる河跡埋積物（4地点試料番号2）では、木本類の占める割合が高く、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属が多産した。分析残渣中には未分解の微細植物片が多かったことから、炭片量比率は13%程度と相対的に少ない。層相観察所見では暗褐色シルト～極細粒砂と青灰色細粒砂の互層であることから、静穏な時期と砂の供給を繰り返していることが推測され、当試料に認められた花粉化石群集は、河川の運搬の影響を受け、河畔沿いや上流域の後背山地の植生を強く反映している可能性がある。このことから、後背山地にはブナ属、コナラ亜属などの落葉広葉樹林が、河畔にはハンノキを主体とする河畔林が存在したと推測される。

本遺跡周辺における古植生に関する調査事例をみると、本遺跡南西約3kmに位置する道端遺跡（荒川町）では、本分析結果と同様にハンノキ属からなる湿地林、ブナ属、コナラ亜属などからなる落葉広葉樹林が、縄文時代に成立していたと想定されている〔株式会社パレオ・ラボ2003〕。また、南西5kmの江添遺跡・豊塚遺跡（中条町・現胎内市）では、約3500年前頃から11世紀頃までの堆積物から同様の種類が検出されている（パリノ・サ・ヴュイ株式会社、未公表）。したがって、本分析結果及びこれらの事例から、落葉広葉樹林、湿地林を主体とする植生は、本地域一帯の広域植生を反映していると考えられる。

C 栽培植物の検証

畠状遺構（SX520）が検出された5地点では、耕土と想定される黒色土（試料番号1）からは、植物珪酸体がわずかに検出されたのみで、土層が形成される過程で植物珪酸体が取り込まれにくかったことが窺われる。また、前述した4地点2は同一の堆積物と考えられるが、花粉化石群集組成から集水域の植生を反映している可能性が指摘されている。そのため、本分析結果では、当遺構における栽培の可能性や栽培植物を言及することはできず、僅かに認められた栽培種のイネ属の珪酸体や組織片は、遺跡周辺で行われた稲作等の影響と考えられる。

近世の掘込田とされる北区SX538と6地点Pでは、検出された植物珪酸体の組成は同様であったが、検出個数は異なる状況を示した。SX538（試料番号1-3）では、イネ属の機動細胞珪酸体の産出が顕著であり、穎珪酸体や短細胞列、機動細胞列も検出された。ところで、現在の水田土壤中に含まれる植物珪酸体の分析調査では、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は9%であり、稻藁を堆肥として与えている水田では16%であるという結果が得られている〔近藤1988〕。SX538の機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は、試料番号3は53%、試料番号2は63%、試料番号1は69%と、極めて高い割合を示すことから、掘込田とする調査所見を支持する結果と言える。また、イネ属の稻糊殻や葉部に形成される珪化組織片も認められることから、稻藁や稻糊殻が埋積していたと推測される。一方、6地点は、イネ属の短細胞・機動細胞珪酸体が検出されるが、検出個数は僅かであった。また、この他のタマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ス

スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亞科等も同様に少なく、本分析結果からは堀込田の土層であることを積極的に支持することはできない。

I) 植物資源利用

中世と考えられる井戸跡内に認められた炭化物等を含む土層からは、栽培植物のイネ (SE046:7層、SE077:6層、SE094:4層)、アワーヒエ (SE046:7層、SE077:6層)、ムギ類・アサ (SE077:6層)、マメ類 (SE046:7層) が検出された。このうちイネ、アワーヒエ、ムギ類、マメ類は炭化した状態であり、火熱を受けた状況が推測される。これらは、古くから栽培のために渡来した植物であり [南木 1991]、イネ、アワーヒエ、ムギ類、マメ類等の穀類は胚乳や種子が食用とされ、アサは種子が食用や油料に、繊維は衣料や繩用に利用される。なお、これらの栽培植物の可食部である種実が井戸跡内から検出されたことから、当該期には木遺跡内で利用されていたことが推測される。

自生していたと考えられる分類群のうち、カヤツリグサ科、イボクサ、サナエタデ近似種、ノカザ科、ナデシコ科、カタバミ属、エノキグサ、オトギリソウ属、ナス科などの草本類は、人里植物を含む分類群であることから、遺跡内や井戸跡周辺に生育していたと考えられる。水生植物のイボクサなどは、畠作に伴う水田雑草の可能性がある。また、針葉樹のアカマツを含むマツ属複雜管束亞属、ハノノキ亜属を含むハンノキ属、ヤマグワ、キイチゴ属、ニワトコなどの落葉広葉樹は、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する種類であることから、付近の森林の林縁部や河畔等に生育していたものに由来すると考えられ、花粉分析結果から推定される占植生と調和的である。これらの分類群のうち、ヤマグワ、キイチゴ属、マタタビ属、ニワトコ、アカザ科、ナス科などの一部には、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種皮以外の部位の利用形態が考えられるが [青葉 1991]、現段階では細分化は不可能であり詳細は不明である。

木製品の樹種同定の結果、針葉樹 5 種類 (マツ属複雜管束亞属、マツ属單雜管束亞属、マツ属・スギ、レノキ)、広葉樹 7 種類 (ヤナギ属、ブナ属、クリ、エノキ属、ウツギ属、ウルシ、トネリコ属) が認められた。これらの樹種の材質は、針葉樹では、マツ属複雜管束亞属と単雜管束亞属は、針葉樹材としては比較的重い部類に入り強度や保存性が高く、スギやレノキは木理が直線で割裂性が高く、いずれも加工が容易といった特徴を有する。一方、広葉樹のブナ属、クリ、エノキ属、トネリコ属は比較的重硬で強度が高く、ヤノギ属は広葉樹材の中では軽軟な部類に入り、加工は容易であるが強度・保存性は低い種類である。また、ウルシは強度や耐水性が高い種類とされる。

樹種構成をみると、針葉樹のマツ属複雜管束亞属とスギの利用が多く、他の樹種は 1 ~ 4 点と少ない傾向が認められた。器種別の樹種構成では、井戸枠は全てエノキ属であった。エノキ属は、自然堤防上等によく生育する種類であり、本地域周辺の地形や花粉分析結果を考慮すると、遺跡周辺に生育していた可能性がある。井戸枠としては、エノキ属は保存性が低いが、遺跡周辺に生育し入手可能であったことや、比較的大径木になる種類であることなどが利用された背景と考えられる。曲物底板は、全点がスギであった。スギ材は、割裂性が高く板の加工が容易で点から選択、利用されたと考えられる。また、曲物は、スギ、ヒノキ科 (ヒノキ、リワラ、アスピロ)、モミ属が多く利用される傾向にあり、本遺跡周辺では青出遺跡 (加治川村・現新発田市) や藏ノ坪遺跡 (中条町・現胎内市) でスギの利用が認められている [パリノ・サーヴェイ株式会社 2002, 鈴木ほか 2004]。スギは、花粉分析結果から推測されるように後背山地等に生育していた可能性があることから、これらを利用していた可能性がある。漆器碗に認められたゾナ属は、ケヤキ等とともに現在でも漆器木地に利用される種類である [橋本 1979]。本遺跡ではブナ属の利用が認め

られたのみであるが、周辺の青田遺跡ではケヤキを利用する事例が認められている〔パリオ サ ヴェイ株式会社 2002、鈴木ほか 2004〕。

E SK1043 の用途及び内容物

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある〔Bowen 1963 Bolt・Bruggenwert 1980、川崎ほか 1991、大野ほか 1991〕。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 $30\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度であり、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ [川崎ほか 1991] という報告例がある。また、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では $6.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を越える傾向が認められている。

SK1043 では、腐植含量は覆土下部（試料番号 3）で 0.54%、地山（試料番号 4）で 0.52% を示し、いずれも有機物はほとんど集積していない傾向が示唆される。リン酸含量は、覆土下部で $3.34\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、地山で $2.52\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を示し、地山と比較して覆土下部でリン酸含量が多い傾向にあり、天然賦存量をやや上回ることが示唆される。したがって、SK1043 覆土中に外的要因によってリン酸が富化されたと推測されるが、試料はいずれも粘質土（国際法区分における野外土性【ペドロジスト懇談会編 1984】は LIC（輕埴土）に分類される）であり、土色では覆土下部は 5Y5/2、地山は 7.5Y5/2 と灰オリーブ色を呈することから、やや還元的な状況下にあったことが窺われる。そのため、リン酸の移動・拡散が容易に起こりやすい条件下にあったと推測され、地下水や土壤水、表面流去水の影響によりリン酸成分が富化された可能性もある。また、土坑覆土の微細物分析結果では、微細な炭化材（針葉樹、クリ、広葉樹）や栽培植物のアワーヒエの胚乳 1 個が検出されたのみであった。このことから、土坑覆土下部でリン酸の富化された可能性が示唆されるが、リン酸が内容物に由来するものであるかは課題であり、本分析結果からは、土坑の用途や内容物を言及するに至らない。

F 石材利用

石製品 30 点の肉眼鑑定の結果、8 種類の岩石が認められた。なお、本遺跡は、荒川下流域、現況の荒川北側の沖積地に立地することから、石器石材としては荒川流域の地質を反映した石材が期待される。本項では、日本の地質「中部地方 I」編集委員会〔1988〕に基づき、各岩石の推定産地を考察する。

火山岩類としては、流紋岩や多孔質安山岩、輝石安山岩が使用されており、流紋岩は石材として最も多く使用される傾向が認められた。特に、砾石として多用され、砾石類にも認められた。多孔質安山岩及び輝石安山岩は、石臼に認められた。これらの火山岩類は、荒川上流域に分布する新第三紀の火山岩類に由来すると考えられ在地性の石材と判断される。

堆積岩類としては、砂岩や頁岩が使用されており、砂岩は砾石に、頁岩は砾石類に各 1 点ずつ認められた。これら堆積岩類は、荒川支流の女川流域や、荒川上流部に分布する足尾帯に由来する岩石と考えられる。河床疊としても容易に採取可能な石材であり在地性の石材と判断される。

変成岩類としては、堇青石ホルンフェルス及び粘板岩が使用されており、堇青石ホルンフェルスは砾石類に、粘板岩は硯に認められた。堇青石ホルンフェルスは、頁岩が花崗岩の貫入による熱変成作用でできる岩石であることから、花崗岩の貫入が認められる足尾帯に由来する石材と考えられる。粘板岩は、荒川水系の地質には見られない石材であることから、搬入品と考えられる。各遺物の年代観は不明であることから、現時点では流通等の検討はできない。なお、江戸時代における硯用の粘板岩石材の著名な産地では、宮城県雄勝町の雄勝玄昌石、山梨県南巨摩郡早川町の雨煙石、滋賀県高島郡安曇川町の高島石などが挙げられる。

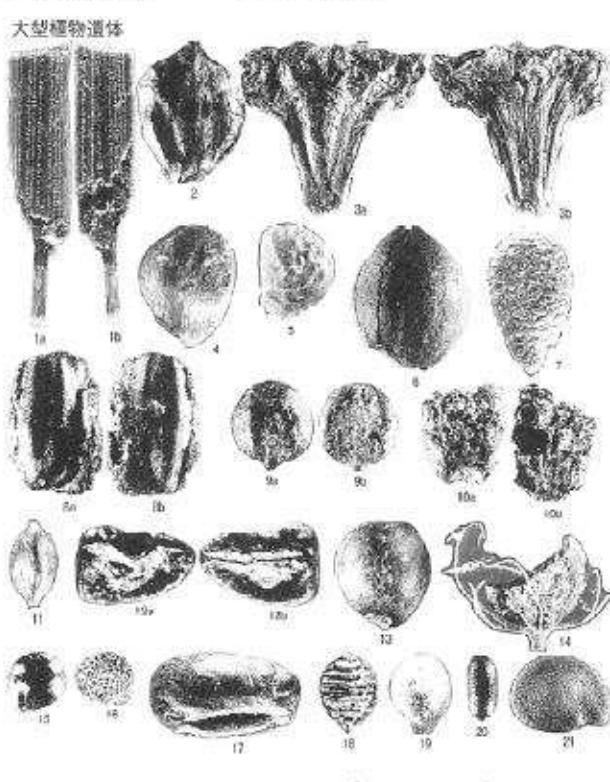
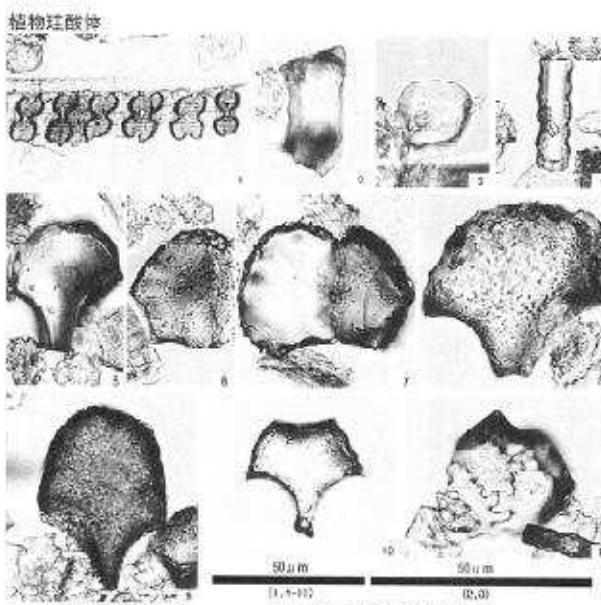
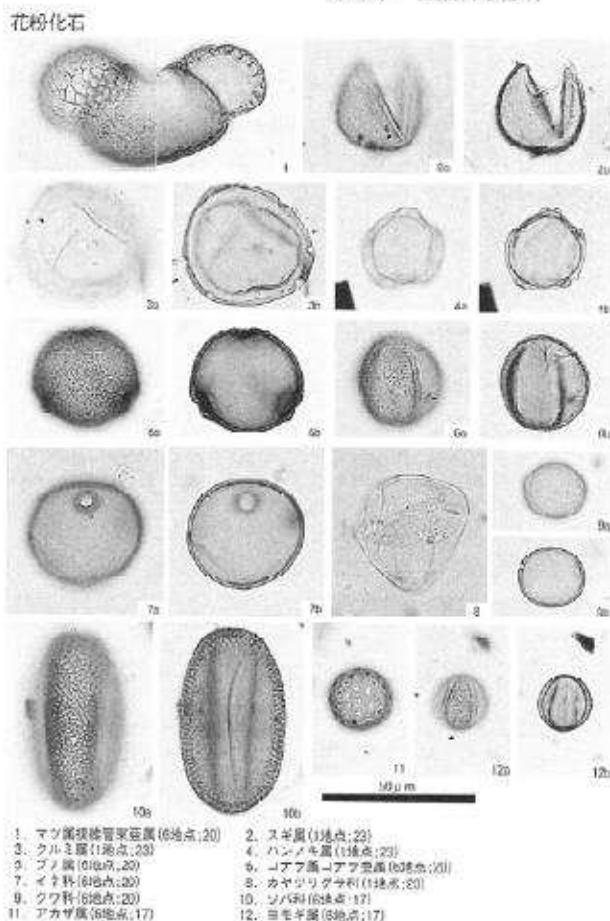
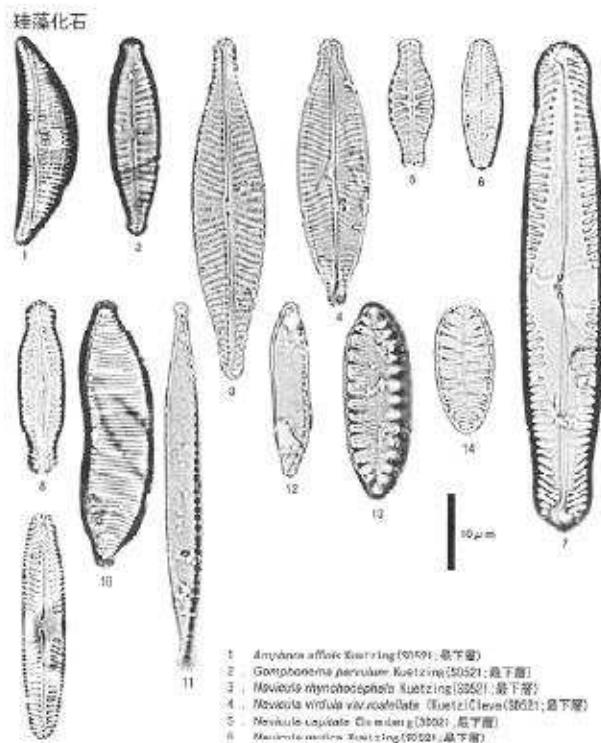
変質岩類としては、変質流紋岩が使用されており、石錘様の石器及び砥石に認められた。変質流紋岩は、緑色に変質した流紋岩であり、前述した新第三系に由来する流紋岩と同様な産地が想定される。

以上、本遺跡から出土した石製品の大部分は、荒川流域における地質に認められることから在地性の石材と判断され、荒川の河床隣として採取可能な石材が使用されていることも特徴と言える。一方で、硯に使用された粘板岩は、荒川流域の地質には認められない石材であることから、搬入品と考えられる。このような搬入石材は、当時の流通状況を検討する上で重要なであり産地の特定が課題である。

引用・参考文献（自然科学分析）

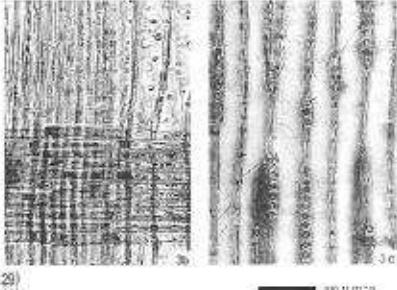
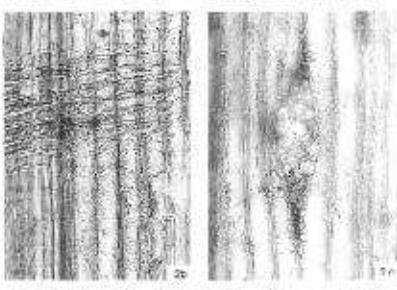
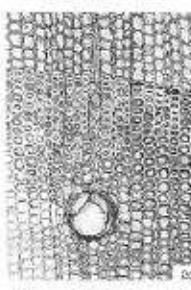
- 青葉 高
1991 「野菜の日本史」 八坂書房 317p.
- 天野 洋司・太田 健ほか
1991 「中部日本以北の土壤型別蓄積量の形態別計量」「土壤蓄積量の再生循環利用技術の開発」農林水産省農林水産技術会議事務局編 28 ~ 36P
- 安藤一男
1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と占環境復元への応用」「東北地理」42. 73 ~ 88p. Asai, K. & Watanabe, T. 1995 「Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophytic and saproxenous taxa」[Diatom] 10. 35 ~ 45P
- 石川茂雄
1994 「原色日本植物推子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会
- 伊藤良永・郷内誠示
1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」「珪藻学会誌」6. 23 ~ 45p
- 井上淳・吉川勝作ほか
2002 「琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黑色木片について」「日本第四紀学会講演要」32. 74 ~ 75p.
- 株式会社パレオ・ラボ
2003 「花粉分析 種実同定 珪藻分析 植物DNA分析 樹種同定 放射性炭素年代測定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第127集 日本海沿岸東北自動車道関遺跡Ⅱ」 新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 24 ~ 41p.
- 川崎 弘・古田 浩ほか
1991 「九州地域の土壤型別蓄積量の形態別計量」「土壤蓄積量の再生循環利用技術の開発」農林水産省農林水産技術会議事務局編 23 ~ 27p.
- Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.
1986 Bacillariophyceae.1.Teil:Naviculaceae.In:Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1.Gustav Fischer Verlag.876p.
- Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.
1988 Bacillariophyceae.2.Teil:Epithemiaceae,Bacillariaceae,Suriellaceae. In:Suesswasserflora von Mitteleuropa Band2/2. Gustav Fischer Verlag.536p.
- Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.
1991 a.Bacillariophyceae.3.Teil:Centrales,Fragilariales,Eunotinales. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa Band2/3. Gustav Fischer Verlag.230p.
- Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.
1991 b.Bacillariophyceae.4.Teil:Achnanthaceae,Kritische Ergänzung zu Navicula(Linckiae) und Gomphonema.In:Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag.248p.
- Krammer,K.
1991 PINNULARIA.eine Monographie europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.J.CRAMER.
- 小杉 正人
1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」「第四紀研究」27. 1 ~ 20p.

- 近藤 錠三 1988 「十二遺跡土壤の植物珪酸体分析」『銚子屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書』御代田町教育委員会 377～383P.
- 近藤 錠二・佐藤 隆 1986 「植物珪酸体分析、その特性と応用」『第四紀研究』25 31～64p.
- 鈴木 三男・小川 とみはる 2004 「青田遺跡出土木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集日本海沿岸東北自動車道関連関係発掘調査報告書V 青田遺跡 関連諸科学・写真図版編』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 53～10p.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 「土壤標準分析・測定法」博友社 354p.
- 土壤養分測定法委員会編 1981 「土壤養分分析法」農業堂 440p.
- 中山 幸大・井之口希秀ほか 2000 『日本植物種子図鑑』東北大出版会
- 南木謙彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究 4 牛畜と流通』石野博信・岩崎卓也ほか編雄山閣 165～174P.
- 南木謙彦・中川 浩美 2000 「大型植物遺体」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3～2 粟津底遺跡Ⅲ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 49～112p.
- 日本の地質「中部地方I」編集委員会 1988 「中部地方I」『日本の地質』4 共立出版 332p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 「新版標準土色帖」
- 浪田善男 1987 「松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の搅乱とその動態について－」『資料集、日本自然保護協会』41～49p.
- 原口 和夫・三友 清史ほか 1998 「埼玉の藻類 珊瑚類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 527～600p.
- Ronwen H.J.M 1979 「Environmental Chemistry of Elements」[浅見 雄男・茅野 充男(訳)]
1983 「環境無機化学、元素の循環と牛化学」博友社 297p]
- Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.1976 「SOIL CHEMISTRY」[岩田 進午・三輪 審太郎・井上 隆弘・陽 捷行(訳)]1980 「土壤の化学」学会出版センター 309p.]
- パリノーサ ヴェイ株式会社 2002 「蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集一般国道7号 中条バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 45～59p.
- ペドロジスト懇談会編 1984 「土壤調査ハンドブック」博友社 156p.
- 松井健・近藤 鳴雄 1992 「土の地理学－世界の土・日本の土」－朝倉書店 122p.
- 松谷暁子 1980 「十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」『浦幌町郷土博物館報告』第16号 203～211p
- 松谷暁子 2000 「植物遺残の識別と保存について」『Ouroboros 東京大学総合研究博物館ニュース』Volume5,Number 8～10p.
- 安田富憲 1987 「文明は経を食べる」読売新聞社 227p.
- 山野井徹 1996 「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』102 526～544p.
- 矢野梓 2002 「遺跡から出土した小型豆のDNA分析」『DNA考古学 Newsletter』3.
- 吉崎昌一 1992 「古代雜穀の検出」『月刊考古学ジャーナル No.355』2～14p. ニューアライアンス社



第16図 自然科学分析写真 (1)

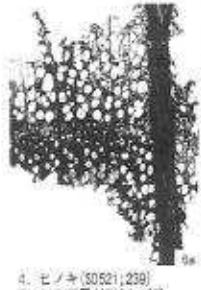
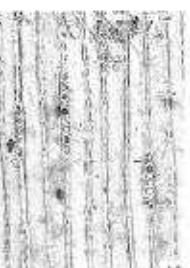
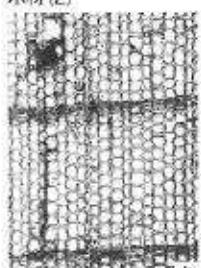
4 考察



1. マツ高級地盤用材 (SE004; 129)
2. マツ高級地盤用材 (SE004; 126)
3. マツ (SE007; 105)
a:木口,b:径面,c:板面

— 200 μm:a
— 100 μm:b,c

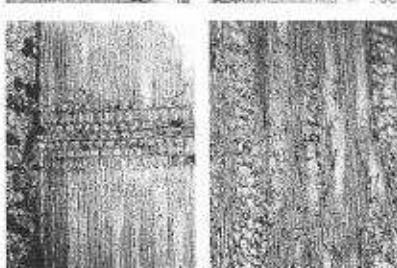
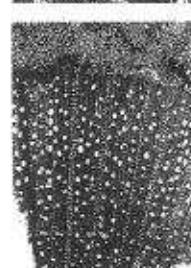
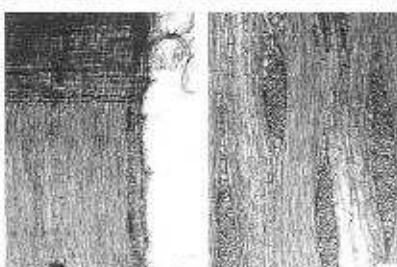
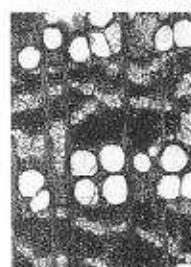
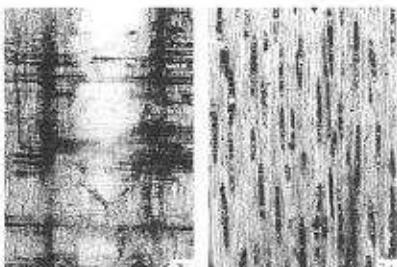
木材(2)



4. ピノキ (S0521; 239)
5. ヤナギ属 (SE004; 125)
6. ノアカ (SE004; 133)
a:木口,b:径面,c:板面

— 200 μm:a,b
— 100 μm:c

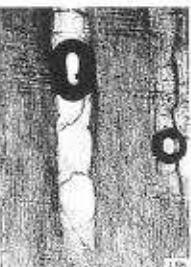
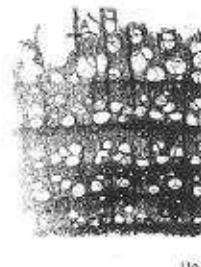
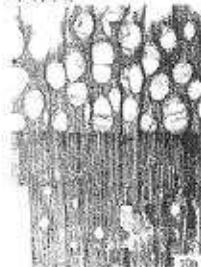
木材(3)



7. クリ (SE004; 管理No.222)
8. エノキ属 (SE009; No.276)
9. ウツキ属 (SE004; 175)
a:木口,b:径面,c:板面

— 200 μm:a
— 100 μm:b,c

木材(4)



10. ウルシ (SE004; 管理No.201) a:木口,b:径面,c:板面
11. トネリコ属 (SE004; 管理No.294) a:木口,b:径面,c:板面
12. イネ科タケヌキ科 (SE000; 175) 横断面

— 200 μm:a
— 100 μm:b,c



a

第17図 自然科学分析写真 (2)

第VII章 まとめ

1 古代

A IX層相当の遺構・遺物

遺構 X層相当上面で十坑7基、溝4条、ピット5基が検出された。遺構は微高地に所在する南区の北側寄りに散在していた。今年度は調査範囲が狭いため、遺跡の性格については明言できないが、特筆すべき遺構としては、北側から南側にかけて直線的に並行する2条の溝SD1054、SD1055がある。いずれの溝も幅約0.6m前後、深さは0.14～0.18m、両溝の芯々距離が約2.5mを測るものである。遺物の出土は無かったが、X層相当上面より検出されたことに加え、土軸が同一となるSD1052の出土遺物も考慮に入れると9世紀代の遺構と考えることができる。2本の溝が直線的に並行することから、道路状遺構の可能性も否定できない。しかし、惜しくも両溝間の硬化面は確認できなかった。今後の延長線上の調査に期待するものである。

類似遺構が上越市の下割遺跡Iで検出され、道路状遺構とされている。下割遺跡Iは上越市大字米岡に所在する飯田川左岸の標高135m～14mの自然堤防上に立地する。道路状遺構は2基検出され、そのうちの1基(SR600)が本遺構と類似している。下割遺跡SR600は調査区の北東から南西に向かって、並行する2条の溝SD23とSD27とから構成されており、SD23とSD27の芯々距離は約2.6mを測る。溝は共に幅0.6mで深さはSD23が0.13m、SD27は0.11mと本遺跡の遺構とはほぼ同規模を示す。SD23とSD27の間に硬化面は確認されていない。また、出土遺物は無かったため、明確な時期は不明である。報告書では「中世の溝(SD52)に壠されていることから、中世かそれ以前に構築されたものと考えられる」と考察されている。また、SR600のような幅員が規定され、直線的な道路は古代的な印象を受けるが、近年、中世道路遺構が調査されるようになるにつれ、古代道路を継承して中世道路が設置されたという指摘もある〔木下2001〕。

本遺跡で検出された遺構も2条の同規模の溝が並行して直線的に走行するもので、溝間距離の規模もほぼ同一の値を示すことから、同様な性格をもつ遺構であると考えられる。道路状遺構の可能性を秘めた遺構として報告しておきたい。

遺物 IX層相当からは多量の須恵器と土師器が出土している。この遺物群の時期について須恵器を中心に山三賀II遺跡における坂井秀弥氏の編年〔坂井1989〕、春日真実氏の編年〔春日1999・2004〕、本遺跡の対岸に位置する荒川町元山窯跡群の吉井雅勇氏の調査見解〔吉井1999〕との比較から考えてみたい。

須恵器無台杯をみると、器形からI～IV類に分けることができ(第V章2-A-1)、このうち、I類とII類が主体を占め、III及びIV類は微量である。I類は平底で、体部から口縁部はやや丸みをもって立ち上がる特徴を有し、口径は132mm以下となり、右クロ回転方向が主体で、左回転は微量である。このような器形的特徴に近似する事例を近隣に求めると荒川町元山窯跡群6号須恵器窯があげられ、当窯跡の遺物群は山三賀編年の第III2期～第IV1期に比定され、9世紀第I四半期から第II四半期とされている。また、春日編年ではV1～VI1期のいずれかの時期に相当するものと思われる。II類は底部が上げ底で、体部から口縁部は直線的に開き、体部の傾きも鋭角になり、ロクロ回転方向は左右両回転が存在するが、左回転の比率が高い。このような点から、II類は山三賀IV期、春日編年IV期に比定され、9世紀後半代と考えられる。

B VII層相当の遺構・遺物

遺構 IX層相当上面で土坑40基、ピット6基が検出された。遺構は調査区の北東寄りから集中して検出された。今年度の調査範囲は狭いため、遺跡の性格は明確ではないが、土坑群として1つのまとまりが確認された。大小さまざまな規模の土坑からなり、直径の規模では1m以上のものと1m以下のものと2グループに大別される。覆土は自然堆積を呈し、自然科学分析の結果からも墓坑とする確認は得られなかった。SK1043の覆土下部でリン酸の含量が多い傾向にあるという自然科学分析の結果が出たが、しかし地下水や土壤水、表面流去水の影響などから、リン酸の成分が増化された可能性が指摘された。

遺物 VII層相当からは多量の土器が出土しており、須恵器の出土は微量である。土器は口クロ土器の無台碗がほとんどで、これに黒色土器の無台碗が加わる。また、中世的な食器具である小皿等は無い。このような組成の土器群は春日編年のVII期に相当し、10世紀前半のものと考えられる。

2 中世

A 中世の遺構・遺物

遺構 今年度調査の主体となる時代である。掘立柱建物5棟、井戸38基、土坑63基、ピット363基、溝23条が調査区のほぼ全域にわたって検出された。遺構は先述のとおり、北区ではV層上面、南区ではVII層相当上面ないし、IX層相当上面で確認された。微高地に立地する。遺構の新旧関係や出土遺物から、①～③期の集落の変遷が考えられる。遺構の時期は覆土中の出土遺物をもとに検討した。中世所産の可能性があるものでも、出土遺物が皆無のものや時期決定の難しい細片遺物のものは保留にした。遺物の時期は珠洲焼「吉岡1994」をもとに、併存する中国輸入陶磁器「森田1978」、「上田1982」や常滑焼「赤羽・中野1994」や山茶碗「藤澤1994」との関係を考慮し決定した。尚、遺物は主に遺構外から出土し、明らかに遺構に伴う例は皆無に近く、遺構構築時期を示す資料とは言えないが、あえて、遺構構築時期に近いものと考え各期の概要と変遷を試みた。

西部遺跡中世①期（12世紀中頃～後半）

掘立柱建物（SB528・529）、区画溝（SD006・016・027・109）、井戸（SE017・047・064・077・097・104・437）、土坑（SK005・020・180）から成り、遺構は調査区北側の北東部から中央部寄りに集中する。掘立柱建物は北東側に位置し、井戸は全体的に調査区の南側寄りに集中する。本期の井戸は規模の類型ではA類が5基、B類が1基、D類が1基。覆土の類型はI類が1基、II類が3基、III類が3基。遺物の流れ込みの方向は北側2基、東側1基、西側4基である。以上のように規模はA類が多く、覆土の類型はII類、遺物の流れ込みの方向は西側が多い傾向にある。

西部遺跡中世②期（13世紀初頭前後～前半）

当期の遺物は時期の細分が可能であるが（珠洲焼I・II期）、遺構からは混在して出土している。掘立柱建物（SE530・531）、区画溝（SD024・025・026・041・490）、井戸（SE019・046・052・053・057・110）、土坑（SK034・086・108）が当期に該当する。遺構はI期に比べ南寄りに位置し、井戸は調査区の中央部に集中する。本期の井戸は規模の類型ではA類3基、B類3基。覆土の類型はII類3基、III類3基。遺物の流れ込みの方向は北側が2基、東側1基、西側2基、東西の両方向が1基である。以上のように規模、覆土の類型が均等の数で検出されている。遺物の流れ込みの方向にはばらつきがある。

西部遺跡中世③期（15世紀前半～後半）

当期の遺物も時期的には細分できるが（珠洲焼V・VI期）、遺構からは現在して出土している。遺構は井戸（SE083・094）、溝（SD515・521）が当期に該当し、調査区の南西側に集中する。井戸は規模の類型でB類2基、着十の類型はI類1基、II類1基、遺物の流れ込みの方向は南1基、方向が一定せず四方からのが1基である。本期の井戸は少ないので、傾向をつかむのは困難である。

最後に、遺跡の隆盛時期は①・②期（12世紀中頃～13世紀前半）で、13世紀後半～14世紀代の空白期間において、③期15世紀前半に再び集落が形成される。集落の盛衰は荒川の氾濫も1つ考えられるが、時代的背景を見ていくと、12世紀中頃に集落形成が開始され、13世紀前半で一度途絶えるのは当時阿賀北地方を支配していた城氏の盛衰の時期に近い。本遺跡も何らかの影響を受けていた可能性は否定できない。さらに、13世紀後半～14世紀の空白期と③期の集落は時期的に色部氏の一族である牛屋氏の支配下（13世紀後半～16世紀）であったと考えられる。限られた調査範囲であるため、これらの社会情勢と集落の変遷について、現段階ではこれ以上詳細に述べることはできない。平成17年度以降に計画されている西部遺跡の調査や周辺の調査の進展により、さらに明確になるものと思われる。

遺物

中世では珠洲焼・中国輸入陶磁器・常滑焼・山茶碗・木製品・石製品が出土している。

珠洲焼 珠洲焼I～II期が出土量の主体をしめている。その分布も調査区全域に認められ、珠洲焼V・VI期は出土量も少なく、調査区の南端のみに分布している。今回の調査において珠洲焼III・IV期の資料は皆無である。この珠洲焼の消長から本遺跡の中世集落は13世紀後半～14世紀前半にかけての断続を挟み、12世紀後半～13世紀前半の集落と14世紀後半～15世紀後半の集落が存在していたと理解できる。

中国輸入陶磁器 中国輸入陶磁器には白磁に碗II類・碗IV類・碗V類・碗VI類・皿IX類・森田編年白磁D群、青磁に龍泉窯系青磁碗I～2類・龍泉窯系青磁碗I～4類・龍泉窯系青磁碗I～5類・同安窯系青磁皿I類・上田編年青磁碗C2もしくはB3類が存在する。これらの中国輸入陶磁器を時期別に並べると第13・14表のようになる。

次に珠洲焼と中国輸入陶磁器の同一遺構内からの出土状況を見ていく（第14表）。

珠洲焼I期には白磁IV類と龍泉窯系青磁碗I～2類が出土しており、当時期の様相としては基本的な矛盾は認められないが、大宰府においては白磁優勢から青磁優勢へと変化する時期で、本遺跡においては白磁が優勢である点が異なる。珠洲焼I・II期の両者が出土した遺構に関しては白磁碗IV類と龍泉窯系青磁碗I～2類あるいは3類の共存が認められ、珠洲焼II期のみの遺構では白磁が無くなり、龍泉窯系青磁碗I類・龍泉窯系青磁碗I～4類・同安窯系青磁碗I類・同安窯系青磁皿I類が出土し、青磁優勢へと変化しているが、これらの青磁群は大宰府において12世紀中頃から後半にかけての所産と考えられていることから珠洲焼との関係において時期的な面で齟齬をきたしている。珠洲焼V期では龍泉窯系青磁碗I～5b類が出土しており、珠洲焼と青磁の間に大きな時間差が認められる。

常滑焼 比較的出土量の多い遺物であるが、いずれも小さな破片で、押印の種類も少ないことから本来の個体数は1～数個体分程度と考えられる。いずれの破片も器壁が薄く、押印は連続気味に施文されており、1点のみ出土した口縁部は人さく外反した素口縁である。これらの特徴より常滑焼2～3型式に相当すると考えられ、12世紀中頃～後半にかけての製品と思われる。常滑焼の出土はSD024からまとまって出土した以外はSE094・110、SD034・026・027から各1点が出土している。廃棄された時期は同一遺構から出土した珠洲焼が、珠洲焼I・II期共に認められることにより珠洲焼I期の終末からII期のはじめにかけてと考えられる。大型で器盤が薄い常滑焼の甕を太平洋岸の常滑から本遺跡まで陸海上ルートで破損

10世紀後半～11世紀中頃	白磁碗 XI類
12世紀中頃～後半	白磁碗IV・V・VI類 龍泉窯系青磁碗I-2・3・4類 同安窯系青磁碗I類・同安窯系青磁皿I類
13世紀初頭～前半	龍泉窯系青磁碗I-5類
13世紀中頃～14世紀初頭	白磁皿II類
14世紀後半～15世紀前半	森田編年白磁D群 上田編年青磁碗C2類もしくはB2類

第13表 中国輸入陶磁器時期別表

遺構名	珠洲焼編年	白 磁	青 磁
SE021	珠洲焼 I 期	山本編年 C 期山東系青磁	
SE057	珠洲焼 I 期		龍泉窯系青磁 I - 2 類
SE064	珠洲焼 I 期	白磁碗IV類	
SE006	珠洲焼 I 期	白磁碗IV類	
SD006	珠洲焼 I 期	白磁碗IV類	
SK005	珠洲焼 I 期	白磁碗IV類	
SD024	珠洲焼 I・II 期	白磁碗IV類	龍泉窯系青磁碗 I 類
SD490	珠洲焼 I・II 期	白磁碗IV類	龍泉窯系青磁碗 I - 2 あるいは 3 類
SE071	珠洲焼 II 期		龍泉窯系青磁碗 I - 4 類
SE262	珠洲焼 II 期		龍泉窯系青磁碗 I 類
SK108	珠洲焼 II 期		同安窯系青磁碗 I 類・同安窯系青磁皿 I 類
SD515	珠洲焼 IV・V 期		龍泉窯系青磁碗 I - 5b 類
SE083	珠洲焼 V 期		龍泉窯系青磁碗 I - 5b 類

第14表 遺構別出土遺物時期別表

せずに運び込むことは至難の業であり、一般的には手に入れ難い品と考えられる。手に入れることのできる経済力をもつ人がいた証拠と言える。

遺跡の時期区分について 本遺跡の時期区分は珠洲焼の編年を基本とするが、中国輸入陶磁器や常滑焼との関係により次のように分けられる。

西部遺跡中世①期 珠洲焼 I 期のみ遺構から出土する時期で、中国製輸入陶磁器は白磁・青磁共に存在するが、白磁がいまだに優勢である。12世紀中頃～後半。

西部遺跡中世②期 珠洲焼 I 期と II 期が混在して遺構内から出土する時期で、中国製輸入陶磁器は白磁・青磁共に存在するが、青磁の比率が上がる。また、常滑焼が廃棄される時期である。13世紀初頭前後。

珠洲焼 II 期のみ遺構内から出土する例があり、中国輸入陶磁器は白磁が無くなり、青磁のみ存在する。13世紀前半。

西部遺跡中世③期 珠洲焼 V・VI 期の時期で、V 期では中国輸入陶磁器に時期的な躍進をきたすが龍泉窯系青磁碗 I - 5 類が残存し、森田編年白磁 D 群や上田編年青磁 C2 類もしくは B2 類といった新しい中国輸入陶磁器群が出現する。15世紀前半。

石製品 石製品には砾石・礫石類・不明石製品が存在する。砾石類の中には自然砾に光沢を有する磨面をもつものがあり、形狀的には不定であるが、人きさから言えば白石のように固定して使用されたものと手にもって使用できるものに分かれる。有機質のものを磨ったときにみられるような光沢のある表面が存在するが、磨面の幅が狭いことから粉の生成には不向きと考えられ、別の用途の可能性も考えたい。

石材鑑定の結果、石製品の石材の大部分は荒川の河床砾として採取可能であると判明した。現に使用された粘板岩は、荒川流域の地質には認められない石材であることから、搬入品と考えられ、当時の流通を検討する上で重要であり、产地の特定が今後の課題である。

3 近世

A 近世の遺構・遺物

近世では井戸 2 基、集石 2 基、凹地遺構 6 基、畝状遺構 23 条、溝 1 条が検出された。遺構は調査区の北側と南側に分布する。遺物は出土量が少なく、遺構の時期や性格がわかるものは少ない。そのため、自然科学分析から、井戸は井戸枠で年代測定を求め、凹地遺構、畝状遺構は覆土のサンプルを採取し、栽培植物の検証を行なった。以下主な遺構についてまとめる。

井戸 南区では素掘りと石組みの 2 種類の井戸が耕作土直下 IX 層相当上面から検出された。両遺構共に、遺物が出土せず、明確な時期は不明であるが、周辺の出土遺物や中世の遺構 (SD521) を切るため、近世以降の所産と推測される。素掘りの井戸 (SE092) は中世の形態を継承している。石組みの井戸は中世では検出されず、今回の調査で検出された SE090 のみである。本遺構は井戸底に方形に板材を組み、その上に石が組まれている。その類例の一つとして、京都府長岡京市に所在する勝龍寺城の調査「岩塙 1991」で検出された井戸をあげることができる。勝龍寺城は史跡公園整備に伴い、本丸と沼田丸のトレント調査を行い、石組みの井戸が総計 7 基検出されている。検出された井戸のうち、6 基は井戸底に方形に板材の木枠が組まれており、その上に石を組む構造である。遺物が出土した井戸は SE22 で、押め戻された礎に混入して、16 世紀第Ⅳ四半期の土師器（かわらけ）や備前焼の擂鉢が出土している。

SE090 の井戸枠で放射性炭素年代測定を行った結果、1635~1666 の年代が得られており、前述の勝龍寺城 SE22 の構造的特徴や年代観とも合せ、本遺跡で数少ない近世の井戸と言えよう。

集石遺構 集石遺構のうち、SX099 については本文中で触れてあるので、ここでは SX100 についてまとめる。本遺構は現状では長方形に石が敷き詰められていた。一部の石に経文が書かれており、ほとんどが梵字である。筆跡は少なくとも 2~3 種類みられる。遺構の性格は經塚と推測される。隣接する石組みの井戸 (SB090) との関係は上部が後世の閉塁等の削平により、切り合いや共存関係を示すものがないため、不明であるが、石組みの井戸や經塚は通常の集落では検出されないもので、経石の存在から寺院跡の可能性が一つ考えられる。本遺構は上部構造が不明なため、類例を求めるのは困難であるが、寺院の床下から経石が出土した一例がある。東京都杉並区妙法寺祖師堂の例では、堂床下から経石が出土している。直径 52cm、深さ 21cm の擂鉢状の穴を掘り、円形に四段積み、多字一石経が並べて埋納され、その上に一字一石経を繕んだ塚が検出された。有富氏はこの出土例をもとに寺院の建物の下に経石が埋納されていた発掘事例を全国で 18 例挙げ、寺社建物の下における經塚の場合はその形態から建物と密接な関係があるとし、地鎮（鎮壇）の意味をもつものと解している〔有富 2000〕。

本遺構がこれに直接結び付くことは不明であるが、本遺跡の所在する牛屋には「ジョウガンジ」という寺があったという伝承が残っている〔田中 1999〕。寺の場所については定かではなく、今回の調査でも直接寺院と明確に判断できる遺構は検出されなかった。しかし周辺に礎石と思われるような扁平な石の散乱が見られ、SX100 が寺に關係する遺構の可能性もある。

凹地遺構 本遺構の形態は幅の広い浅い溝や方形状の落ち込みである。この遺構の類例には、新津市細池遺跡・寺道上遺跡で検出された B 類の溝状の凹地遺構と J 類の方形の凹地遺構がある〔小池ほか 1994〕。この報文では、凹地遺構の性格について、群馬県玉村町柄田添遺跡〔小田澤 1992〕に形態が類似する「掘込田（ホリコメダ）」と仮称された遺構を取り上げている。この遺構の年代は浅間火山灰によって 1783 年以降と考えられている。掘込田は利水困難な微高地に水田耕地を確保する特異な形態の水田である。した

がって本遺跡の凹地遺構群が水田と仮定すれば、遺構間の空間が畦や道であることが理解できる。自然科学分析の結果では SX538 でイネ属の機動細胞珪酸体の産出が顕著であった。ほかでは僅かであったという結果が出た。この結果から即、水田遺構であると結論付けることは難しい。凹地遺構が現水田耕作土の直下に存在することから、分析試料が現在の水田の影響を少なからず受けていることも考慮する必要がある。今後、類似する遺構が検出された場合、調査方法や分析試料の採取方法について充分検討しなければならない。

畝状遺構 形状から畑作に関わる畝跡と推測される。自然科学分析の結果では植物珪酸体がわずかに検出されたのみで、本遺構における栽培の可能性や栽培植物を言及できないという結果であった。分析の方でも触れてあるが、河川の氾濫等により、土層が形成される過程で植物珪酸体が取り組みにくかった可能性がある。

要 約

1. 西部遺跡は、新潟県北部の岩船郡神林村大字牛屋 1192 番地ほかに所在する。遺跡は荒川右岸の自然堤防上に位置する。
2. 本発掘調査は日本海東北自動車道の建設に伴って、平成 16 年度に実施した。実質的な調査面積は 11,410 m² である。
3. 調査の結果、古代 2 面と中・近世 1 面の文化層が確認され、古代と中・近世の遺構・遺物が検出された。共に集落の一部である。
4. 古代のⅨ層相当の遺構としては、土坑 7 基、溝 9 条、ピット 5 基が検出され、時期は 9 世紀代と考えられる。遺構は南区の北寄りに土坑が散在し、道路状遺構と考えられる 2 本の溝が北西から南東方向に走行する。遺物には無台壺や有台碗の須恵器が多く、ほかには壺、長頸壺、横瓶が少量出土している。また、土師器には無台碗や壺があり、無台碗の数が多い。
5. 古代のⅩ層相当では土坑 40 基、ピット 6 基が検出され、時期は 10 世紀前半と考えられる。遺構の多くは土坑で、南区の北東側に土坑群を形成する。遺物は、土師器が多く、ロクロ土師器の無台碗が大半を占め、僅かに黒色土器の無台碗が出土した。須恵器は繊片が少量出土した。
6. 中世の遺構は掘立柱建物 5 基、井戸 41 基、土坑 60 基、溝 23 条、ピット 363 基が検出された。

遺構の時期は 12 世紀中頃～後半、13 世紀初頭前後～前半、15 世紀前半～後半に分かれる。荒川の氾濫による集落の盛衰も考えられるが、当時の時代背景から時の権力者による影響と本遺跡の集落のあり方も今後の課題の一つである。遺構は溝で区画された中に掘立柱建物や井戸、土坑が配され、いくつかの屋敷が集まり、集落を形成していたと考えられる。

遺物は珠洲焼、常滑焼、古瀬戸、中国輸入陶磁器、石製品、木製品である。珠洲焼の出土量が多く、ほかは少ない。石製品は砥石・磨石・硯が出土した。また、木製品には漆器碗、皿物、槽等がある。

7. 近世は井戸 2 基、集石遺構 2 基、凹地遺構 6 基、畝状遺構（小溝）23 基が検出された。遺物が少ないため明確な時期は不明だが、僅かに 17 世紀代の肥前系染付碗の出土がみられることや、井戸枠の年代測定（AMS）からほぼ 17 世紀代の所産と考えられる。

近世の遺構は調査区の北側と南側に分散して検出された。北側の凹地遺構は類例をみていくと利水困難な微高地に水田耕地を確保する特異な形態の水田遺構に類似する。

遺物は肥前系陶磁器、土製人形、一字一石経、多字一石経、石臼、煙管、寛永通寶が若干量出土した。

引用・参考文献

- 河部 洋輔 1987 「第一章 第一節 二 越後の地頭」『新潟県史』通史編2 中世 新潟県
- 有富山紀子 2000 「妙法寺祖師堂床下の経塚 経石からみた近世信仰形態」『杉並区立郷土資料館研究紀要』第8号 杉並区郷土資料館
- 岩崎 誠 1991 「長岡市埋蔵文化財調査報告書第6集 謙龍寺城発掘調査報告」(財)長岡市埋蔵文化財センター
- 岩本 正一 2001 「中世の井戸」『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
- 上田 寛夫 1982 「14~16世紀の青銅鏡の分類について」『貿易と経済研究』NO.2 日本貿易陶器研究会
- 宇野 隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻 第5号
- 宇野 隆夫 2001 「第Ⅲ章 中世莊園遺跡の諸相」『莊園の考古学』シリーズ日本史のなかの考古学 青木書店
- 小田由美子・高橋保晴 2002 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第117集 赤坂山中世窯跡・赤坂山B遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田澤佳之 1992 「柄田添遺跡(第一次)」「第4回 東日本の水田を考える会-資料集」東日本の水田を考える会
- 春日 真実 1997 「越後の10・11世紀の土器」『シンボジウム北陸の10・11世紀代の土器』北陸古代土器研究会
- 春日 真実 1999 「土器偏年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日 真実 2004 「第Ⅱ章 船舶郡の土器様相」「越後阿賀北地域の古代土器様相」新潟古代土器研究会
- 鎌方 正樹 2003 「第2章 井戸の構造と分類」「井戸の考古学」ものが語る歴史3 同成社
- 金子 拓男 1996 「人化元年『越後寮上』についての検討」「越と古代の北陸」古代王権と交流3 名著出版
- 小池 義人 1994 「第IX章 まとめ1. 中世の凹地遺構と構について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集 細池遺跡 寺道上遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 崩見 和夫 1993 「井戸をめぐる祭祀 -地域的事例の検討から-」『考古学雑誌』第77巻 第4号
- 坂井 秀弥 1986 「平安時代中期の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第40集 一之口西地区』新潟県教育委員会
- 坂井 秀弥 1989 「第IV章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三智Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 坂井 秀弥 1991 「給園に見る城館と町」「中世の城と考古学」新人物往来社
- 坂井 秀弥 1997 「第5章第5節 中世聚落の展開と城館の動向」「中・近世の北陸 考古学が語る社会史」北陸中世土器研究会編 桂書房
- 坂井 秀弥 1999 「中世越後の村・家・住まい」「中世の越後と佐渡」環日本海歴史民俗叢書7 高志書院
- 沙見 一夫 1999 「砥石について -中世遺跡出土の仕上げ砥を中心にして-」「中世北陸の石文化」北陸中世土器研究会
- 鈴木 孝之 1990 「古代~中世の井戸跡について(1) -埼玉県における形態分類を中心として-」『研究紀要』第7号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木 孝之 1991 「石組みの井戸について -古代~中世の井戸跡について(2)」『埼玉考古学論集 設立10周年記念論集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木 俊成 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡車地区(本文編)(図版編)」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 一樹 1990 「平安末・鎌倉期の越後と佐渡 -中世莊園の形成と国衛領支配」「中世の越後と佐渡」環日本海歴史民俗学叢書7 高志書院
- 高橋 一樹 1999 「小泉莊の成立と展開」「村上市史」通史編 中世 新潟県村上市
- 田島光男編 1979 「越後国人領主色部氏史料集」新潟県神林村教育委員会
- 田中 真吾 1985 「神林村誌」新潟県神林村
- 田中 真吾 1999 「牛屋村史談」

- 田辺早苗・土生朗治 2001 『神林村埋蔵文化財調査報告第9衣田遺跡 道上遺跡』新潟県岩船郡神林村教育委員会
- 田辺 早苗 2001 「越後の様相」『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
- 鶴巻 康志 1991 「壺器系盆神奈製品について」『新潟県考古学談話会会報』第7号 新潟考古学談話会
- 戸谷 邦隆 1990 「掘り方」からみた中世の石組の井戸』『富山考古学研究』第2号 (財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 中野 善久 1995 「常滑 濱美」 中世土器研究会編 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 成田寿一郎 1990 「第4章 木工の諸職 八 刺ぎ板類・曲物類」『日本木工技術の研究』 法政大学出版会
- 日色 四郎 1967 『日本上代井の研究』 奈良県立橿原考古学研究所
- 久世 康博 2001 「井戸はどうして埋められたのか(石を入れる)」『考古学論集』第5集 考古学を学ぶ会
- 藤澤 良祐 1991 「古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要』X 潤戸市民俗資料館
- 藤澤 良祐 1994 「山茶碗の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤 良祐 1995 「古瀬戸」 中世土器研究会編 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 松原 真明 1994 「礎石経の地域相3 関東・甲信越」『考古学論究』第3号 特集・礎石経の世界
- 三浦謙一・松本建速 1995 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書 第228集 柳之御所跡』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 水澤 幸一 1997 「第5章 第3節 中世越後国の土器 陶磁器組成」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 水澤 幸一 1999 「第5節 中世の信仰と墓制 第1項 級塚と塚」『新潟県の考古学』 新潟考古学会編 高志書院
- 森田勉・横田賛次郎 1978 「人宰府出土の輸入中国陶磁について -形式分類と編年を中心にして」『九州歴史資料研究論集』4 九州歴史資料館
- 森田 勉 1983 「14~16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』N02 日本貿易陶磁研究会
- 山崎 忠良 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第120集 下割遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本 信夫 1983 「付録 土器の分類」『大宰府市の文化財第7集 大宰府条約跡 II』 福岡県大宰府市教育委員会
- 四柳 嘉章 1992 「古代~近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会会誌』第35号 石川考古学会
- 四柳 嘉章 1995 「漆器」 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 四柳 嘉章 1997 「概説・北陸の漆器考古学」『北陸の漆器考古学 -中世とその前後-』 北陸中世土器研究会
- 吉井 雅勇 1999 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第5集 元山窯跡群』 新潟県荒川町教育委員会
- 吉井 雅勇 2001 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第7集 田島遺跡』 新潟県荒川町教育委員会
- 吉井 雅勇 2002 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第8集 鴨狩遺跡』 新潟県荒川町教育委員会
- 吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

別表17 土器・土製品調査表

報告番号	種別	器種	グリッド	遺構名	層位	口径 mm	裏面 mm	底径 mm	外面(側)色	給土	焼成	整形	備考
1	須恵器	無台坪	SD	SD1052	4-	130	30	73	灰白 灰白	砂・礫	還元焰 不艮	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	底部外側に「千」の墨書き。
2	須恵器	無台坪	SD12		IX 相当	(114)	20	74	灰 灰	白・黒	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
3	須恵器	無台坪	4B19- 20		IX 相当	118	35	67	オーピア灰 オーピア灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	
4	須恵器	無台坪	4B15- 24-582		IX 相当	(124)	92	(92)	灰白 灰白	砂・白	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
5	須恵器	無台坪	3D25 3D5-10		IX 相当	-133	31	70	淡黄 淡黄	礫	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
6	須恵器	無台坪	6D28		IX 相当	(126)	29	84	灰白 灰白	礫	還元焰	ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	
7	須恵器	無台坪	4B4- 3E5-		IX 相当	(118)	30	74	暗青灰 暗 灰 灰	黒・白 外	還元焰	ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	
8	須恵器	無台坪	4A18		IX 相当	(120)	33	(72)	オーピア灰 オーピア灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
9	須恵器	無台坪	4C6		IX 相当	(132)	32	(82)	オーピア灰 オーピア灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	
10	須恵器	無台坪	4E4		IX 相当	(138)	29	78	灰 灰	白	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
11	須恵器	無台坪	3D6		IX 相当			40	灰 灰	白	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	底部外側に「太」の墨書き。
12	須恵器	無台坪	4A15		IX 相当			74	灰白 灰白	砂	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
13	須恵器	有台坪	4D2		IX 相当	130	35	78	灰 灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
14	須恵器	有台坪	3E10		IX 相当	138	46	78	緑天 緑灰	白・白	還元焰	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	
15	須恵器	有台坪	4D0- 11-12		IX 相当	108			紺リ・ブ灰 紺リ・ブ灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	
16	須恵器	有台坪	4C2-7		IX 相当	134	67	84	区・リーパ 区・リーパ 灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	
17	須恵器	有台坪	4B19- 4C3		IX 相当	134	62	80	灰 灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	
18	須恵器	有台坪	3A25		IX 相当	(152)	82	84	灰 灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	
19	須恵器	有台坪	9C3		IX 相当	(156)	79	88	灰 灰	白・礫	還元焰	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	
20	須恵器	罐	4A20- 255A21		IX 相当	158	24	65	灰白 灰白 灰口	白・礫	還元焰	ロクロ整形。天井部外面回転ヘラ切り。	
21	須恵器	罐	1C3		IX 相当	180	20	63	灰白 灰白	白・礫	還元焰	ロクロ整形。天井部外面回転ヘラ切り。	
22	須恵器	罐	3D3		IX 相当			62	灰 灰	白・白	還元焰	ロクロ整形。天井部外面左回転ヘラ切り。	
23	須恵器	罐	4B24		IX 相当			64	灰 灰	白・白	還元焰	ロクロ整形。天井部外面左回転ヘラ切り。	
24	須恵器	長頸壺	4C6		IX 相当	114			灰 灰	砂	還元焰	ロクロ整形。	
25	須恵器	長頸壺	4C7- 5E5		IX 相当			80	灰 灰	砂	還元焰	ロクロ整形。未切り。	
26	須恵器	罐	3D2- 3C17- 17-22- 23		IX 相当	122	260		灰 灰白	砂	還元焰	開脚輪廻頭素。口縁部横ナリ。胴部外周押さへ力なし、内面同心円凸凹。	
27	土師器	有台碗	4D1		IX 相当	242	106	126	浅黄色 浅黄色	砂・白	酸化焰	口縁部横ナリ。体部はロクロ。	
28	土師器	陶	4B19		IX 相当	152	56	65	黄灰 浅黄色	砂・礫	酸化焰	ロクロ整形。右回転未切り。内外面赤茶。	
29	土師器	小型壺	4C8		IX 相当	(190)			浅黄色 浅灰	砂	酸化焰	ロクロ整形。外面赤茶。	
30	土師器	無台碗	5E	SK1003	1-	122	42	44	淡黃 淡黃	砂・白	酸化焰	ロクロ整形。右回転未切り。	
31	土師器	無台碗	5E	SK1003	1-	(123)	41	(49)	淡黃 淡黃	砂・針	酸化焰	ロクロ整形。	
32	土師器	無台碗	SD	SK1005	2-			(49)	淡黄色	砂・砂 34	酸化焰	ロクロ整形。右回転未切り。	
33	土師器	無台碗	SD	SK1006	3-	(118)	41	(44)	灰白 灰白	砂・白	酸化焰	ロクロ整形。右回転未切り。	
34	土師器	無台碗	SD	SK1006	3-	(160)			灰白 灰白	砂	酸化焰	ロクロ整形。	
35	土師器	無台碗	SD	SK1002	2-	(160)			灰白 灰白	砂・白 針	酸化焰	ロクロ整形。内面ナリ。	内面茶。
36	土師器	無台碗	SD	SK1008	2~ 5	124	39	53	浅黃 淺黃 燒 燒	砂	酸化焰	ロクロ整形。右回転未切り。	
37	土師器	無台碗	SD	SK1010	2-			(50)	淺青色 淺青色 燒	砂	酸化焰	ロクロ整形。右回転未切り。	
38	須恵器	甕	SD	SK1011	腰 ±				灰白 灰白	砂・白	還元焰	ロズモジナリ。胴部外周斜め力なし、内面ナリ。	

機器番号	種別	基準	グリッド	選択名	幅 mm	高さ mm	奥行き mm	外表面(前面)色 内面(裏面)色	耐候性	焼成	整形	備考	
39	土師器	無台輪	4E	SK1017	1			(60) 標準	砂・墨	酸化焰	ロクロ整形。回転糸切り。		
40	土師器	無台輪	4E	SK1017	4			(50) 標準	砂・沙	酸化焰	ロクロ整形。回転糸切り。		
41	土師器	無台輪	SE	SK1036	1	(116)		灰白 灰白	砂・沙	酸化焰	ロクロ整形。		
42	土師器	無台輪	SE	SK1036	1			(57) 標準	砂・墨	酸化焰	ロクロ整形。右回転糸切り。		
43	土師器	無台輪	SE	SK1036	1			(56) 標準 灰白	砂・墨	酸化焰	ロクロ整形。左回転糸切り。		
44	土師器	無台輪	SE	SK1036	1	(125)	39	(44) 次回 灰白	砂・砂	酸化焰	ロクロ整形。右回転糸切り。		
45	土師器	無台輪	SE	SK1036	1	(194)	39	(54) 標準 淡黄灰	砂・砂	酸化焰	ロクロ整形。右回転糸切り。		
46	土師器	無台輪	SE	P11	■ 相当			50 灰白 黒灰	砂・砂	酸化焰	ロクロ整形。右回転糸切り。		
47	土師器	無台輪	SE	P12	■ 相当	(134)	59	66 灰白 灰白	砂・墨	酸化焰	ロクロ整形。右回転糸切り。		
48	土師器	無台輪	SE	P16	■ 相当	(124)	42	64 灰白 灰白	砂	酸化焰	ロクロ整形。右回転糸切り。		
49	土師器	無台輪	SE	P17	■ 相当	(116)			砂・砂 針	酸化焰	ロクロ整形。回転糸切り。		
50	土師器	無台輪	4D2		■ 相当			(60) 標準 後接 灰白 黒	砂	酸化焰	ロクロ整形。回転糸切り。外面体節下部・底部回転ヘラ削り。 内品。		
51	土師器	無台輪	4D4		■ 相当	(178)	54	(70) 標準 端部 端部	砂	酸化焰	ロクロ整形。右回転糸切り。		
52	白磁	豆?	11B	SB529 P3	■ 土			砂 灰白 灰白	墨	還元焰	ロクロ整形。内外面施錆。	内外面に墨かの摩耗。	
53	白磁	豆?	6A	SB531P 8	1	(120)		砂 灰白 灰白	墨	還元焰	ロクロ整形。白線と外端面取り、内外面施錆。	内面に擦痕状の使用痕。	
54	白磁	豆?	6A	SB531 P15 P16	1 3	(180)		砂 灰白 灰白	墨	還元焰	ロクロ整形。内外面施錆。	内面に擦痕状の使用痕。	
55	青磁	豆?	6A 3C21	SB531 P11	2 ■	(106)	21	(48) 標準 端部	砂 灰 灰 灰 灰	墨	還元焰	ロクロ整形。外面体節下部回転ヘラ削り。外表面部下端・底面削除。	内面に擦痕状の使用痕。
56	青磁	豆?	13E 9E	SE017 SK108	4 4	160	66	50 標準 端部	砂 灰 灰 灰 灰	墨	還元焰	ロクロ整形。外面墨付～底面露。	擦痕状の使用痕が内面に多く、外面は少量。
57	白磁	豆?	11B	SE019	4			砂 淡黄 灰 灰白	墨	還元焰	ロクロ整形。内面に沈線、内外面施錆。		
58	白磁	豆?	10B	SE021	5			前 砂 淡黄 灰 灰白	墨	還元焰	ロクロ整形。内外面施錆。		
59	珠洲焼	片口	10B	SE021	5	(352)		灰 灰	黒灰・白	還元焰	ロクロ整形。如上口開き。	使用痕不明瞭。	
61	山茶園	鉢	7B	SP046	6			(69) 灰 灰	黒灰・白	還元焰	ロクロ整形。回転糸切り。高台に見込みが平滑に磨耗。	見込みが平滑に磨耗。均質手。	
62	珠洲焼	片口	7B	SP046	■ 覆土				黒灰 黒灰	砂・白	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。
63	珠洲焼	片口	7B	SE046	■			灰 灰	砂・灰	還元焰	ロクロ整形。鋸口日は幅16mm、8日。	使用痕不明瞭。	
64	珠洲焼	片口	7B	SE046	■ 覆土	(306)			灰 灰	針・白	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。
65	珠洲焼	片口	7B	SE046	■ 覆土	(262)			灰白 灰白	黒灰・白	還元焰	ロクロ整形。片口指頭による調整。	使用痕不明瞭。
66	珠洲焼	R種窓	7B	SE046	■ B			灰 灰	黒灰・白	還元焰	ロクロ整形。幅17mm9日の鋸口日放送文。	外間に媒付着。	
67	珠洲焼	R種窓	7B	SE046	■ 覆土			(55) 灰 灰	黒・白 針	還元焰	ロクロ整形。底面部状模。		
68	珠洲焼	R種窓	7B	SE046	■			(122) 灰 灰	黒灰・白	還元焰	ロクロ整形。静止糸切り。		
69	珠洲焼	R種窓	7B	SE046	■			(106) 灰 灰	白・針 黒灰	還元焰	ロクロ整形。底面部状模。	鋸口に溝が付着、底面部状模。	
70	珠洲焼	T種窓	7B	SE046	■				黒灰 黒灰	黒灰・白・針	還元焰	口縁部横ナギ、底面部状模。	鋸口に溝が付着、底面部状模。
71	珠洲焼	甕	7B	SE046	■			灰 灰	白・針	還元焰	頭部外面平行叩き目、内面筋太当て目。	頭部に刻文。	
72	珠洲焼	甕	7B	SE046	■			灰 灰	白・針	還元焰	頭部外面平行叩き目、内面筋太当て目。		
73	珠洲焼	甕	7B	SE046	■			灰 灰	白・針	還元焰	頭部外面平行叩き目、内面筋太当て目。		
74	珠洲焼	T種窓	7B	SE047	■			灰 灰	白・針	還元焰	頭部外面平行叩き目、上端ナギ、内面当て目被強さなし。		
75	荒滑	甕	10B	SE052	1			精 オリーブ 灰 灰	砂	還元焰	内面ナギ、内面ナギ。	外面に緑色の厚い霜。	
80	土製品	羽口	10B	SE053	■			砂	砂	酸化焰	剥離しているため小崩。	外面が一部融解。	
81	當滑	甕	11C	SP055	■			赤 赤	砂・白 黒灰	還元焰	内面ナギ、内面不連続の僅状押出。	胴下部片。	

候合番号	機種	基板	グリッド	道構名	層位	口経 mm	高さ mm	底径 mm	外面(緑)色 内面(貼)色	樹脂	焼成	整形	備考
02	音磁	面	8C	SE067	1				社灰4 リニア 貼灰白	黒	還元焰	ロクロ整形。片切と片切り彫りによる文様。内外面施錆。	内外面に微量の擦痕状使用痕。
83	珠鋼焼	片口	8C	SE067	4				灰 灰	白・針 黒灰	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。
84	珠鋼焼	片口	8C	SE067	1				油槍 吹き灰	針・白	還元焰	ロクロ整形。底部静止未切り。印し日幅2mm19日。	内部体上部～見込み部減度顕著。
86	珠鋼焼	T種器	8C	SE067	1				灰 灰	白・糊	還元焰	ロクロ整形。	
88	丸貫上 錠	鏡	9C	SE057	3				灰白 赤橙	白・糊 糞	酸化焰	ロクロ整形。外周体部磨き状の削り。	内外面全面に赤茶。内外面に擦付着。
89	珠鋼焼	面	7D	SE062	12			(150)	黄灰 灰灰	白・糊	還元焰	砂芯。外面底部押さえ、内面ナガ。	
91	皿磁	面	6C	SE064	1				社灰4 リニア 貼灰白	黒	還元焰	ロクロ整形。外周体部下部は削り、露胎。内面に比較。	内面に少量の擦痕状使用痕。
92	珠鋼焼	片口	6C	SE064	1				灰 灰	白・糊	還元焰	ロクロ整形。	
93	珠鋼焼	R種器	11C	SE068	9				灰 灰	外・白 糞	還元焰	ロクロ整形。	
98	青磁	面	7C	SE071	4	(140)			社オーリー ^ブ 灰 貼灰白	黒	還元焰	ロクロ整形。外周体部回転ヘラ削り、片切り彫りの文様。内外面施錆。	内外面に多量の擦痕状使用痕。
99	珠鋼焼	片口	7C	SE071	8	+			灰 灰	針・白	還元焰	ロクロ整形。印し日幅3mm4日。	100と同一個体
100	珠鋼焼	片口	7C	SE071	4				灰 灰	針・白	還元焰	ロクロ整形。印し日幅5mm4日。	99と同じ個体
101	珠鋼焼	片口	7C	SE071	覆土				灰 灰	黒灰・白	還元焰	ロクロ整形。印し日幅30mm10日。	使用痕不明瞭。
104	珠鋼焼	片口	6C	SE077	6				灰 灰	黒灰	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。
106	青磁	面	4D	SE060	4	(160)			社オーリー ^ブ 灰 貼灰白	黒	還元焰	ロクロ整形。片切り彫り縫隙弁文。	内外面に多量の擦痕状使用痕。
107	珠鋼焼	片口	4B	SE083	4	(290)			灰 灰	所・白	還元焰	ロクロ整形。印し日幅15mm4日。	内部体下部摩滅で印し日消失。無い日に添付着。
108	珠鋼焼	片口	4B	SE083	6			(1254) 灰 増灰	糊	糊	還元焰	ロクロ整形。印し日幅40mm以上15日以上。	内部体下部～見込み部平行に摩滅。
109	珠鋼焼	片口	4B	SE083	5			(1041) 灰 灰	糊・白	還元焰	ロクロ整形。静止未切り。	破損端、端部修復。	
112	青磁	面	5B	SE094	2				社 明紋 貼灰白	黒	還元焰	ロクロ整形。内外面施錆するが、外周は輪状のカキトリ。	見込みに微量の擦痕状使用痕。
113	青磁	面	6B	SE094	3			(160)	社 明紋 貼灰白	黒	還元焰	ロクロ整形。内外面に凹線による縫隙弁文。見込みにスクープによる文様。内外面施錆されるが、外周は輪状のカキトリ。	見込みに微量の擦痕状使用痕。
114	白磁	皿	5B	SE094	1	94	25	39	社 灰白 貼灰白	黒	還元焰	ロクロ整形。外周体下部回転ヘラ削り、内外面施錆するが、外周下部～底部露空。	見込み、覺付摩滅度顕著。
115	青磁	裏	5B	SE094	2				青 灰	糊	酸化焰	内面ナガ。外周に断続的な輪状の押印。	
116	珠鋼焼	片口	5B	SE094	1			(1254) 灰 糊	日・糊	還元焰	ロクロ整形。外周体下部摩滅。印し日幅2mm8日。	内面やや摩滅。	
117	珠鋼焼	裏	5B	SE094	2				灰白 灰白	日	還元焰	外周平行叩き目、内面省て目後ナガれ。	
118	土製品	掛湯	5B	SE094	1	(70)			黑 黑	秀	還元焰	全体に溶解しているため不明。	内面の融解が著しい。
130	珠鋼焼	R種器	4A	SE097	5				灰 灰	白・黒灰	還元焰	ロクロ整形。幅11mm8日の節目大。	内面はせている。
131	珠鋼焼?	裏	4A	SE097	6				にぶい 灰 灰	糊・黒灰	還元焰	口縁部横ノグ。外周回部平行叩き目。	焼成不良で、外周は融化している。
132	珠鋼焼	T種器	4A	SE097	4				灰 灰	黒次・白	還元焰	口縁部横ノグ。外周回部平行叩き目。	
134	白磁	面	6C	SE104	1				社 次口 糊・次口	黒	還元焰	ロクロ整形。内外面施錆。	隙接状の使用痕が内面に多く、外周は少量。
136	青磁	裏	10m	SE110	發土				青 灰 灰白	黒・糊	還元焰	内面ナガ。外周に断続的な輪状の押印。	
137	青磁	面	10E	SE262	11			48	社 オーリー ^ブ 糊 糊	黒	還元焰	ロクロ整形。内外面施錆。外周は高台から露胎となるが、一部墨付まで難激激している。	見込み中央に擦痕状使用痕が集中。外周高台内に墨斑。
138	珠鋼焼	片口	10E	SE262	3			(112)	灰白 灰 灰 灰	白・針	還元焰	ロクロ整形。印し日幅2mm4日。	内面僅かに磨耗している。139と同一個体か。
139	珠鋼焼	片口	10E	SE262	5			(60)	社 糊 糊 糊	白・針	還元焰	ロクロ整形。印し日幅8mm3日。	内面下半平滑に磨耗。138と同一個体か。
142	白磁	面	14D	SK005	1			(60)	社 糊 糊 糊	黒	還元焰	ロクロ整形。外周本上部回転ヘラ削り、内面施錆、外周露胎。	内面に微量の擦痕状使用痕。
143	珠鋼焼	R種器	14D	SK005	2			(112)	灰 灰 灰	白 糊	還元焰	ロクロ整形。静止未切り。	

報告番号	種別	斧種	クリップ	被積名	量	口徑	深さ	底径	外面(右)色 内面(左)色	鉛土	焼成	整形	備考	
144	珠洲焼	四耳壺	14D	SK005	1		110		灰 灰	繩・黒 灰・斜	還元焰	クロ彫形。胴部に鶴目文。		
145	珠洲焼	T輪壺	14D	SK006	1	(200)			オリーブ灰 灰	繩・黒灰	還元焰	口縁部横ノア。胴部外面平行叩き。内面當て日落模様なし。		
146	珠洲焼	甕	14D	SK005	1			(134)	灰 灰	白・黒灰	還元焰	萬葉歌のあらわし。胴部内外面ナフ。	見込みにも参考付着。	
147	珠洲焼	甕	14D	SK005	1			(162)	灰 灰	白	還元焰	妙窓。胴部ナデ。		
148	珠洲焼	片口	13C	SK014	1				灰 灰	黒灰・白	還元焰	クロ彫形。	使用痕不明顯。	
149	珠洲焼	四耳壺	10B	SK020	1				灰 灰	繩・日・ 黒灰	還元焰	クロ彫形。ヘリ抜きの文様。	把手基部のみ残存。	
150	煮瀬	甕	10A	SK034	1				黄灰 灰黄	繩・黒灰	酸化焰	内面ナフ。外面に箆状の押印。		
151	珠洲焼	片口	10C	SK049	9				灰 灰	白・黒灰	還元焰	クロ彫形。	使用痕不明顯。	
152	珠洲焼	四耳壺	10C	SK049	1				灰 灰	黒灰・白	還元焰	クロ彫形。幅16mmの鶴目文。	把手基部のみ残存。	
153	白磁	甕	6B	SK050	1				白灰 白	黒	還元焰	クロ彫形。外面体部下部同様ヘリ抜き。露胎。内面に沈線。		
154	土製品	不明	6B	SD060	1				黄灰 黄灰	砂	酸化焰	素焼きの施工塊。		
155	珠洲焼	甕	8D	SK066	2				灰 灰	白・繩・ 黒灰	還元焰	妙窓。ノア。胴下端に削り。	内面に墨付着。	
156	青磁	甕	7C	SK069	2			(58)	粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。内外面に施釉。外面は高台から外底が露胎となるが、一部は釉垂れしている。	青色釉く、二次的な熱による変色か。	
157	珠洲焼	片口	4A	SK086	1			(128)	灰 灰	繩・日	還元焰	クロ彫形。幅11mmの鶴目文。	内面跡痕痕跡。	
158	青磁	甕	8B	SK108	2			(40)	粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。内面施釉。外面は高台から外底が露胎となるが、一部は墨付まで焼が透れている。	内面に微量の擦痕状使用痕。	
159	珠洲焼	片口	8E	SK108	2			(118)	粗 灰	繩・明緑 灰	黒	還元焰	クロ彫形。幅11mmの鶴目文。	内面跡痕痕跡。
160	青磁	甕	8E	SK108	1			(74)	粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。内面施釉。外面は高台から外底が露胎となるが、一部は墨付まで焼が透れている。	内面に微量の擦痕状使用痕。	
161	青磁	甕	8E	SK108	1				粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。内面施釉。	内面に微量の擦痕状使用痕。	
162	青磁	皿	8E	SK108	3	(118)			粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。内面施釉。	内面に微量の擦痕状使用痕。	
163	古彌山	鉢	9E	SK100	1				粗 灰	黒	還元焰	未切。浅盤に上書きし日。	内面に微量の跡が残っている。	
164	珠洲焼	片口	8E	SK108	1				粗 灰	黒灰	還元焰	クロ彫形。		
165	珠洲焼	片口	8E	SK108	2			(106)	粗 灰	針・白	還元焰	クロ彫形。輪止め付。	内面に擦痕。	
166	珠洲焼	片口	8E	SK108	5				粗 灰	白・繩	還元焰	クロ彫形。幅11mmの鶴目文。	使用痕不明顯。	
167	珠洲焼	T輪壺	8F	SK108	2	(184)			粗 灰	白・繩・ 針	還元焰	口縁部横ナフ。胴部外面平行叩き目。内面鶴目文當て目。		
168	珠洲焼	片口	9D	SK486 SD490	1			(124)	灰白 灰	針・白・ 繩	還元焰	クロ彫形。底部カナリ。		
169	白磁	甕	13D	SD006	1	(150)			粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。内外面追釉。	内面に微量の擦痕状使用痕。	
170	珠洲焼	片口	13D	SD006	1				粗 灰	黒灰	還元焰	クロ彫形。	使用痕不明顯。	
171	珠洲焼	片口	13D	SD006	1				粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。幅12mmの鶴目文。		
172	珠洲焼	R輪壺	13D	SD006	1				粗 灰	黒灰・白	還元焰	口縁部横ナフ。		
173	珠洲焼	甕	13E	SD010	1				粗 灰	白・針	還元焰	口縁部横ナフ。		
174	白磁	甕	9E	SD024	1			(95)	粗 灰	黒	還元焰	クロ彫形。外表面下部同軸ヘラ削り。内面詰結・外面部始。	見込みに微量の擦痕状使用痕。	
175	青磁	甕	9E	SD024	2	(150)			粗 灰	黒	酸化焰 焼成不良	クロ彫形。片切に彫りの文様。	擦痕状の使用度が内面に多く、外面は微量。	
176	常滑	甕	8D	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	口縁部横ナフ。		
177	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
178	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
179	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
180	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
181	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
182	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
183	常滑	甕	9E	SD024	2				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
184	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
185	常滑	甕	9E	SD024	9				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
186	常滑	甕	9E	SD024	1				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	
				SD024	2				粗 灰	黒	還元焰	内面ナフ。	外面に軽。	

報告番号	種別	器種	グリッド	遺構名	層段	口径mm	器高mm	底径mm	外面(側)色 内面(底)色	胎土	焼成	整形	備考	
187	常滑	壺	9B	SD024	2				灰オリーブ 灰黄	黑吹・織	還元焰	内面ナデ。外面に壓状の押印。	外面に株。	
188	常滑	壺	9B	SD024	2				灰オリーブ 灰黄	黒吹・織	還元焰	内面ナデ。外面に連續する壓状の押印。	外面に株。押印は早い組み立ての不鮮明。	
189	常滑	壺	8C	SD024	1				灰灰 灰灰	織	還元焰	内面ナデ。外面に連續する壓状の押印。		
190	常滑	壺	9B	SD024	2				灰灰 灰黄灰	織・黑吹	還元焰	内面ナデ。外面に連續する壓状の押印。		
191	珠洲焼	片口	8D	SD024	1				灰 灰	白	還元焰	ロクロ整形。鉢し日幅10mm8目。	内面下端がやや摩滅。	
192	珠洲焼	片口	8E	SD024	1				灰 灰	白・織	還元焰	ロクロ整形。	内面全面に摩滅痕顕著。	
193	珠洲焼	片口	8C 8D	SD024 SE057	3				(194)	灰 灰	針・白	還元焰	ロクロ整形。鉢し日幅8mm3目。	内面胴下半から見込みに摩滅痕顕著。
194	珠洲焼	四耳壺	8C	SD024	1				灰 灰 灰 灰	黑吹・白	還元焰	ロクロ整形。幅目幅9mm以上5目以上。	把手付裏張有り。	
195	珠洲焼	四耳壺	9B	SD024	2				灰 灰 灰 灰	針・白・ 黑吹	還元焰	ロクロ整形。	統耳。	
196	珠洲焼	R縦巻	8C	SD024	1				(194)	灰 灰	針・白・ 黑吹	還元焰	ロクロ整形。鉢底余切り。	
197	珠洲焼	R縦巻	8C	SD024	1				灰 灰	黒吹・白	還元焰	ロクロ整形。	口縁部肥厚。	
198	珠洲焼	壺	8D	SD024	1				灰 灰	黒吹	還元焰	口縁部横ナチ。		
199	珠洲焼	壺	8D	SD024 SD027	1				灰 灰	白・織 黒吹	還元焰	内面平行叩き日後に沈線。内面ロクロナデ。砂底。		
200	珠洲焼	片口	10A	SD026 SD041 SD049	1	(280)			灰 灰	白・黑吹	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。	
201	常滑	壺	10A 8C 11A	SD026 SD057	1				灰アーチ灰 灰アーチ	黒吹・織	還元焰	内面ナデ。	外面に株。	
202	珠洲焼	片口	10A	SD026	1				灰 灰	白	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。	
203	珠洲焼	片口	10A	SD027	1				灰灰 灰灰	黒吹・白	還元焰	内面ナデ。外面上部に壓状の押印。		
204	珠洲焼	片口	9A	SD027	2				(118)	灰 灰	織・白・ 針	還元焰	ロクロ整形。右向軽辛振り。	胴下部以下平滑に摩滅し、一部は光沢を有す。
205	珠洲焼	R縦巻	7B	SD027	2				(94)	灰 灰	黒吹・白	還元焰	ロクロ整形。鉢底余切り。	
206	珠洲焼	R縦巻	7B	SD037	2				(104)	灰 灰	黒吹・白	還元焰	ロクロ整形。外面胴部下端ヘラナギ。鉢底余切り。	
207	珠洲焼	壺	8B	SD027	1				灰灰 灰灰	黒吹・白	還元焰	内面ナデ。		
208	珠洲焼	片口	7B	SD027	2				(118)	灰 灰	織・白・ 針	還元焰	ロクロ整形。右向軽辛振り。	胴下部以下平滑に摩滅し、一部は光沢を有す。
209	珠洲焼	R縦巻	7B	SD027	2				(94)	灰 灰	黒吹・白	還元焰	ロクロ整形。鉢底余切り。	
210	珠洲焼	R縦巻	7B	SD037	2				(104)	灰 灰	黒吹・白	還元焰	ロクロ整形。外面胴部下端ヘラナギ。鉢底余切り。	
211	珠洲焼	壺	8B	SD027	2				灰 灰	黒吹・白	還元焰	口縁部横ナチ。稍部外面平行叩き目。内面無文當て目。		
212	珠洲焼	壺	8B	SD027	1				(154)	灰 灰 灰 灰	織・針	還元焰	口縁部外面ロクロ整形後、平行叩き、胴部下端ヘラナチ。砂底。	
213	珠洲焼	壺	10C	SD041	2				灰 灰	黒吹・白	還元焰	口縁部横ナチ。		
214	常滑	壺	11A	SD049	1				灰オリーブ 灰灰	織	還元焰	内面ナデ。外面上部に壓状の押印。	外面に株。	
215	常滑	壺	11A	SD049	1				灰 灰	織	還元焰	内面ナデ。外面上部に壓状の押印。	外面に株。	
216	常滑	壺	11A	SD049	1				暗オリーブ 灰灰	織	還元焰	ナチ。		
217	常滑	壺	11A	SD049	1				灰 灰	白	還元焰	内面ナデ。外面上部に壓状の押印。	外面に株。	
218	常滑	壺	11A	SD049	1				暗灰黄 灰灰	黒吹・白	還元焰	ナチ。		
219	珠洲焼	片口	10A	SD049	1				灰 灰	黒吹・白	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。	
220	白磁	碗直腹	10D	SD109	1				灰 灰 灰 灰	黒 白	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。外面下部露胎。	使用痕不明瞭。	
221	白磁	碗	9D	SD490	1	(142)			灰 灰 灰 灰	黒 白 灰 白	還元焰	ロクロ整形。外面外縁は回転ヘラ削り、下部露胎。内外面施釉。		
222	青磁	碗	3A	SD490	1				青 青 青 青	黒	還元焰	ロクロ整形。片切跡の文様。内外面施釉。	内外面にも多量の被痕状施用痕。	
223	青磁	碗	2B	SD490	3				(54)	青 青 青 青	黒	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。外面は高台へ外底が厚底となるが、高台外縁は粗面。	内外面ともに少量の被痕状施用痕。
224	珠洲焼	片口	3C	SD490	2				灰 灰	黒吹・白	還元焰	ロクロ整形。鉢し日幅7mm6目。	内面摩滅痕顕著。	
225	珠洲焼	片口	3A	SD490	2				灰 灰 灰 灰	織・針	還元焰	ロクロ整形。鉢し日幅31mm13目。内面に舟文。	鉢身より下位が摩滅痕顕著。	
226	珠洲焼	片口	3A	SD490	2	(334)			灰 灰 灰 灰	黒吹	還元焰	ロクロ整形。	使用痕不明瞭。	
227	珠洲焼	四耳壺	3A	SD490	1				灰 灰	織・黒吹	還元焰	ロクロ整形。	把手は基部のみ残存。	
228	珠洲焼	四耳壺	3A	SD490	2				灰 灰	白・針	還元焰	ロクロ整形。	把手は基部のみ残存。	
229	珠洲焼	R縦巻	3A	SD490	1				(198)	灰 灰	黒吹・織	還元焰	ロクロ整形。右回転糸引き。	

報告番号	種別	器種	グリッド	車両名	部位	口径 mm	器高 mm	底径 mm	外面(鉛) 内面(鉛)色	鉛土	焼成	整形	備考
239	沐浴瓶	T種盛	3B	SD490	4	(244)			灰 灰	陶灰・土	還元焰	口縁部斜ナデ、縫面に幅6mm5 日の横目波状文、縫部外面平行 印き目、内面当し目波溶合めし。	
231	中臍須 壺	甕	3A	SD490	3				淡黄褐 褐灰	陶	還元焰	ナデ。外面に山形の押印。	在地製品。
232	瓦質工 器	鉢	3C	SD490	11	(160)	5d	(110)	褐灰 黑褐	陶・黑	酸化焰	口縁部～内面横ナデ。底部ナ デ。	口縁部内面に炭化物付着。
233	瓦質工 器	碗?	2B	SD490	3			(92)	淡黄褐 褐	陶	酸化焰	ロクロ整形、直部削り。	
234	瓦質土 器	甕	3B	SD490	1			(23)	にふい鉛 灰	陶	酸化焰	ロクロナデ。砂粒。	
235	青磁	甕	3A	SD515	1				釉 オリーブ 灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。片切形の輪連文。 内外面施釉。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
236	珠鋼瓶	片口	3A	SD515	1	(396)			灰 灰	陶	還元焰	ロクロ整形。口縁部幅10mm5日 の弱目溶合す。鉢口、口幅97mm3 日。	
237	青磁	甕	2A	SD521	11			(42)	釉 にふい 骨 骨灰	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。外面は 最付まで施釉。高台内面へ外底 接続。	見込みに摩滅斑。斜 口・体部外面、内底に 擦付着物。
238	珠鋼瓶	片口	2A	SD521	11				灰 灰	陶	還元焰	ロクロ整形。口縁部幅20mm7日 の弱目波状文。鉢口幅31mm8日	使用痕不明確。
239	白磁	甕	2B2b		1				釉 淡青白 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。	
241	白磁	甕	13D5		III	(154)			釉 灰白 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
242	白磁	甕	6B4		III	(160)			釉 灰白 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
243	白磁	甕	13D4	SD004	III				釉 灰白 リーノ 灰	黑	還元焰	ロクロ整形。見込みに刷目文。内 外面施釉。外側は丸み～外底露 体となるが、高台外周部底れ。	
244	白磁	甕	8B19		III				釉 淡黄 淡黄	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。見込み に刷毛目との複合。	
245	白磁	甕	12D	SX004	1			(65)	釉 底日 底日	黑	還元焰	ロクロ整形。底付後、見込みを輪 状のカギリ。外面露輪。	
246	白磁	甕	13E	SK001	III				釉 男爵灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。外面下 部露輪。内面下端に施カギリの 段寄り。	内面に微量の擦痕痕。
247	白磁	甕	7B5		III				釉 灰白 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。外面下部回転ヘラ削 り。内外面施釉。外面下部露輪。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
248	白磁	甕	7B6		III				釉 灰白 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
249	白磁	甕	8B20		III				釉 灰白 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
250	白磁	甕	BB	SN030	1				釉 灰白 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。口ハ ゲ。	
251	青磁	甕	2D25		IV				釉 オリーブ 灰 灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。桜目文。内外面施 釉。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
252	青磁	甕	11D	SX010	1	(140)			釉 オリーブ 灰 灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。桜目と片切形の文 様。内外面施釉。	内外面に多量の擦痕状 使用痕。
253	青磁	甕	2D18		II	(160)			釉 明緑灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。片切形の大根。内外 面施釉。	内外面に少量の擦痕状 使用痕。
254	青磁	甕	3A	SD440	IV			(44)	釉 オリーブ 灰 灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内面施釉。外面露 輪。	見込みに擦痕状付着痕 少量。
255	青磁	甕	2D	SD182	1			(108)	釉 明緑灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。	
256	青磁	香炉	3B		IV				釉 灰 灰 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。内外面施釉。	内面に微量の擦痕状 使用痕。
257	青白磁	不明	12C7		III				釉 淡青白 青白	黑	還元焰	墨物。内面刷毛目。器付削り。	
258	古窯戸	甕	3A	SK093	1	(50)			釉 淡黄 淡黄 灰白	黑	還元焰	ロクロ整形。外面～口縁部内面 露輪。内面口縁部以下露輪。	
259	常滑	甕	11A11		III				釉 オリーブ灰 灰白	黑	還元焰	内面ナデ。外面上部状の押印。	外面上部。
260	常滑	甕	3A	SK093	1				にふい鉛 灰	陶	還元焰	ナデ。	
261	常滑	甕	9B5		III				黄灰 灰黄 灰 にふい鉛	陶灰	還元焰	ナデ。	
262	常滑	甕	11A	EX010	I				灰 灰黄 灰 にふい鉛	陶灰	還元焰	内面ナデ。外面に擦状の押印。	
263	常滑	甕	9A16		III				黒灰 にふい鉛	陶灰	還元焰	内面ナデ。外面に擦状の押印。	
264	常滑	甕	11B2		III				暗灰 にふい鉛	陶灰	還元焰	内面ナデ。外面に擦状の押印。	
265	常滑	甕	10A13		III				暗青灰 灰	陶灰	還元焰	内面ナデ。外面に擦状の押印。	

総合番号	種別	器種	グリッド	遺構名	層位	口径 mm	器高 mm	底径 mm	外面(袖)色 内面(底)色	粘土	焼成	整形	備考
266	陶製品	片口	3B	S3091	I				灰 灰	白・黒	焼元場	ロクロ整形。口縁細部に幅15mm以上6目以上の擦目施状況。加し口幅20mm以上。	使用度不明瞭。
267	陶製品	四耳盃	9A17		III	(168)			灰白 灰	白・黒	焼元場	ロクロ整形。	把手は既述のみ残存。図上復元。
268	陶製品	四耳盃	6A29		III				灰 灰	灰灰	焼元場	ロクロ整形。幅9mm7目の擦目文。	把手は既述のみ残存。
269	陶製品	盆	7D5 7E6		III	(169)			灰 灰	白・黒灰	焼元場	口縁部横ナナ。腹部外周平行叩き、内面正面で目後ナテ消し。	
270	陶製品	支	3A		III				黄灰 黄灰	深	焼元場	腰器外周平行叩き目。胴部内面ナナ。底度。	内外面に擦状行者物。武器検査時に出土。
271	瓦質土器	片口	3D	S3099	I				赤褐 赤橙 赤橙	白	焼化粧	口縁部横ナナ。腰部外周ナナ。加し目22mm以上6目以上。	内外面に少量の黑色付着物。
272	吉備戸	皿	2A		III	100	42	50	赤褐 赤 灰白	白	焼元場	回転糸引き。削り高台。3ヶ所にトテン痕。体下部へ底部露胎。	腰器調査時に出土。
274	土製品	人形	11A22		III	21	30	12	赤褐 赤	白	焼化粧	型物。底面に孔。	大黒様。

別表18 石製品・金属製品観察表

()内数字は参考値

組合番号	種別	器種	グリッド	遺構番号	層位	材質	長さ・口径 (mm)	幅・底径 (mm)	厚さ・高さ (mm)	重量(g)	備考
74	石製品	椎石	7B	S2040	10	流紋岩	(145)	(54)	47	380	弧面2面。
75	石製品	椎石	7B	S2040	8	流紋岩	(44)	(47)	(47)	107.90	弧面2面。削られている面1面。
76	石製品	椎石	7B	S2040	覆土	流紋岩	(71)	(61)	(64)	243.13	弧面3面。刃痕。
77	石製品	砂石	7B	S2040	8	流紋岩	128	126	41	1070	弧面3面。刃痕多。
87	石製品	砂石	8C	S2041	4	流紋岩	139	86	65	820	弧面3面。
90	石製品	砂石	7B	S2042	12	流紋岩	(76)	(48)	(105)	940	弧面1面。
94	石製品	鉛石類	113°	S2068	3	黒青石ホルンフェルス	(167)	(103)	122	2300	平頭な廢鉱面が1面。廢鉱面に擦地。
95	石製品	鉛石強	11C	S2068	2	流紋岩	(112)	63	46	442.11	光沢をもつ廢鉱面が1面。
96	石製品	鉛石強	11C	S2068	3	流紋岩	(61)	46	38	180	一面に刃痕が集中する。
97	石製品	砂石類	11C	S2068	3	頁岩	201	195	74	2195	光沢を持つ廢鉱面1面。被削痕有り。廢鉱面の縁がやや堅め。
102	石製品	砾石	7C	S2071	1	瓦質流紋岩	(80)	(41)	(13)	30	端面に切込みと傷が入る。底面2面。表皮に刃痕。
103	鉄滓	炉内滓	7C	S2071	6		101	73	48	320	含まされる鉄分は微量。
119	石製品	鏡	15B	S2094	覆土	粘板岩	(58)	(26)	6	5	小型品。漆付着。被削面に擦痕痕。
120	石製品	鏡	5B	S2094	1	粘板岩	(59)	(65)	8	45	海綿の裏面は大部分が剥落している。
121	石製品	鏡石	5B	S2094	1	流紋岩	(111)	58	(43)	310	底面3面。
122	石製品	鏡石	5R	S2094	2	流紋岩	142	66	59	760	底面1面。側面と裏面に刃痕。
133	石製品	鐵石類	8A	S2097	4	流紋岩	89	(66)	30	225	底面1面。廢鉱面1面。
140	石製品	不明	10B	S2262	1	流紋岩	(45)	45	20	46.95	擦れられていいる。表面に明確な削痕が認められず。自然縫の可塑性もある。
141	銅滓	炉内滓	10B	S2437	墨土		26	25	49	39	含まされる鉄分は微量。
168	銅滓	炉内滓	10C	S2049	1		112	87	40	980	含まされる鉄分は微量。
169	銅滓	炉内滓	10D	S2084	1		37	27	25	26.74	含まされる鉄分は微量。
160	石製品	石鉢	9A 9B	S2030 SK099	1 1	多孔質安山岩	(400)		(138)	610	外面に堅痕。板岩。
168	石製品	磁石	7D	SK1006	5	流紋岩	(87)	(82)	(86)	450	陽面1面。被削痕有り。
169	石製品	磁石類	7E	SK1008	5	砂岩	154	73	72	1060	摩耗面2面。1面は光沢を有す。
174	石製品	磁石	12D	S2006	1	流紋岩	183	31	40	320	底面1面。
200	石製品	磁石	10B	S2024	2	流紋岩	68	57	22	105	底面1面。
201	石製品	磁石	10B	S2024	2	瓦質流紋岩	190	54	59	270	底面1面。
202	石製品	磁石	10B	S2024	2	流紋岩	138	96	92	1250	底面1面。
204	石製品	磁石	10C	S2025	2	流紋岩	166	134	54	1110	底面3面。
213	石製品	磁石	7B	S2027	2	流紋岩	(120)	126	94	1010	底面3面。被削痕有り。
215	石製品	磁石	10B	S2041	2	流紋岩	(104)	(87)	61	530	底面2面。側面の一部に削痕。
273	石製品	管	13E	SK001	1	銅	9	54		4.62	複数欠損。
275	石製品	鏡	12C	SK023	1	粘板岩	(36)	(47)	(7)	15	海綿の裏面は剥落している。
280	石製品	石臼	9A	SK009	1	多孔質安山岩	(264)		61	646	下白。目は磨耗により消失。平滑で、光沢を有す。
281	石製品	石臼	3B	SK099	1	輝石安山岩	(300)		59	340	下白。7目確認できる。平滑で、光沢を有す。
282	石製品	石臼	3L	SK099	1	輝石安山岩	(360)		58	615	下白。4目確認できる。平滑で、光沢を有す。
283	石製品	磁石	9A	SK1006	1	砂岩	53	11	19	19	「南撲」の墨書。
284	石製品	磁石	9A	SK1006	1	砂岩	63	37	19	40	「南撲」の墨書。
285	石製品	磁石	9A	SK1006	1	砂岩	44	27	14	24	「南撲」の墨書。

報告番号	種別	基準	グリッド	遺構番号	層位	材質	長さ・口径 (mm)	幅・底径 (mm)	厚さ・器高 (mm)	重量(g)	備考
286	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		37	29	7	7	「南」の墨書き。
287	石製品	燧石	3A	SX100	II 砂岩		32	21	13	18	「銘」の墨書き。
288	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		60	44	20	78	「他」の墨書き。
289	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		78	31	12	38	「チャガフバヤ」の墨書き。
290	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		52	40	19	47	「チャ」の墨書き。
291	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		46	30	12	34	「ギヤ」の墨書き。
292	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		42	37	15	30	「ギヤ」の墨書き。
293	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		42	51	13	38	「チャ」の墨書き。
294	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		37	30	14	21	「チャ」の墨書き。
295	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		45	40	15	38	「カ」の墨書き。
296	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		35	42	18	36	「フ」の墨書き。
297	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		69	54	17	79	「ハシ」の墨書き。
298	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		62	43	9	30	「ハシ」の墨書き。
299	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		43	16	9	31	「ノン」の墨書き。
300	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		37	22	13	18	「ハシ」の墨書き。
301	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		71	30	29	98	「キリーグ」の墨書き。
302	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		46	25	13	22	「キリーグ」の墨書き。
303	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		51	34	12	25	「キリーグ」の墨書き。
304	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		75	43	21	84	「アンク」の墨書き。
305	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		45	44	20	43	「ウン」の墨書き。
306	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		60	59	20	50	「ウン」の墨書き。
307	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		62	32	17	44	「ヂク」の墨書き。
308	石製品	燧石	3A	SX100	I 砂岩		42	33	8	16	「ヂク」の墨書き。
309	鉄製品	釘	2D19		I 鉄		126	13	9	45	頭を折り曲げた各釘。
310	銅貨	寛永通宝	16A11		III 銅		29		1.2	2.1	寛永通宝
311	銅貨	寛永通宝	16B1		III 銅		23		1.2	1.85	寛永通宝
312	銅貨	不明	16A16		III 銅		24		1.4	3	表面に鉄錆付着。

別表19 木製品観察表

() 残存度あるいは指定度

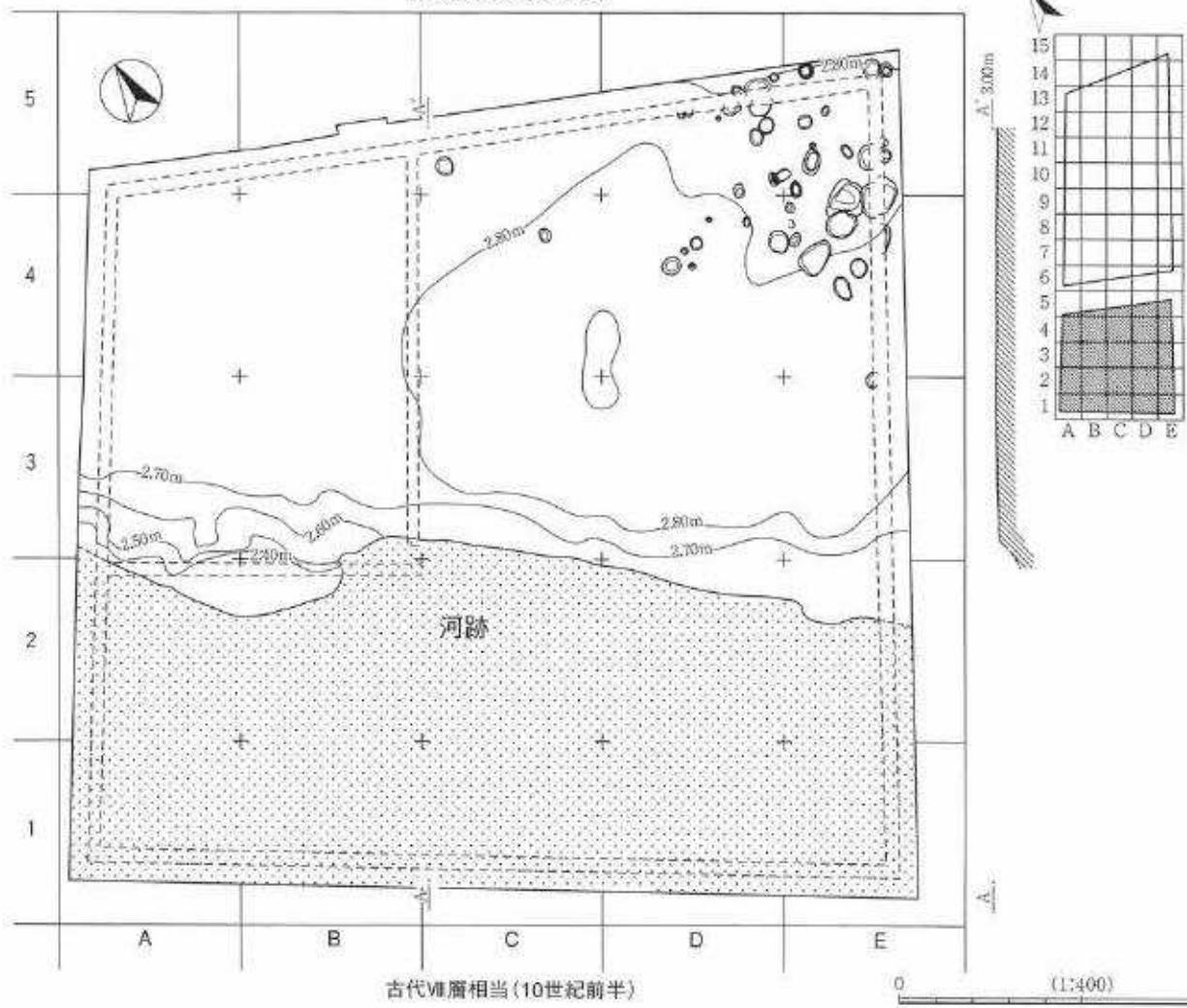
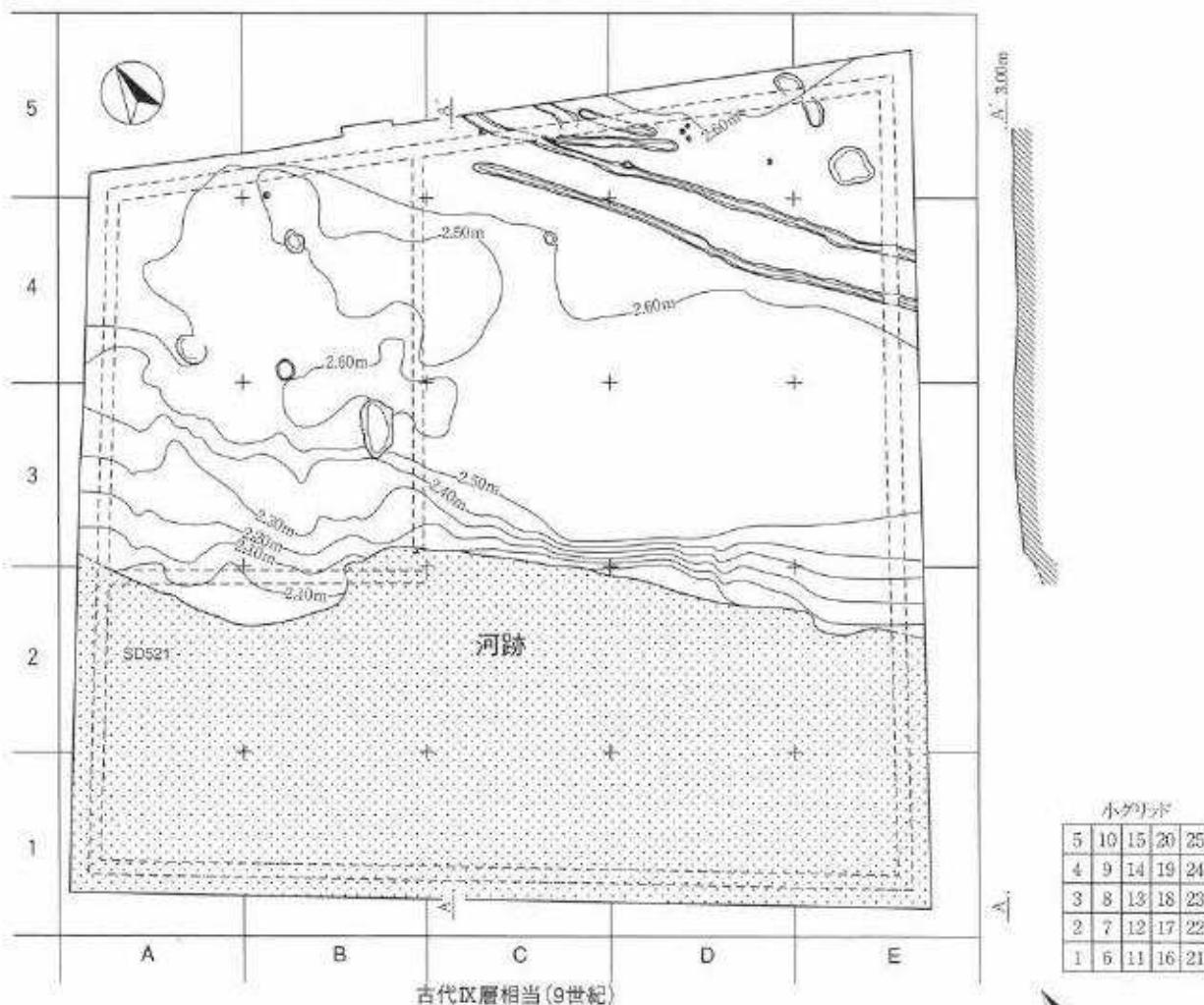
報告番号	種別	基準	グリッド	遺構名	層位	長さ・口径 (mm)	幅・底径 (mm)	厚さ・器高 (mm)	備考	木取り	精度
80	木製品	漆器	12R	SPN40	?						二つ折りとなっていて、
88	木製品	曲物削板	SC	SP057	II (203)	(94)	4コギ			紅目	内面にケビや縫隙が見られる。
106	木製品	細工材	TC	SB077	6 (859)	(74)	(32)	スピ	板目	建築材で、ほぞ部分を再加工し穴を設けていた。	
110	木製品	曲物削板	4R	SPN43	5	93	7コギ			板目	側面に水打孔が認められる。
111	木製品	曲物削板	4R	SPN43	6 (56)	8コギ				板目	全体に腐食が著しい。
123	漆器	漆	SA	SPN94	2				ブナ漆	漆採取?	内外全面に虫食い。
124	木製品	把手	5R	SP094	3 (246)	31	20	スピ	板目		端部が破損する。
125	木製品	漆の柄	5R	SP094	3 (120)	34	34	ヤナギ漆	板目		端部が研削し、幅が広がる。
126	木製品	桟	BB	SP004	3 (356)	43	9	マツ脂抜縦管東亞 属	板目		中央と両端に削孔の痕跡。中央部の孔より二つに分けていた。削り抜きの表裏及び側面の一部を削り一穴孔へ削損。
127	木製品	桟	BB	SP004	3 (365)	33	10	マツ脂抜縦管東亞 属	板目		中央と両端に削孔の痕跡。中央部の孔より二つに分けていた。削り抜きの表裏及び側面の一部を削り一穴孔へ削損。
128	木製品	桟	5B	SP094	3 (179)	41	9	マツ脂抜縦管東亞 属	板目		両端に削孔の痕跡がある。
129	木製品	桟	5B	SP094	3 (645)	(24)	106	マツ脂抜縦管東亞 属	板目		半数された丸太材をくりぬいていた。
135	木製品	曲物底版	OC	SP104	20	(38)	48	スズキ	板目		側面に鋤孔が1ヶ所認められる。
279	木製品	曲物削板	2A	SP021	II (14)	26	1ヒノギ			板目	内面に3条のケビを認める。
270	木製品	木忤	3B	SP00	88U	90	62	エノキ属	板目		端部にほぞがある。
277	木製品	木忤	3B	SP090	860	97	58	エノキ属	板目		
278	木製品	木忤	3B	SP090	804	100	63	エノキ属	板目		
279	木製品	木忤	3B	SP090	760	103	45	エノキ属	板目	両端にほぞ。	

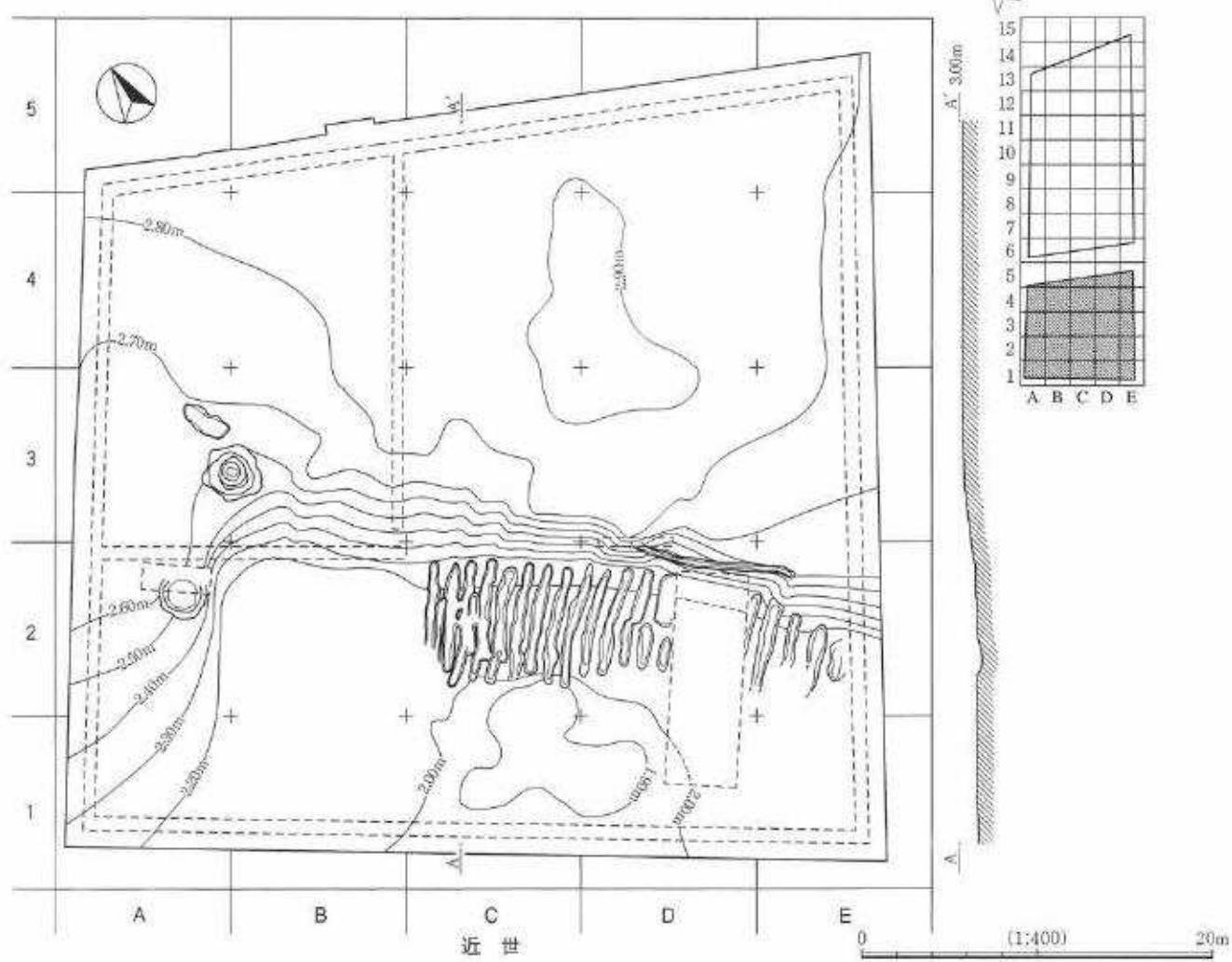
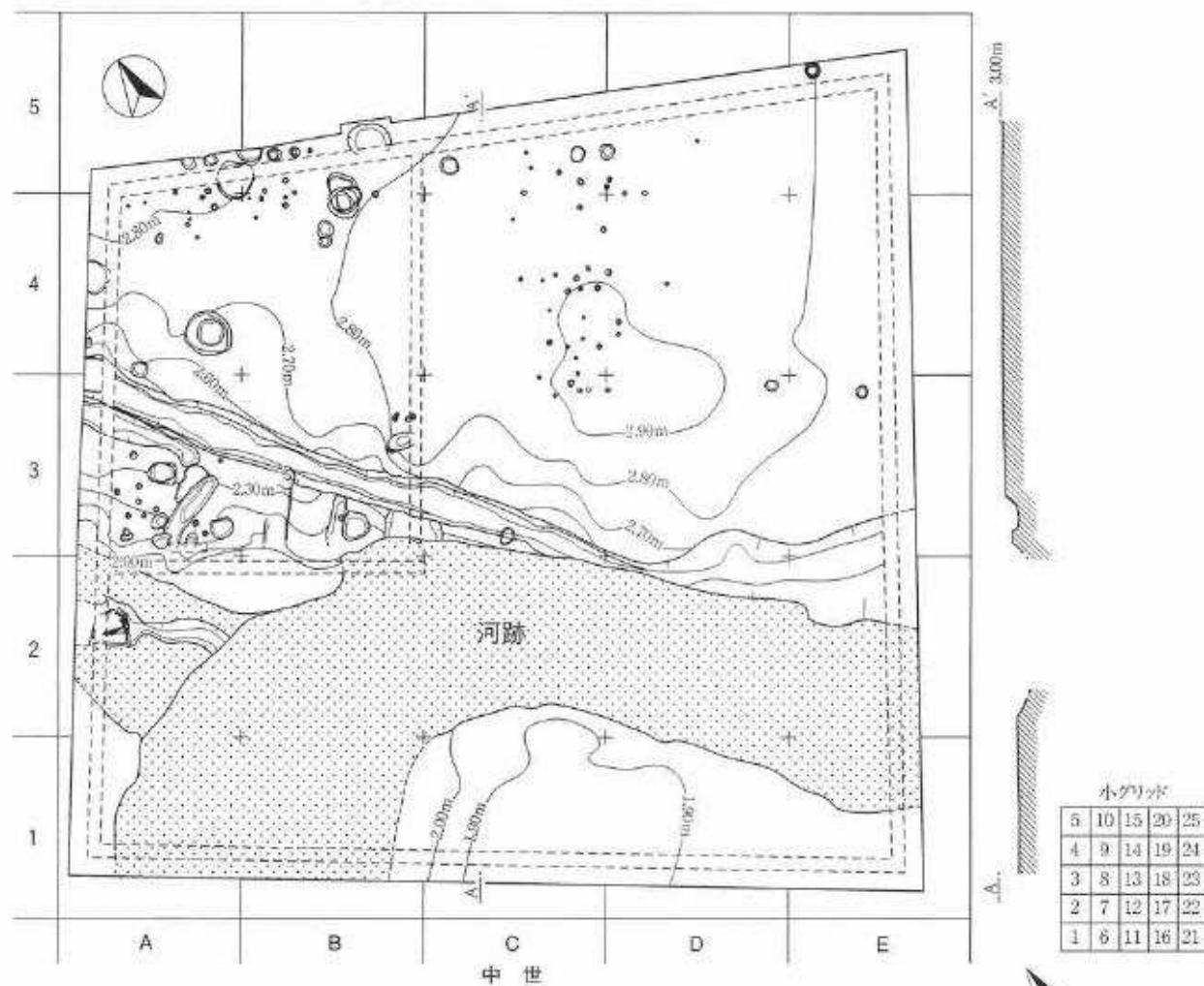
図 版

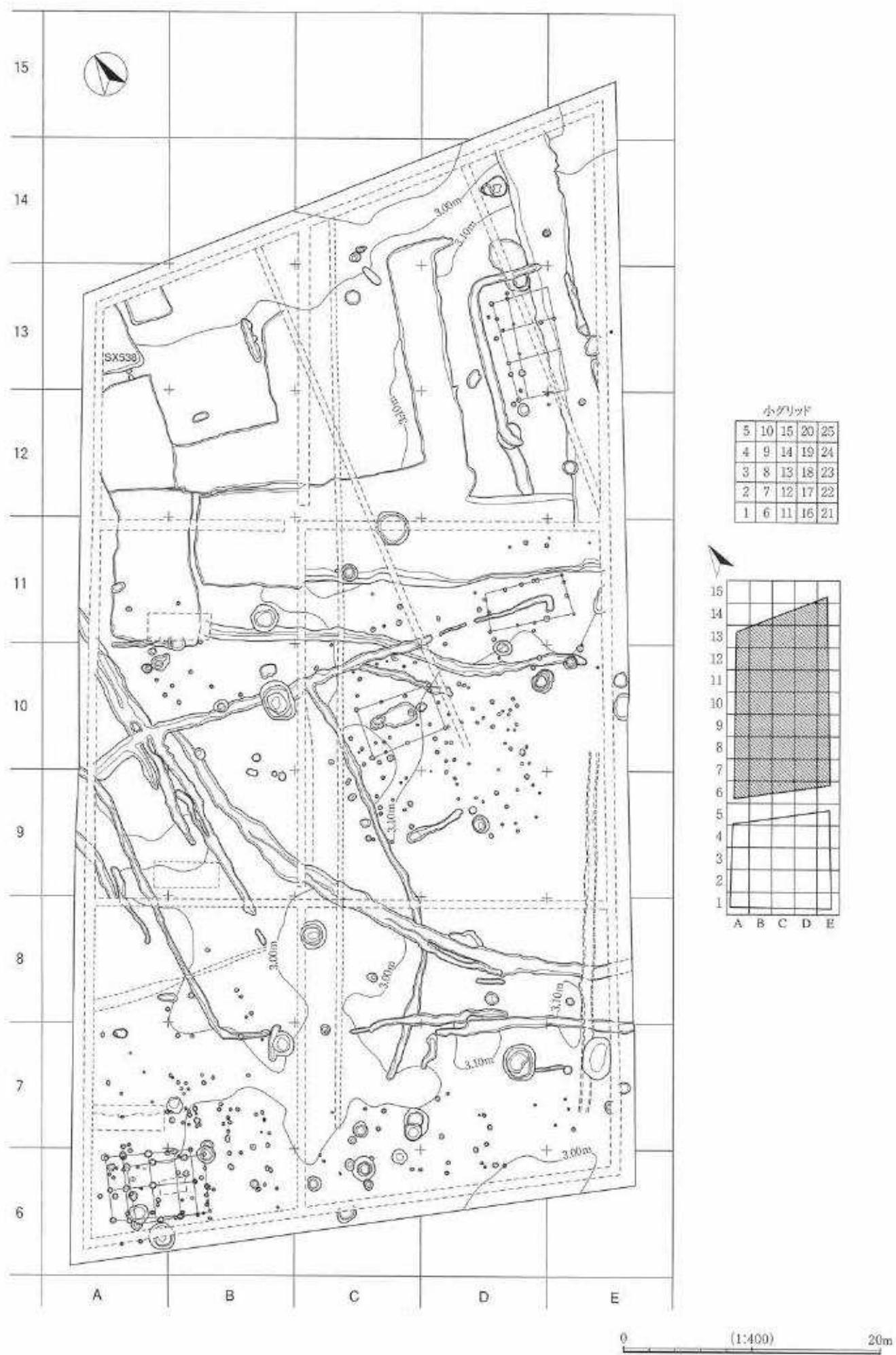
凡 例

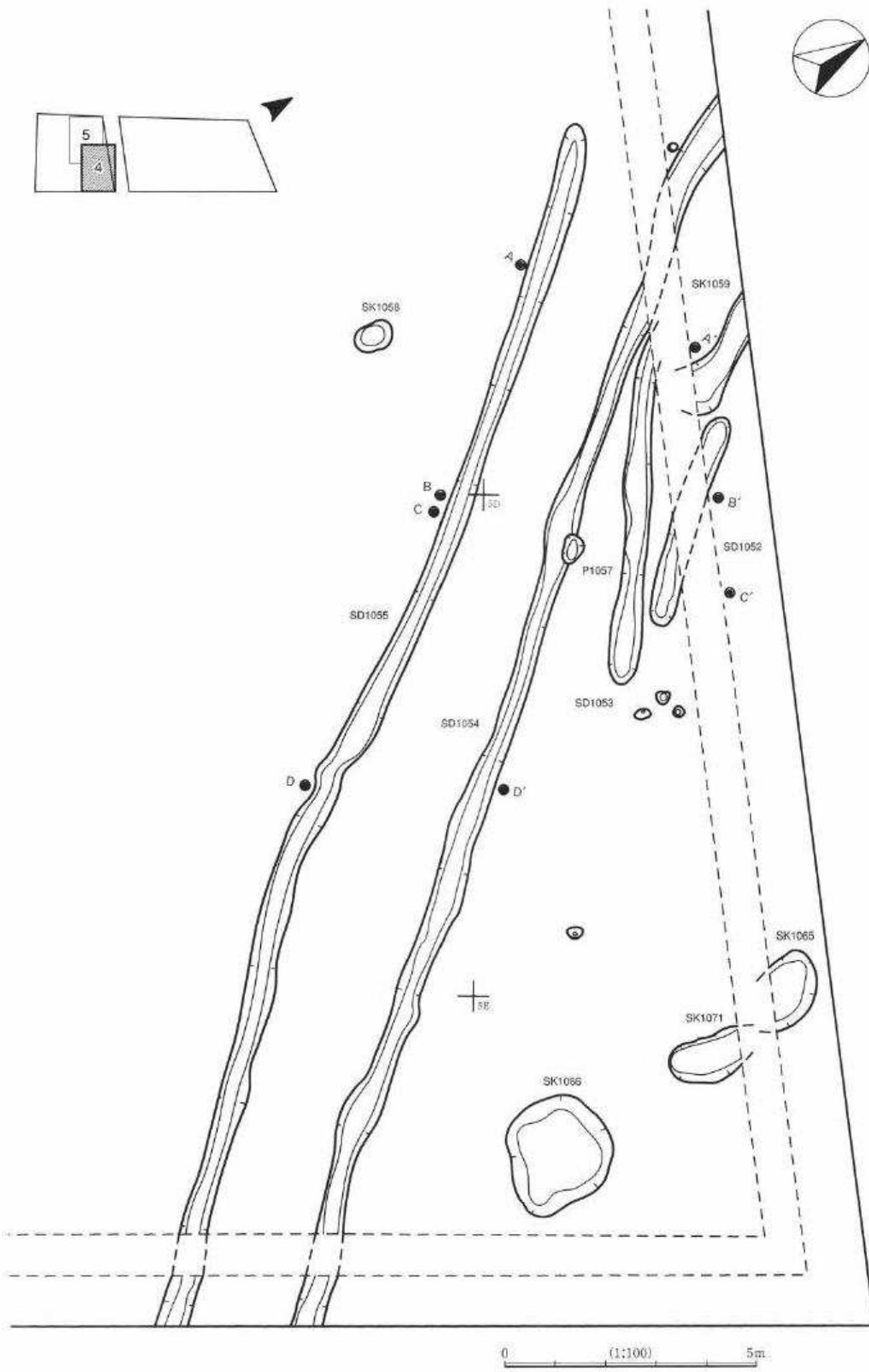
- 1 図版は、遺構実測図面、遺物実測図面、写真とで構成される。
- 2 遺構・遺物の報告番号は、全て本文の報告番号と共通する。
- 3 各図版には縮尺率及びスケールを付した。遺物の縮尺は1:3を基本としたが、それ以外のものは縮尺をスケールで示した。
- 4 遺物実測図中のスクリーントーンは下記を示した。

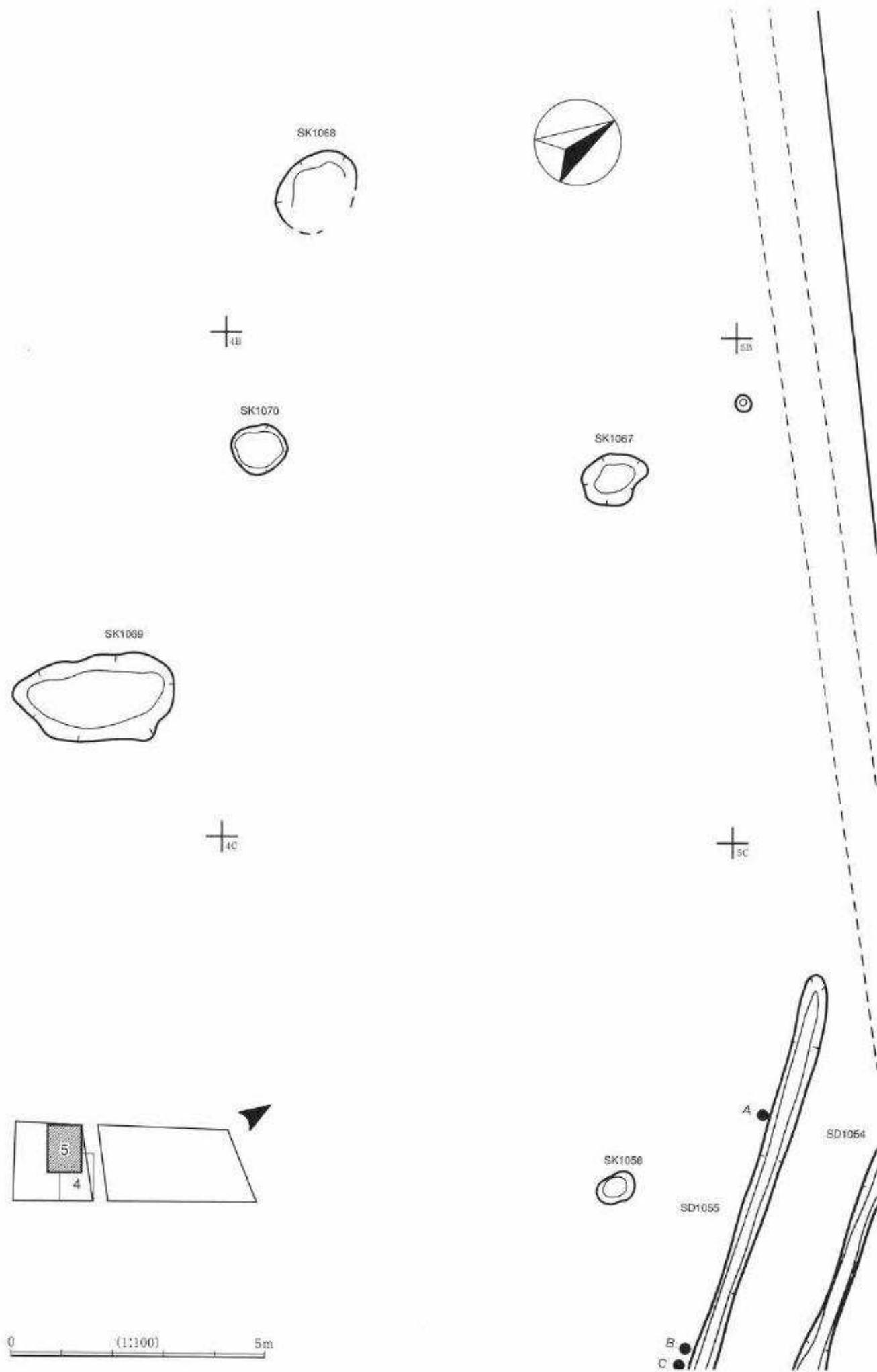
	黒色処理		赤彩		漆様付着物
	煤付着		融解範囲		摩耗面・紙面
- 5 掘立柱建物跡の柱穴実測図上のスクリーントーンは柱痕を示した。
- 6 遺構個別図で断面図だけのものは、遺構分割図に断面の位置を A● ●A' の形で示した。

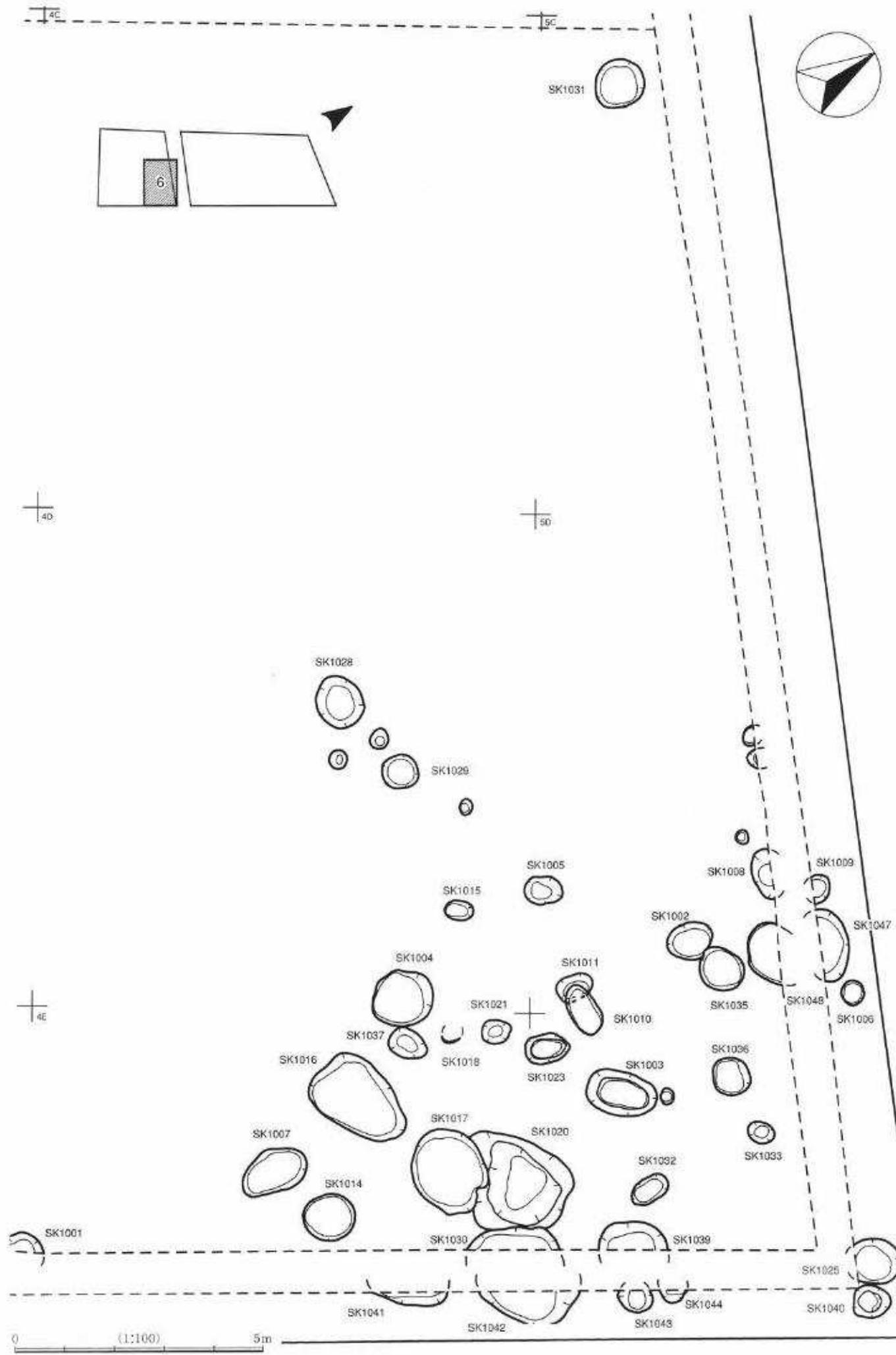


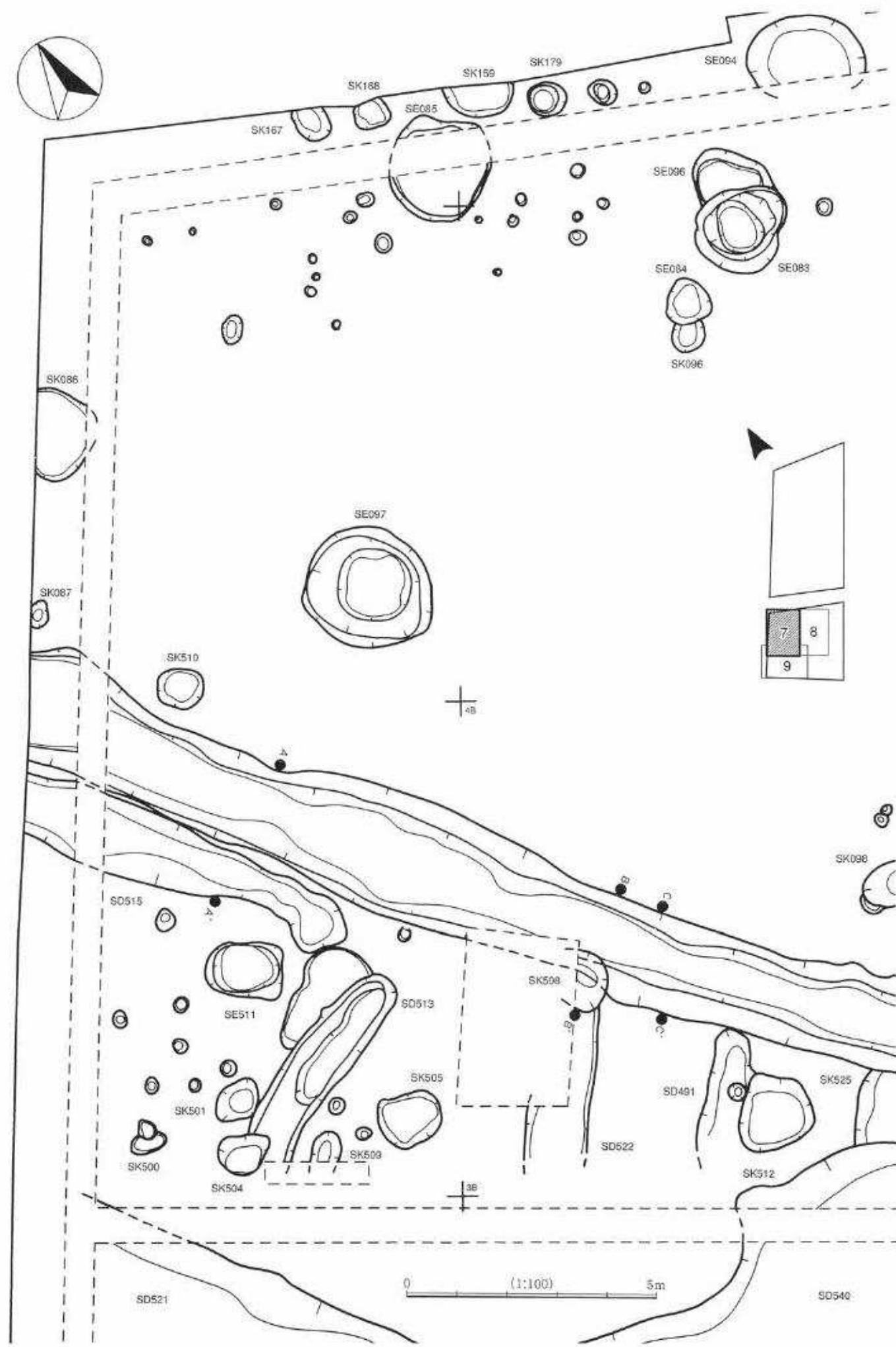


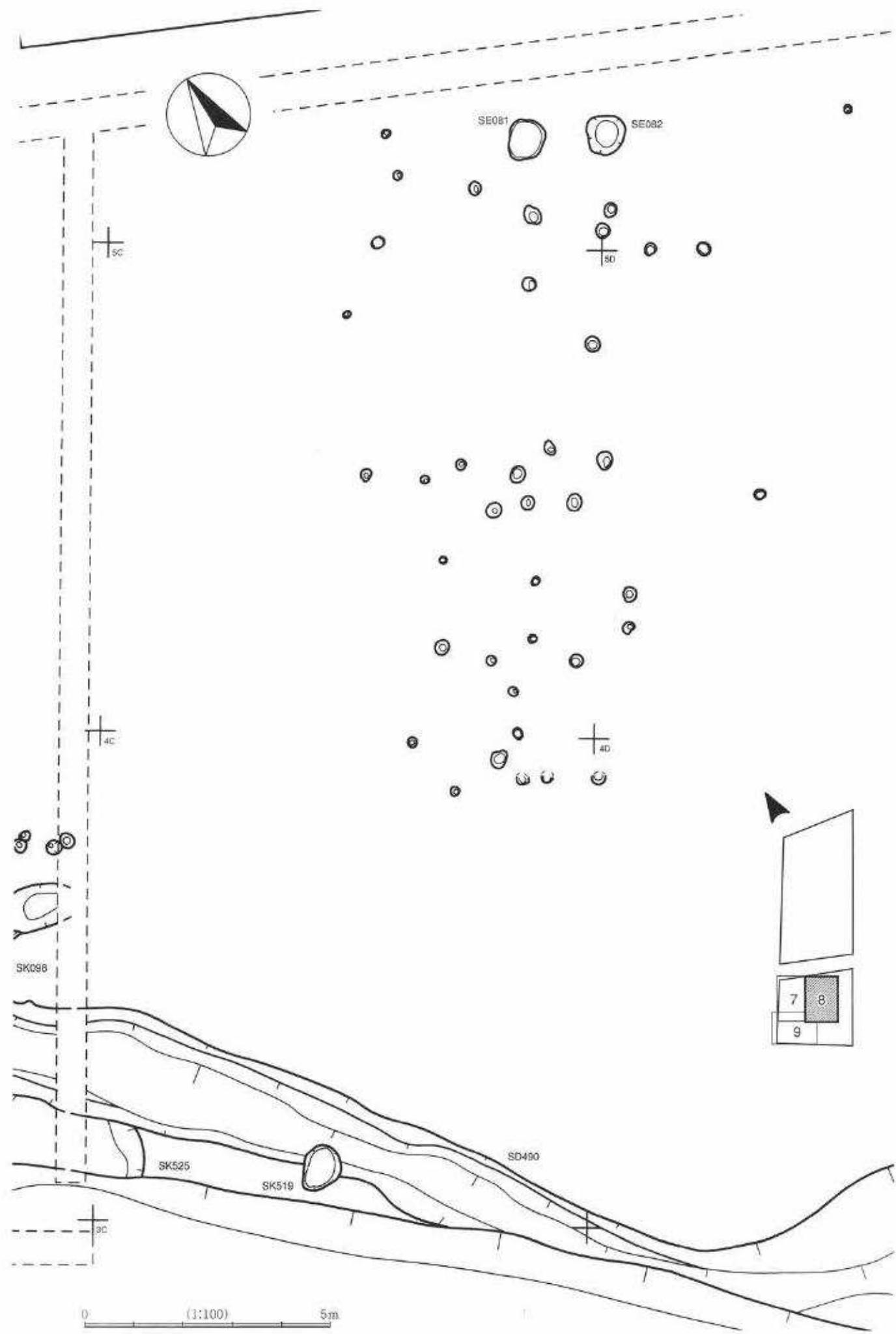


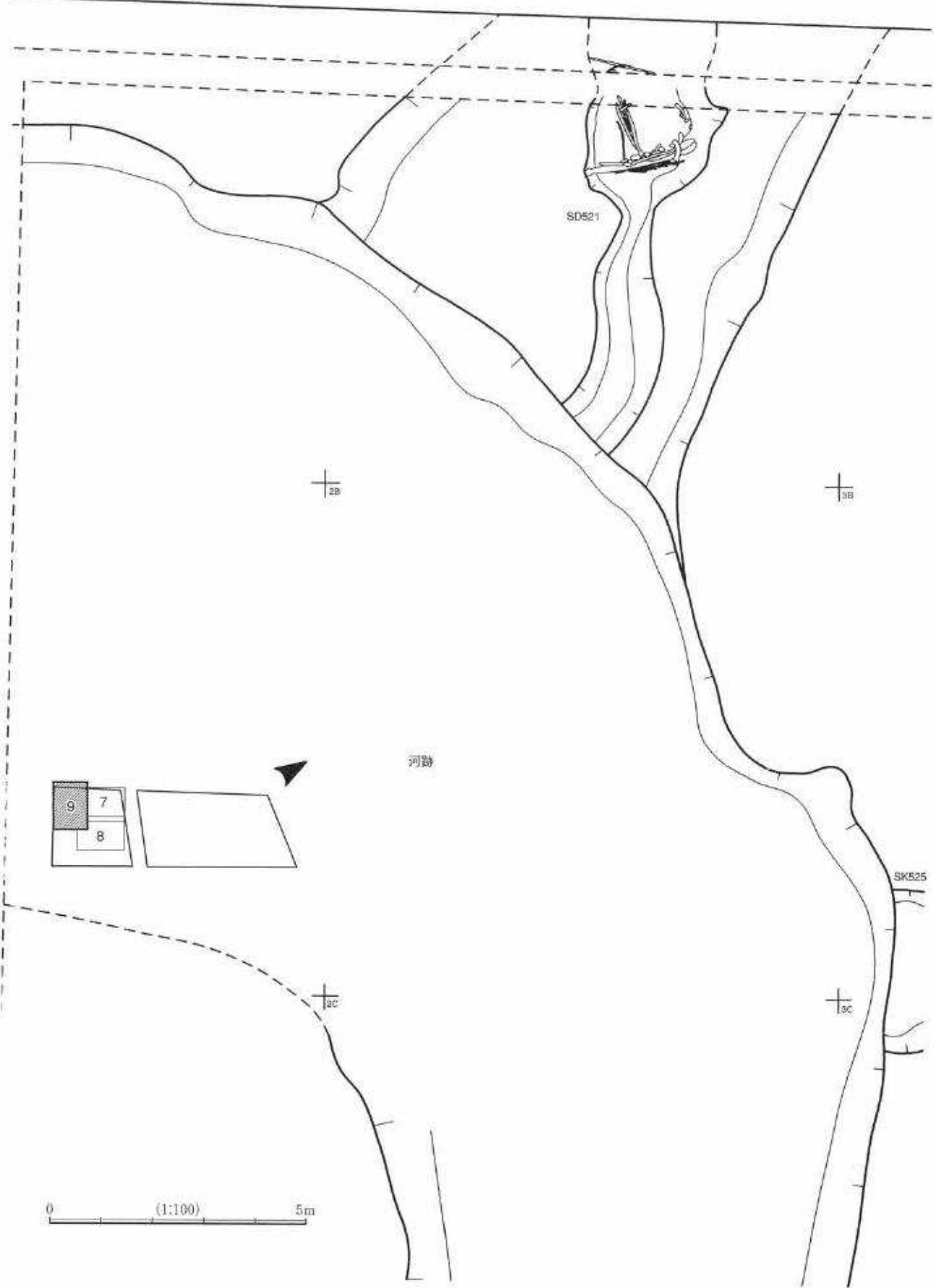


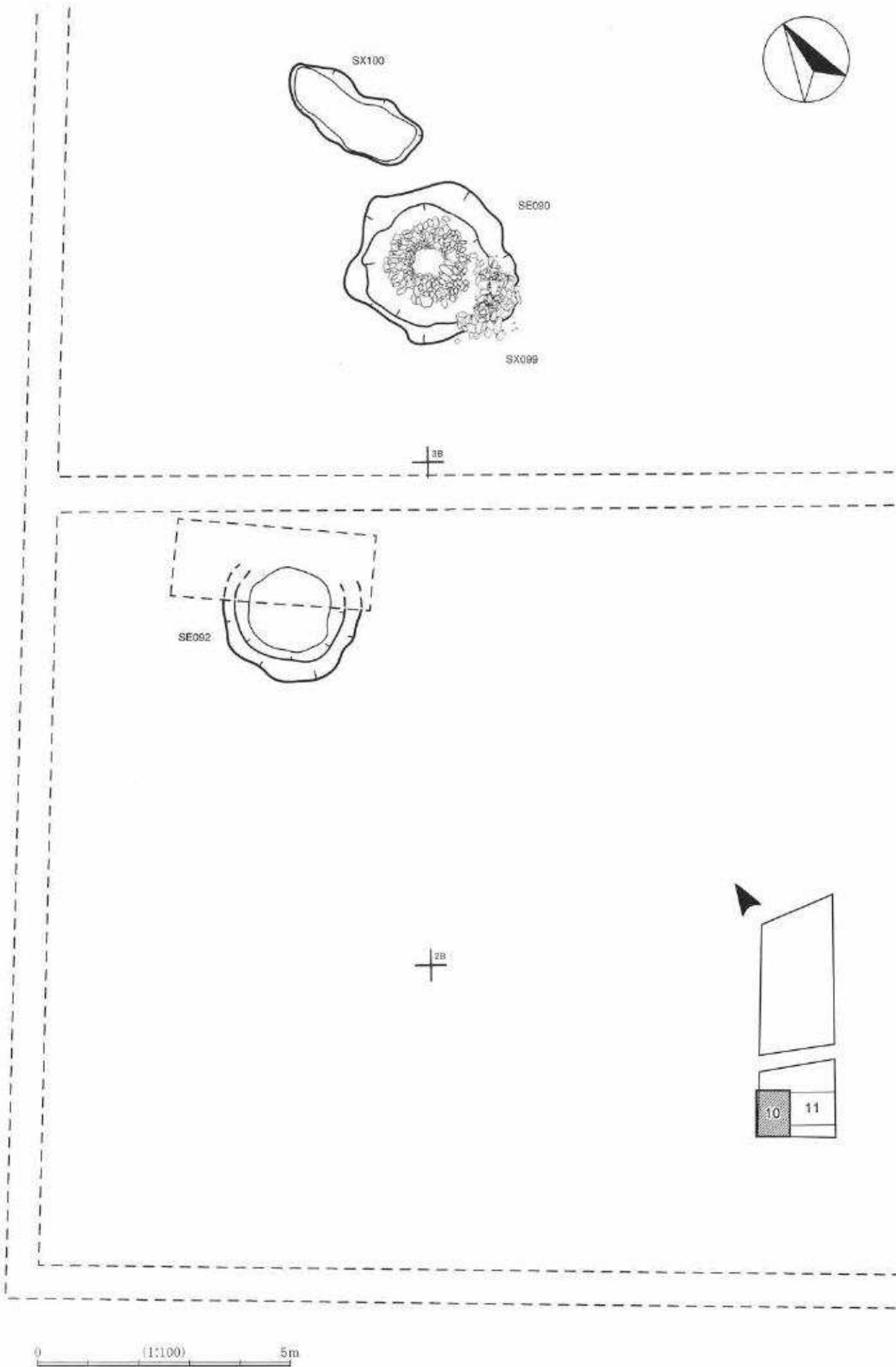


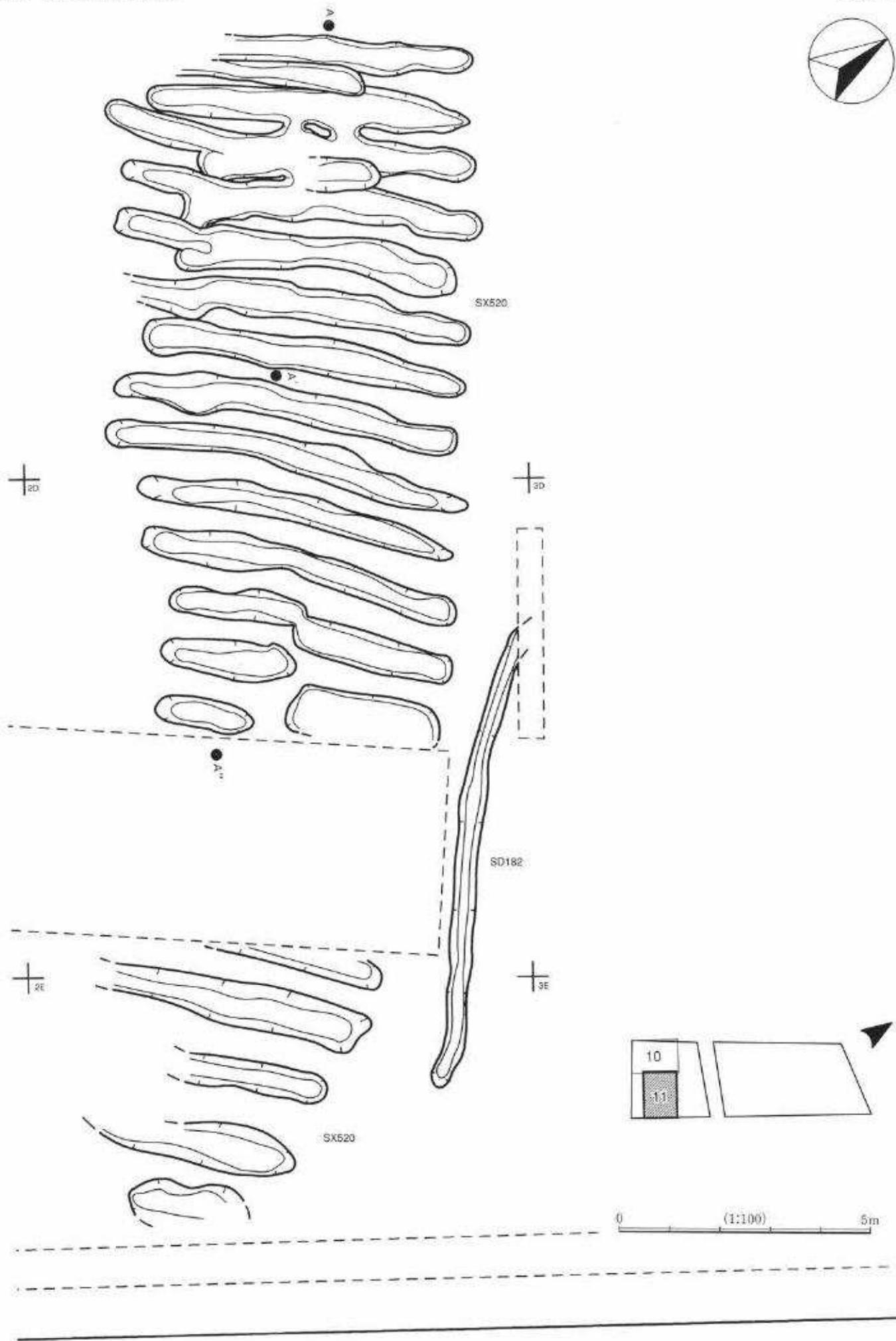


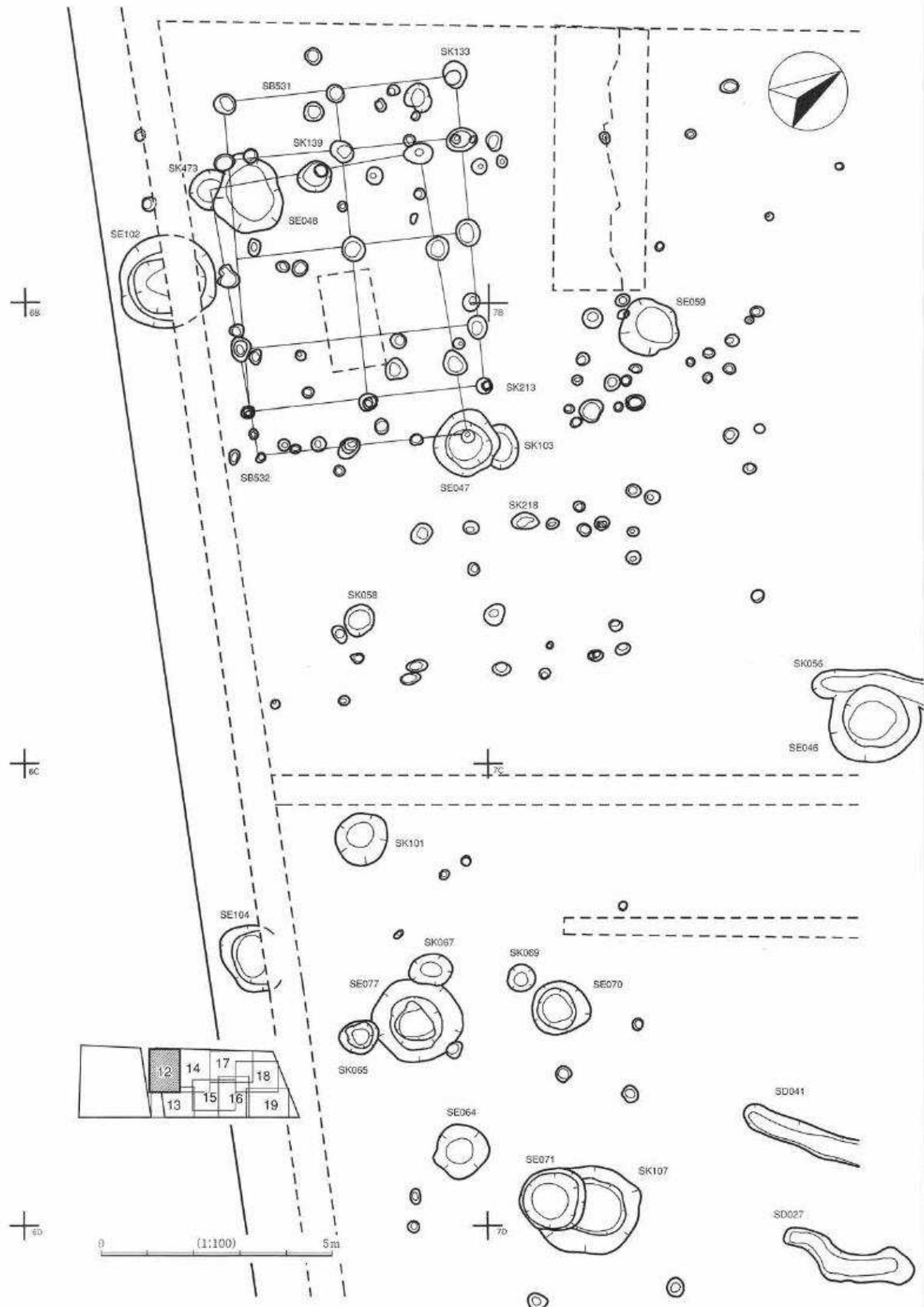


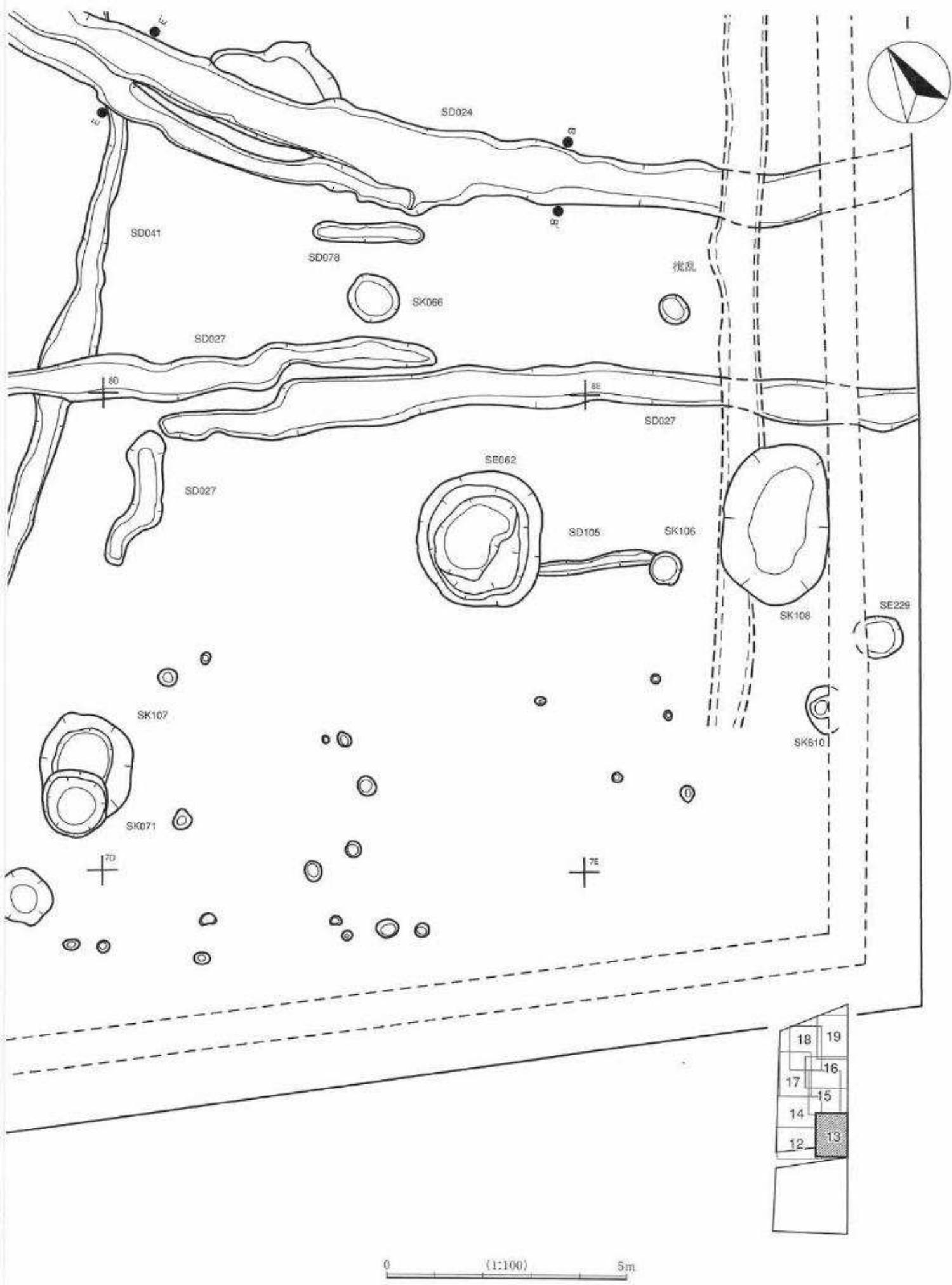


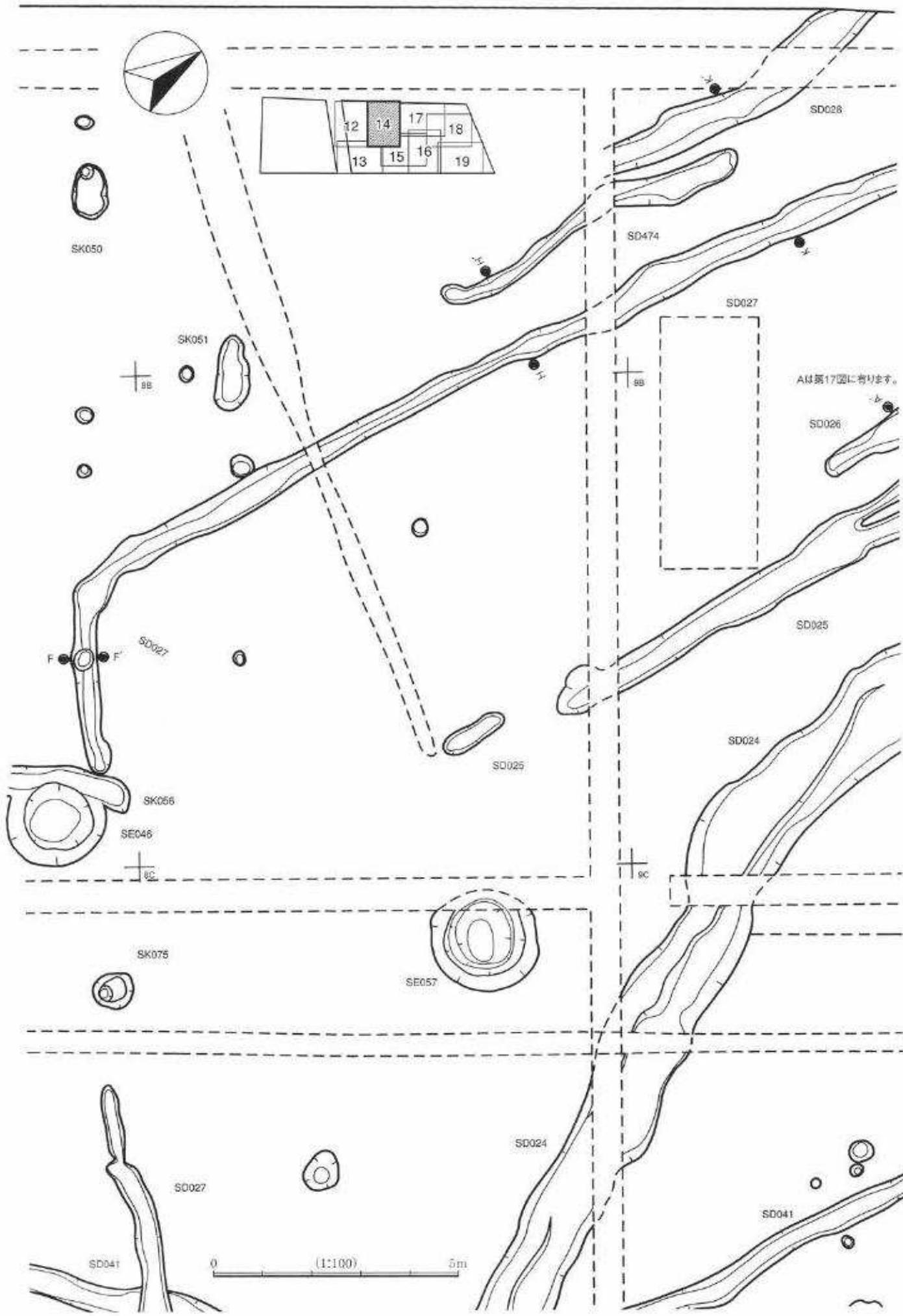






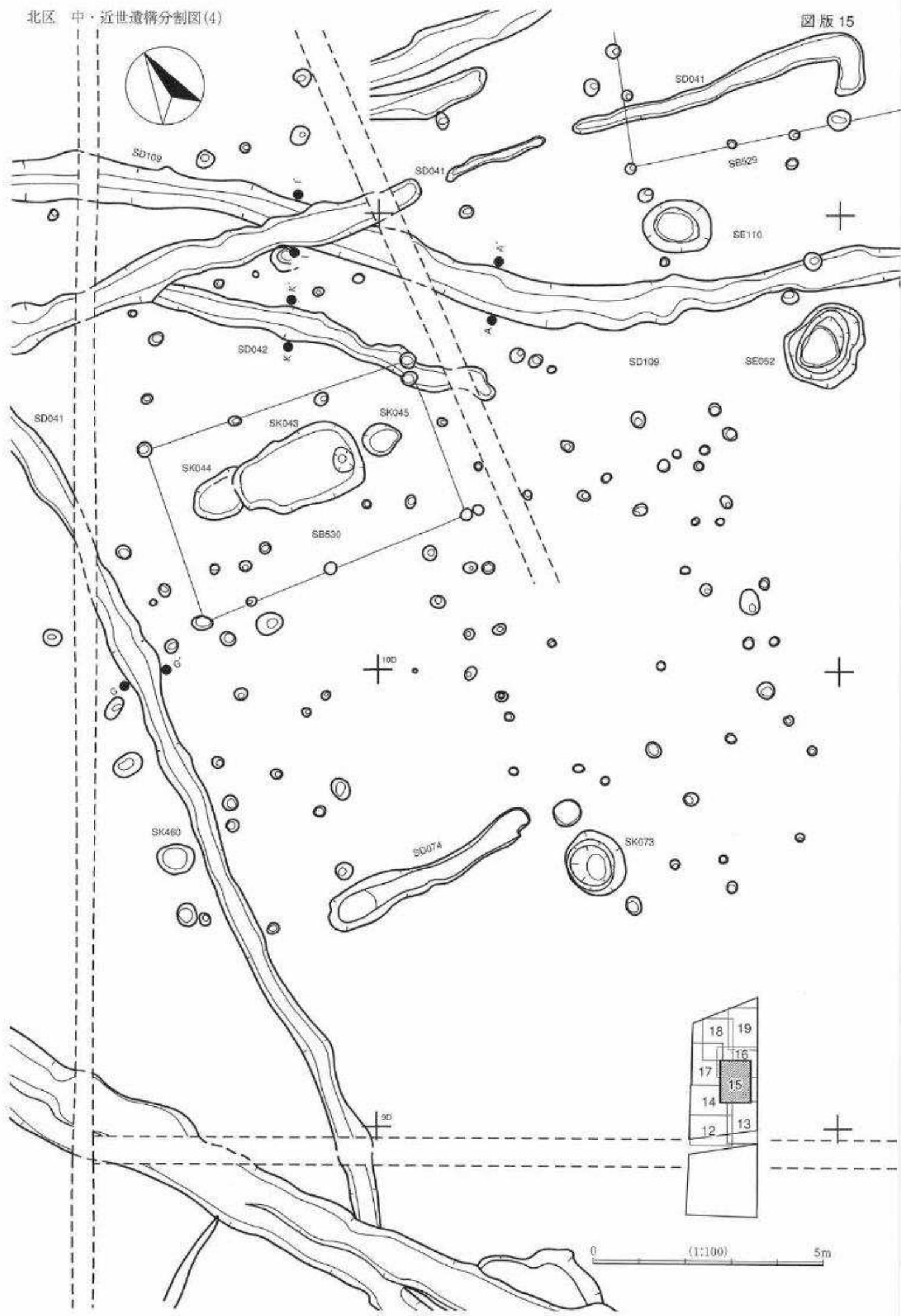


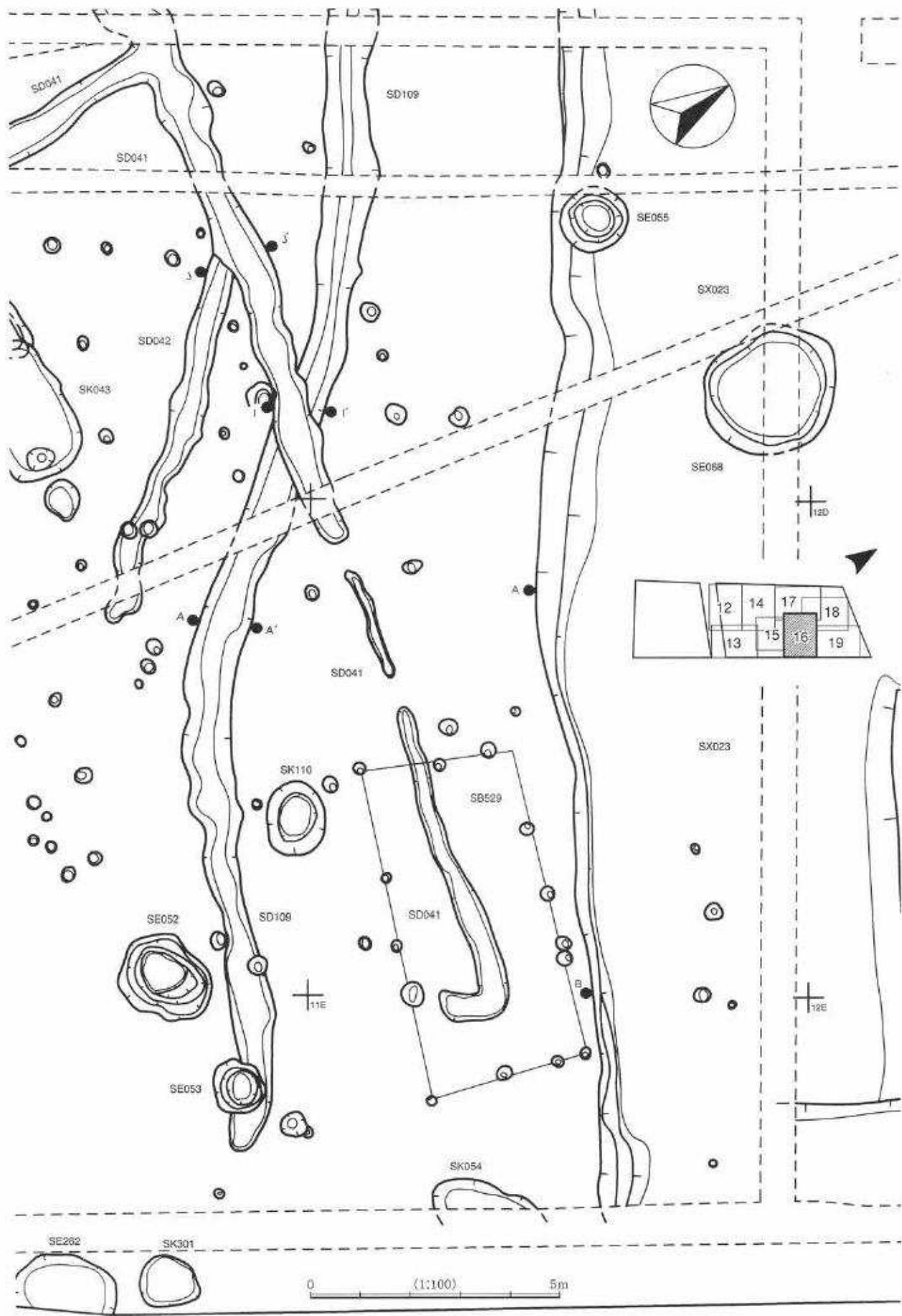


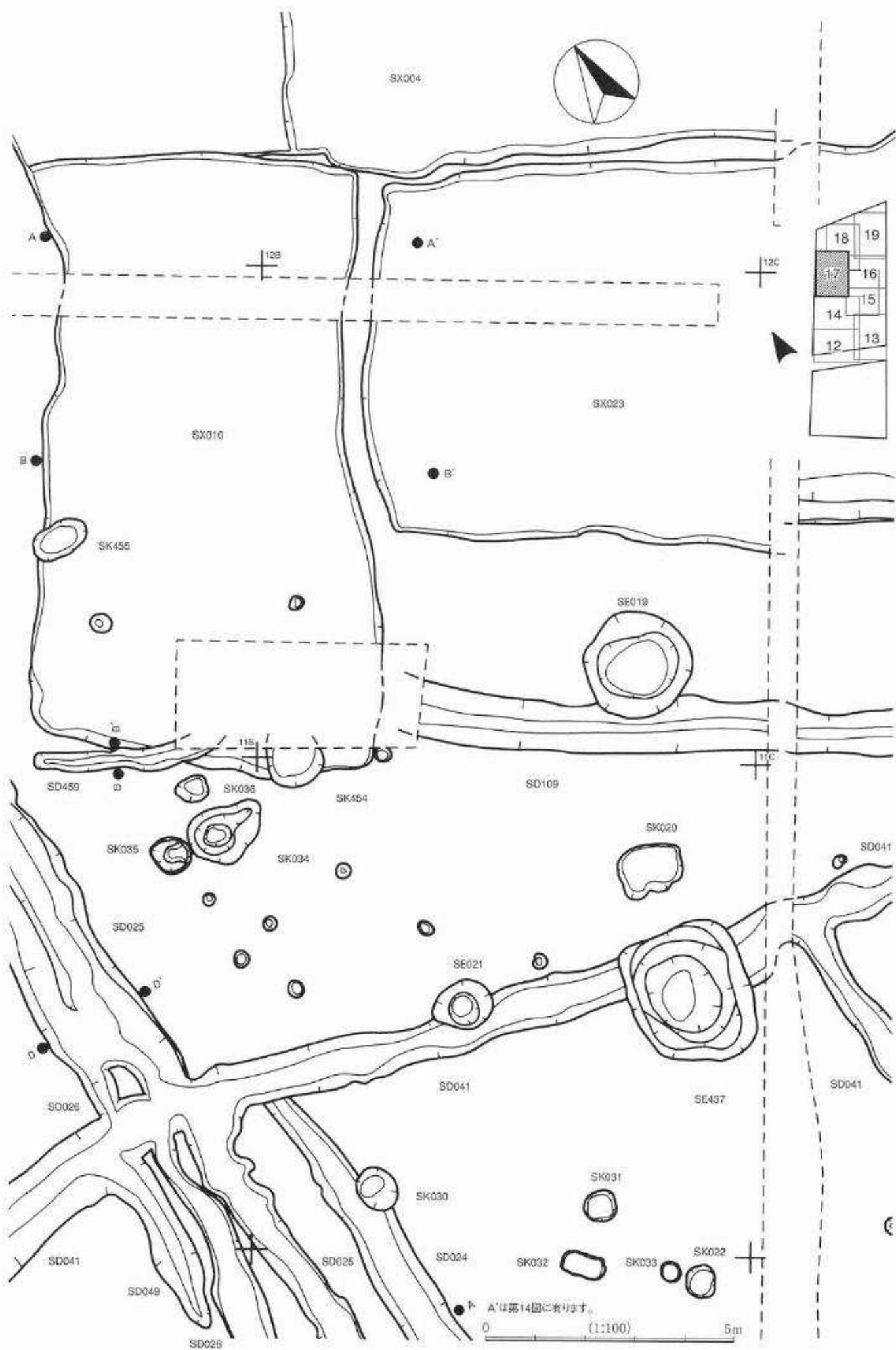


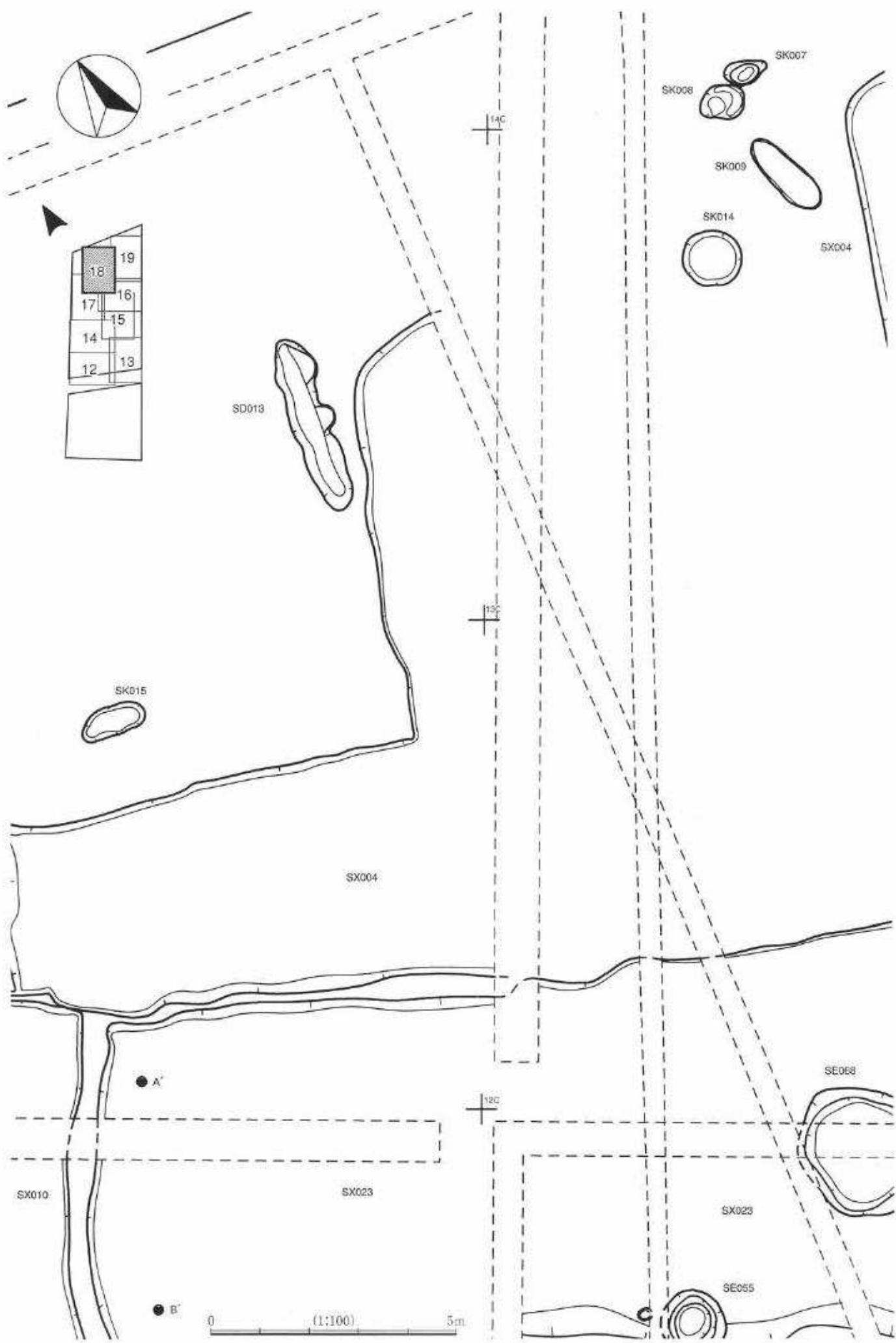
北区 中・近世遺構分割図(4)

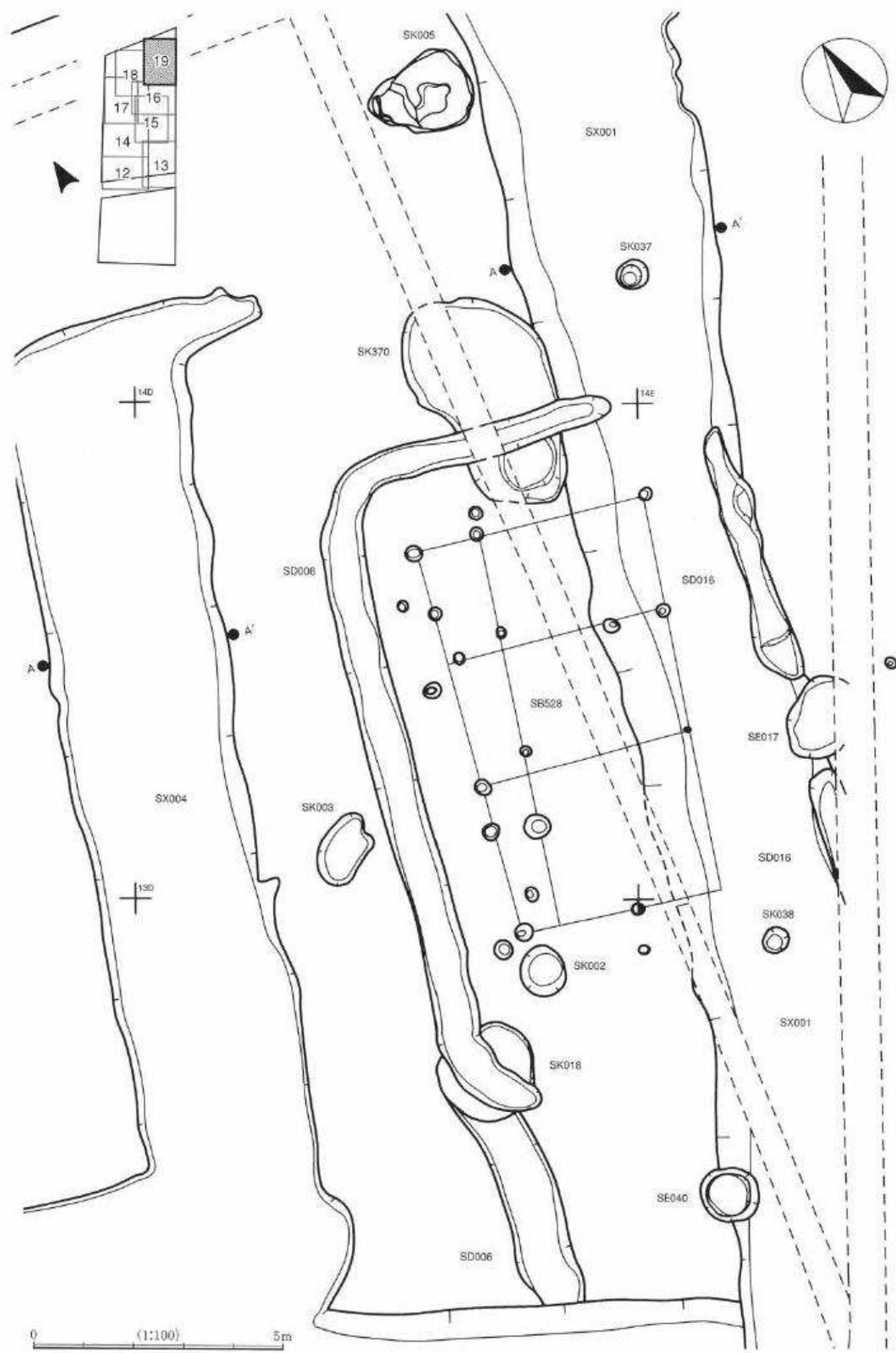
図版 15



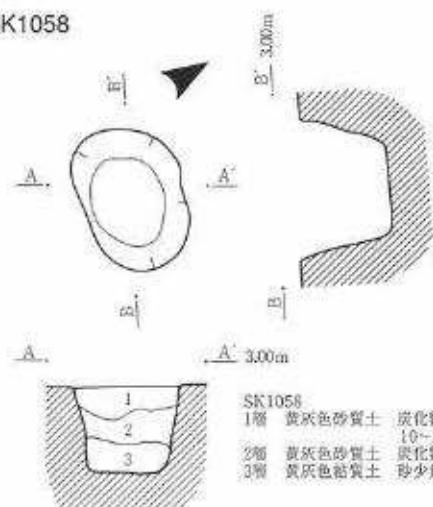




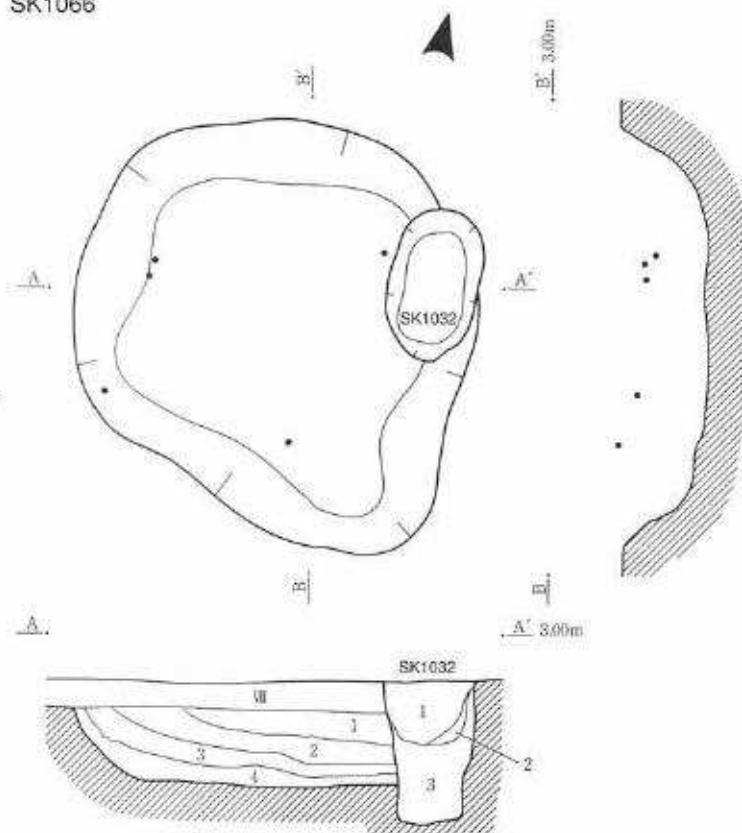




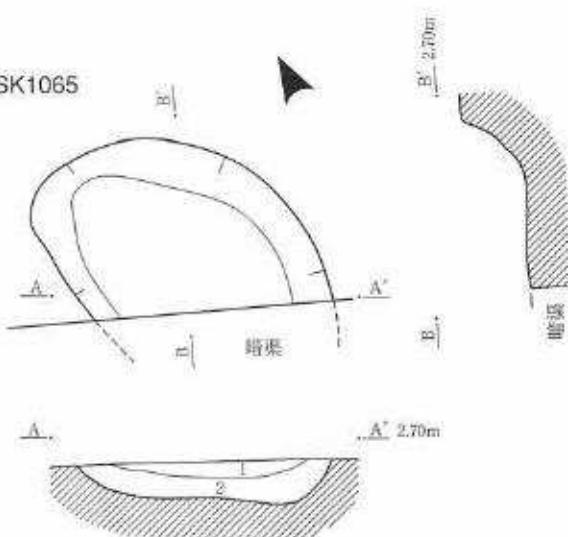
SK1058



SK1066



SK1065

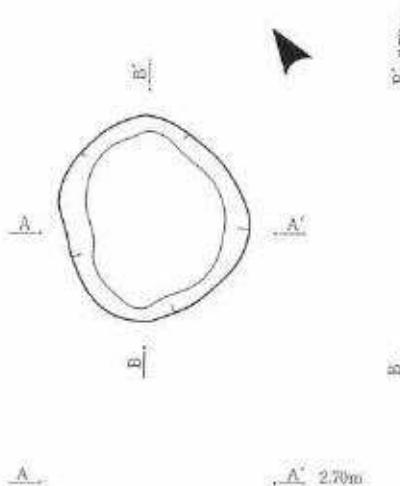


SK1068



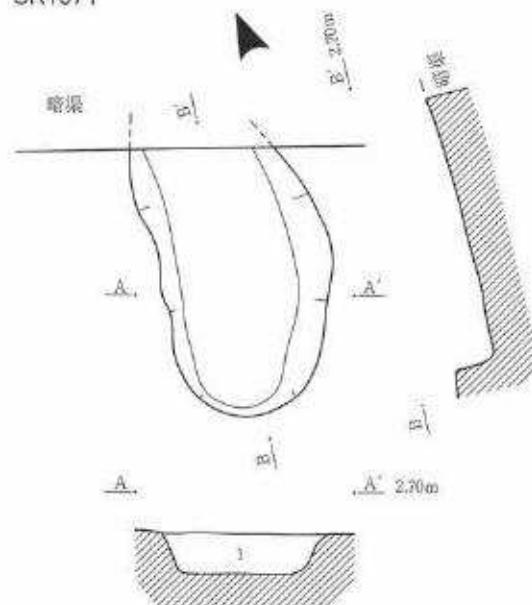
遺構個別図(2) SK1070・1071、SD1052~1055

SK1070



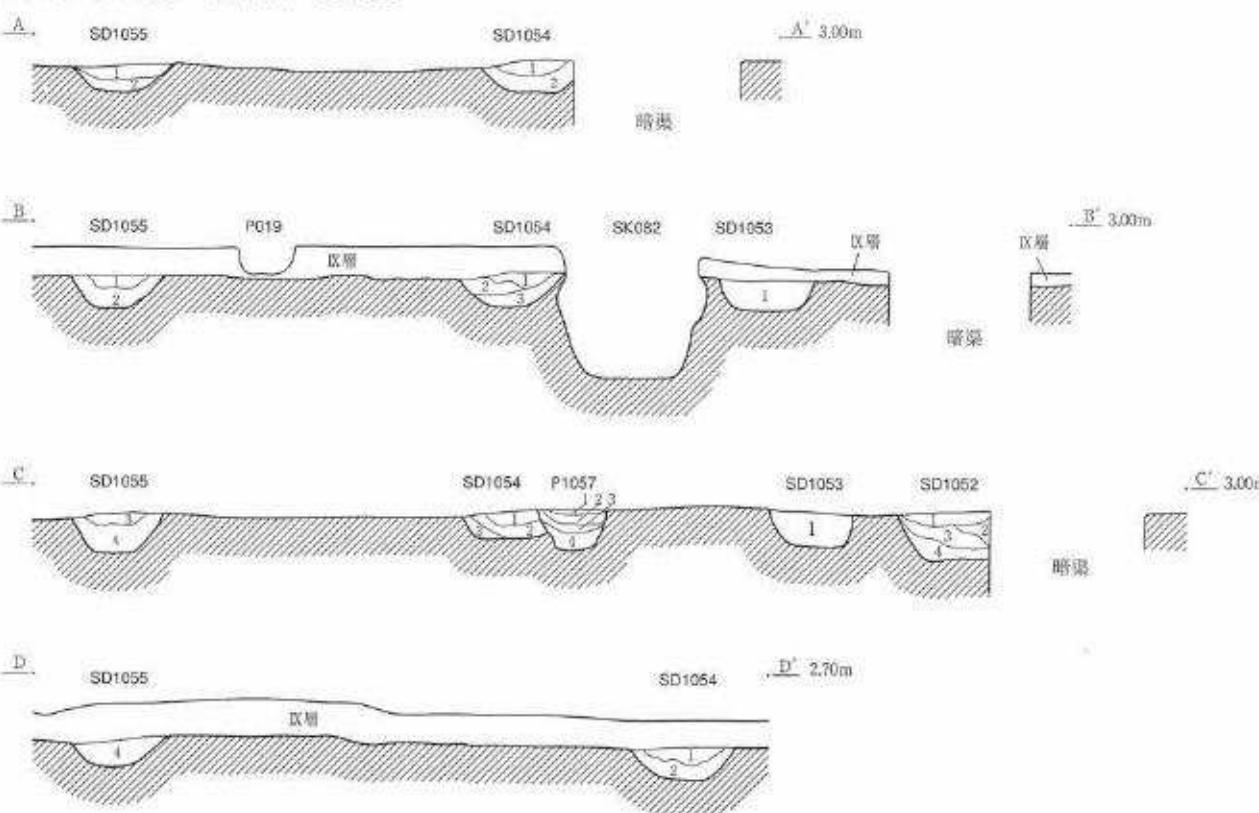
SK1070
1層 青灰色粘質土 塩化物少量、砂少量、灰色粘土塊少量含む。

SK1071



SK1071
1層 黄灰色粘質土 塩化物多量に含む。

SD1052・SD1053・SD1054・SD1055



SD1052
1層 黄灰色粘質土 塩化物多量、砂を多量に含む。
2層 黄灰色粘質土 砂多量に含む。
3層 黄灰色粘質土 灰色粘土塊径10mmを少量含む。
4層 黄灰色粘質土 塩化物多量、砂を多量に含む。

SD1053
1層 灰色粘質土 塩化物少量、砂多量に含む。

SD1054

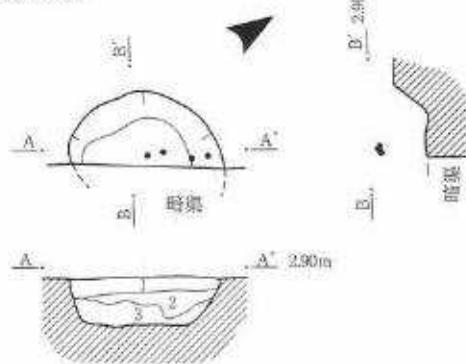
1層 黒色粘質土 塩化物多量に含む。
2層 黄灰色粘質土 塩化物微量、灰色粘質土塊少量を含む。
3層 灰白粘質土 砂多量、灰色粘質土塊径10mm少量含む。

SD1055
1層 黄灰色粘質土 塩化物少量、灰色粘質土塊少量含む。
2層 黄灰色粘質土 塩化物少量、砂を多量に含む。
3層 灰色粘質土 灰色粘土塊径10mmを少量含む。
4層 青灰色粘質土 塩化物少量、砂少量含む。

P1057

1層 灰黄褐色灰色粘質土 塩化物多量、砂少量含む。
2層 黄灰色粘質土 塩化物微量、砂を多量に含む。
3層 灰色粘質土 塩化物微量、砂を多量に含む。
4層 灰色粘質土 塩化物少量、砂を多量に含む。

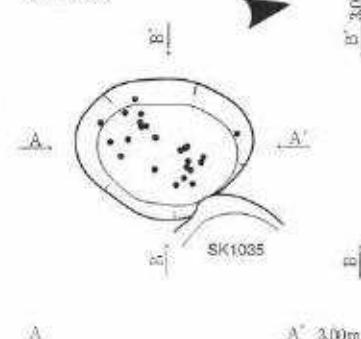
SK1001



SK1001

1層 灰黃褐色粘質土 塩化物微量、瓦砾土塊径10~20mm少量含む。
2層 褐灰色粘質土 塩化物少量、瓦砾土塊径10~20mm少量含む。
3層 褐灰色粘質土 塩化物微量、瓦砾土塊径10~30mm少量含む。

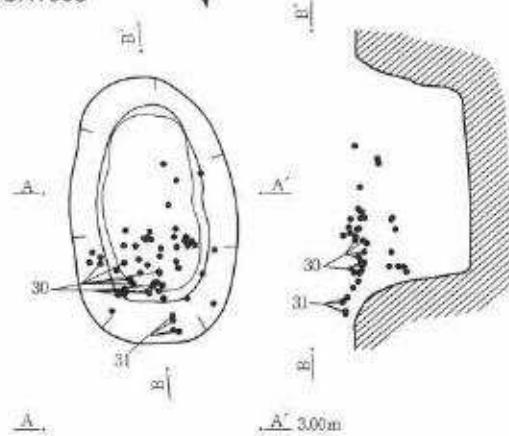
SK1002



SK1002

1層 灰褐色粘質土 塩化物微量に含む。
2層 黄褐色粘質土 塩化物多量、瓦砾土塊径10~20mm少量含む。
3層 青灰色粘質土 塩化物微量含む。

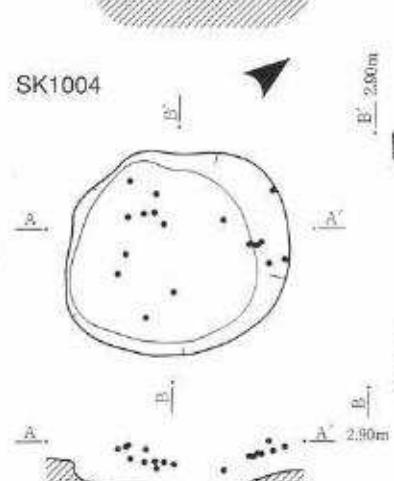
SK1003



SK1003

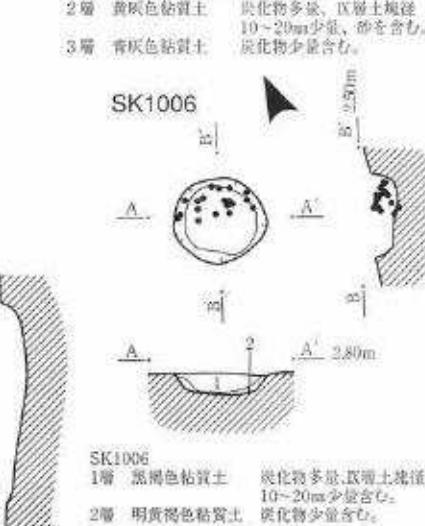
1層 褐灰色粘質土 塩化物微量、瓦砾土塊径10~20mm少量含む。
2層 褐灰色粘質土 塩化物微量に含む。
3層 青灰色粘質土 塩化物少量含む。
4層 青灰色粘質土 塩化物微量、砂を含む。

SK1004



SK1004

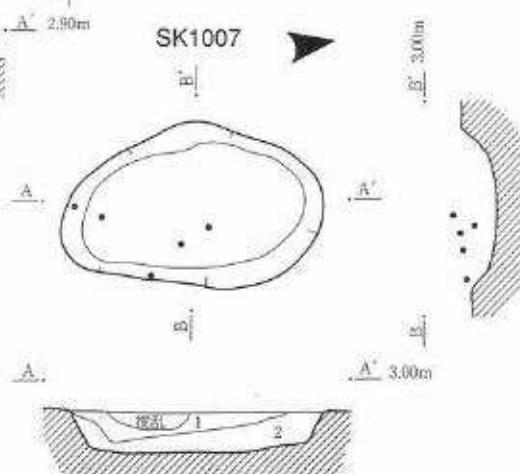
SK1006



SK1006

1層 黑褐色粘質土 塩化物多量、瓦砾土塊径10~20mm少量含む。
2層 明黄褐色粘質土 塩化物微量含む。

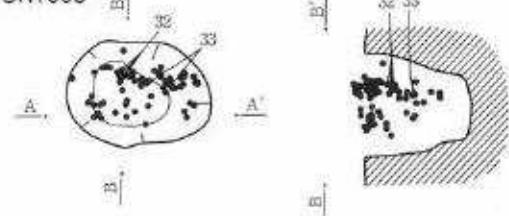
SK1007



SK1007

1層 黑褐色粘質土 塩化物多量に含む。
2層 黄灰色粘質土 塩化物多量、瓦砾土塊径10~20mm少量含む。

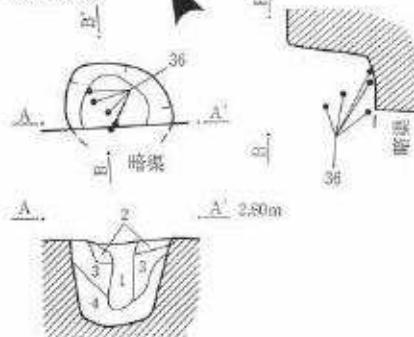
SK1005



SK1005

1層 黑褐色粘質土 塩化物微量に含む。
2層 暗褐色粘質土 瓦砾土塊径10~20mm少量含む。
3層 明黄褐色粘質土 塩化物多量、砂を含む。

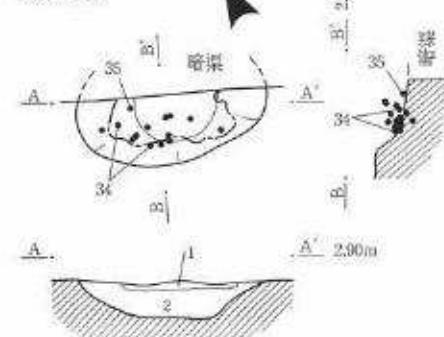
SK1009



SK1009

1層 黑褐色粘質土 塩化物微量、瓦砾土塊径10mm少量含む。
2層 黄褐色粘質土 塩化物及瓦砾土塊径20~30mm多量含む。
3層 黄褐色粘質土 塩化物多量、瓦砾土塊径10~20mm多量含む。
4層 黄褐色粘質土 塩化物少量含む。

SK1008



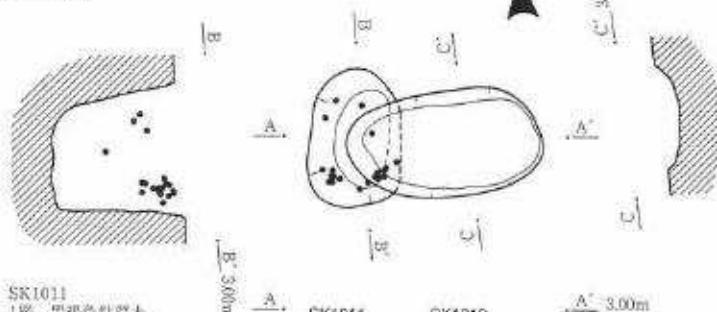
SK1008

1層 暗赤褐色粘土層 塩化物微量に含む。

2層 黑褐色粘質土 塩化物・瓦砾土塊を多量に含む。

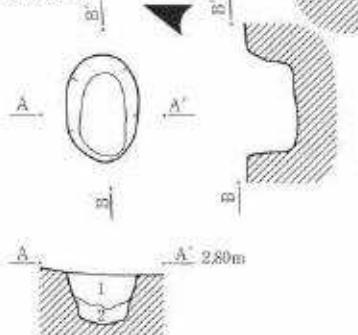
0 (1:40) 2m

遺構個別図(4) SK1010・1011・1014～1017・1020

SK1010
SK1011

SK1011
1層 黒褐色粘質土
炭化物多量に含む。
2層 灰色粘質土
炭化物少量含む。
3層 青灰色粘質土
炭化物少量含む。

SK1015

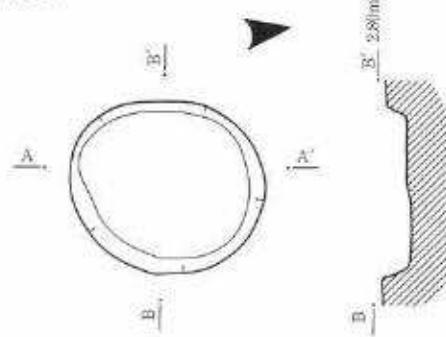


SK1015
1層 黄灰色粘質土
炭化物多量に含む。
2層 青灰色粘質土
砂多量、炭化物少量含む。

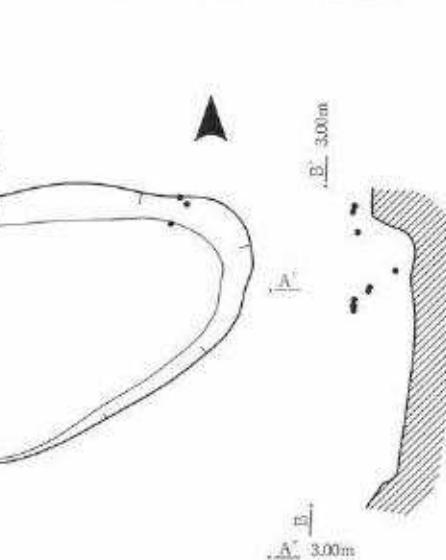


SK1010
1層 黒褐色粘質土
炭化物多量に含む。
2層 暗褐色粘質土
炭化物多量、灰褐色塊径
10~20mm 多量含む。

SK1014

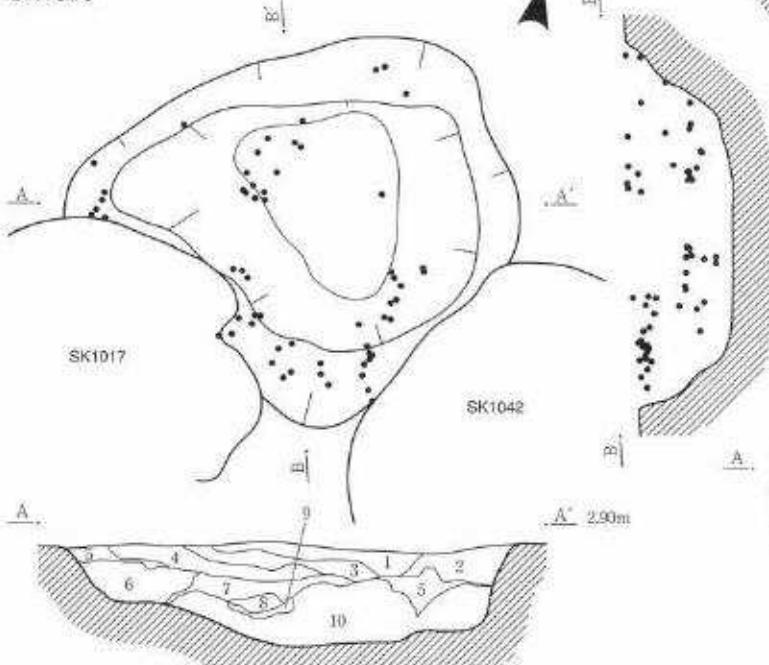


SK1014
1層 黒褐色粘質土
灰褐色塊径10~20mm多量に含む。

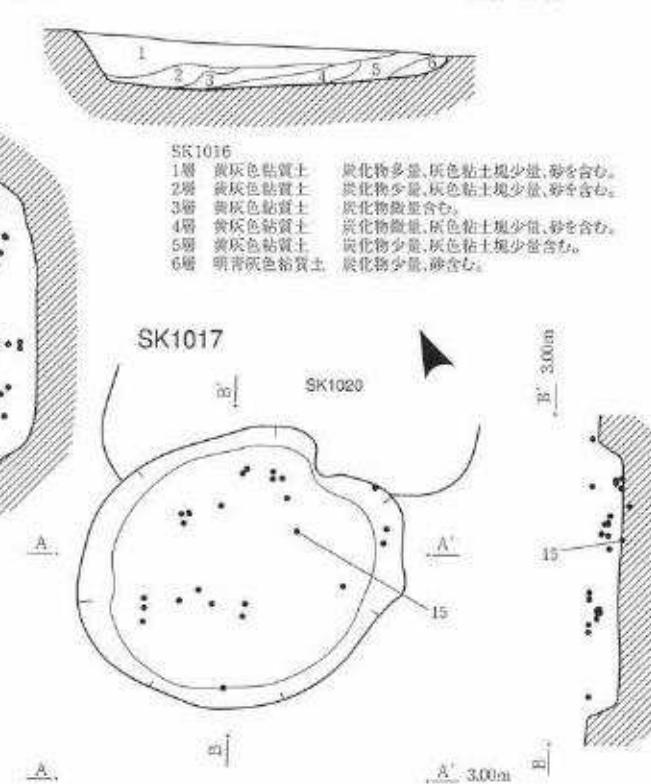


SK1016
1層 淡灰色粘質土
炭化物多量、灰褐色塊少量、砂を含む。
2層 灰色粘質土
炭化物少量、灰褐色塊少量、砂を含む。
3層 淡灰色粘質土
炭化物微量含む。
4層 黄灰色粘質土
炭化物微量、灰褐色塊少量、砂を含む。
5層 黄灰色粘質土
炭化物少量、灰褐色塊少量含む。
6層 明青灰色粘質土
炭化物少量、砂含む。

SK1020

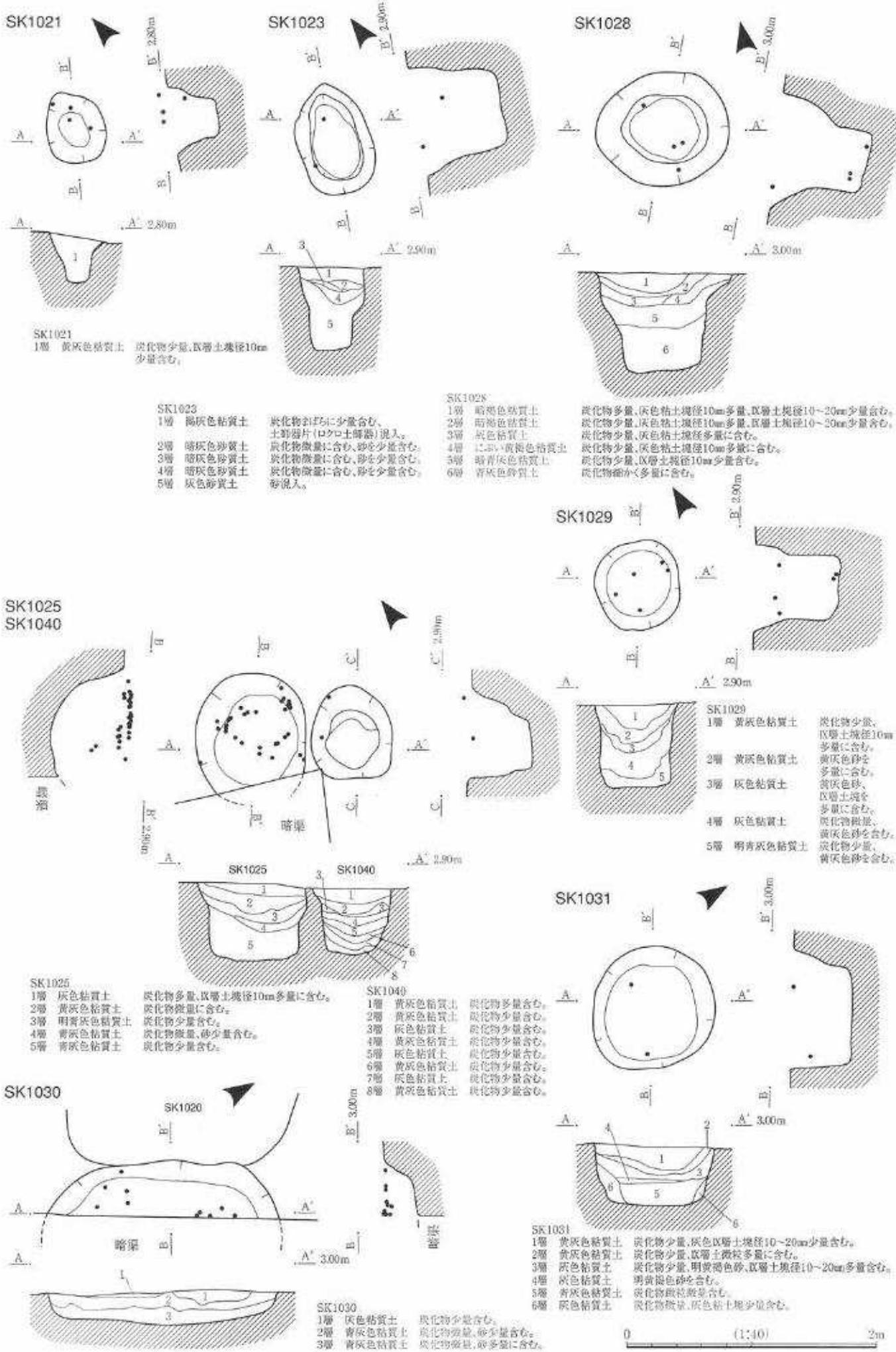


SK1020
1層 黑褐色粘質土
炭化物微粒多量に含む。
2層 青灰色粘質土
炭化物少量、明黄褐色砂を含む。
3層 明黄褐色砂質土
砂を含む。
4層 灰色粘質土
炭化物微粒微量含む。
5層 灰色粘質土
炭化物微量、明黄褐色砂を含む。
6層 灰色粘質土
炭化物微量含む。
7層 黄褐色粘質土
炭化物微量、明黄褐色砂を含む。
8層 青灰色粘質土
炭化物微量、明黄褐色砂を含む。
9層 青灰色粘質土
炭化物少量、明黄褐色砂を含む。
10層 青灰色粘質土
炭化物少量含む。

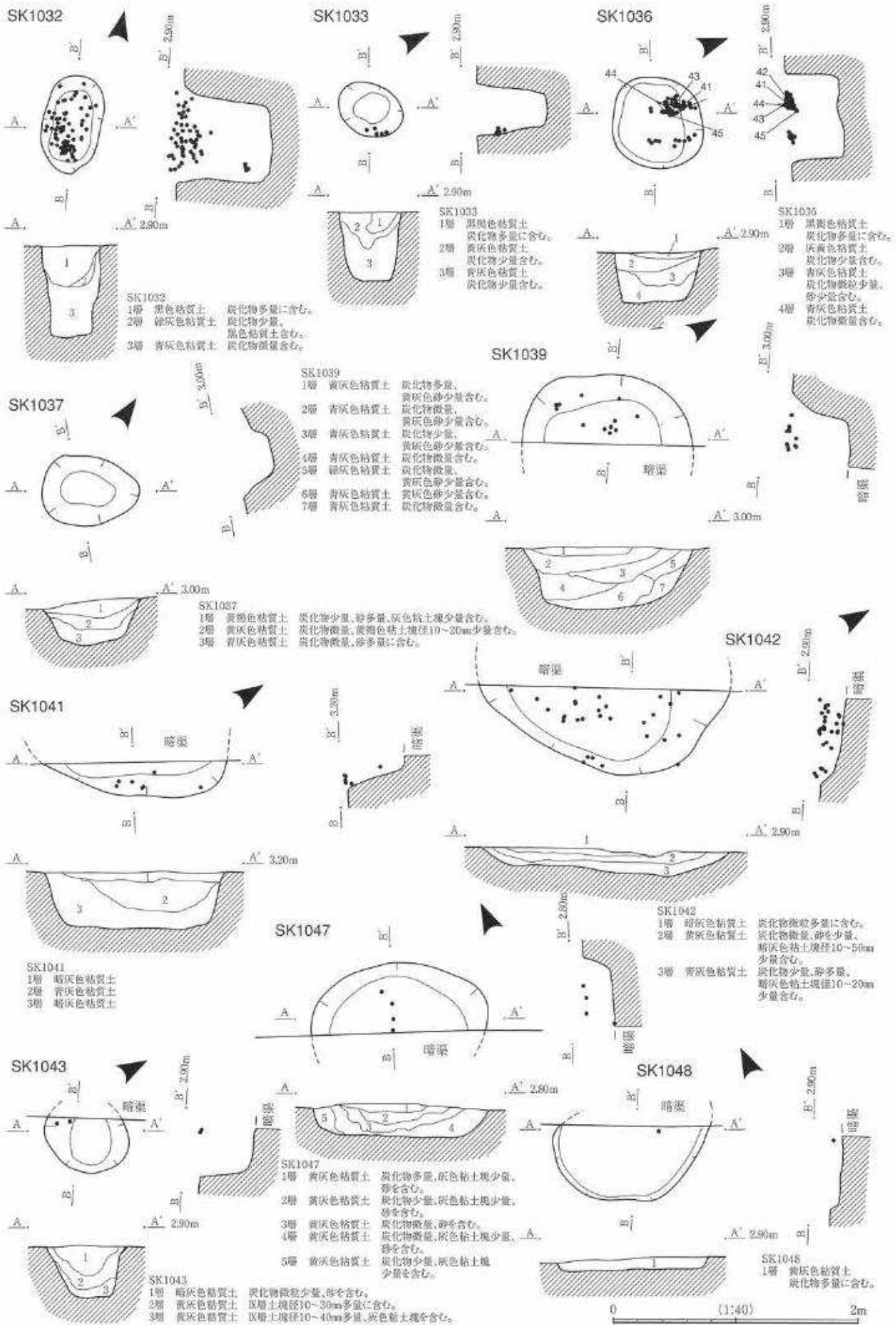


SK1017
1層 淡灰色粘質土
炭化物少量、灰褐色塊径10~100mm多量に含む。

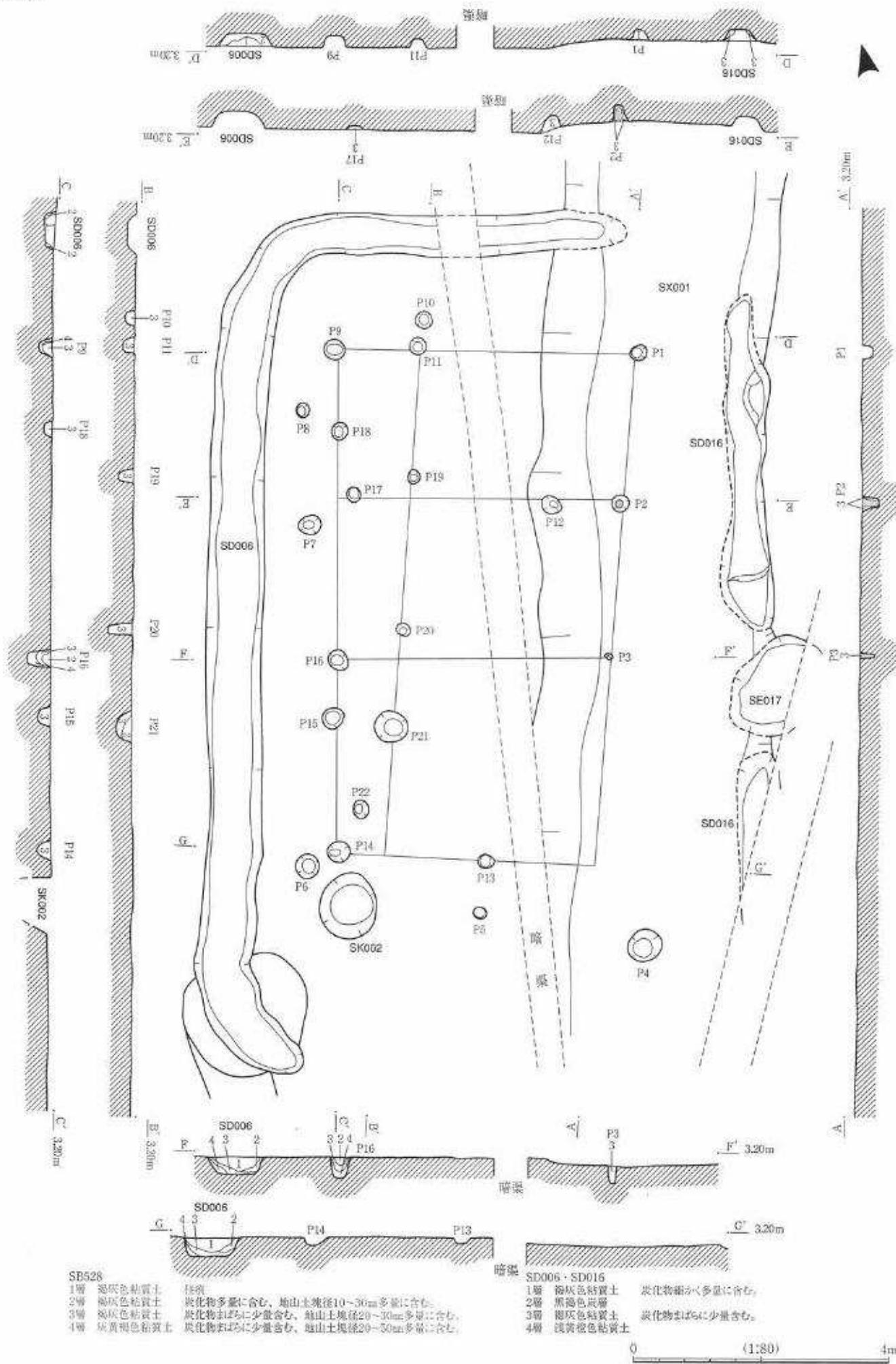
0 (1:40) 2m



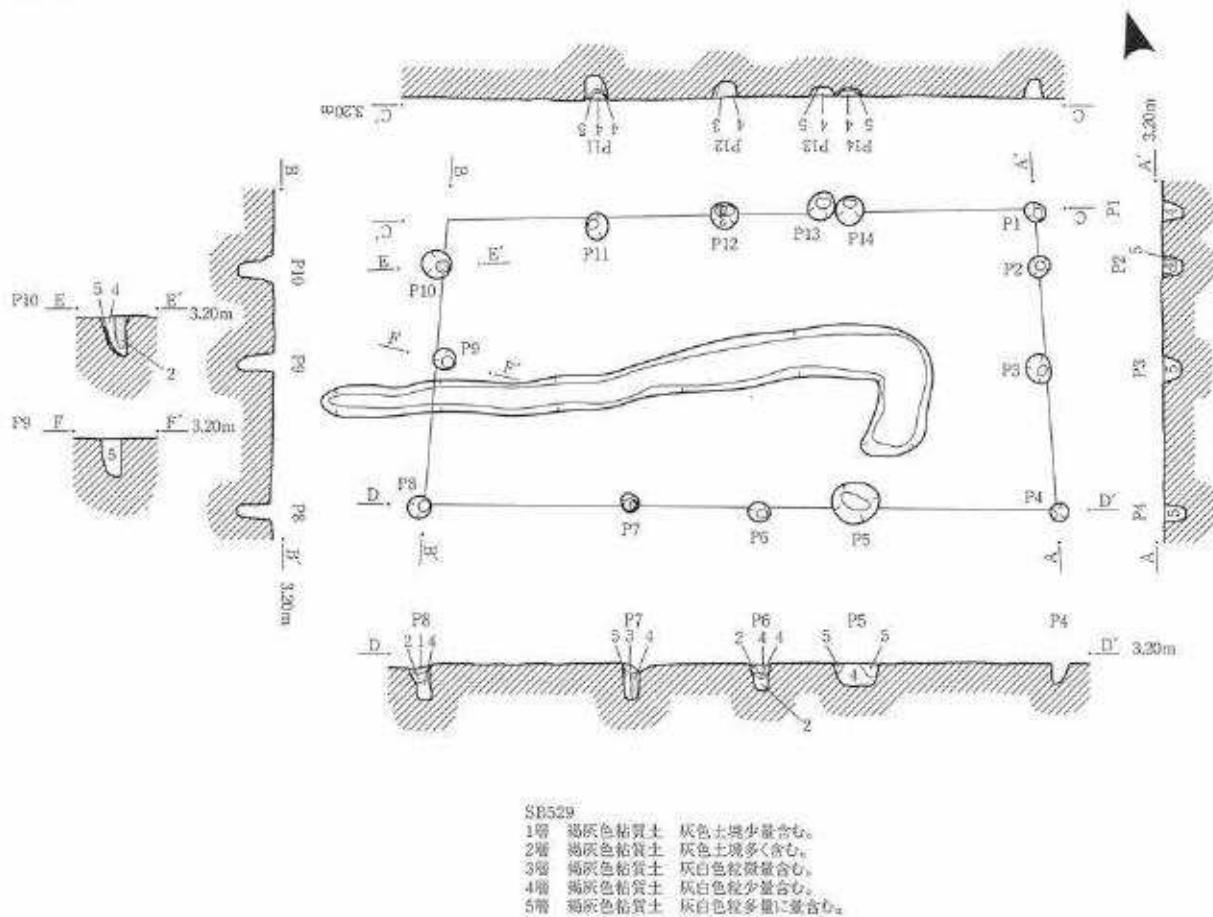
過構個別図(6) SK1032・1033・1036・1037・1039・1041~1043・1047・1048



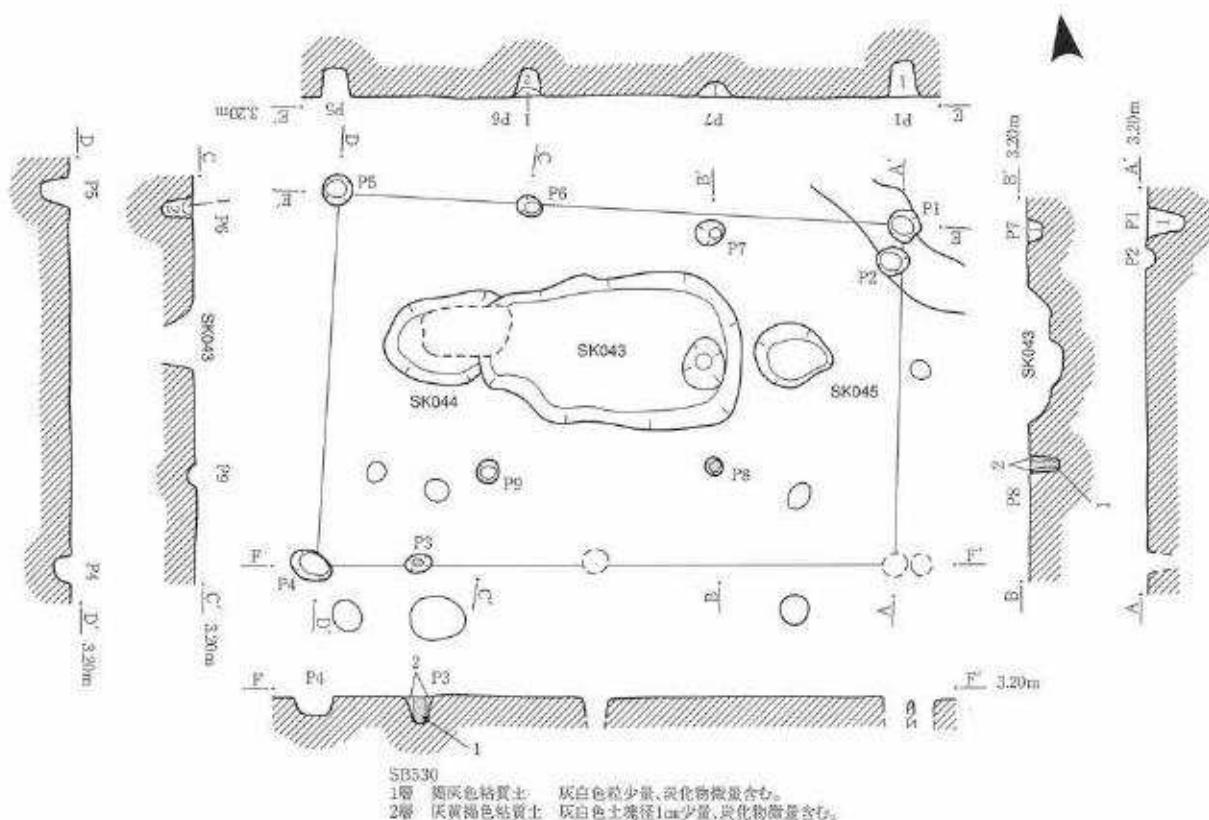
SB528



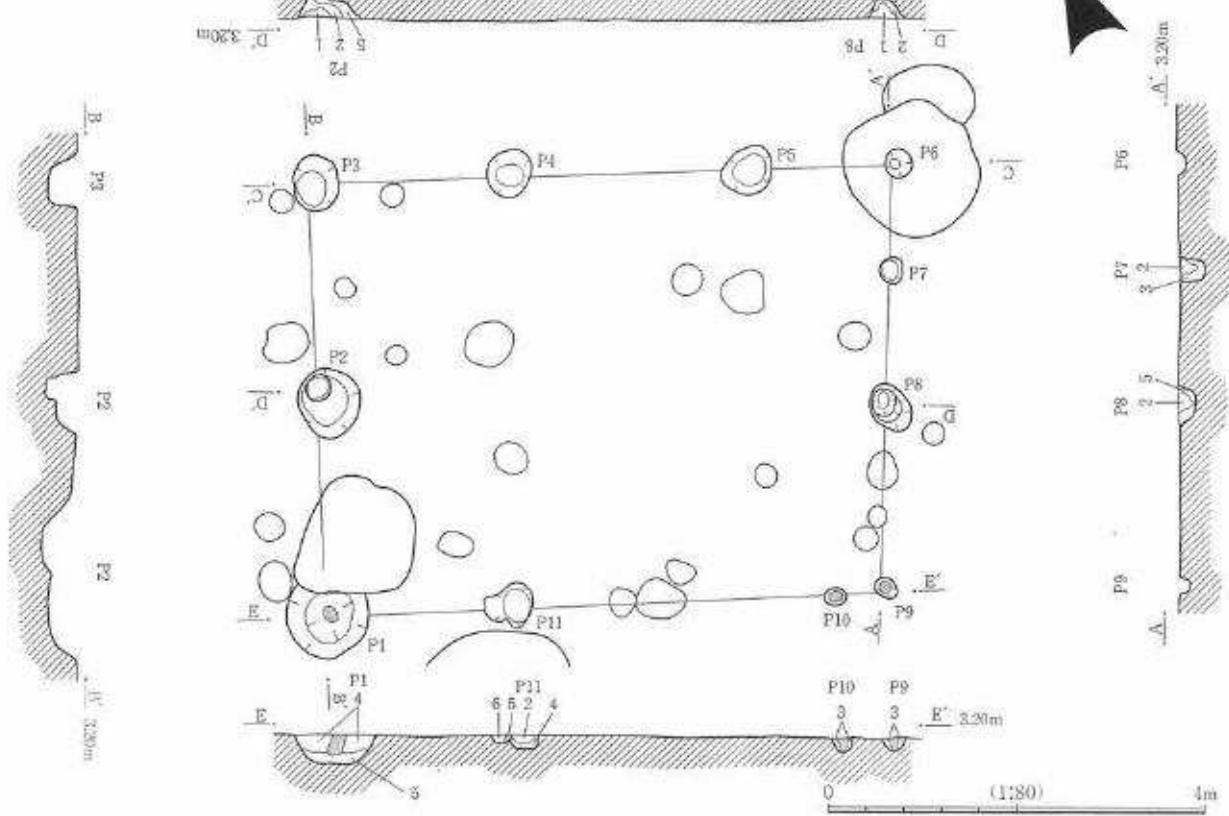
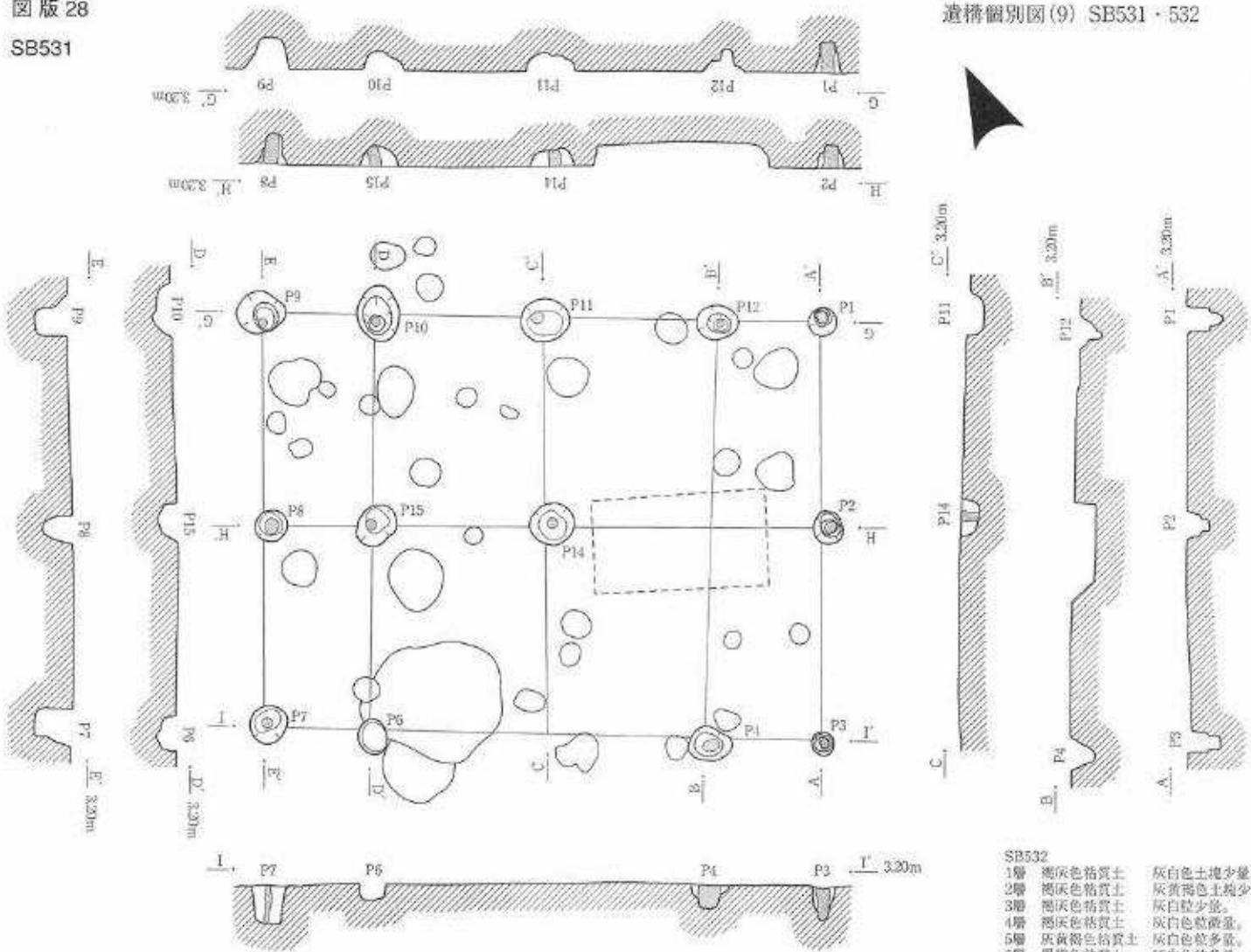
SB529



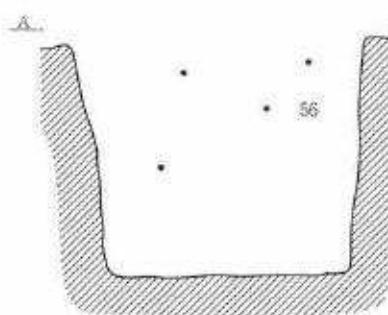
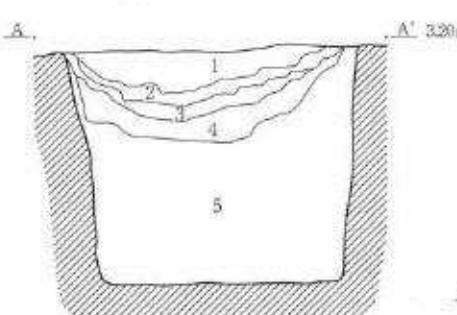
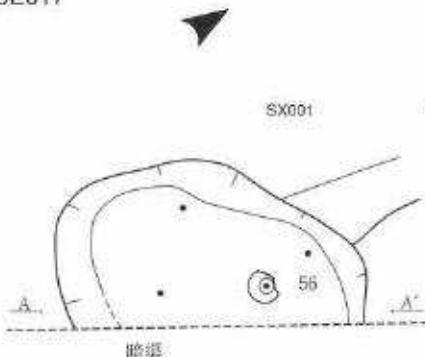
SB530



0 (1:80) 4m

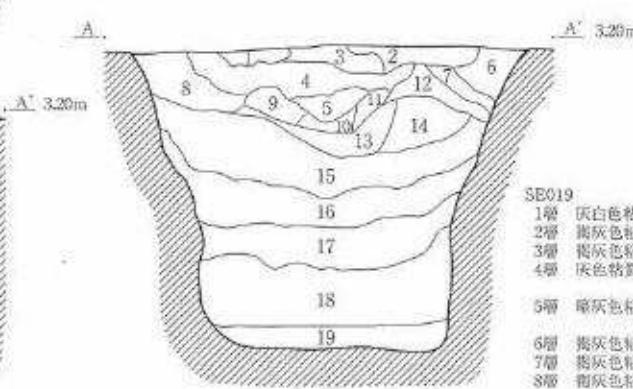
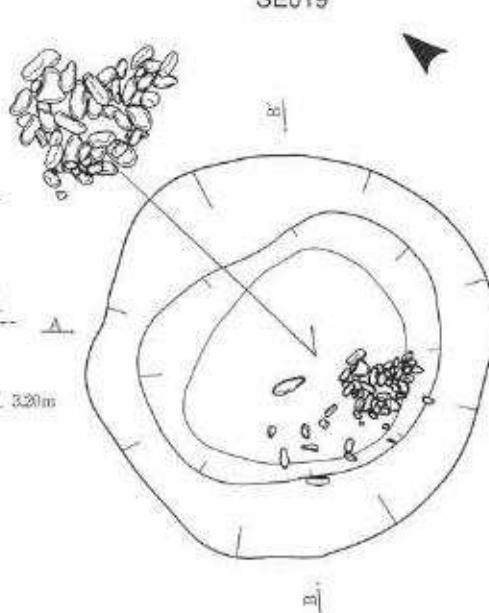


SE017



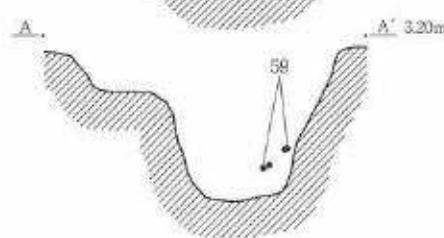
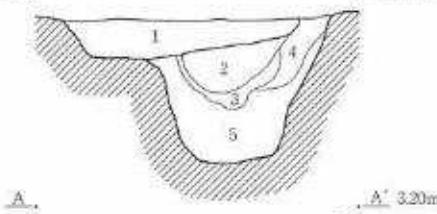
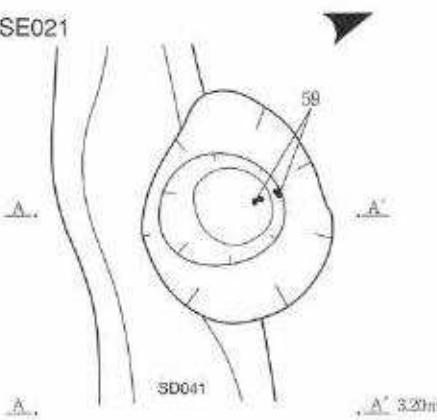
SE017
1層 黒褐色粘質土 炭化物少量、V層土塊少量含む。
2層 暗灰色粘質土 炭化物少量含む。
3層 青灰褐色粘質土 炭化物少量含む。
4層 灰褐色粘質土 炭化物微量少量含む。
5層 青灰色粘質土 炭化物微量少量含む。

SE019



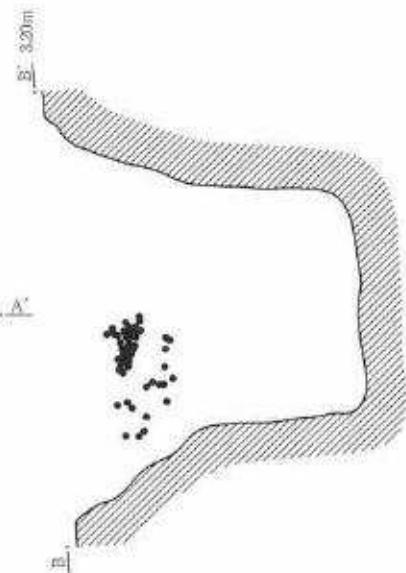
SE019
1層 暗灰色粘質土 炭化物微量含む。
2層 暗灰色粘質土 炭化物多量、灰白色土塊含む。
3層 暗灰色粘質土 灰白色土塊、灰土塊。
4層 暗灰色粘質土 炭化物少量含む。
5層 暗灰色粘質土 灰白色土塊微量、炭化物少量含む。
6層 暗灰色粘質土 炭化物微量含む。
7層 暗灰色粘質土 灰白色土塊少量、炭化物微量含む。
8層 暗灰色粘質土 灰白色土塊微量含む。
9層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
10層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
11層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
12層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
13層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
14層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
15層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
16層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
17層 青灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
18層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
19層 暗灰色粘質土 灰白色土塊少量含む。

SE021



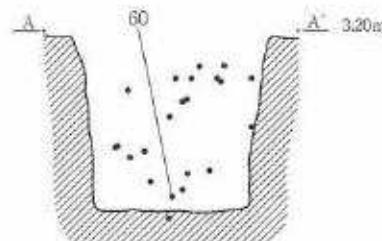
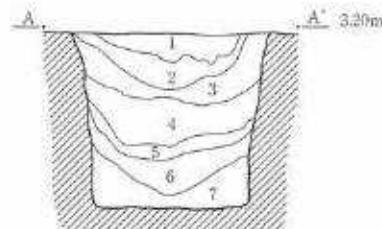
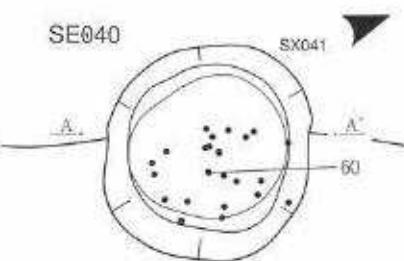
SE021
1層 暗灰色粘質土 炭化物微量含む、SD041覆土。
2層 暗灰色粘質土 炭化物多量に含む。
3層 暗灰色粘質土 炭化物少量含む。
4層 暗灰色粘質土 炭化物少量、V層土塊を多量に含む。
5層 黑色粘質土 炭化物多量に含む。

SE019

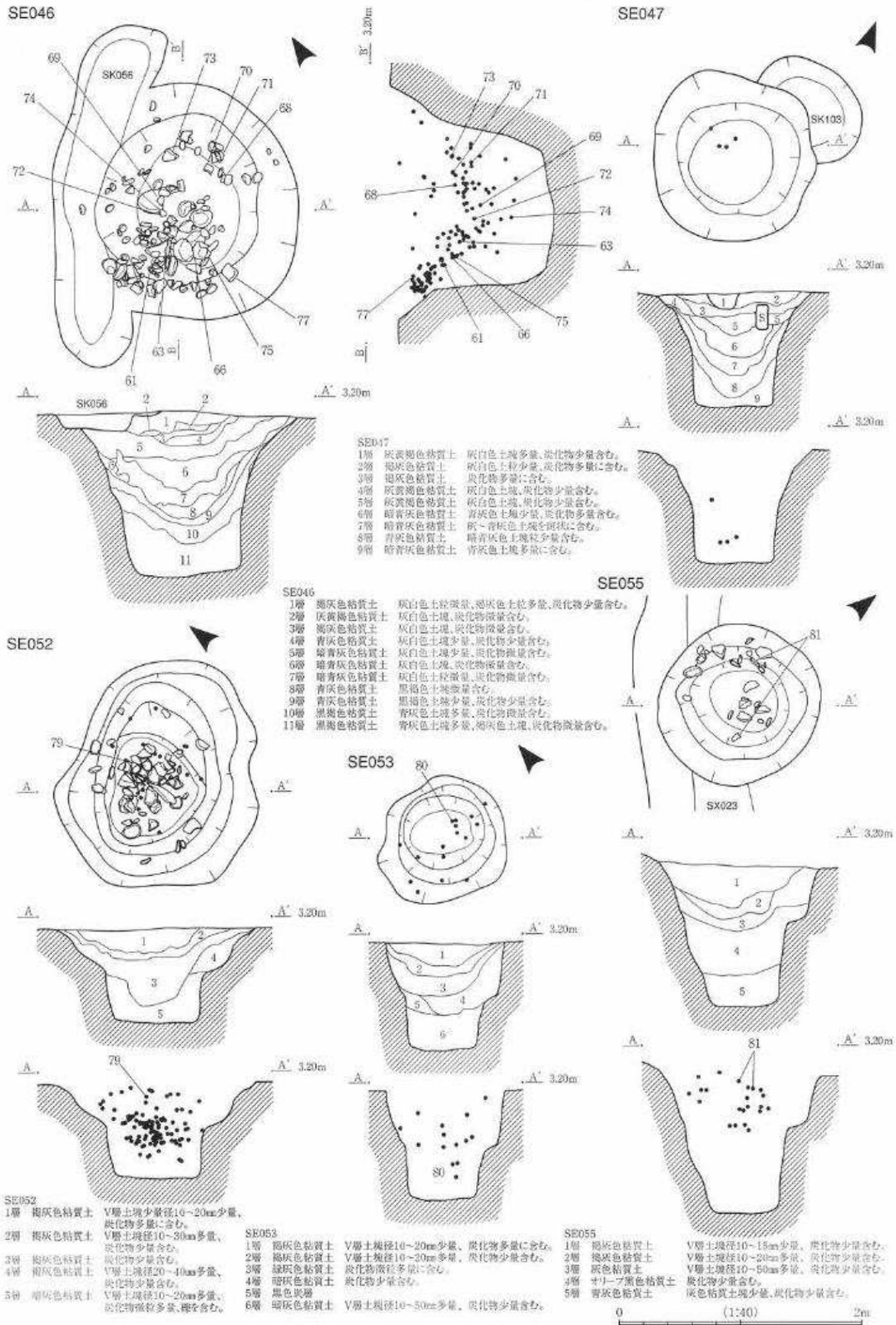


SE019
1層 暗灰色粘質土 炭化物微量含む。
2層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
3層 暗灰色粘質土 灰白色土塊、灰土塊。
4層 暗灰色粘質土 炭化物少量含む。
5層 暗灰色粘質土 灰白色土塊微量、炭化物少量含む。
6層 暗灰色粘質土 炭化物微量含む。
7層 暗灰色粘質土 灰白色土塊少量、炭化物微量含む。
8層 暗灰色粘質土 灰白色土塊微量含む。
9層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
10層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
11層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
12層 暗灰色粘質土 灰白色土塊含む。
13層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
14層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
15層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
16層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
17層 青灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
18層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
19層 暗灰色粘質土 灰白色土塊少量含む。

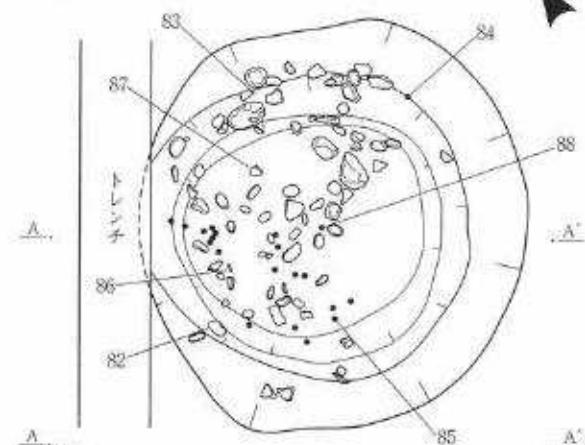
SE040



SE040
1層 暗灰色粘質土 炭化物微量に少量含む。
2層 暗灰色粘質土 炭化物多量に多量に含む。
3層 暗灰色粘質土 炭化物微量に少量含む。
4層 暗灰色粘質土 炭化物微量に少量含む。
5層 黑色粘質土 粒子粘質。
6層 暗灰色粘質土 炭化物微量に少量含む。
7層 青灰色粘質土 炭化物微量含む。



SE057



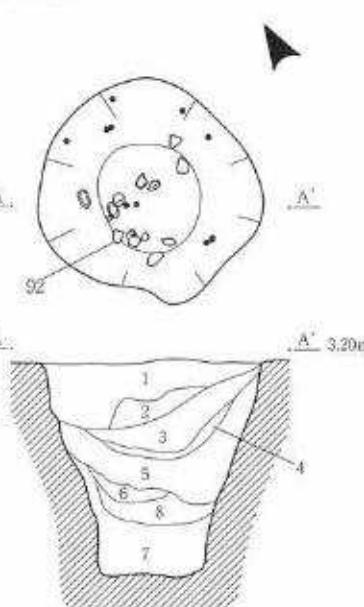
SE057

1層	褐灰色粘質土	灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
2層	青灰褐色粘質土	灰白色土粒、灰褐色土塊少量含む。
3層	暗青褐色粘質土	青灰～灰色土塊多量、炭化物多量含む。
4層	暗青灰色粘質土	炭化物微量含む。
5層	暗青褐色粘質土	青褐色土塊多量に含む。
6層	暗青褐色粘質土	灰白色土塊微量、炭化物少量含む。
7層	青褐色粘質土塊	灰褐色粘質土塊・灰褐色粘質土塊・灰白色土塊微量含む。
8層	青褐色粘質土塊・灰褐色粘質土塊	黒褐色粘質土塊の混土層
9層	青褐色粘質土	灰褐色土塊微量含む。
10層	青褐色粘質土	灰褐色土塊多量に含む。
11層	暗青褐色粘質土塊	黒褐色土塊の混土層
12層	暗青褐色粘質土	青褐色土塊微量、炭化物少量含む。
13層	青褐色粘質土	黒褐色土塊、灰白色土塊微量、鉄を少量含む。
14層	褐灰色粘質土	灰色～灰白色土塊を少量含む。
15層	褐灰色粘質土	青褐色土塊10mmを少量含む。

A' 3.20m

13層

SE064

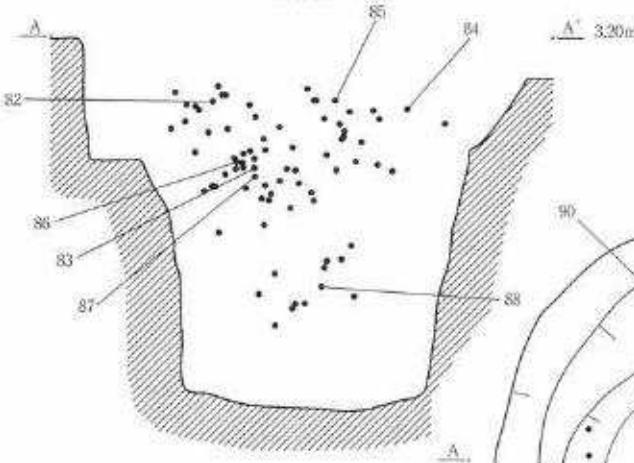


SE064

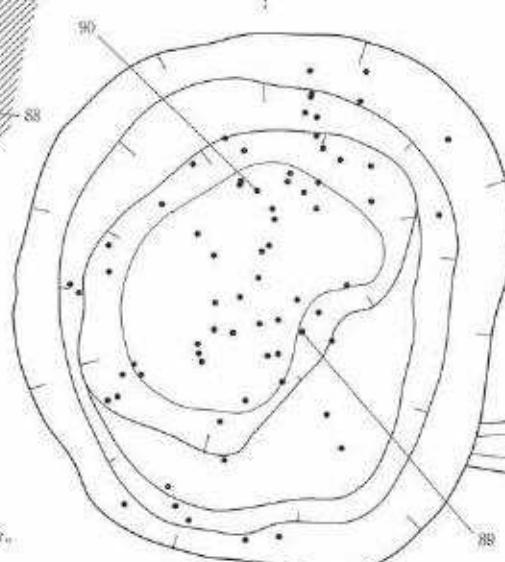
1層	黒褐色粘質土	黄褐色～灰白色土塊多量に含む。
2層	灰青褐色粘質土	灰白色土粒少量、炭化物微量含む。
3層	褐灰色粘質土	黄褐色土塊少量、炭化物少量含む。
4層	黑色泥炭	黑色泥炭
5層	褐灰色粘質土	黄褐色～灰白色土塊多量に含む。
6層	綠灰色粘質土	墨褐色土塊少量含む。
7層	綠灰色粘質土	墨褐色土塊少量含む。
8層	青褐色粘質土	墨褐色土塊微量含む。

A' 3.20m

8層



SE062

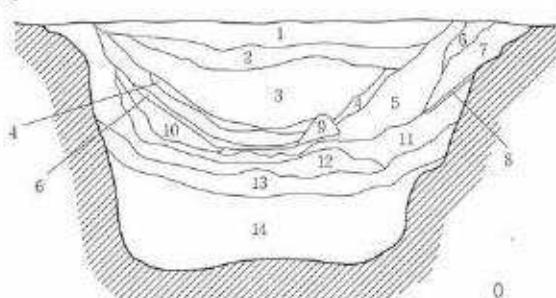


SE062

1層	灰黃褐色粘質土	灰白色土粒微量、炭化物微量含む。
2層	灰黃褐色粘質土	炭化物微量含む。
3層	褐灰色粘質土	灰白色土粒微量、炭化物少量含む。
4層	黑色炭層	
5層	灰黃褐色粘質土	灰白色土塊径10mm以上多量に含む。
6層	黑色炭層	
7層	褐灰色粘質土	炭化物微量含む。
8層	褐灰色粘質土	青褐色～灰白色土塊径10mm多量に含む。
9層	墨褐色粘質土	炭化物少量含む。
10層	褐黃褐色粘質土	灰白色土塊径10mm少量含む。
11層	褐黃褐色粘質土	灰褐色土多量、鉄少量、炭化物少量含む。
12層	褐灰色粘質土	灰白色土塊径20mm少量、炭化物少量含む。
13層	暗青褐色粘質土	灰白色土塊径10mm少量含む。
14層	暗綠灰色粘質土	黑色土塊径10mm少量含む。

A

3.20m

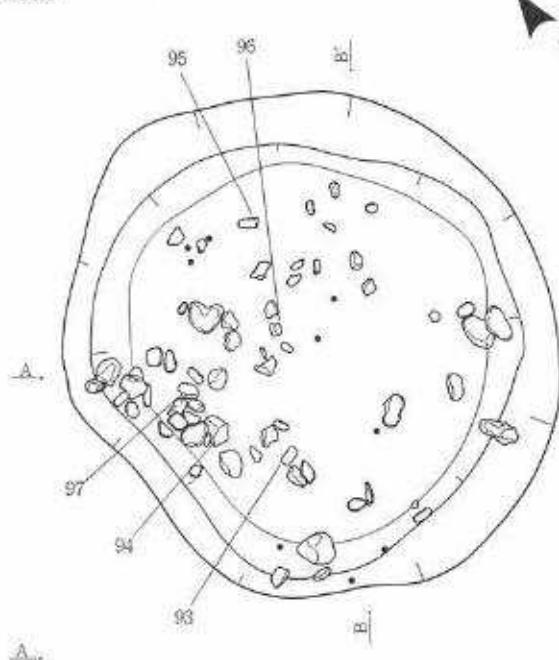


0

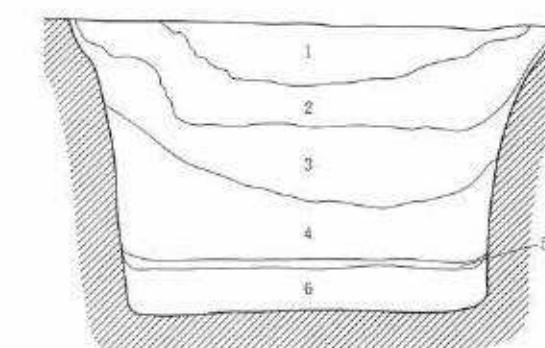
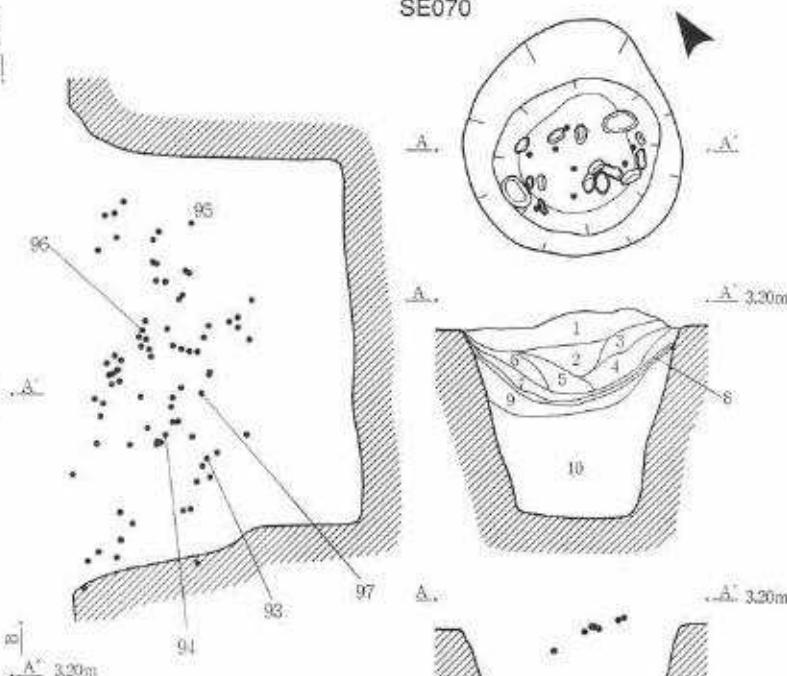
(1:40)

2m

SE068



SE070



SE070
1層 間灰色粘質土
2層 暗灰色粘質土
3層 暗灰色粘質土
4層 暗褐色粘質土
5層 暗褐色粘質土
6層 暗褐色粘質土
7層 暗褐色粘質土
8層 黒色粘質土
9層 暗褐色粘質土
10層 青灰色粘質土

黒褐色土塊、灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
灰白色土塊微量、炭化物微量含む。
灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
炭化物微量含む。
灰-灰白色土塊多量に含む。

黒褐色土塊微量含む。
暗青灰色土塊微量含む。

SE068

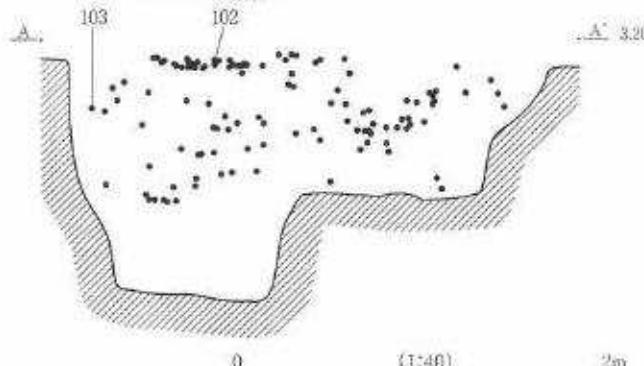
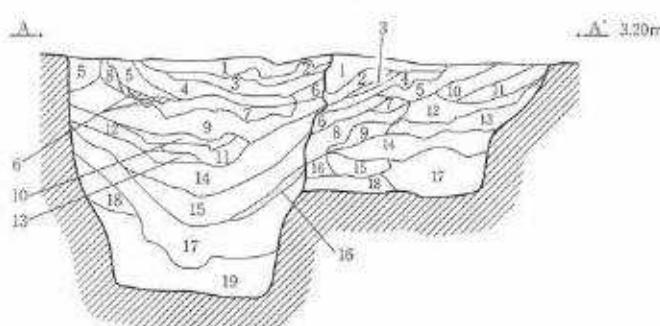
1層 緑灰色粘質土 V層土壤径10~30mm少量、炭化物少量含む。
2層 暗灰色粘質土 V層土壤径10~30mm多量、炭化物少底含む。
3層 暗灰色粘質土 炭化物微量含む。
4層 暗褐色粘質土 炭化物少量含む。
5層 黒色粘質土混入
6層 青灰色粘質土 増青灰灰色土塊を微量含む。

SE071

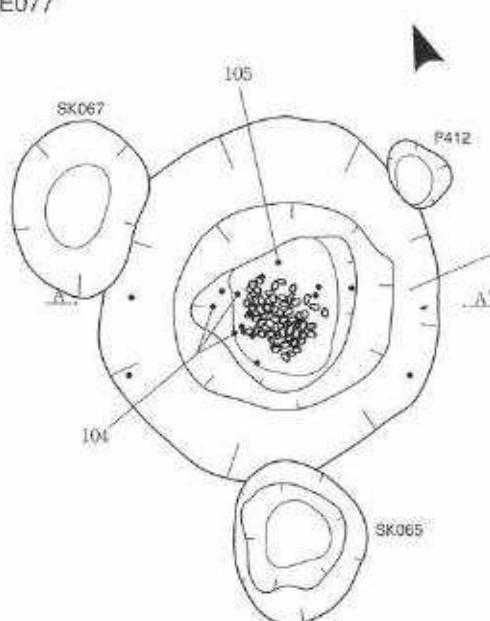
1層 暗灰色粘質土 灰白色土粒、炭化物少量含む。
2層 灰白色粘質土塊 灰褐色土塊少量含む。
3層 暗灰色粘質土 灰白色土粒少量、炭化物少量含む。
4層 暗灰色粘質土 灰褐色土壤径5mm微量、炭化物微量含む。
5層 暗灰色粘質土 灰褐色土壤径5mm微量、炭化物微量含む。
6層 灰白色粘質土塊 灰褐色土塊少量含む。
7層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量含む。
8層 灰白色粘質土塊 灰褐色土塊少量含む。
9層 暗褐色粘質土 灰白色土粒少量、炭化物微量含む。
10層 黑褐色粘質土 灰白色土粒少量、炭化物微量含む。
11層 灰褐色粘質土 灰白色土粒、炭化物微量含む。
12層 暗灰色粘質土 灰白色土粒微量含む。
13層 灰白色土壤 暗灰色土壤の混土層
14層 黑褐色粘質土 灰白色土粒少量含む。
15層 青灰色粘質土塊
16層 暗灰色粘質土 青灰灰色土塊少量含む。
17層 暗灰色粘質土 灰褐色土少量、炭化物少量、鉄を含む。
18層 青灰色粘質土塊
19層 増青灰色粘質土 黑褐色土塊少量、炭化物少量、鉄を含む。

SK107

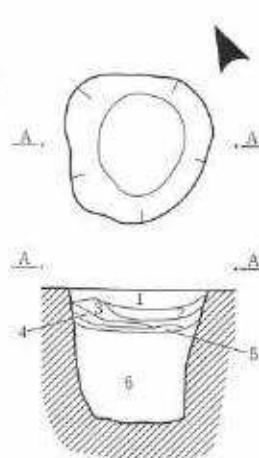
1層 暗灰色粘質土 灰白色土粒微量、炭化物少量含む。
2層 暗灰色粘質土 灰白色土粒微量、炭化物多量含む。
3層 暗灰色粘質土 灰白色土塊多量、黒褐色土少量含む。
4層 暗灰色粘質土 炭化物少量含む。
5層 灰褐色粘質土 炭化物微量含む。
6層 黑褐色粘質土 灰白色土粒少量、炭化物微量含む。
7層 暗灰色粘質土 炭化物微量含む。
8層 灰褐色粘質土 灰白色土粒微量含む。
9層 灰褐色粘質土 炭化物微量含む。
10層 灰褐色粘質土 炭化物少量含む。
11層 暗褐色粘質土 灰白色土粒微量含む。
12層 暗褐色粘質土 灰白色土粒微量含む。
13層 暗褐色粘質土 灰白色土塊微量含む。
14層 灰褐色粘質土 灰褐色土壤多量、炭化物微量含む。
15層 増灰褐色粘質土 灰白色土粒、墨色土粒微量含む。
16層 增灰褐色粘質土 灰白色土粒多量、炭化物微量含む。
17層 増灰褐色粘質土 灰白色土粒多量、炭化物少量含む。
18層 増灰褐色粘質土 灰白色土粒微量、炭化物微量含む。

SE071
SK107

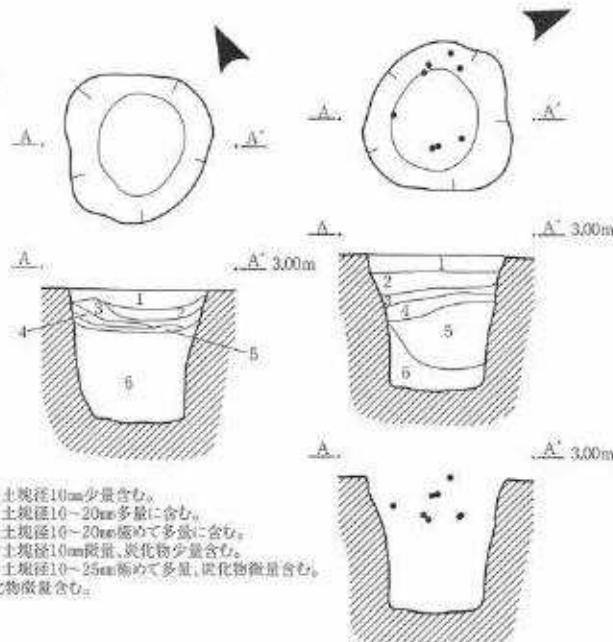
SE077



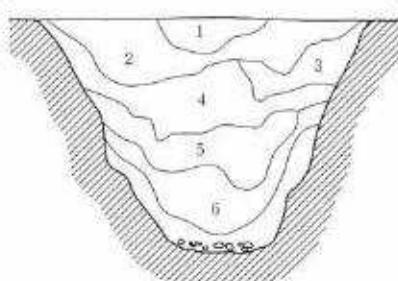
SE081



SE082

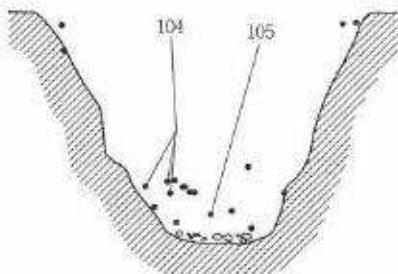
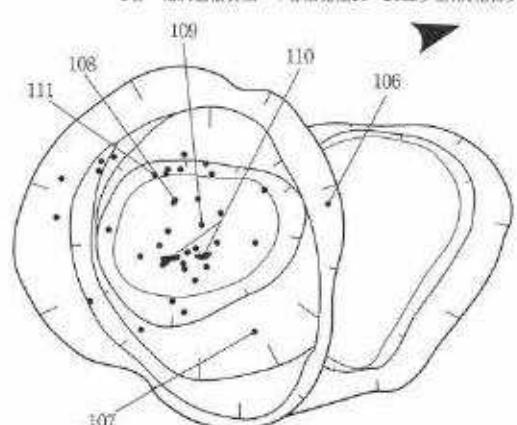


A. A' 3.20m



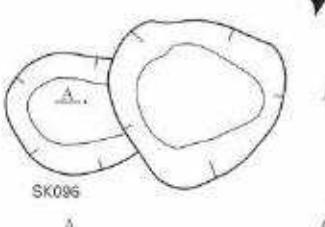
SE082
1層 暗紺色粘質土 V層土塊径10~20mm少量、炭化物多量に含む。
2層 暗紺色粘質土 V層土塊径10~30mm多量、炭化物少量含む。
3層 黒色粘質土 炭化物多量に含む。
4層 暗紺色粘質土 V層土塊径10~30mm少量含む。
5層 暗紺色粘質土 V層土塊径10~50mm多量含む。
6層 暗紺色粘質土 V層土塊径10~20mm多量、炭化物少量含む。

A. A' 3.20m

SE083
SE095

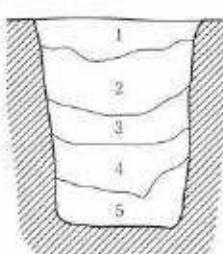
SE077
1層 鮎灰色粘質土 暗白色土塊、炭化物少量含む。
2層 灰黃褐色粘質土 暗白色土塊微量、炭化物微量含む。
3層 灰黃褐色粘質土 暗黃褐色土塊多量、炭化物少量含む。
4層 灰黃褐色粘質土 暗褐灰色土塊、灰白色土塊少量、炭化物微量含む。
5層 鮎灰色粘質土 灰白色土塊、炭化物少量含む。
6層 鮎灰色粘質土 灰白色土塊、炭化物微量含む。
7層 鮎灰色粘質土 灰白色土塊微量含む。

SE084



SE083
1層 暗灰褐色粘質土 暗層土塊径10~30mm多量、炭化物微量含む。
2層 暗灰色粘質土 球層土塊径10~100mm多量、炭化物少量含む。
3層 灰色粘質土 球層土塊径10~50mm少量、炭化物少量含む。
4層 灰色粘質土 球層土塊径10~70mm多量、炭化物少量含む。
5層 黑色粘質土 X層土壤径10~50mm多量含む。
6層 暗灰色粘質土 X層土壤径10~50mm少量含む。
7層 灰色粘質土 X層土壤径10~20mm少量、炭化物微量含む。
8層 オリーブ灰褐色粘質土

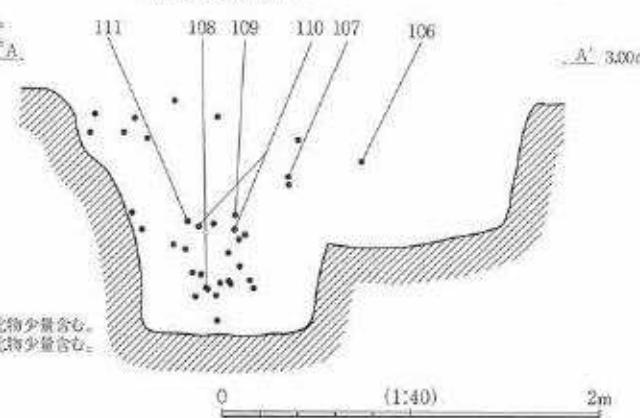
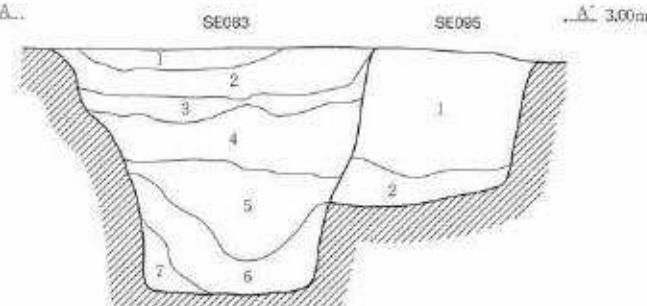
A' 3.00m



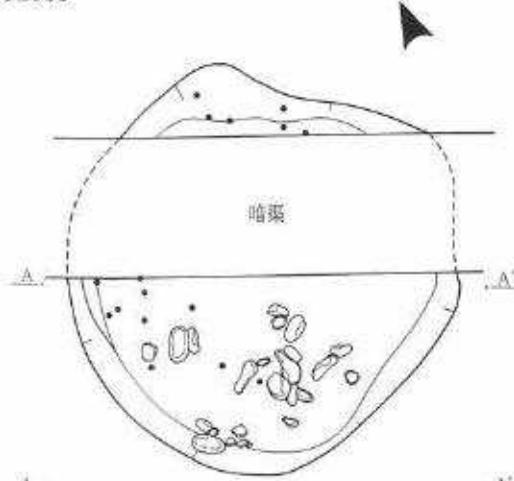
SE095
1層 暗灰色粘質土 暗層土塊径50~200mm多量、炭化物少量含む。
2層 青灰色粘質土 黑色粘質土塊、暗層土塊径50~200mm多量含む。

SE084

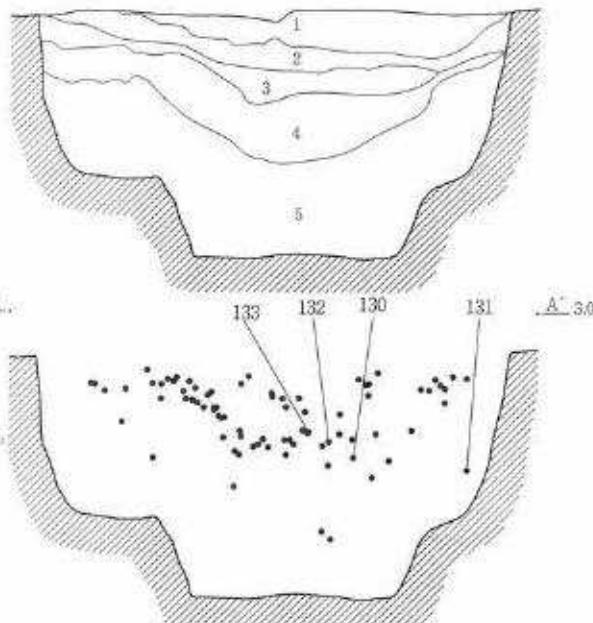
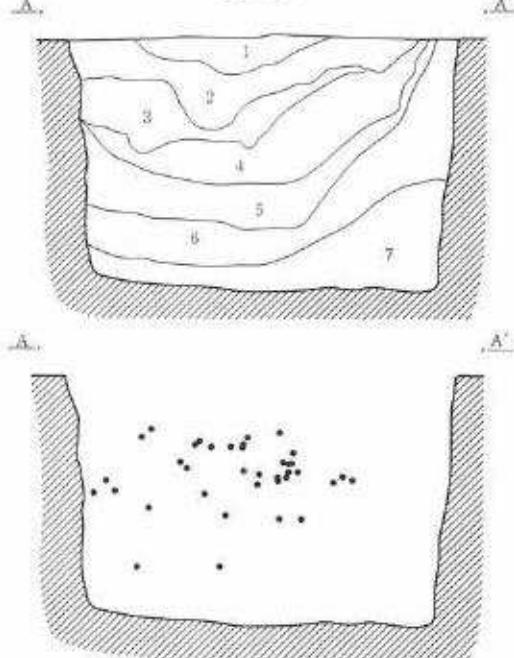
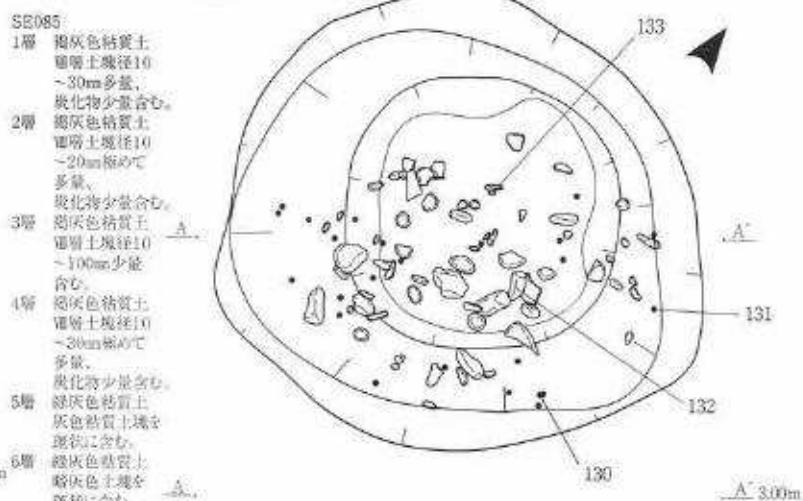
A' 3.00m

SE084
1層 灰色粘質土 暗層土塊径10~50mm多量、炭化物少量含む。
2層 灰色粘質土 暗層土塊径10~70mm多量、炭化物少量含む。
3層 暗灰色粘質土 炭化物微量多量に含む。
4層 灰色粘質土 炭化物微量含む。
5層 オリーブ灰褐色粘質土

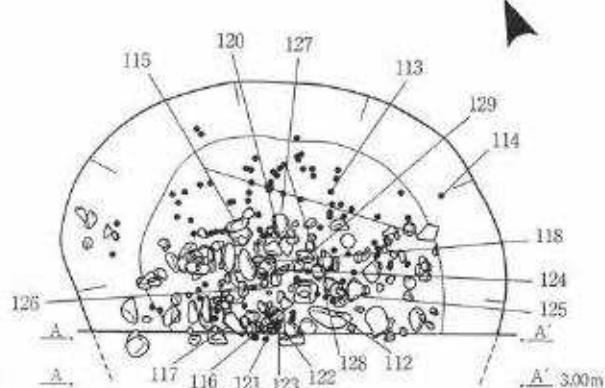
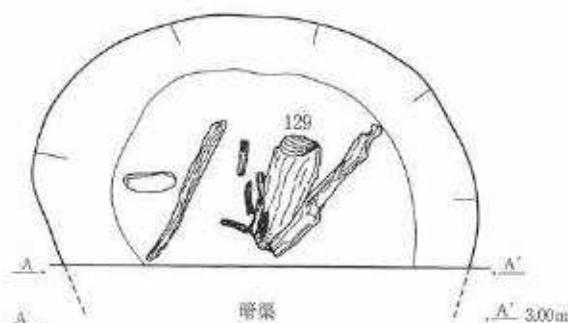
SE085



SE097

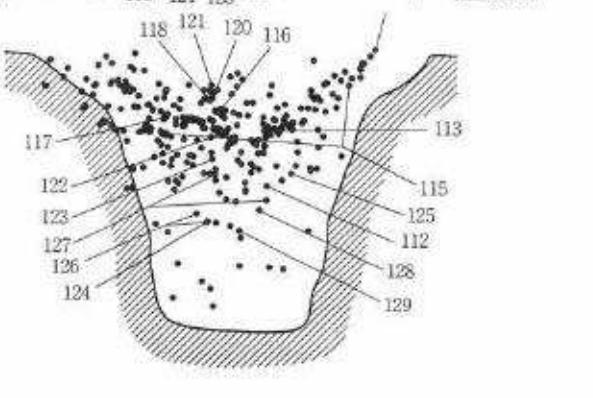


SE094



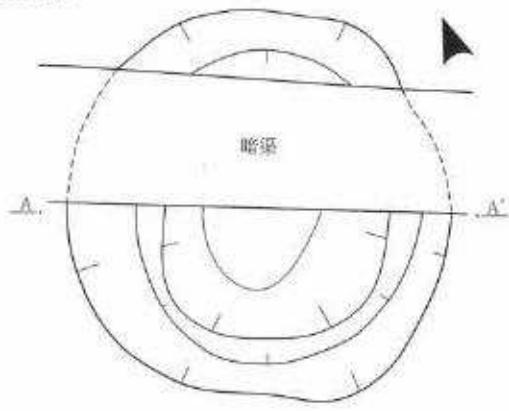
SE094

1層 鷺灰褐色粘質土
炭化物少量含む。
2層 鷺灰褐色粘質土
鶴層土塊径10~60mm少量含む。
3層 鷺灰褐色粘質土
鶴層土塊径10~20mm多量、炭化物少量含む。
4層 鷺灰褐色粘質土
鶴層土塊径10~20mm多量に含む。
5層 黒褐色粘質土
炭化物含む。



0 (1:40) 2m

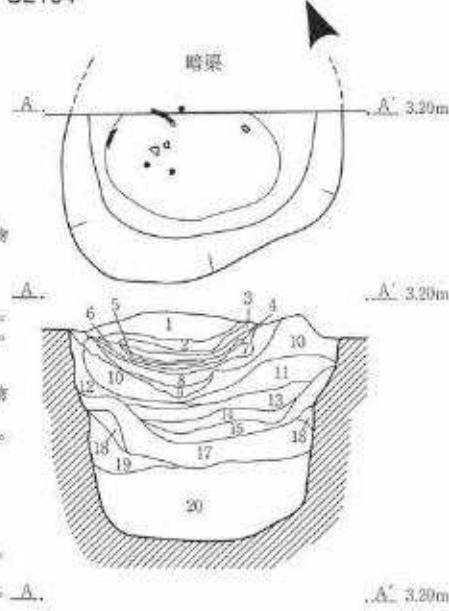
SE102



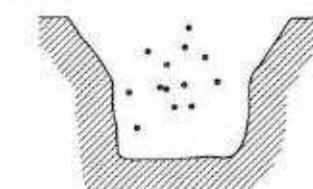
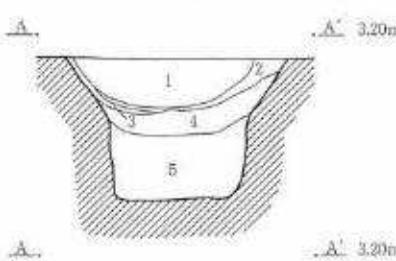
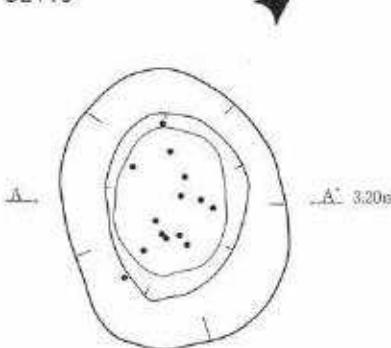
SE102

1層	灰青褐色粘質土
2層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
3層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
4層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
5層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
6層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
7層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
8層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
9層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量に含む。
10層	灰青褐色粘質土 灰白色土塊多量に含む。
11層	暗緑灰褐色粘質土 灰白色土塊多量含む。
12層	綠灰色粘質土 灰白色土塊多量含む。
13層	暗緑灰褐色粘質土 灰白色土塊少量含む。
14層	綠灰色粘質土 灰白色土塊少量含む。
15層	暗緑灰褐色粘質土 灰化物微量含む。

SE104



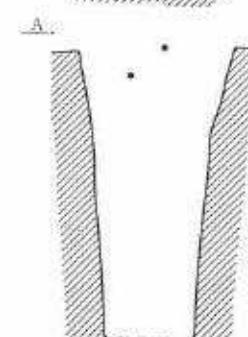
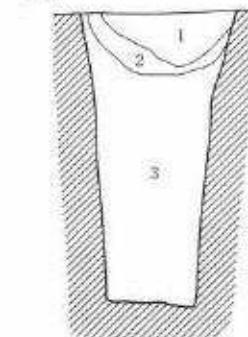
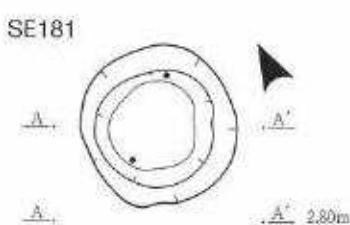
SE110



SE110

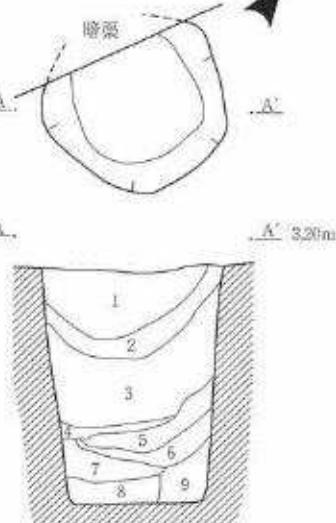
- 1層 灰褐色粘質土 炭化物多量に含む。
- 2層 灰青褐色粘質土 灰白色土塊少量含む。
- 3層 黑色炭層
- 4層 褐褐色粘質土 灰白色土塊多量、炭化物少量含む。
- 5層 灰青褐色粘質土 灰白色土塊微量、炭化物少量含む。

SE181



- 1層 灰褐色粘質土
炭化物微量含む。
- 2層 青灰色粘質土
明青灰色土塊径1~20mm少量、移を含む。
- 3層 青灰色粘質土
明青灰色土塊径10mm少量、炭化物微量含む。
- 4層 オリーブ灰色粘質土
青灰色土塊多量に含む。
- 5層 暗青灰色粘質土
青灰色土塊少量、炭化物微量含む。
- 6層 暗灰色粘質土
青灰色土塊径10mm多量に含む。
- 7層 墓者灰色粘質土
青灰色土塊少量、炭化物多量に含む。
- 8層 灰褐色粘質土
炭化物少量含む。
- 9層 暗青灰色粘質土
炭化物少量含む。

SE229

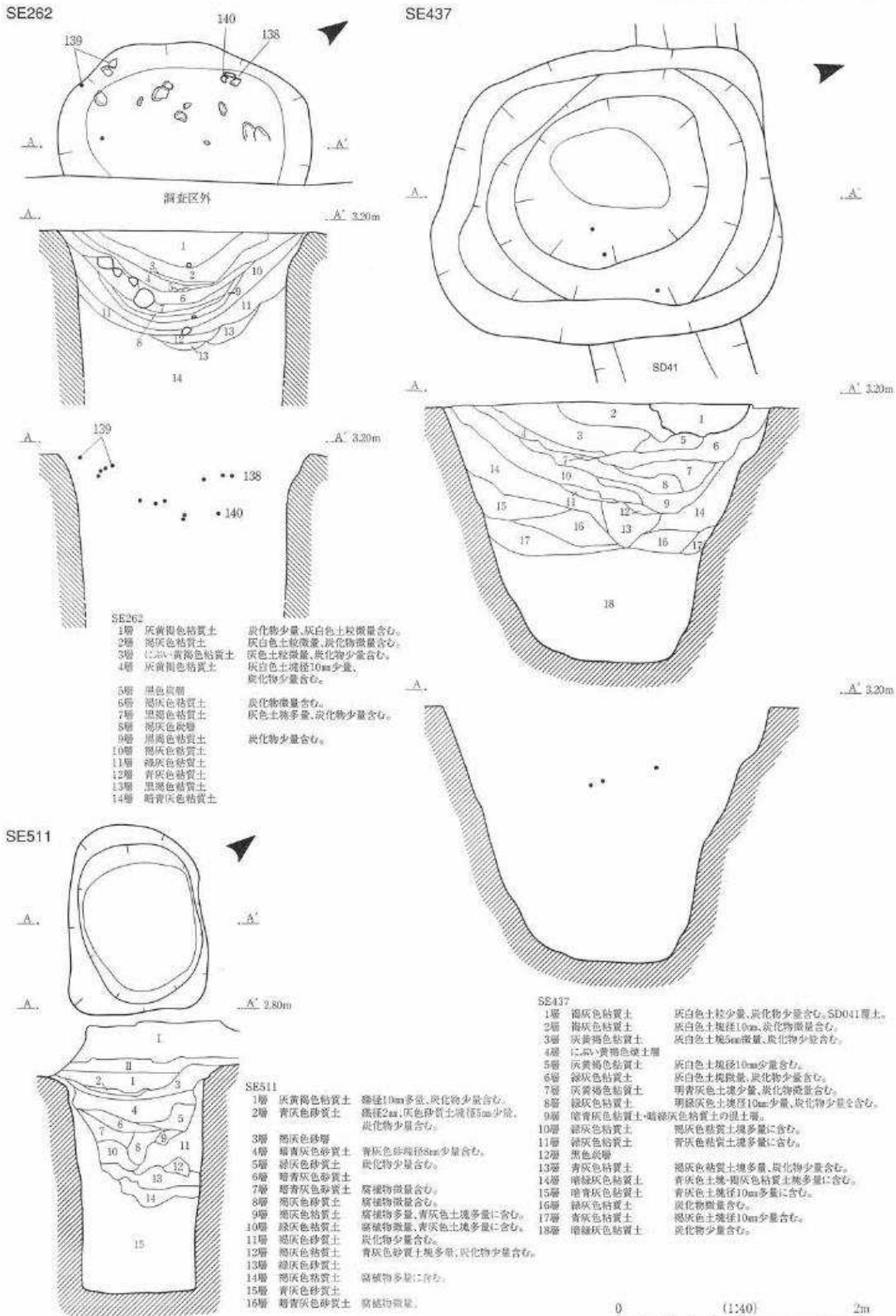


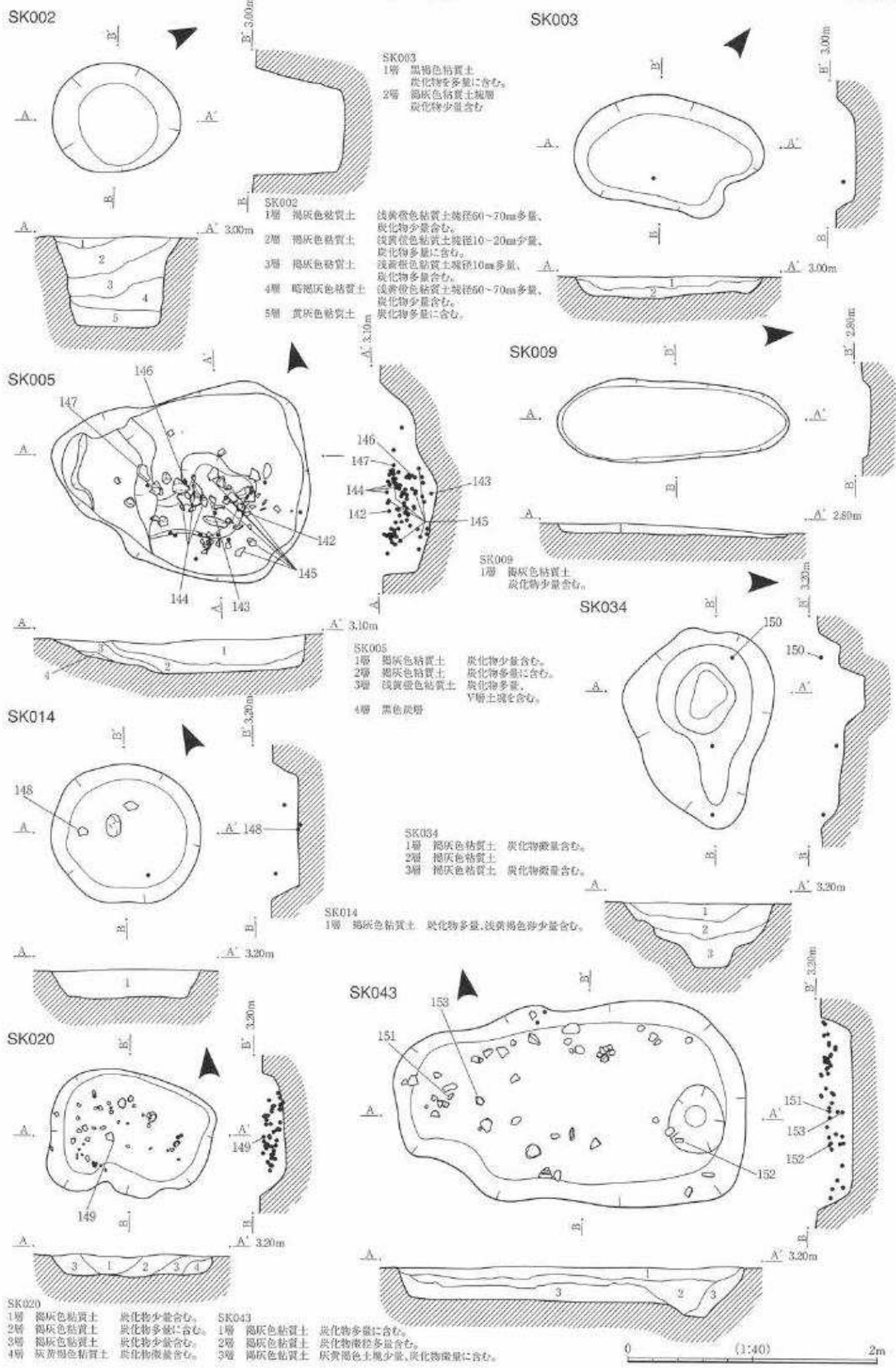
- 1層 灰褐色粘質土
炭化物微量含む。
- 2層 青灰色粘質土
明青灰色土塊径1~20mm少量、移を含む。
- 3層 青灰色粘質土
明青灰色土塊径10mm少量、炭化物微量含む。
- 4層 オリーブ灰色粘質土
青灰色土塊多量に含む。
- 5層 暗青灰色粘質土
青灰色土塊少量、炭化物微量含む。
- 6層 暗灰色粘質土
青灰色土塊径10mm多量に含む。
- 7層 墓者灰色粘質土
青灰色土塊少量、炭化物多量に含む。
- 8層 灰褐色粘質土
炭化物少量含む。
- 9層 暗青灰色粘質土
炭化物少量含む。

0

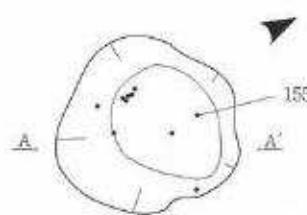
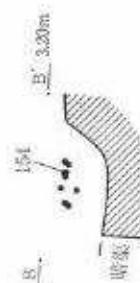
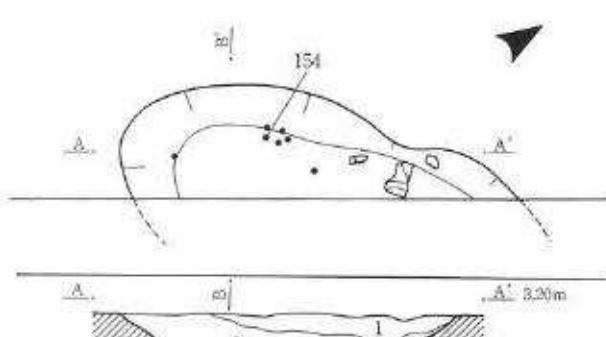
(1:40)

2m

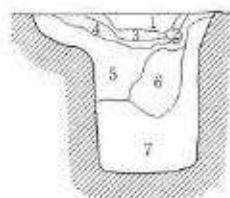




SK054



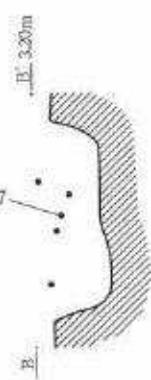
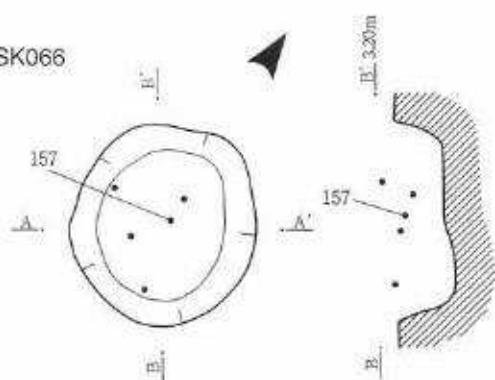
A-A' 3.20m



SK059
1層 暗灰色粘質土
2層 暗灰色粘質土
3層 暗灰色粘質土
4層 灰黃褐色粘質土
5層 暗灰色粘質土
6層 黒色粘質土
7層 灰色砂質土

灰白色土塊、炭化物少量含む。
灰白色土塊少量、炭化物微量に含む。
灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
灰白色土塊少量、炭化物少量に含む。
灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
青灰色シルトと暗褐色シルトの混合土。
炭化物微量含む。

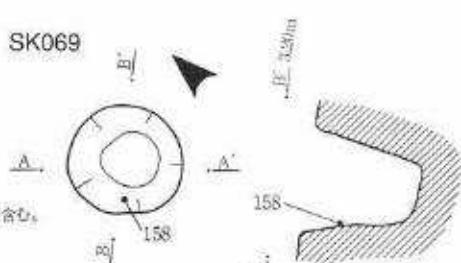
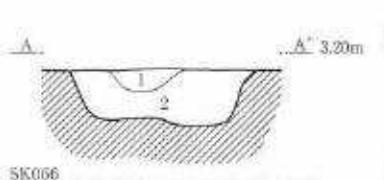
SK066



SK059
1層 暗灰色粘質土
2層 暗灰色粘質土
3層 暗灰色粘質土
4層 灰黃褐色粘質土
5層 暗灰色粘質土
6層 黒色粘質土
7層 灰色砂質土

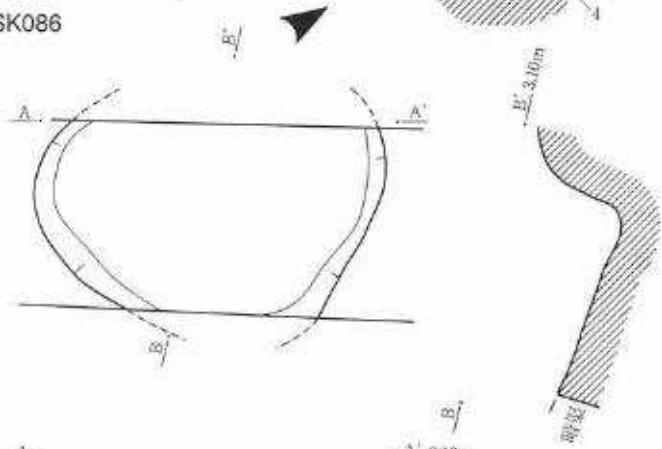
灰白色土塊、炭化物少量含む。
灰白色土塊少量、炭化物微量に含む。
灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
灰白色土塊少量、炭化物少量に含む。
灰白色土塊多量、炭化物微量含む。
青灰色シルトと暗褐色シルトの混合土。
炭化物微量含む。

SK069



SK069
1層 暗褐色粘質土 白色土塊少量、炭化物少量含む。
2層 暗褐色粘質土 白色土塊少量、炭化物少量含む。
3層 黒色粘質土
4層 暗褐色粘質土 白色土塊
5層 黑色粘質土

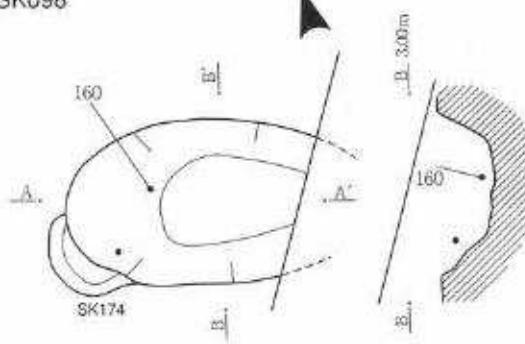
SK086



SK086

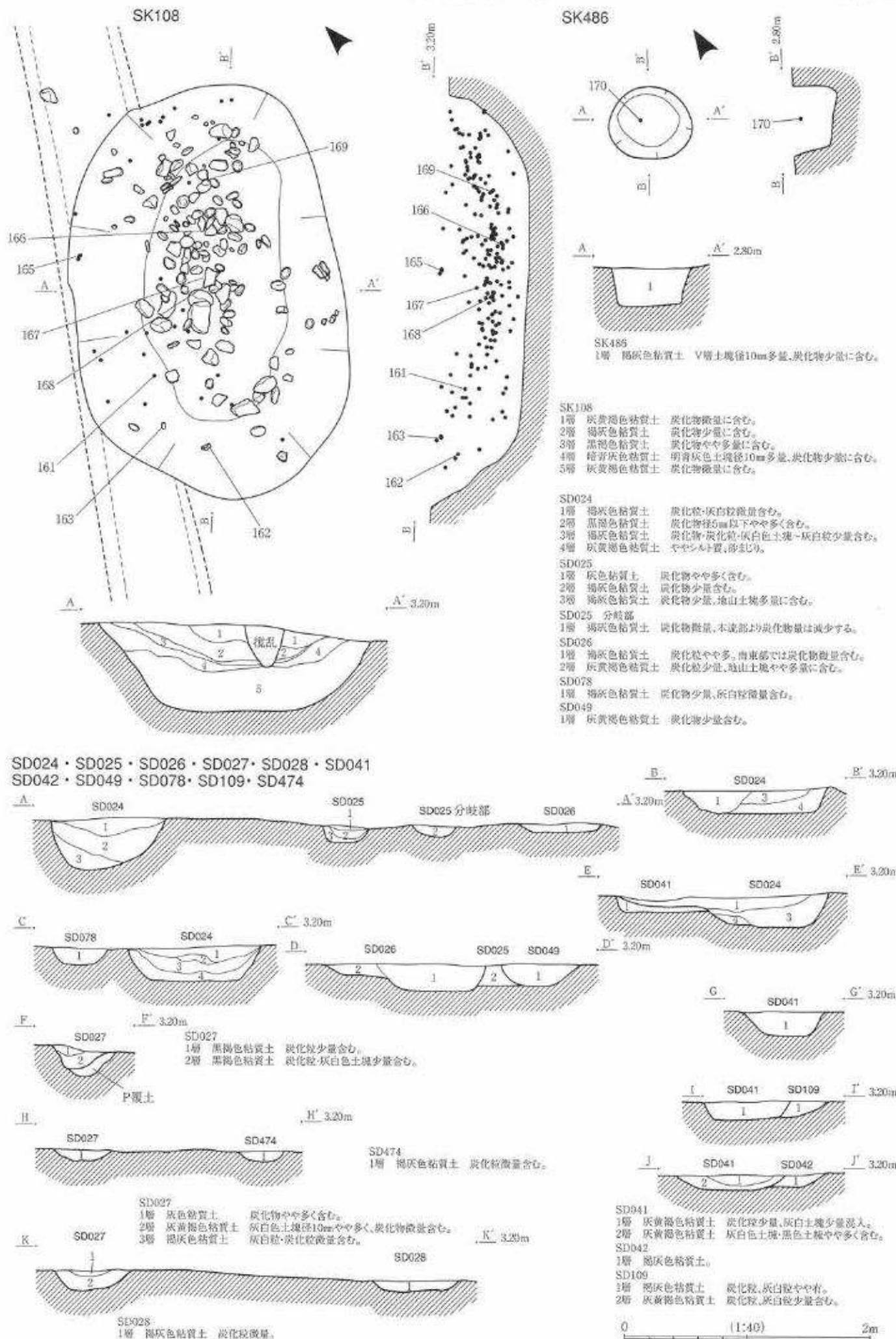
1層 灰色粘質土 廃化物多量に含む。
2層 灰色粘質土 廃化物微量含む。

SK098

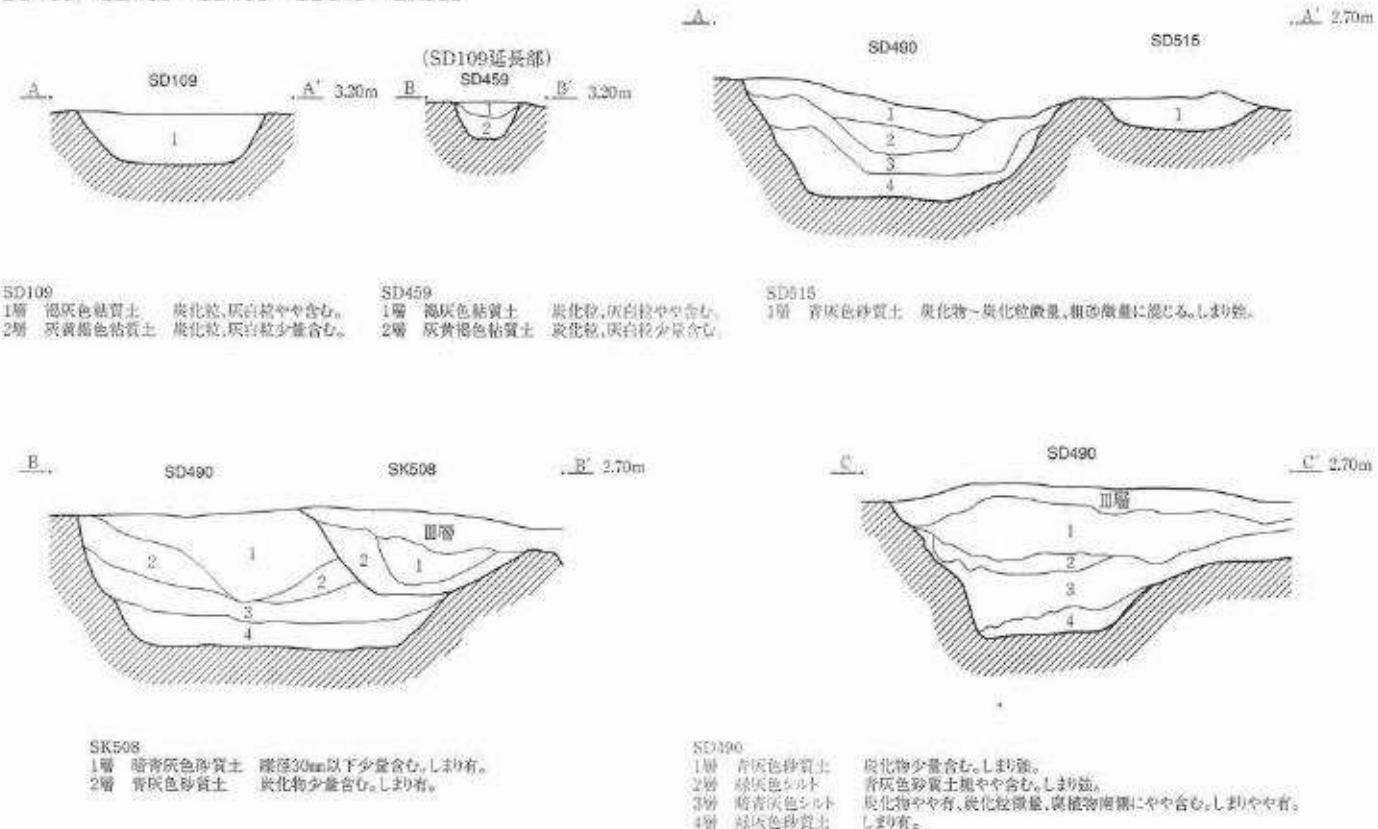


SK098
1層 黒褐色粘質土 V層土塊径10mm少量、炭化物少量に含む。
2層 暗灰色粘質土 V層土塊径10~20mm多量、炭化物多量に含む。

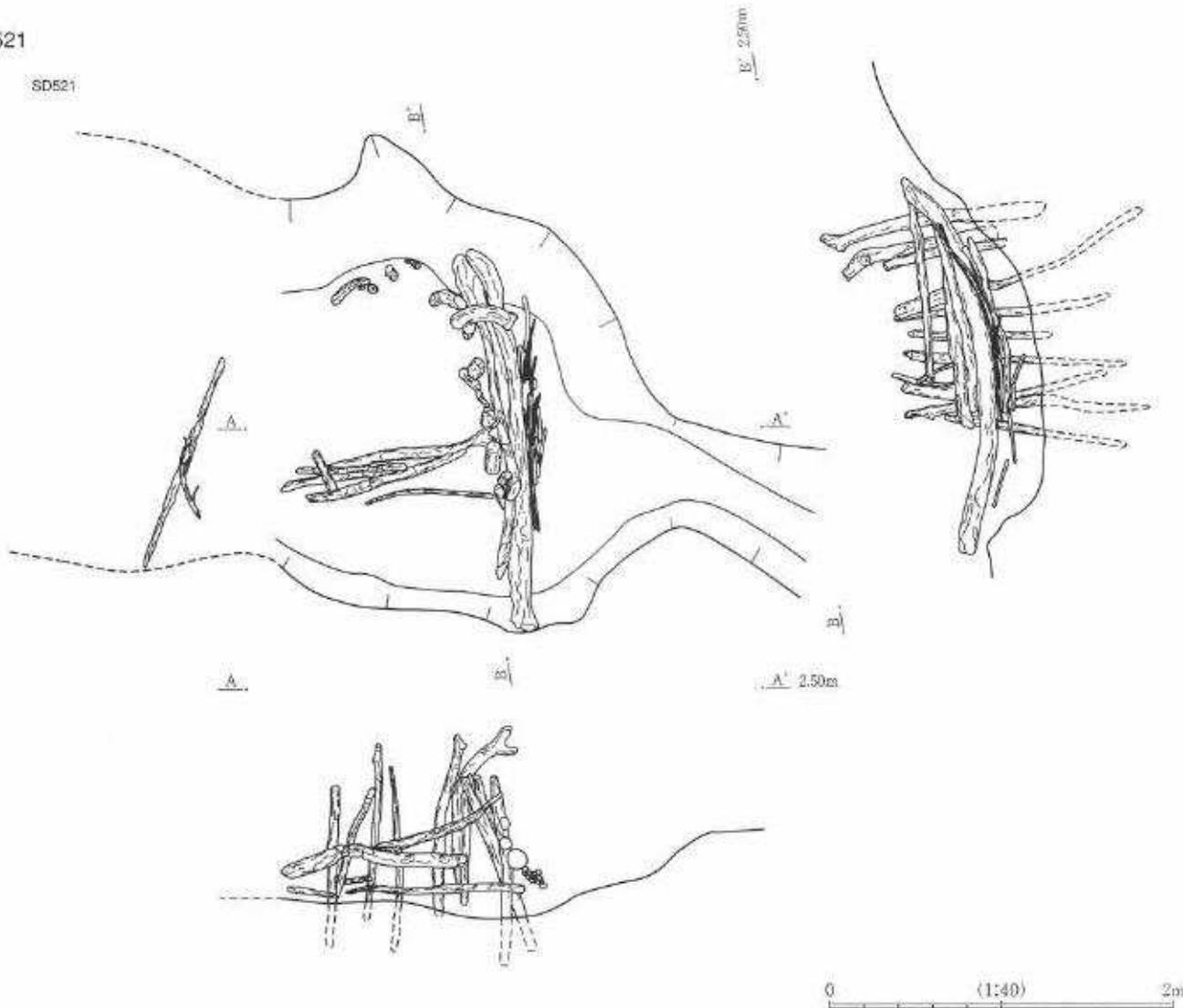
0 (1:40) 2m

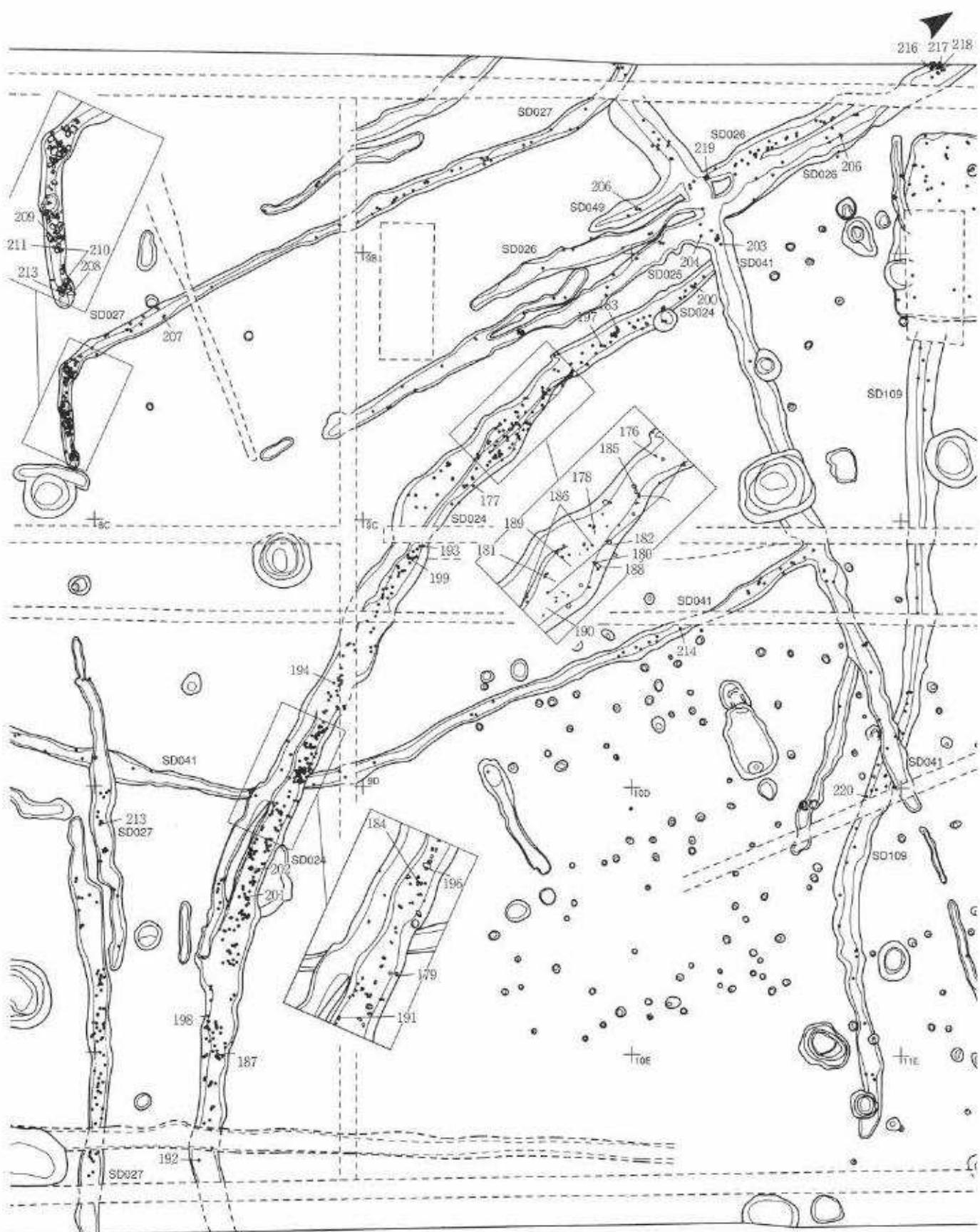


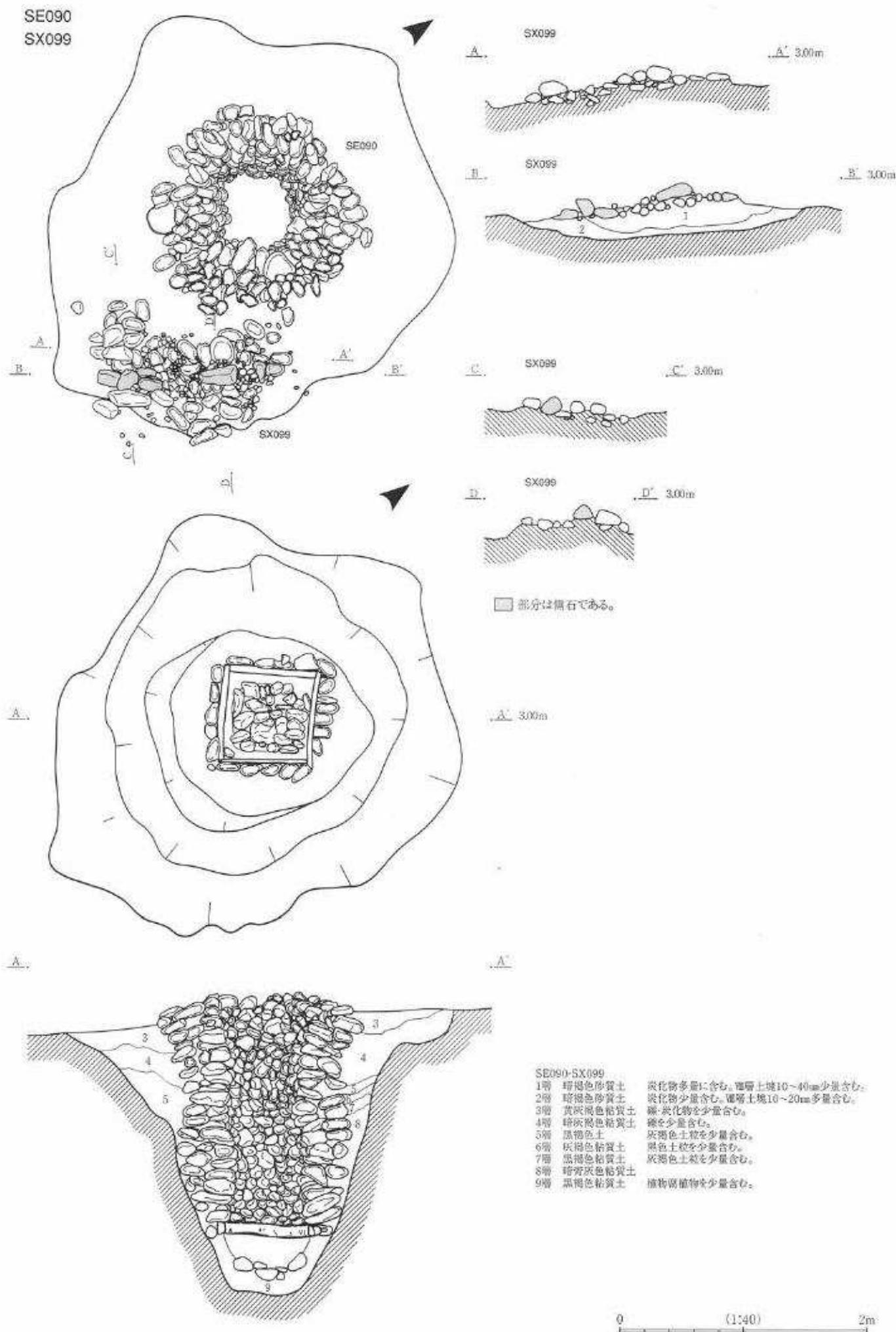
SD109・SD459・SD490・SD515・SK508



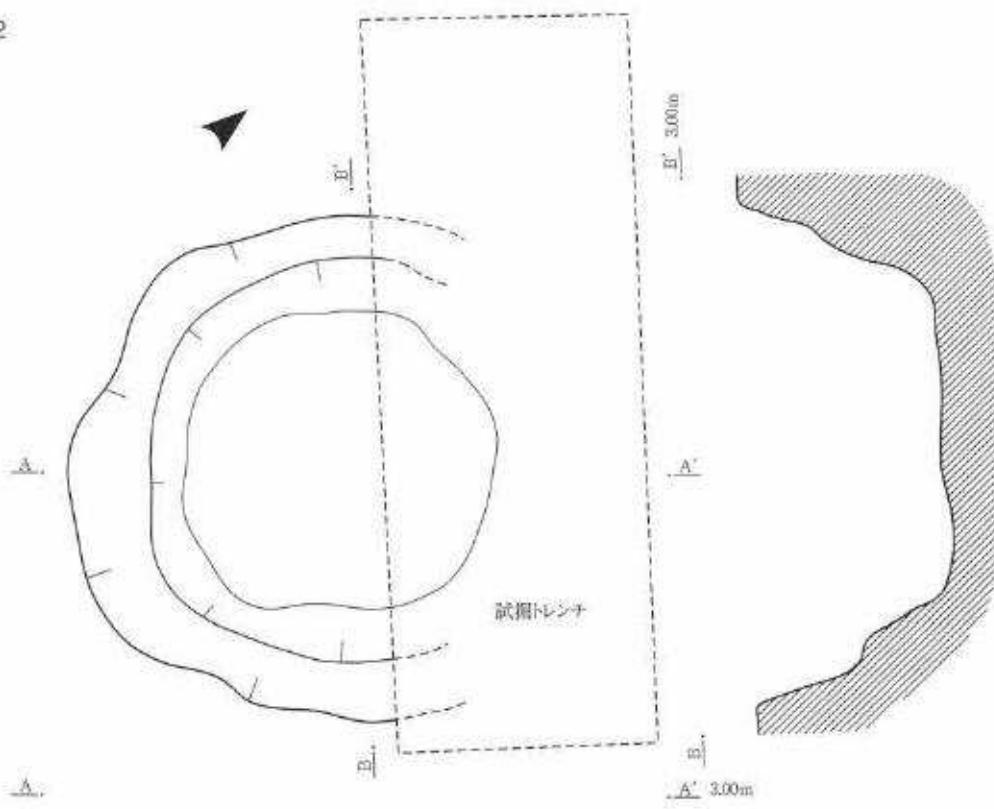
SD521







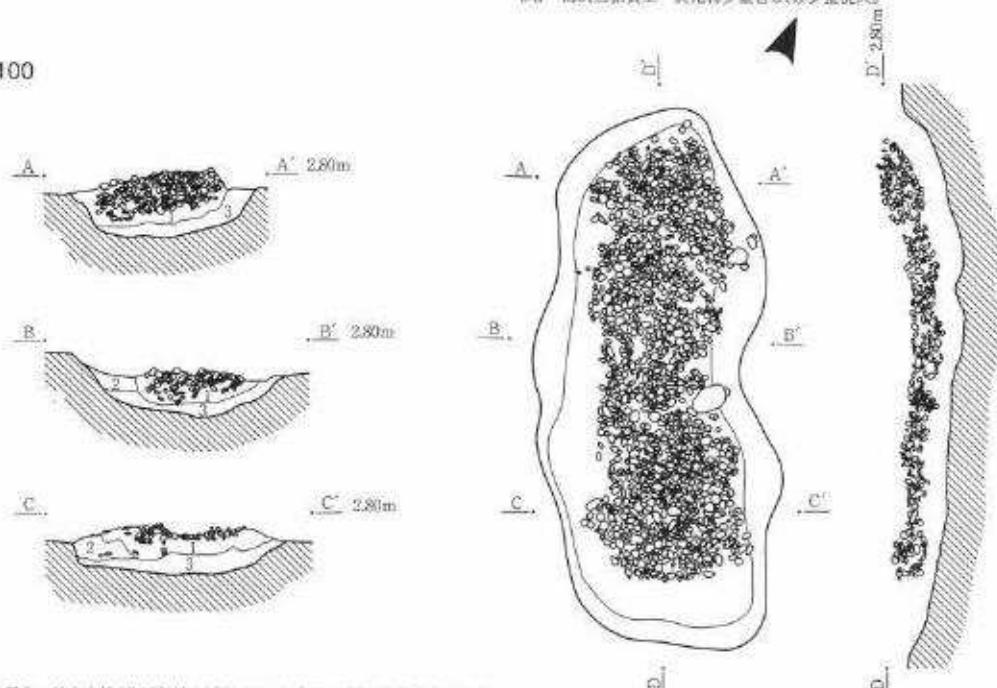
SE092



SE092

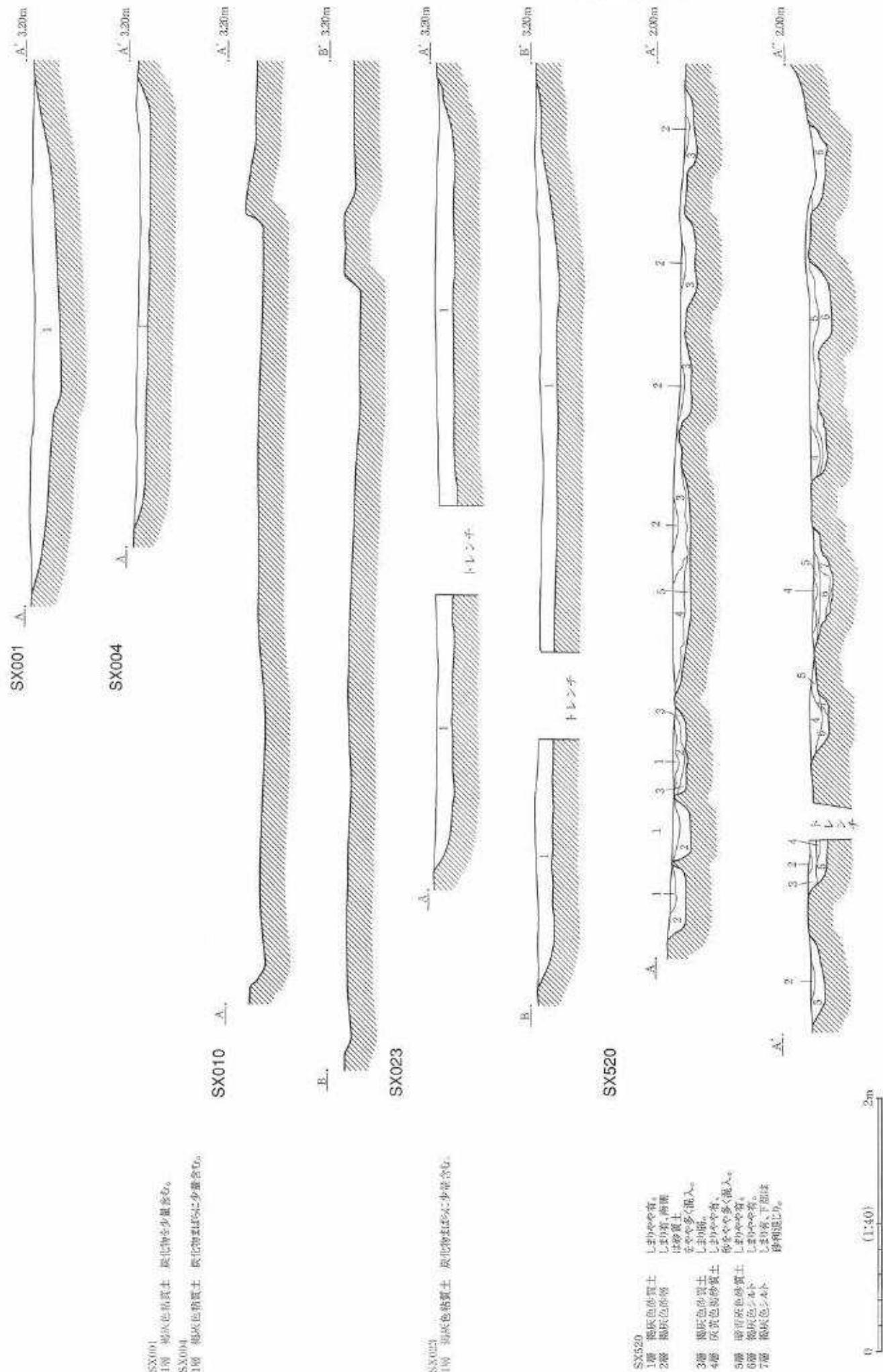
1, 2層は人為的な堆土。
 1層 濁灰色粘質土 地山土塊径10cm~20cm多量に含む炭化物および少量含む。
 2層 濁灰色粘質土 地山土塊(黄色シルト)径10cm~15cm多量に含む、砂混入。
 3層 濁灰色粘質土 炭化物多量に含む、地山土塊少量含む(径10~30mm)。
 4層 濁灰色粘質土 砂混入、炭化物少量化。
 5層 濁灰色粘質土 炭化物少量化含む、砂多量に混入。
 6層 濁灰色粘質土 炭化物少量含む、砂少量混入。

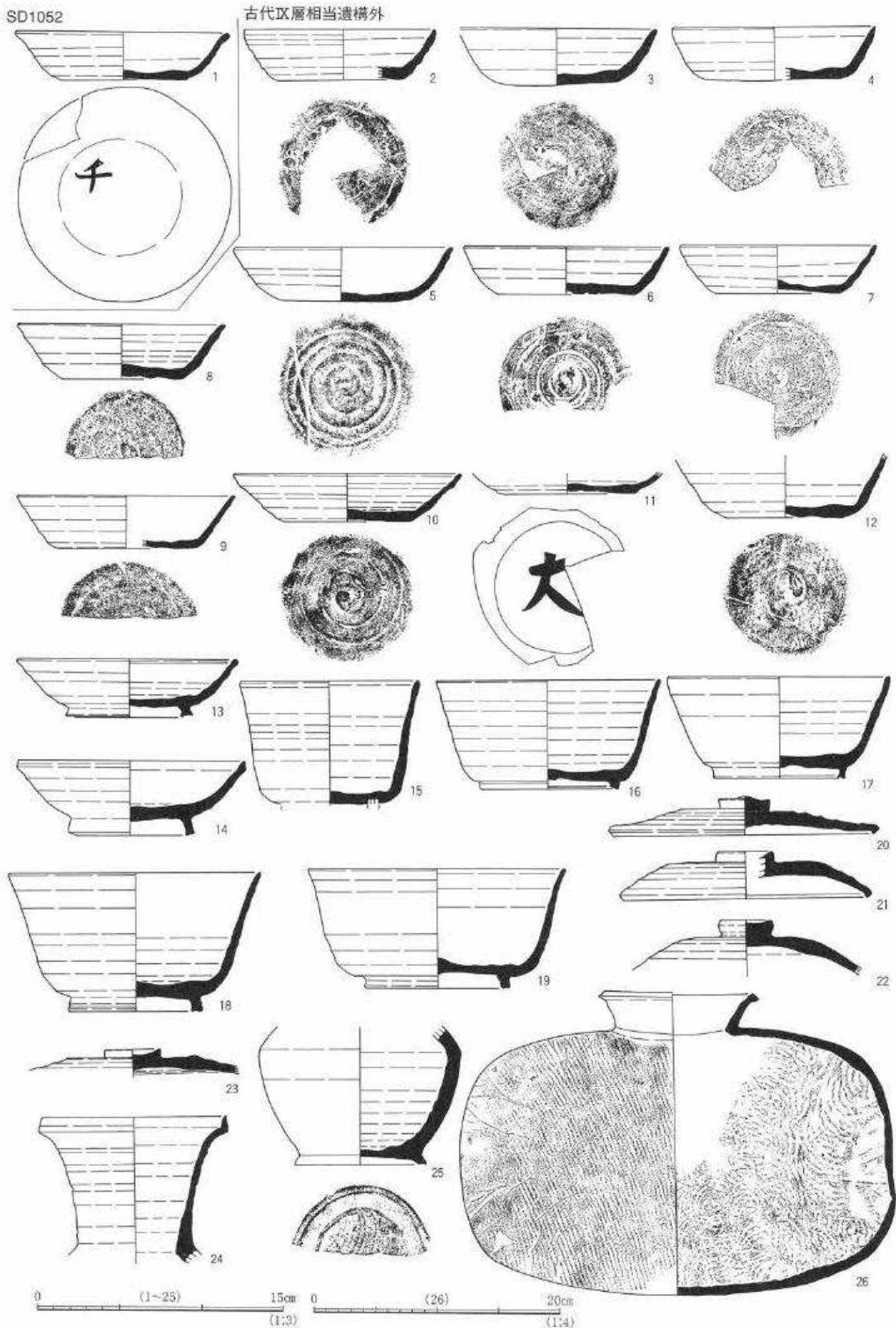
SX100



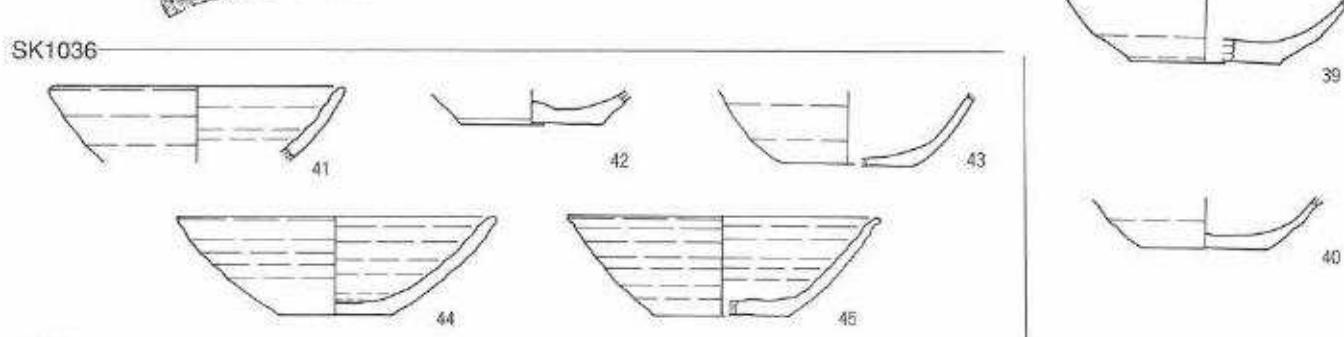
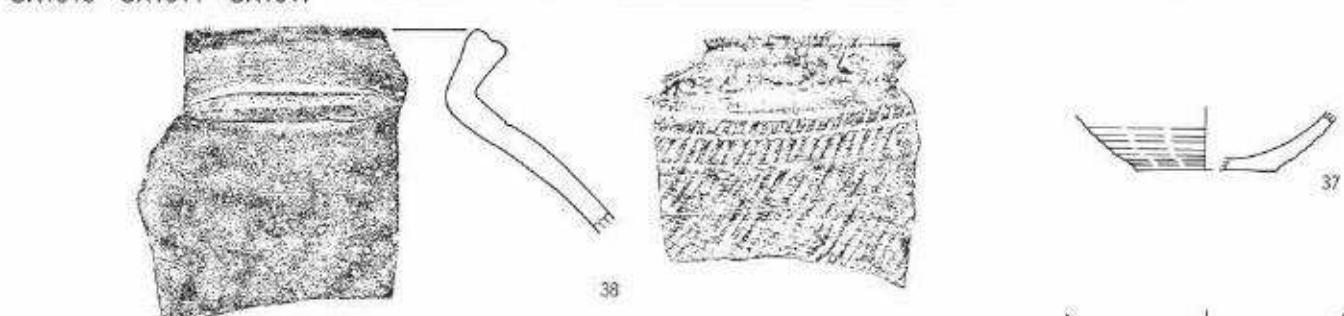
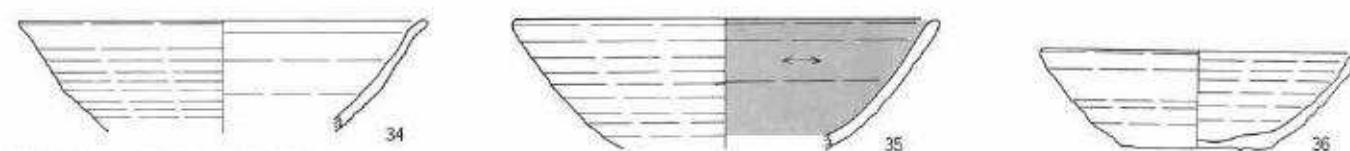
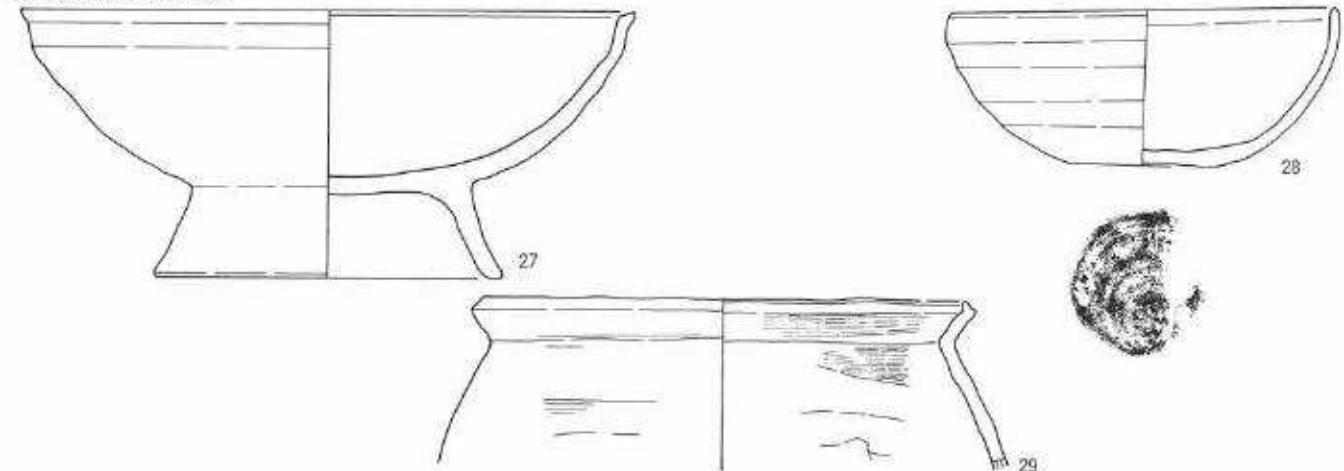
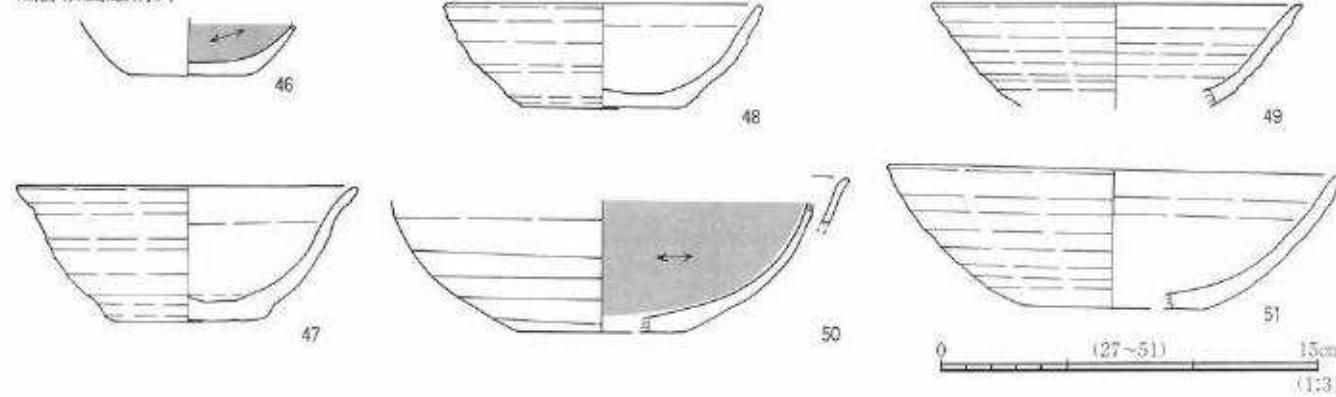
SX100

1層 褐灰粘質土 地山土塊(黄灰色粘土)径10~30mm多量に含む、炭化物少量含む。
 2層 褐灰粘質土 地山土塊(黄灰色粘土)径30~50mm多量に含む、炭化物少量含む。
 3層 褐灰色粘質土 川砂多量に混入。

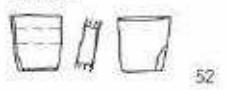




古代IX層相当遺構外

古代
Ⅷ層相当遺構外

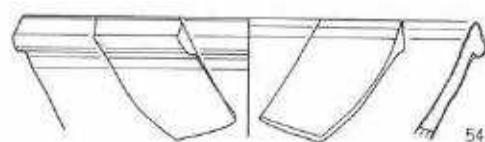
SB529・SB531



52



53



54

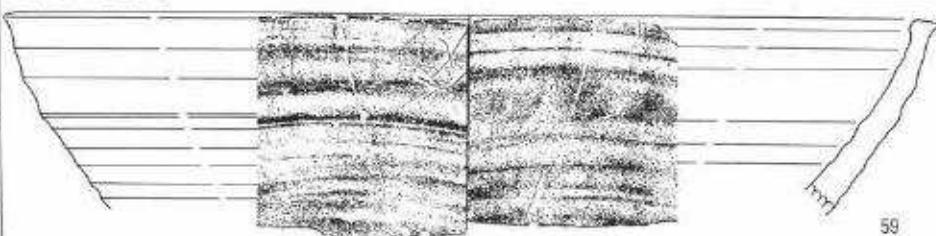


55

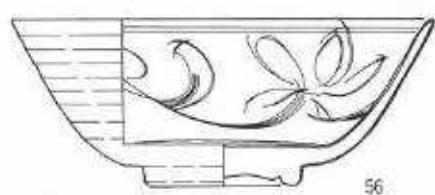
SE017・SE019



SE021・SE040



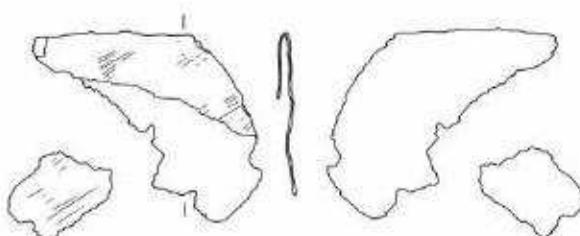
59



56



57



60

SE046



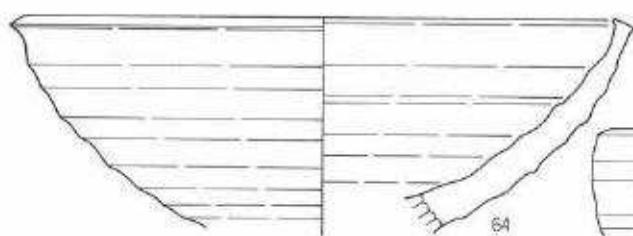
61



62



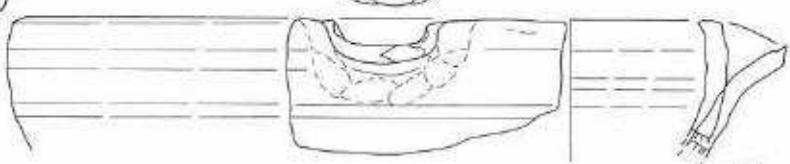
63



64



65



66



66



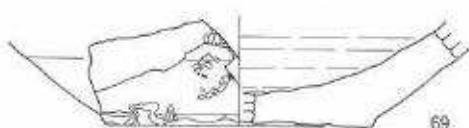
66



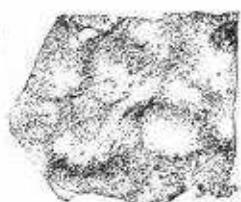
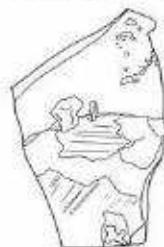
67



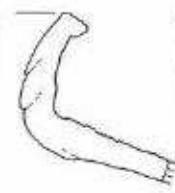
68



69

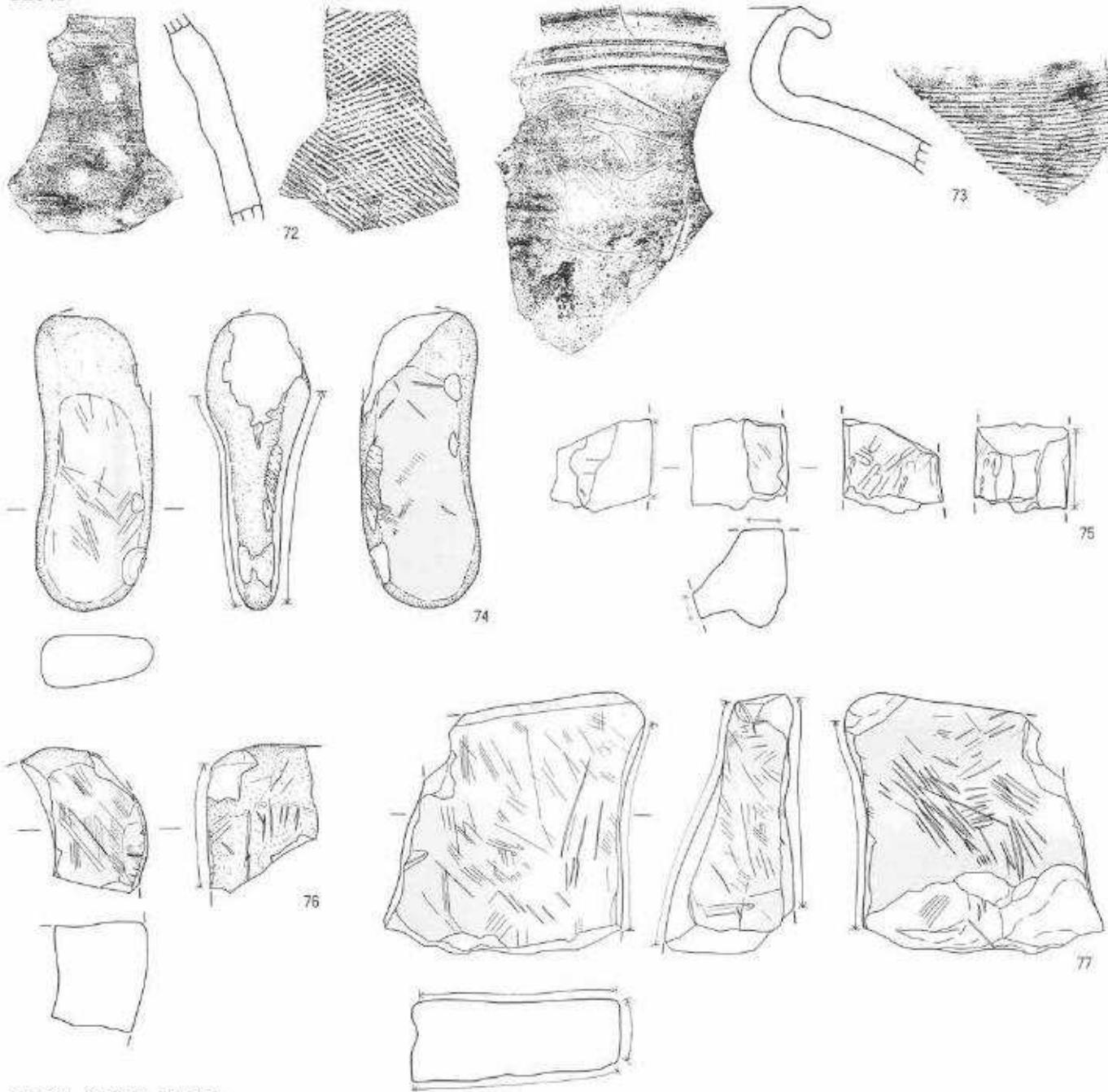


71

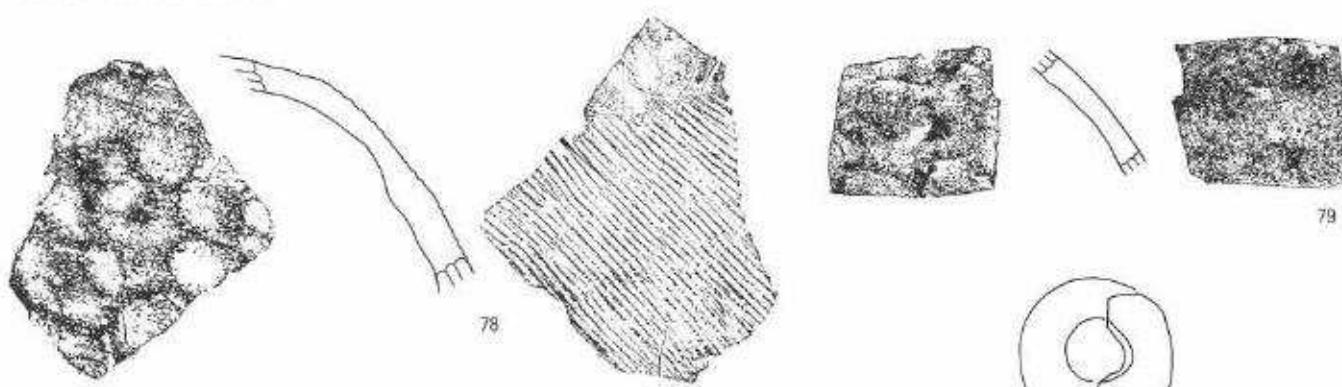


0 (52~70) 15cm
(1:3)

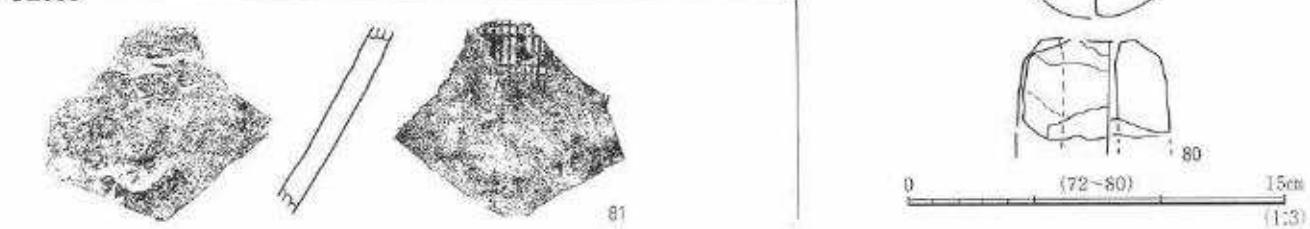
SE046



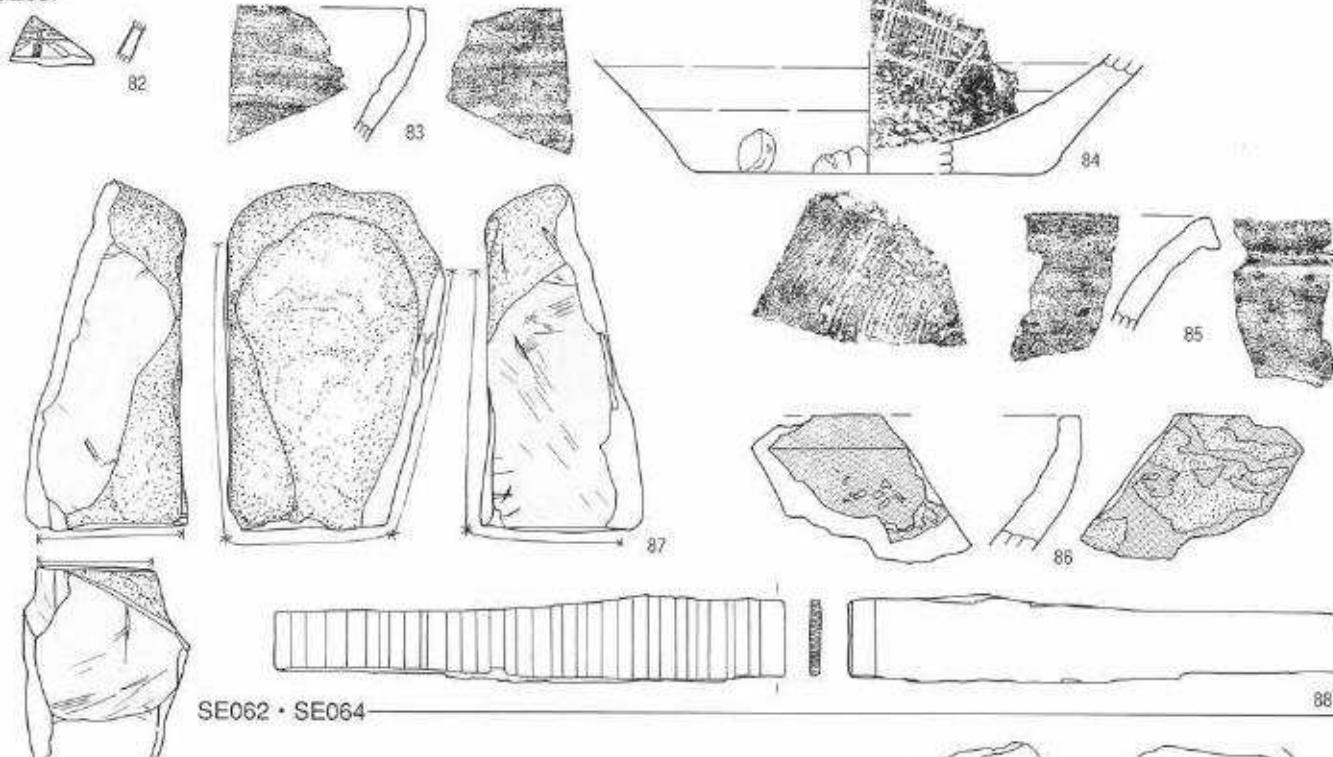
SE047・SE052・SE053



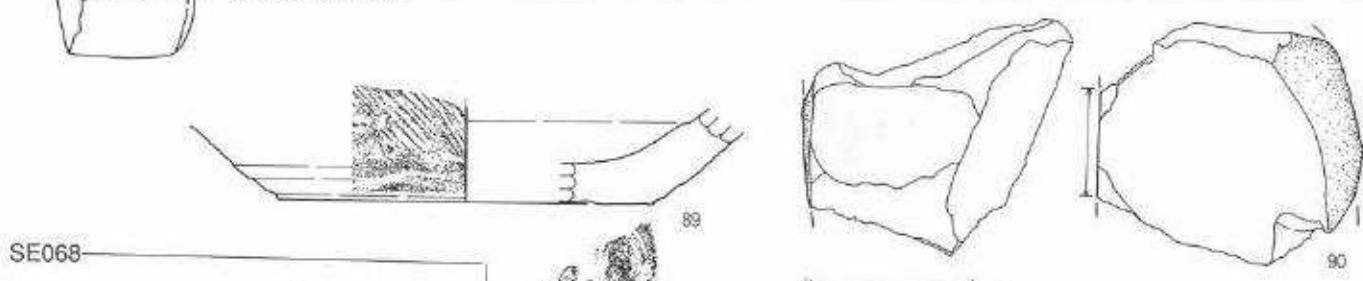
SE055



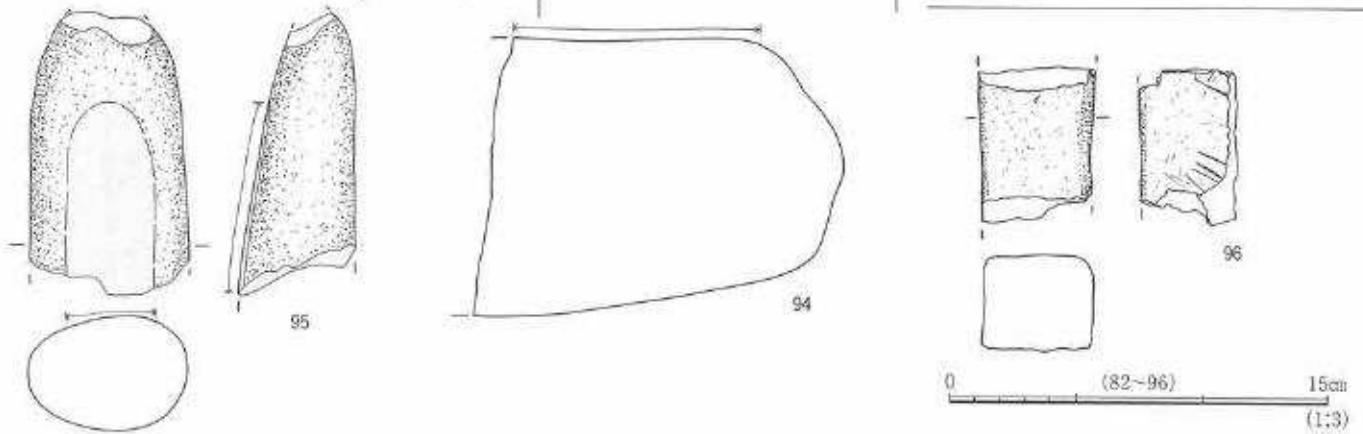
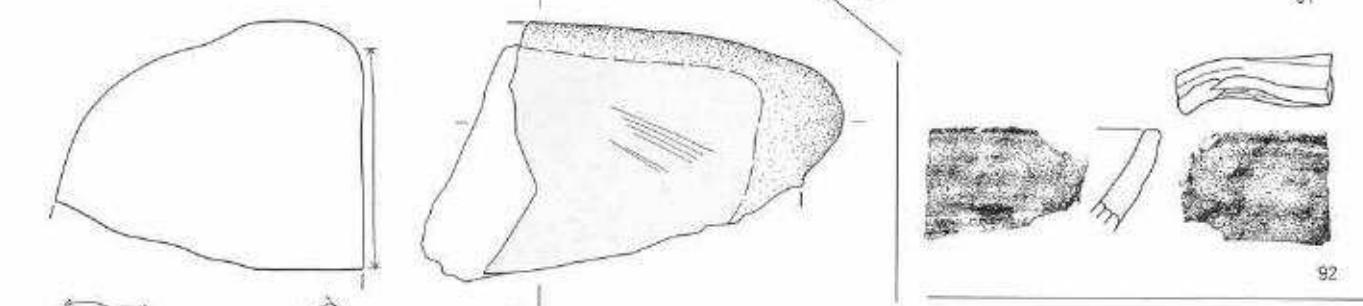
SE057



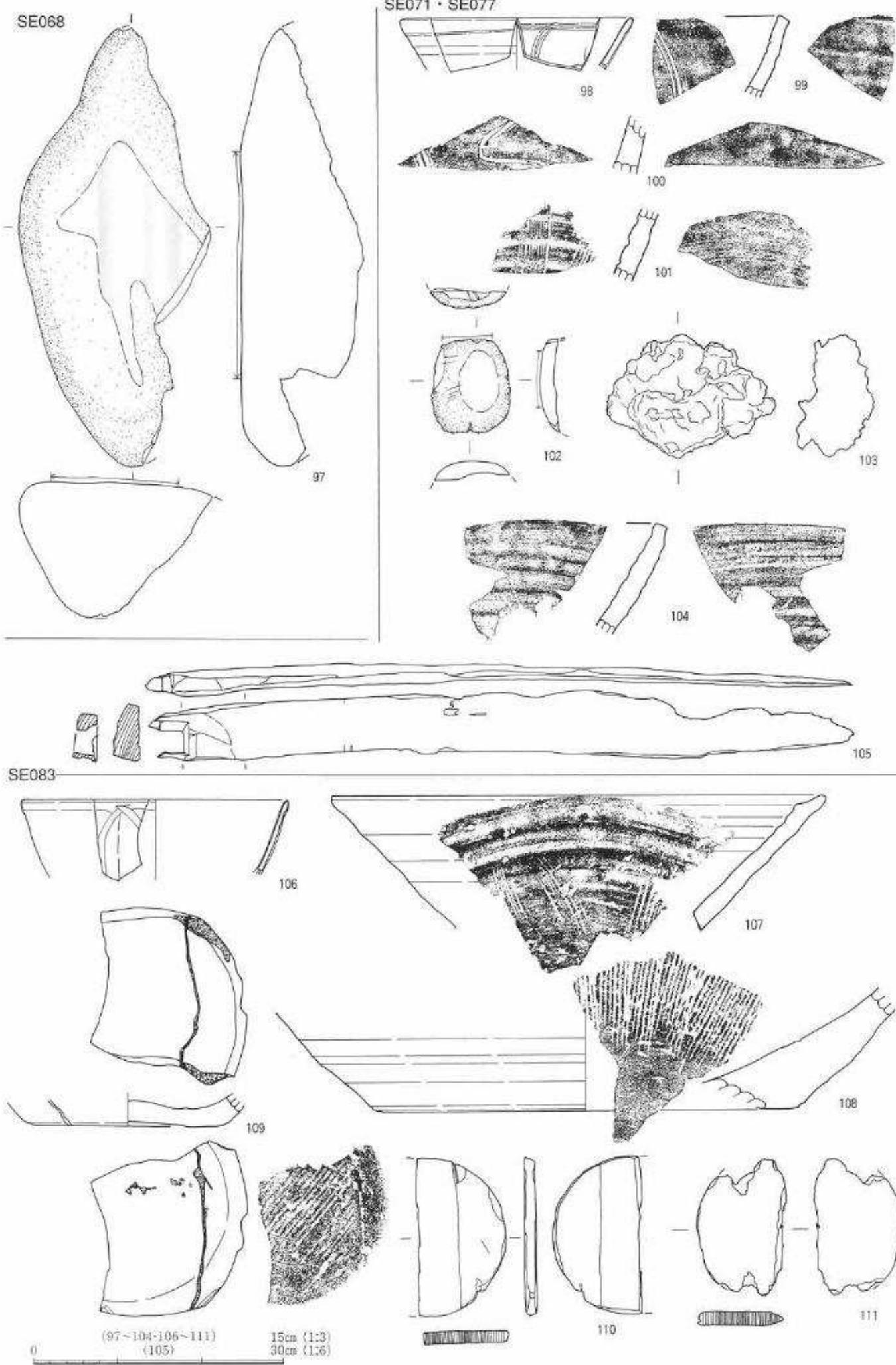
SE062・SE064

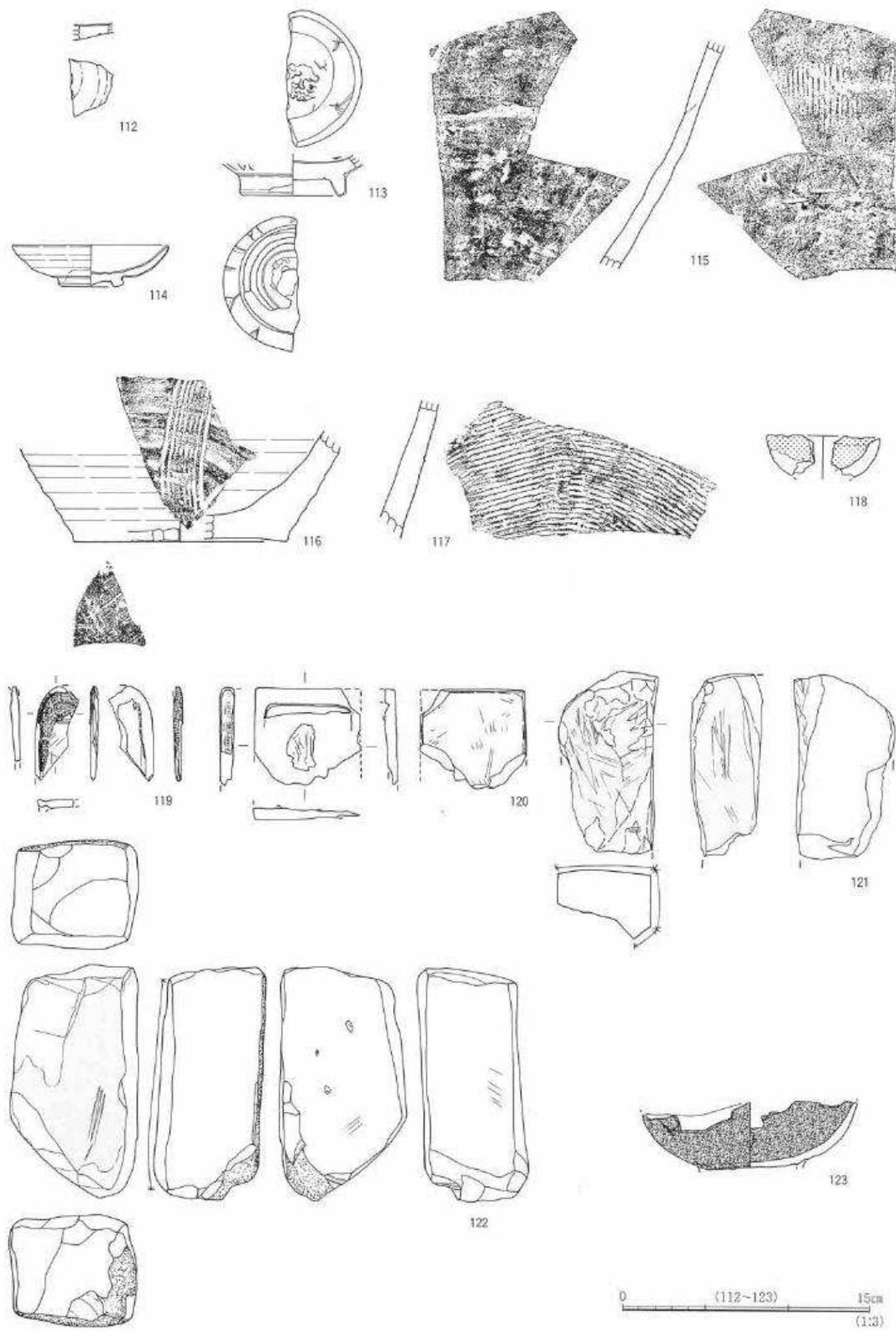


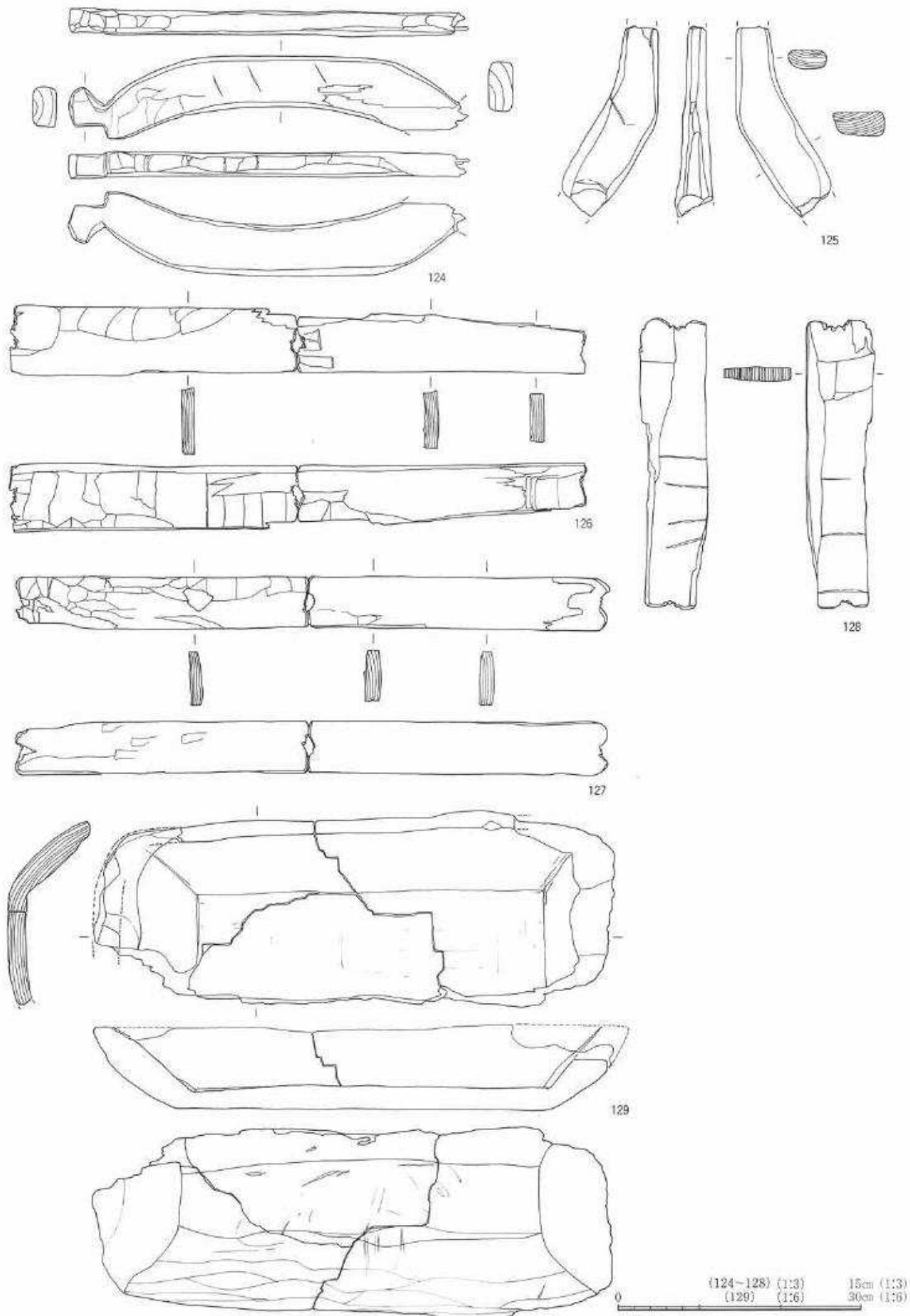
SE068

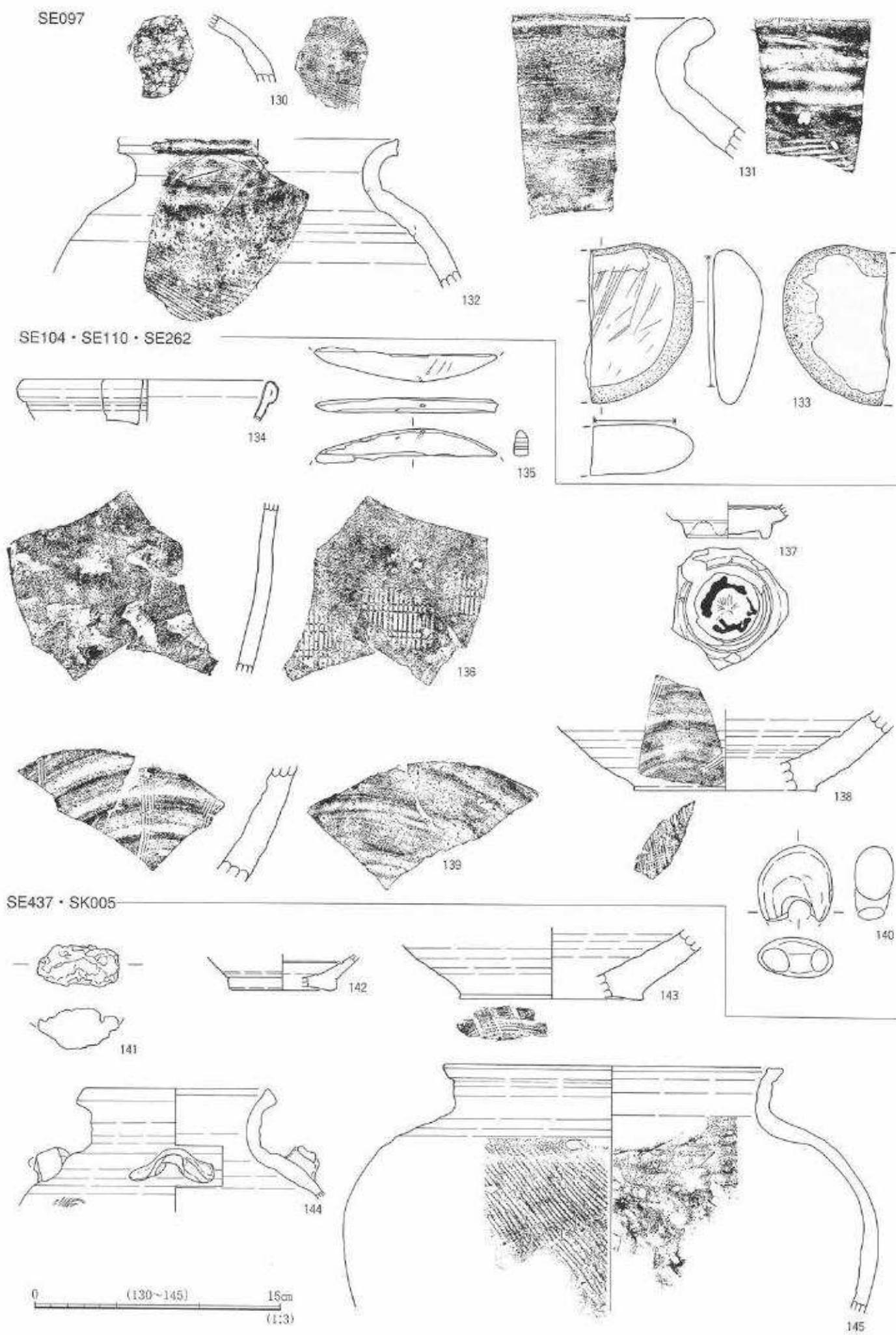


0 (82~96) 15cm
(1:3)

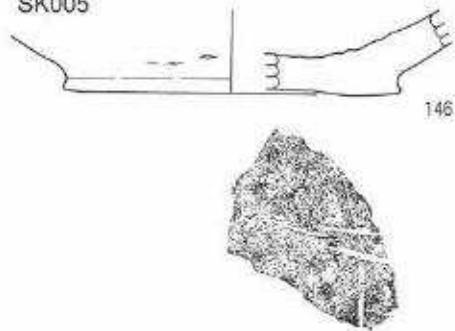








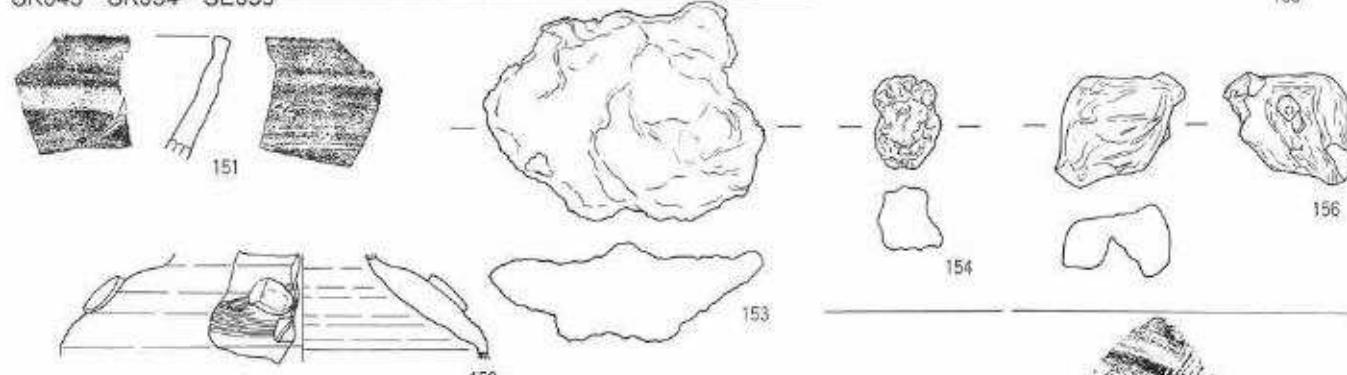
SK005



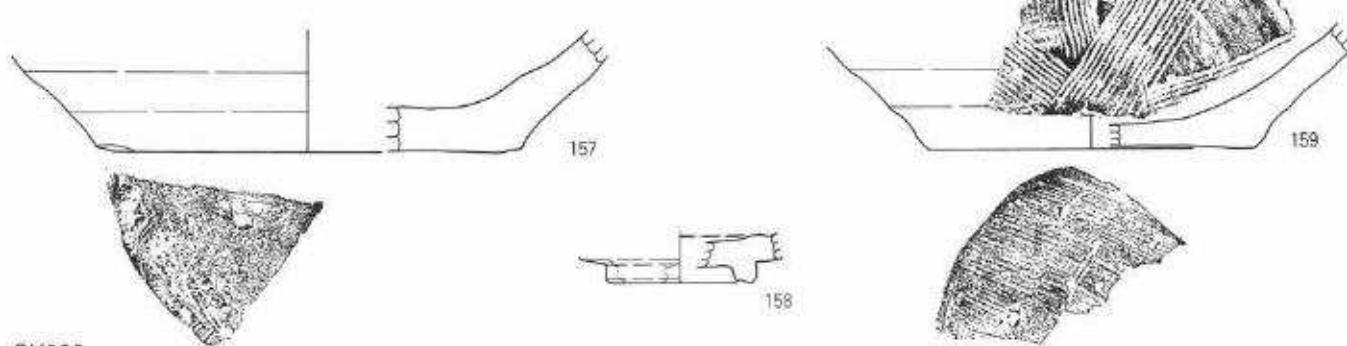
SK014・SK020・SK034



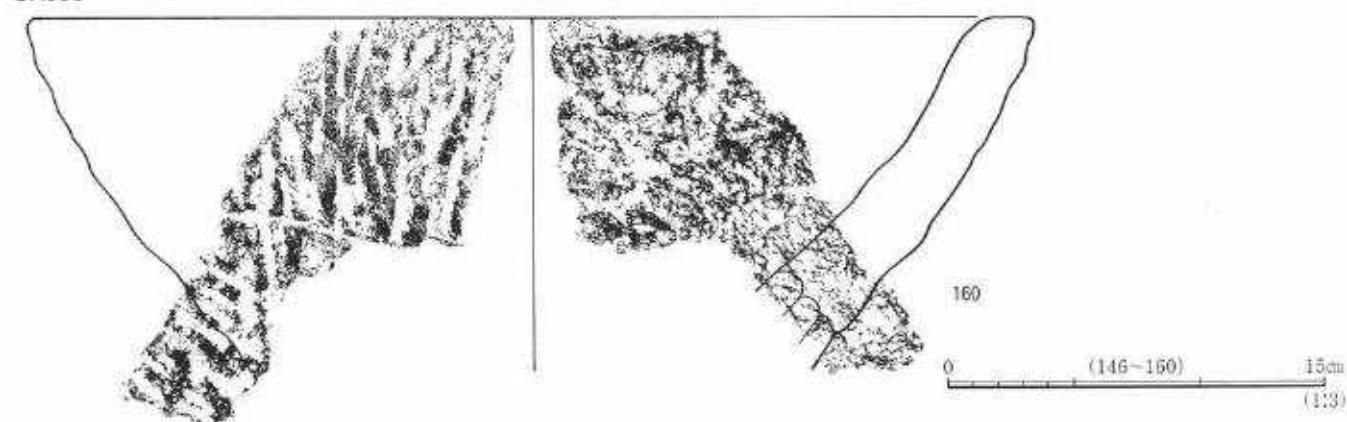
SK043・SK054・SE059

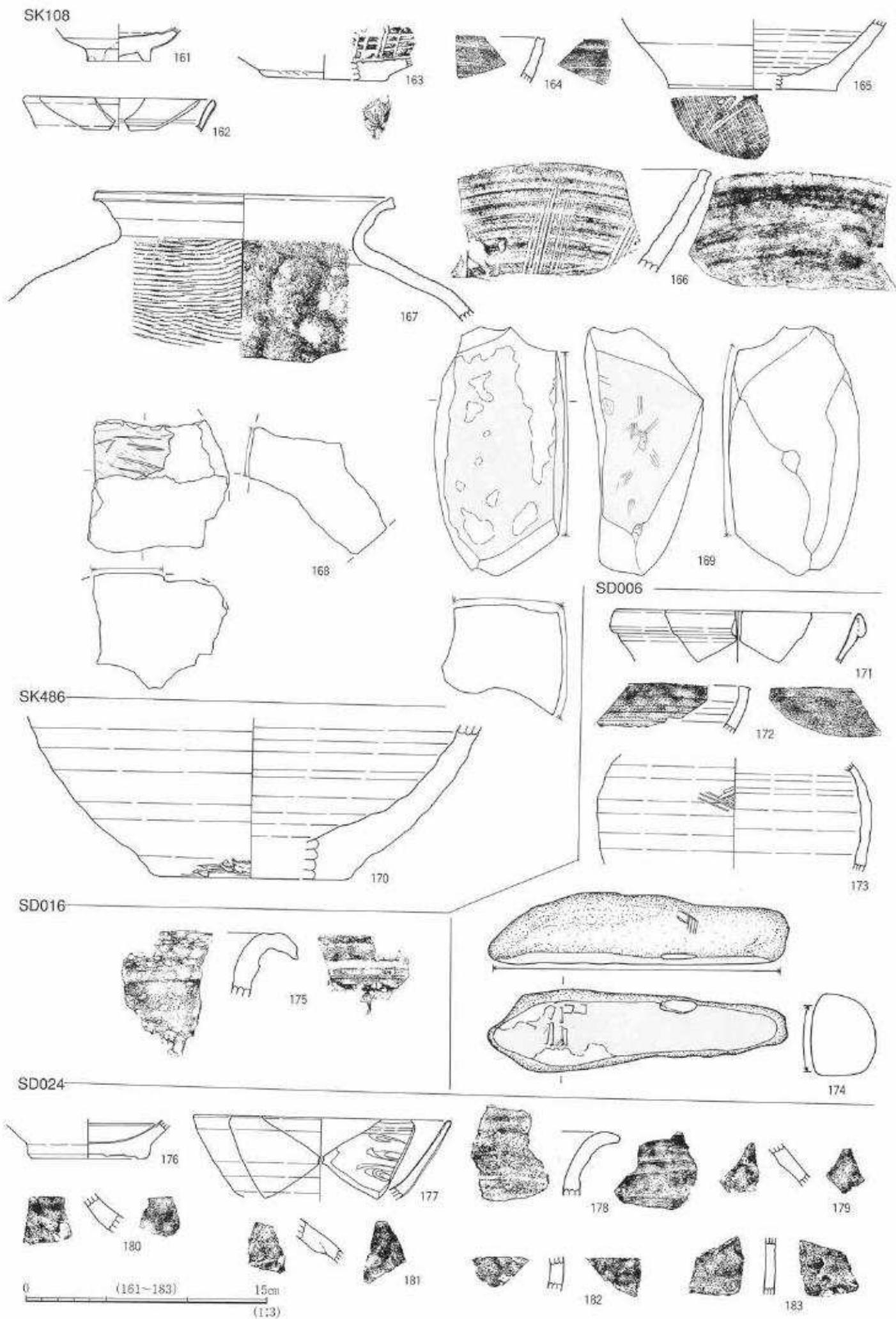


SK066・SK069・SK086

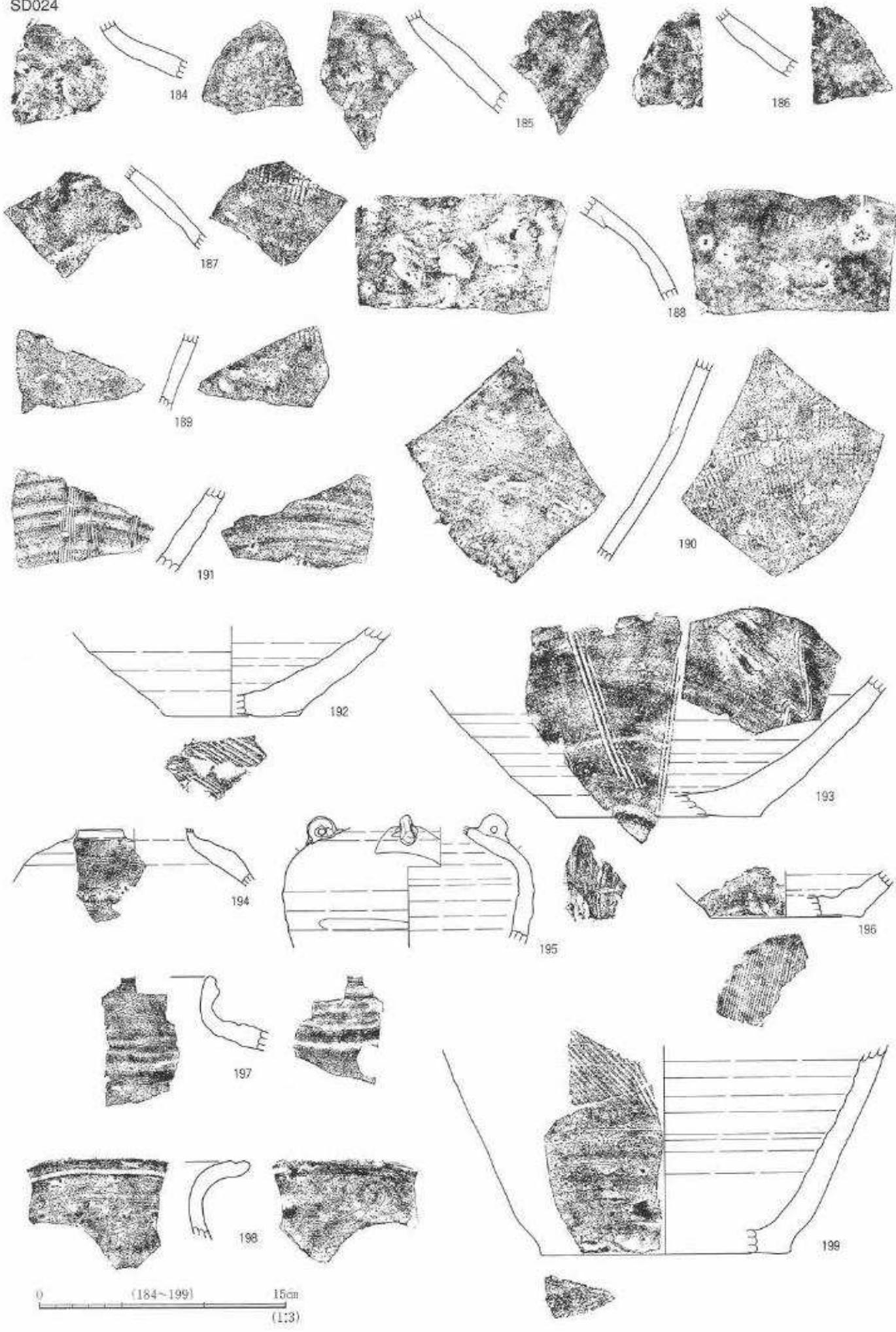


SK098

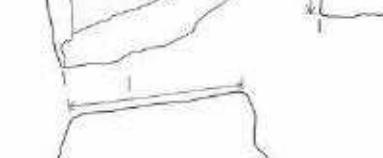
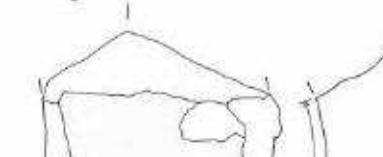
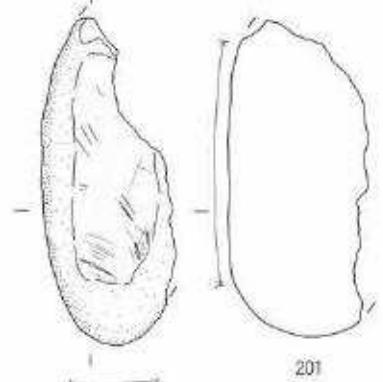




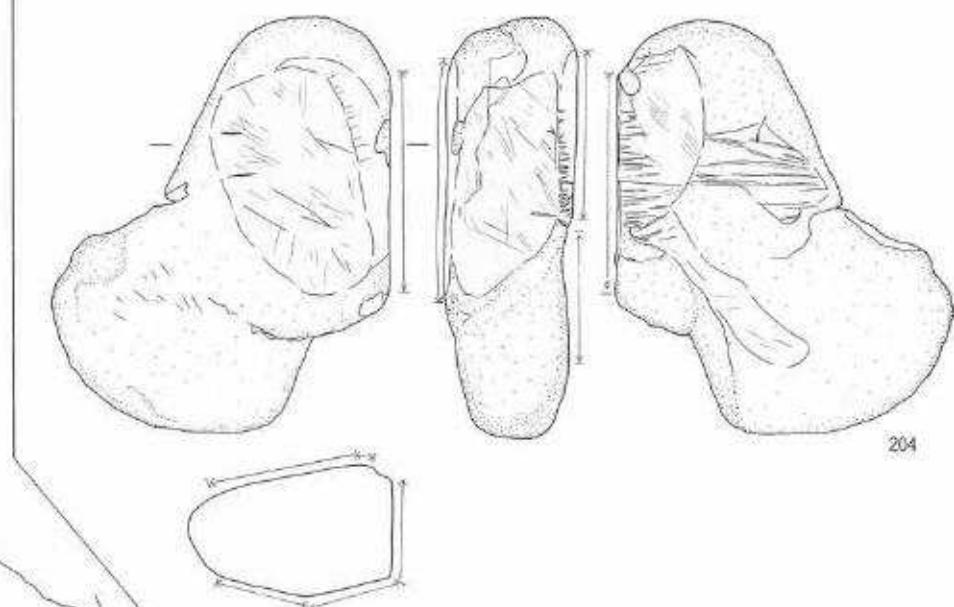
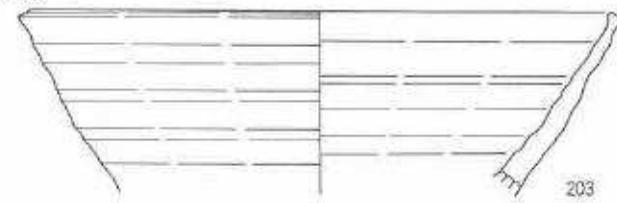
SD024



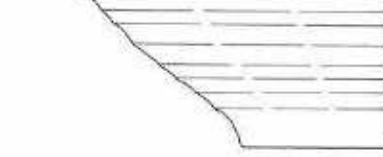
SD024



SD 025・SD 026

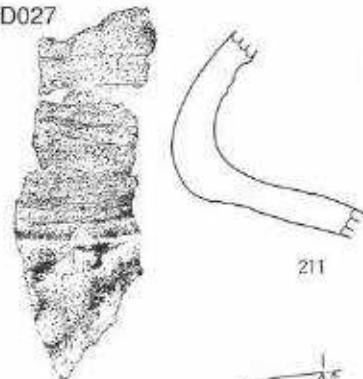


SD027

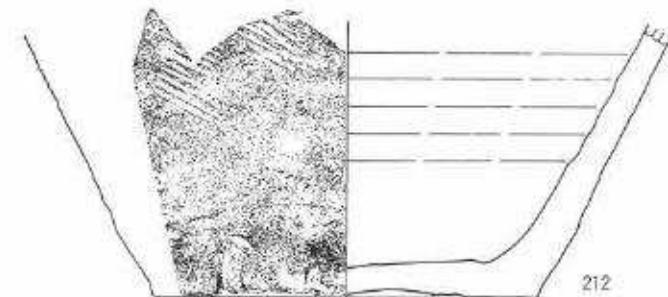


0 (200~210) 15cm
(1:3)

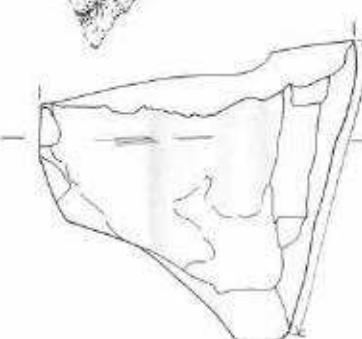
SD027



211



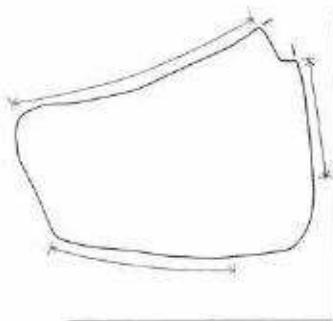
212



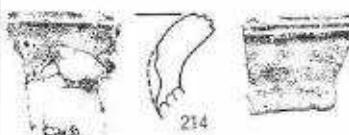
213



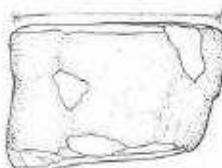
SD041・SD049・SD109



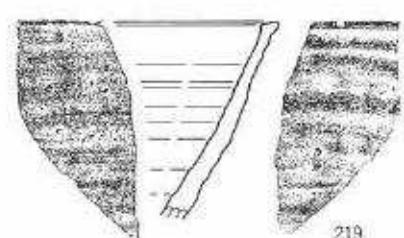
215



216



217



218



219

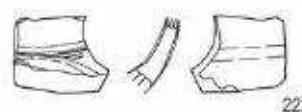
SD490



220



221



222



223



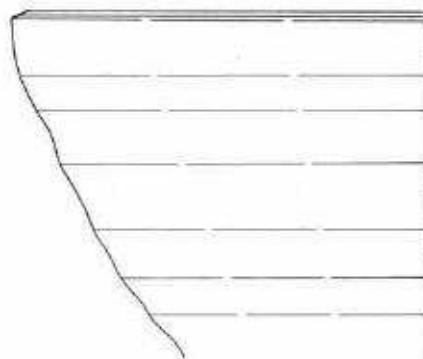
224



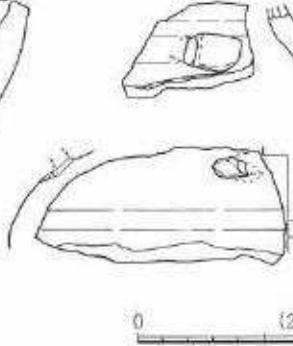
225



226

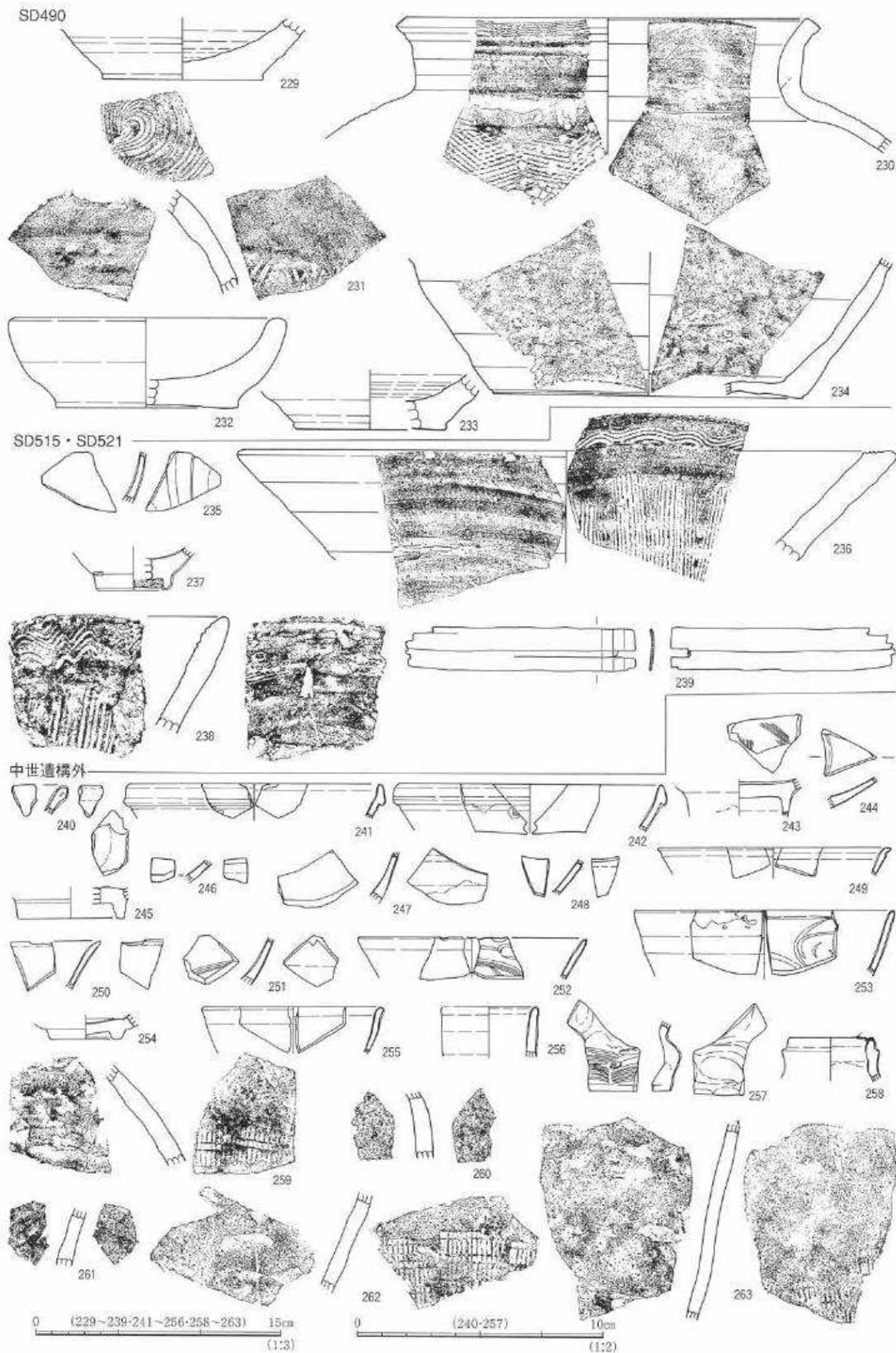


227

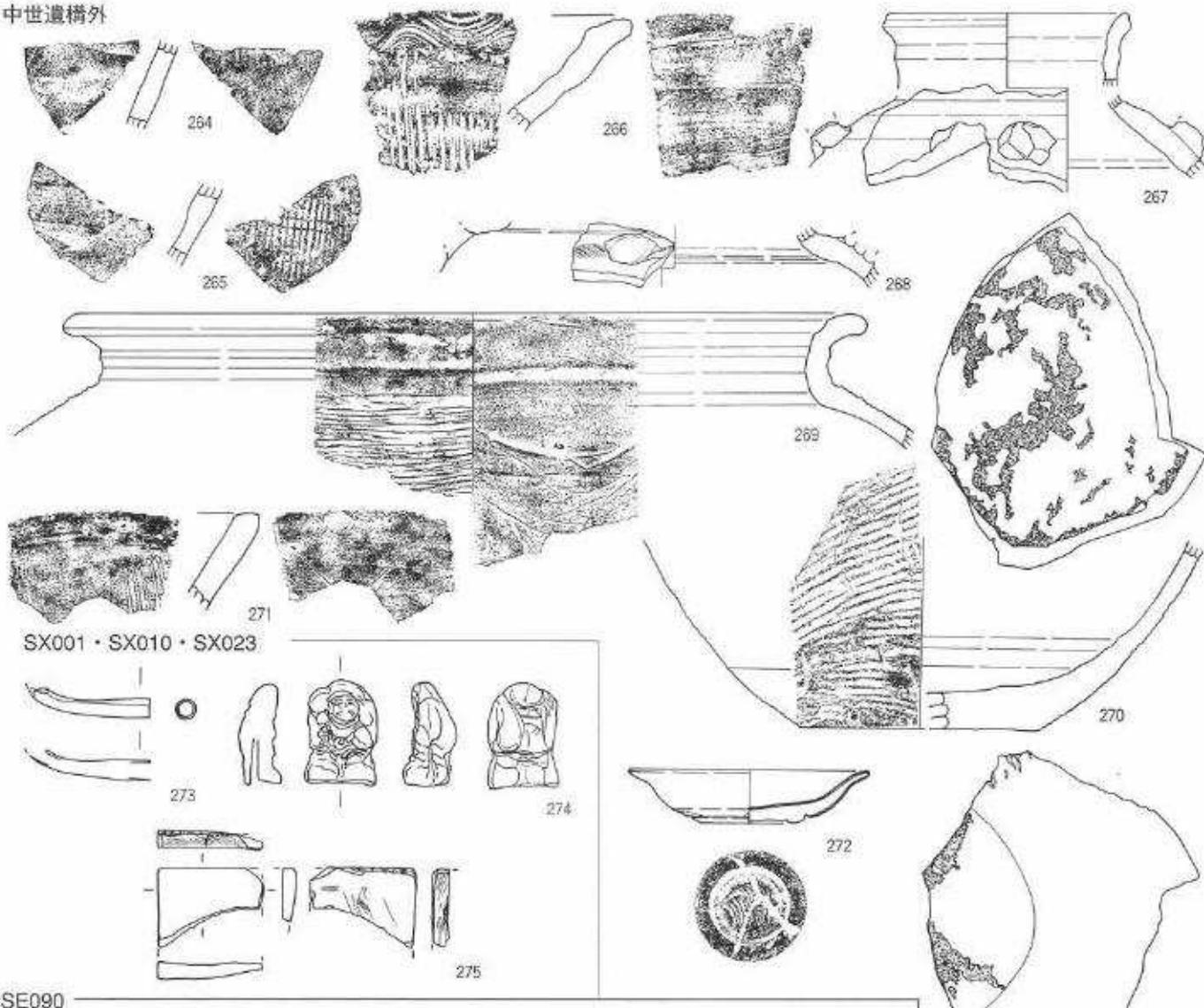


228

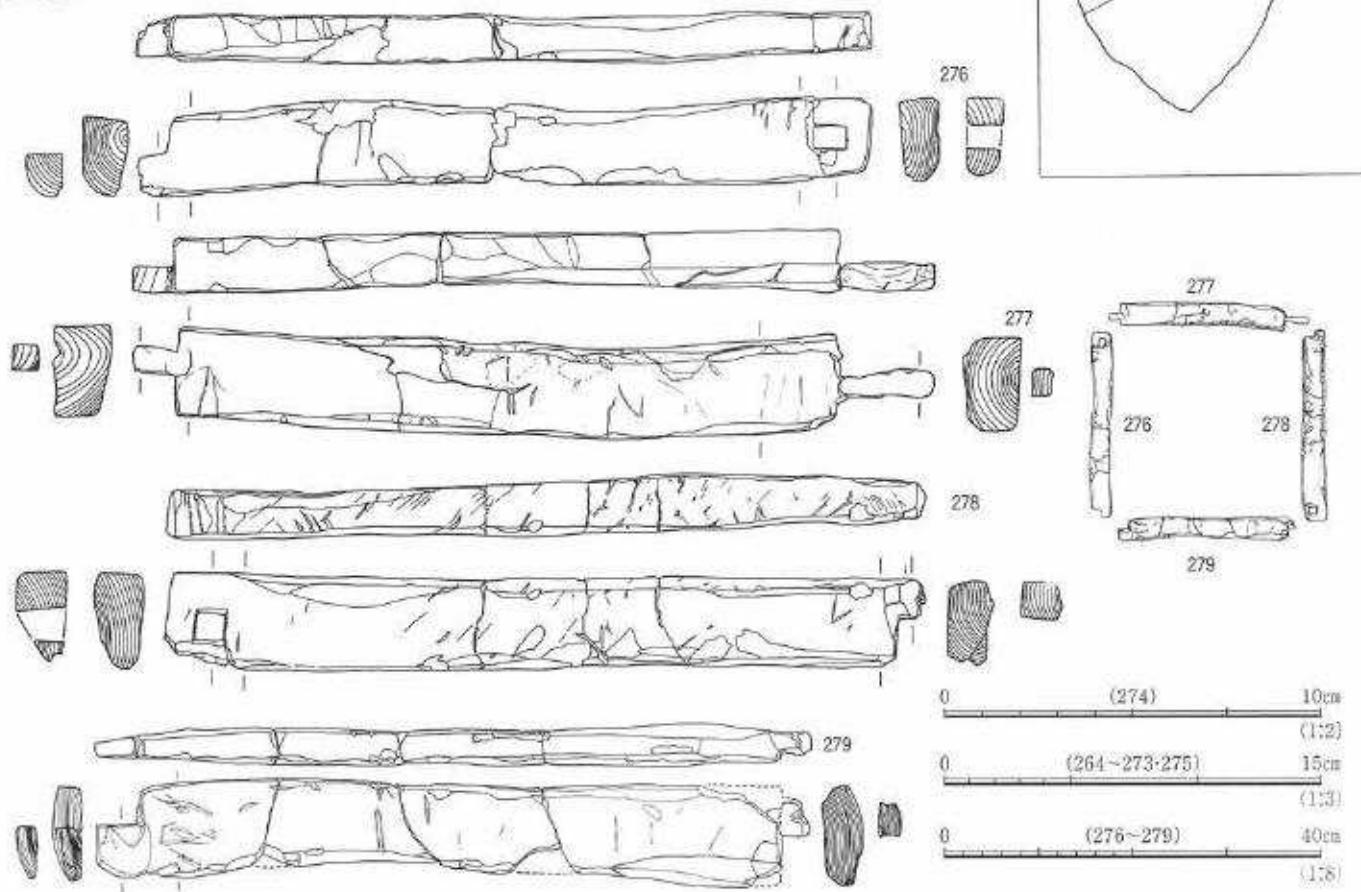
0 (211~228) 15cm (1:3)

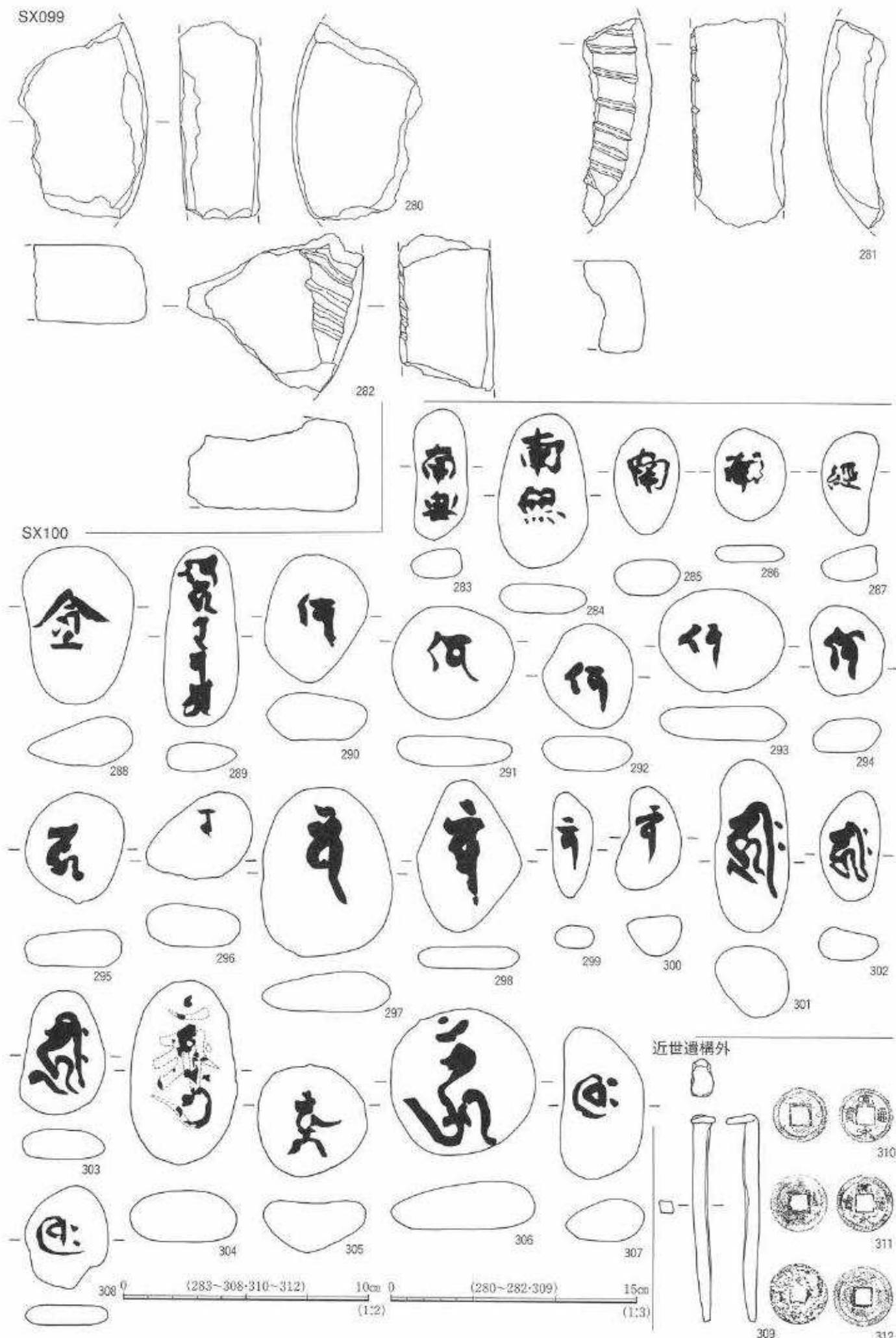


中世遺構外



SX001・SX010・SX023







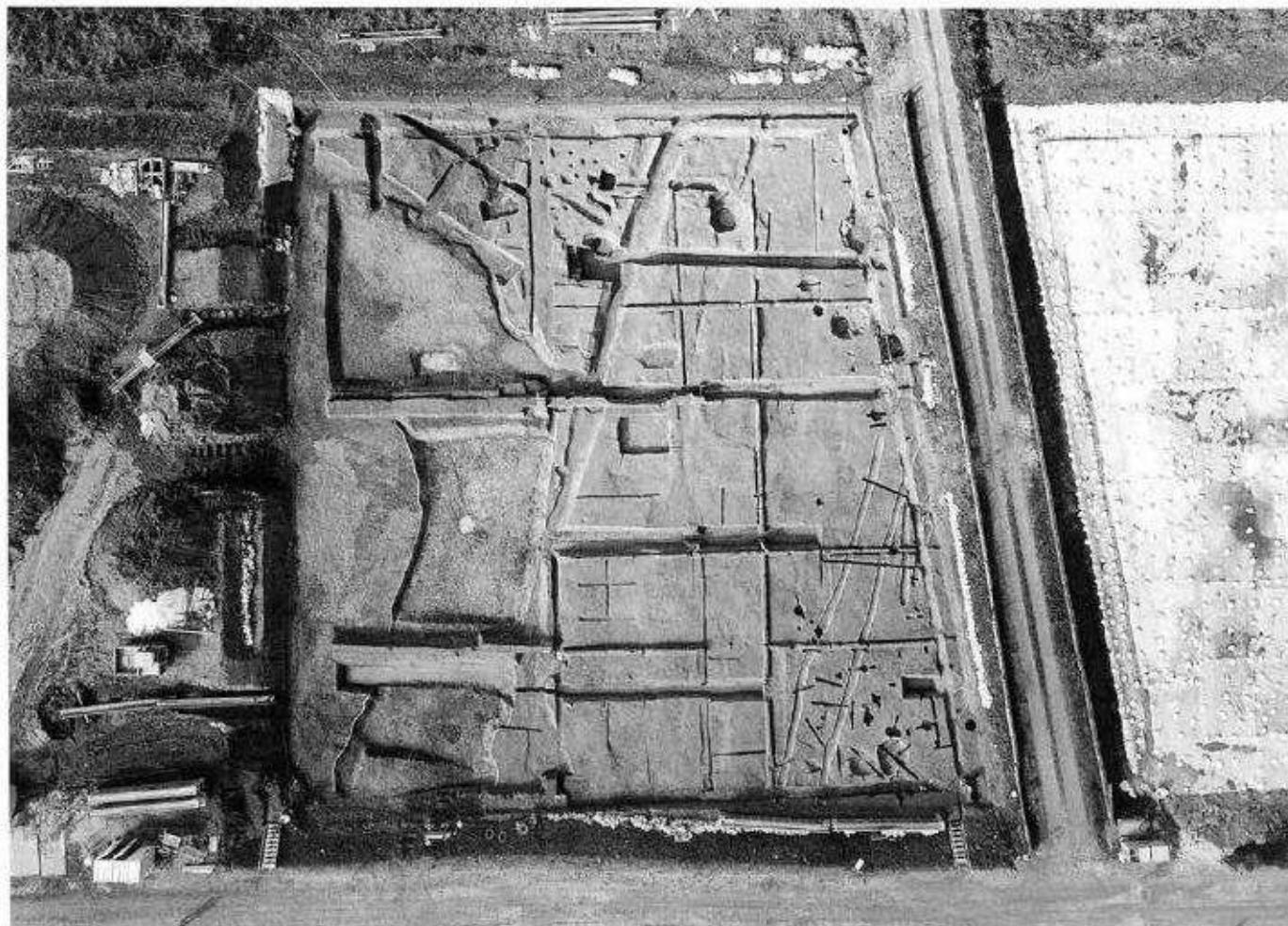
昭和22年 GHO撮影航空写真



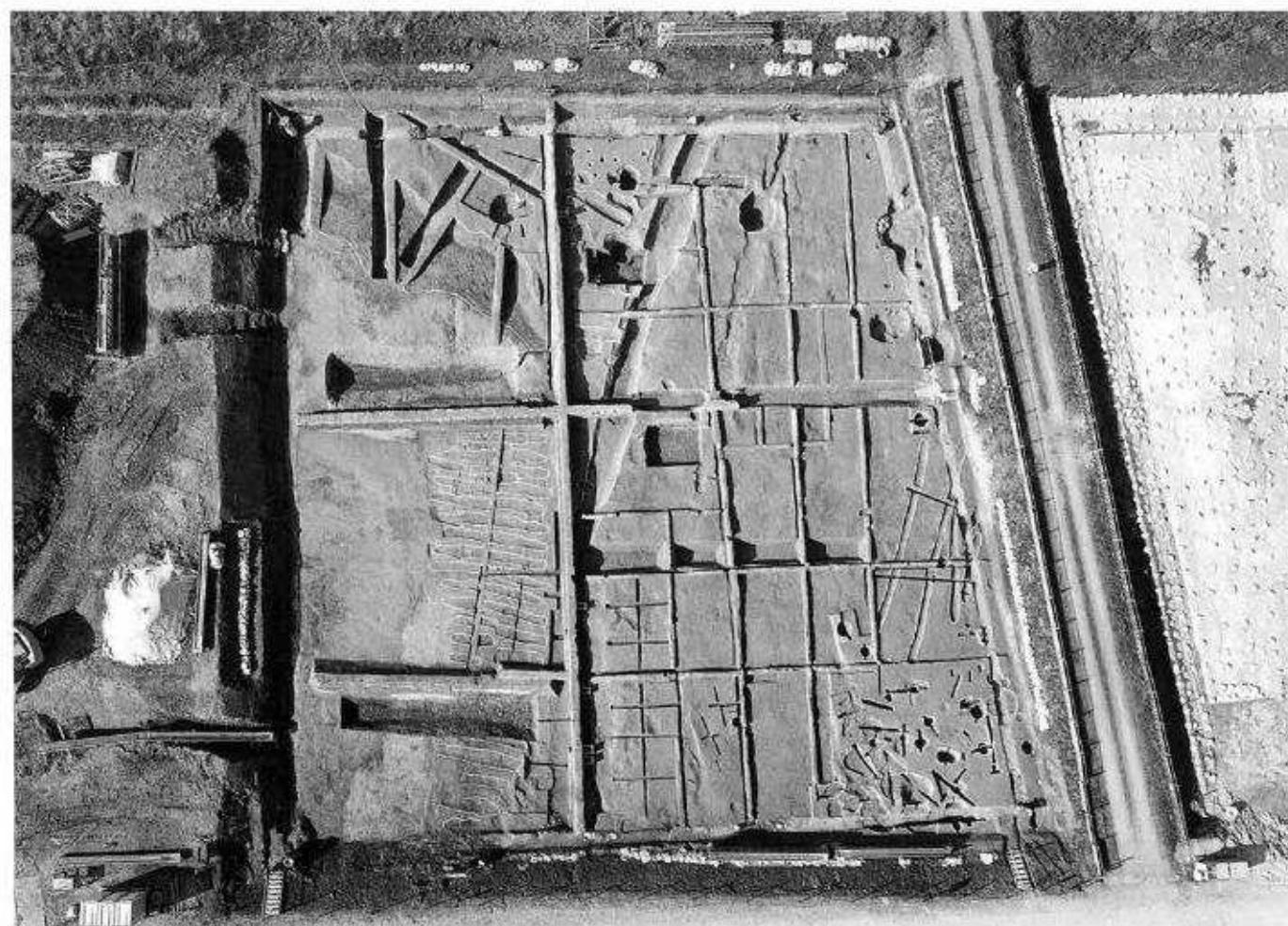
遺跡遠景 東から



遺跡全景 中・近世



南区古代Ⅸ·Ⅹ層相當 全景



南区古代Ⅶ層相當 全景



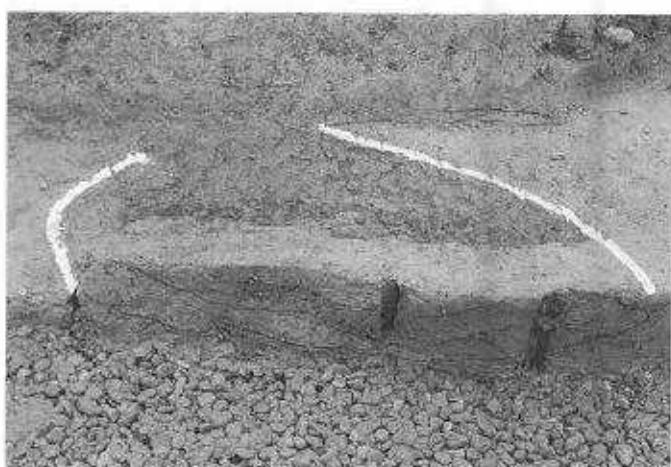
SK1058 完掘状況 東から



SK1058 土層断面 東から



SK1065 完掘状況 南から



SK1065 土層断面 南から



SK1066 完掘状況 西から



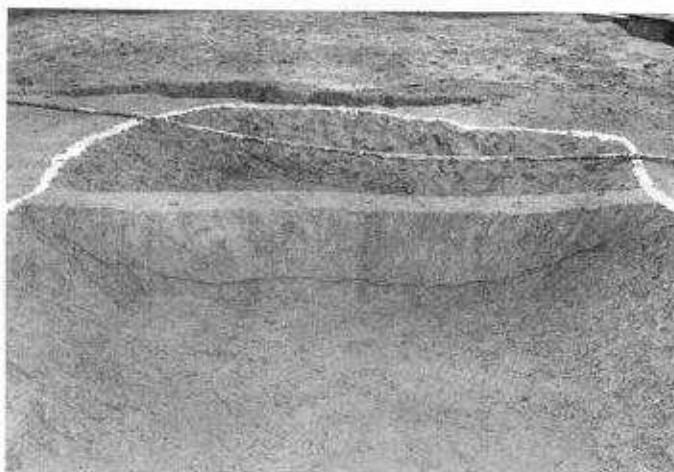
SK1066 土層断面 北から



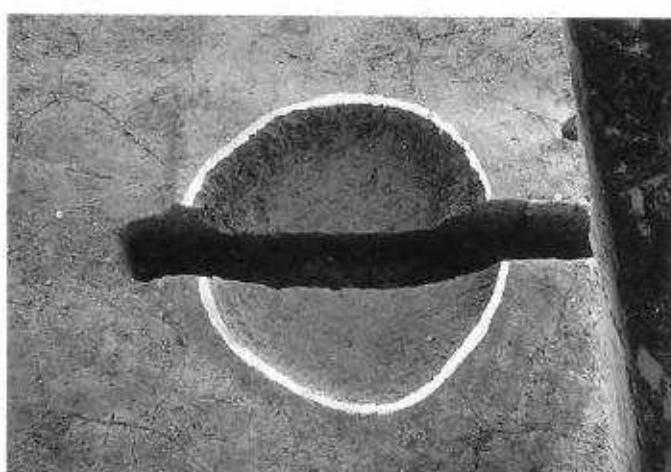
SK1068 完掘状況 西から



SK1069 完掘状況 北から



SK1069 土層断面 南から



SK1070 完掘状況 北から



SK1071 完掘状況 北から



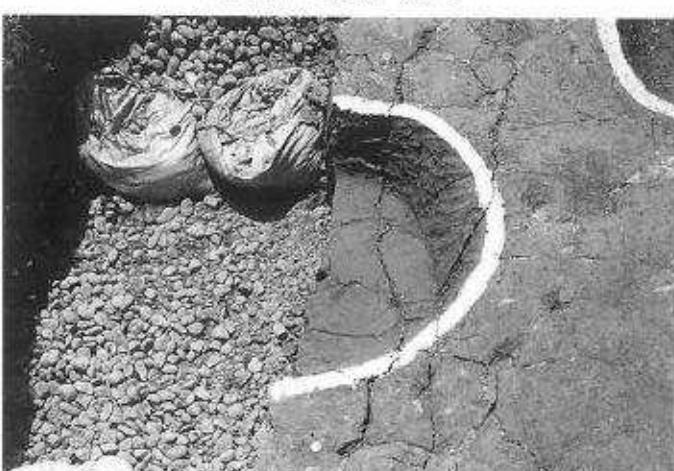
SD1052～1054 完掘状況 西から



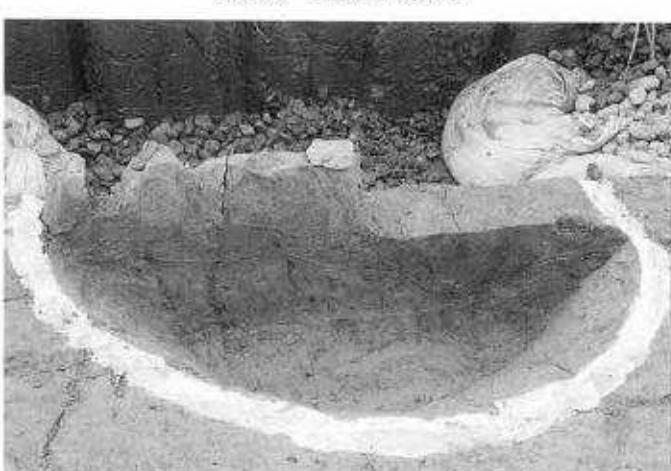
SD1054 土層断面 東から



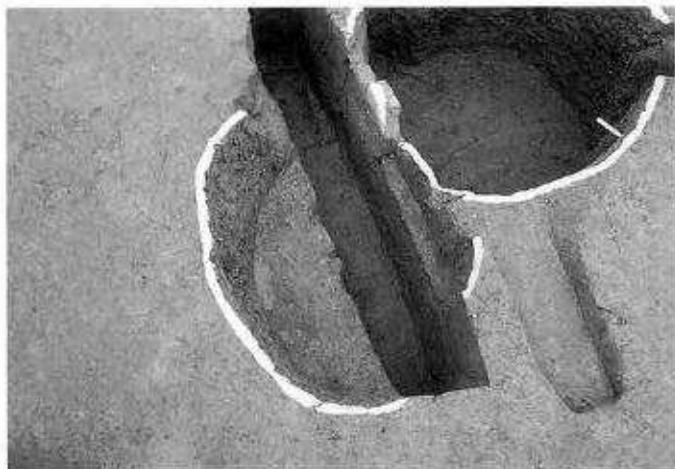
SD1055 土層断面 東から



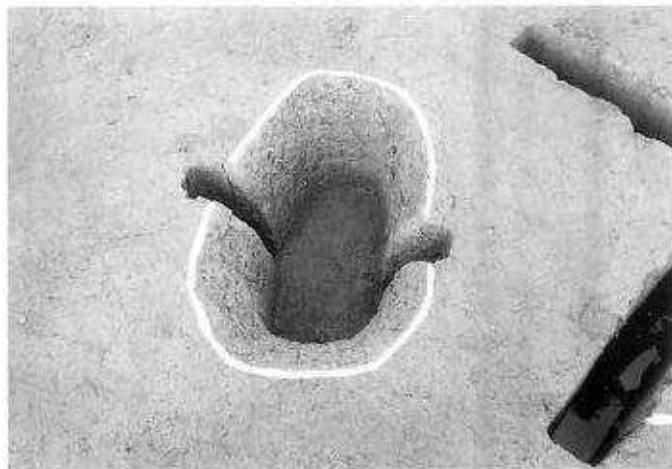
SK1001 完掘状況 東から



SK1001 土層断面 東から



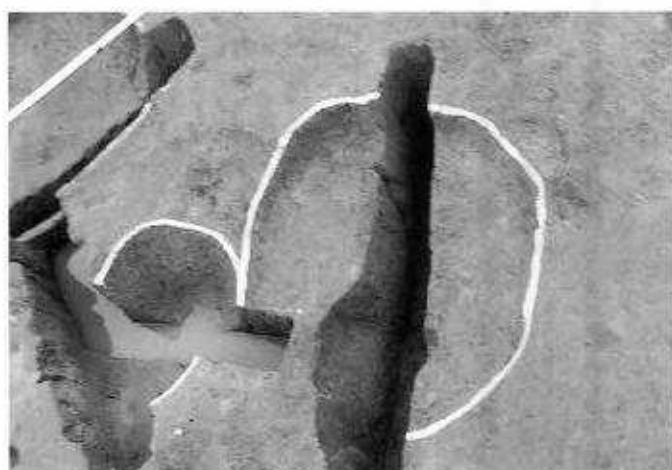
SK1002 完掘状況 南から



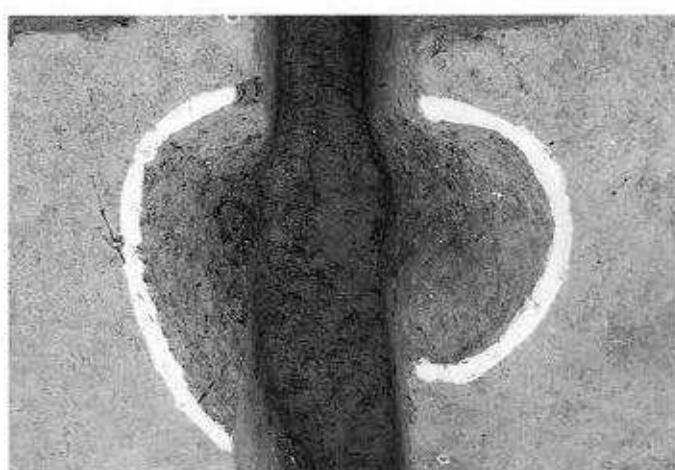
SK1003 完掘状況 南から



SK1003 土層断面 南から



SK1004・1037 完掘状況 北から



SK1005 完掘状況 北から



SK1005 土層断面 西から



SK1006 完掘状況 西から



SK1006 土層断面 南から



SK1007 完掘状況 東から



SK1007 土層断面 東から



SK1008 完掘状況 北から



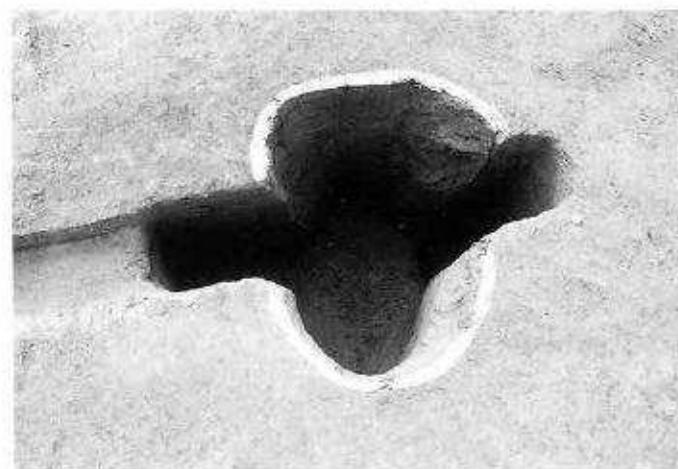
SK1008 土層断面 北から



SK1009 完掘状況 南から



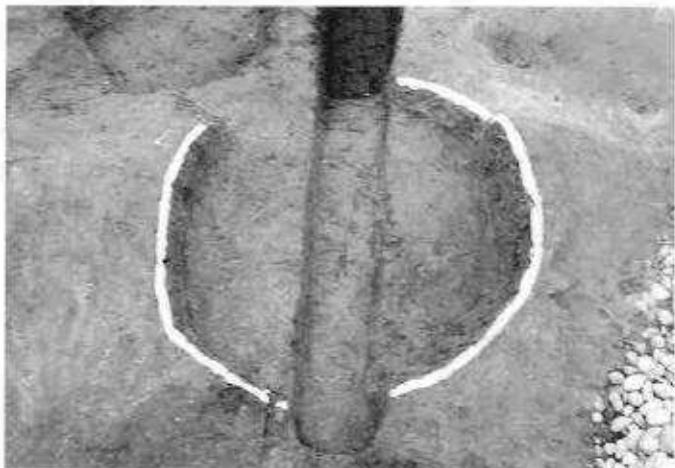
SK1009 土層断面 南から



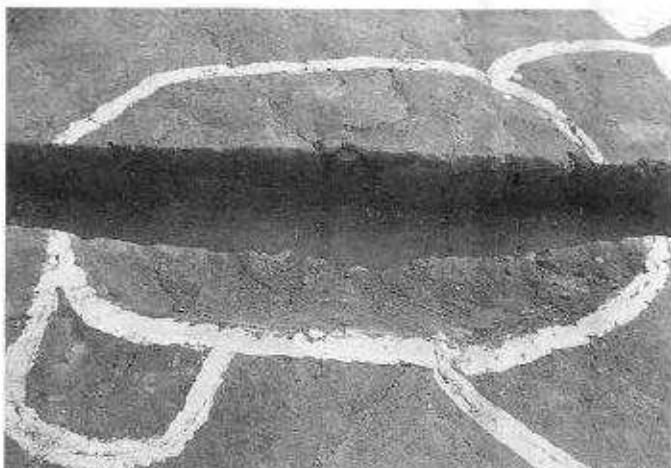
SK1010・1011 完掘状況 北から



SK1010 土層断面 南から



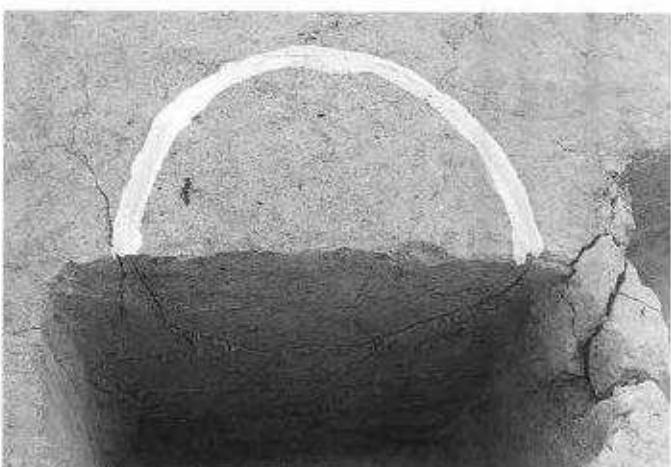
SK1014 完掘状況 南から



SK1014 土層断面 東から



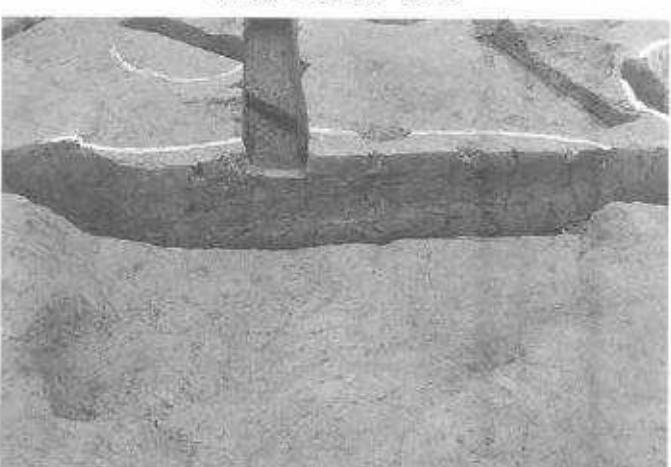
SK1015 完掘状況 北から



SK1015 土層断面 北から



SK1016 完掘状況 南から



SK1016 土層断面 南から



SK1017 完掘状況 北から



SK1017 土層断面 南から



SK1018 完掘状況 西から



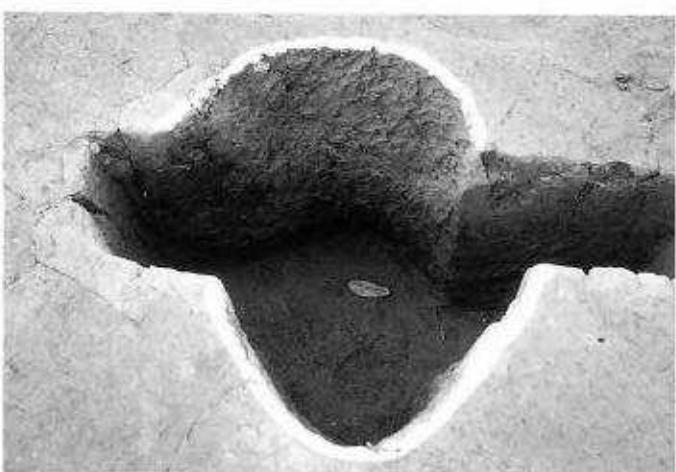
SK1020 完掘状況 北から



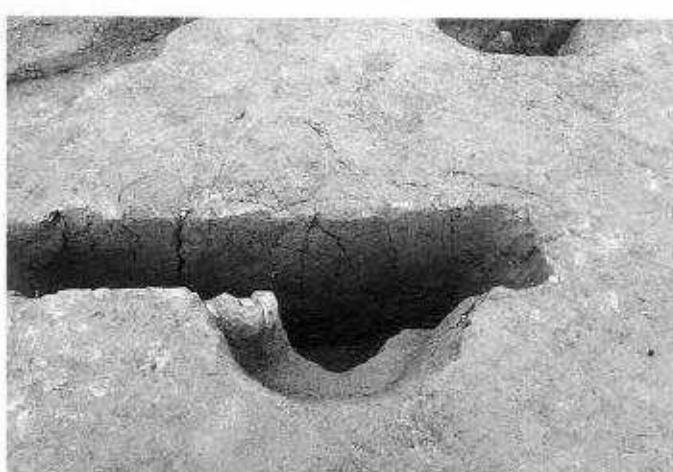
SK1020 土層断面 北から



SK1021 完掘状況 西から



SK1023 完掘状況 南から



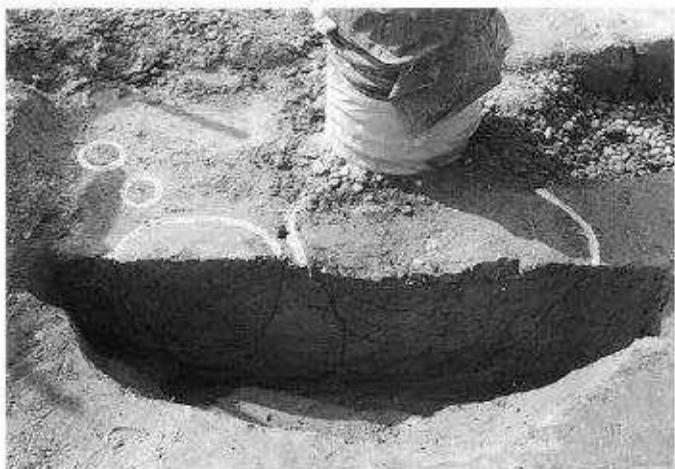
SK1023 土層断面 北から



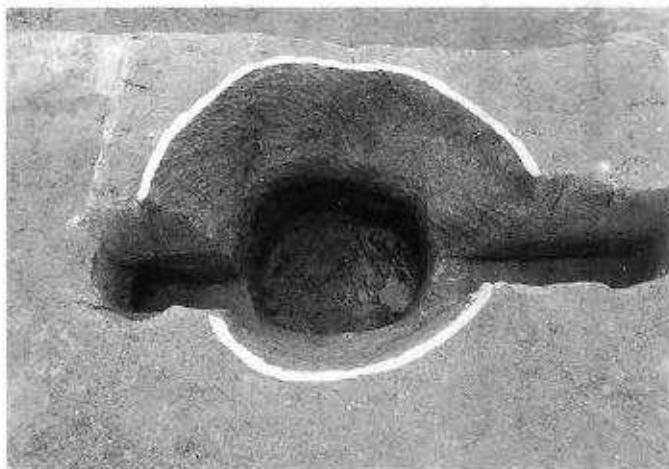
SK1025 完掘状況 東から



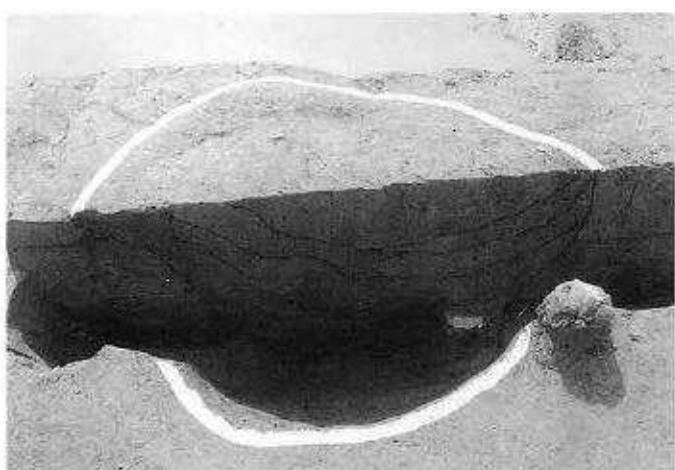
SK1040 完掘状況 東から



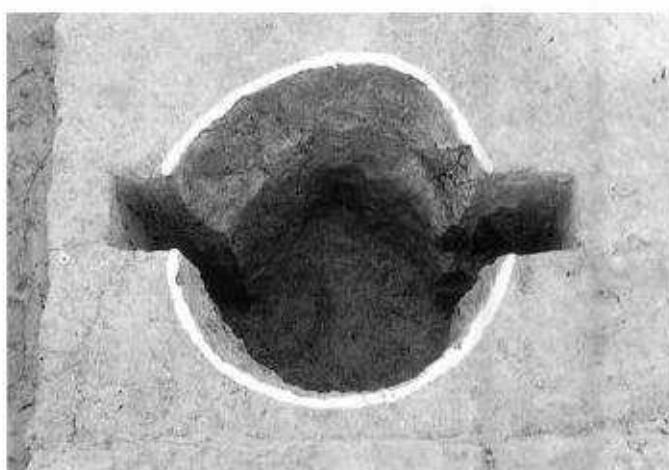
SK1020・1040 土層断面 北から



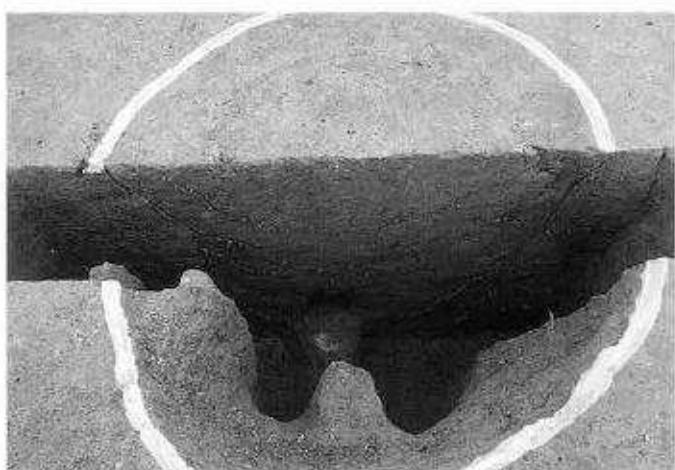
SK1028 完掘状況 北から



SK1028 土層断面 北から



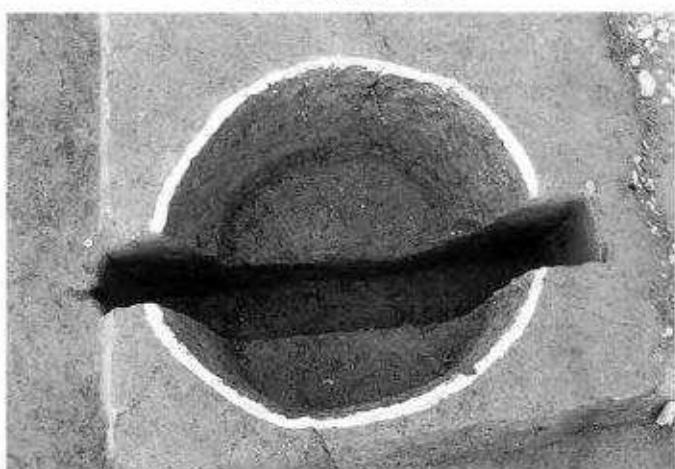
SK1029 完掘状況 北から



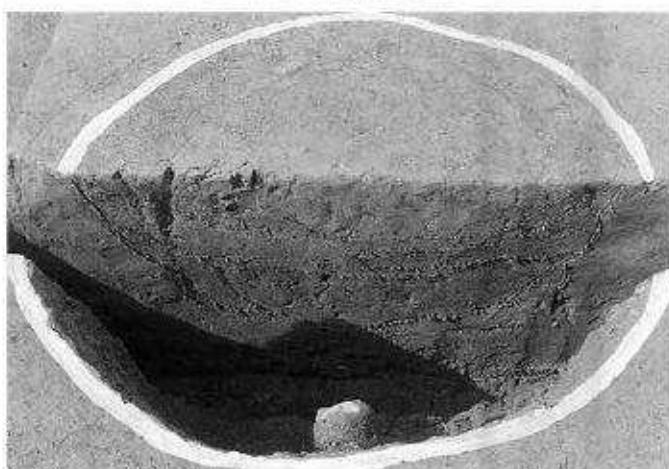
SK1029 土層断面 北から



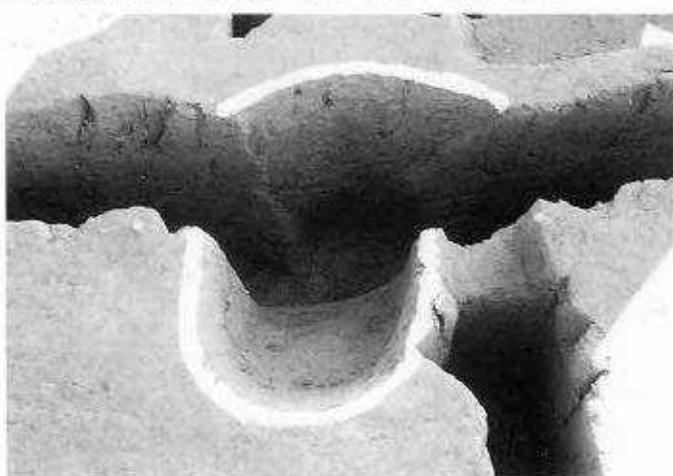
SK1030 完掘状況 南から



SK1031 完掘状況 東から



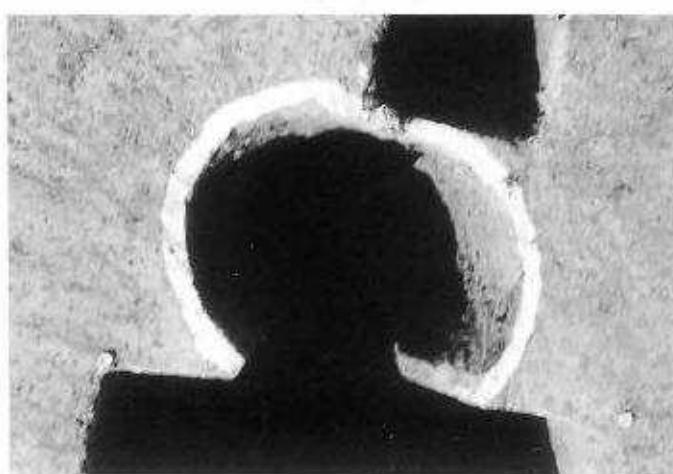
SK1031 土層断面 東から



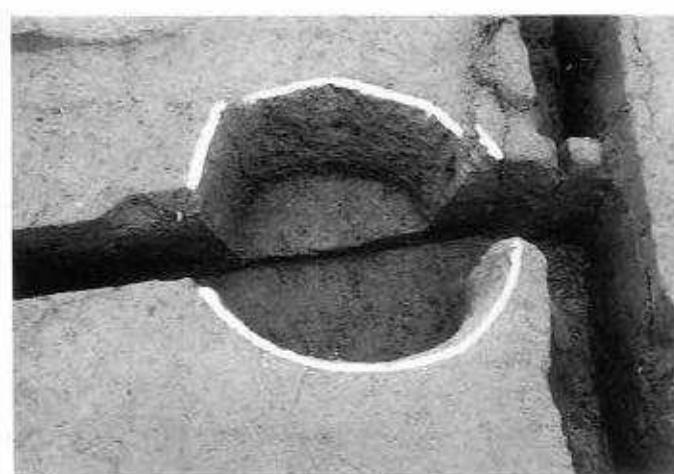
SK1032 完掘状況 北から



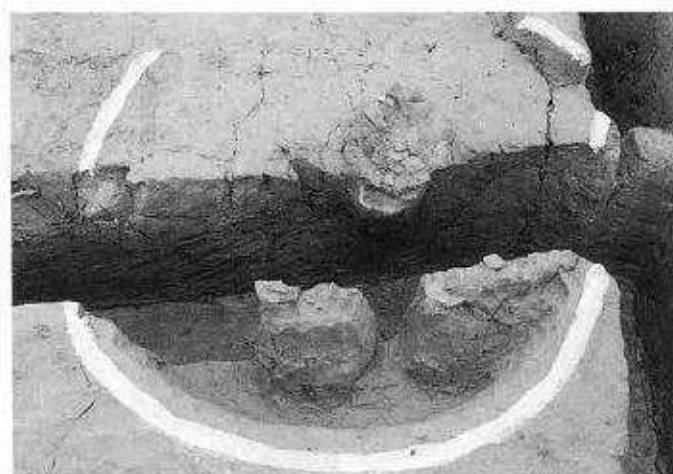
SK1032 土層断面 南から



SK1033 完掘状況 東から



SK1036 完掘状況 東から



SK1036 土層断面 東から



SK1039 完掘状況 北から



SK1039 土層断面 東から



SK1041 完掘状況 南から



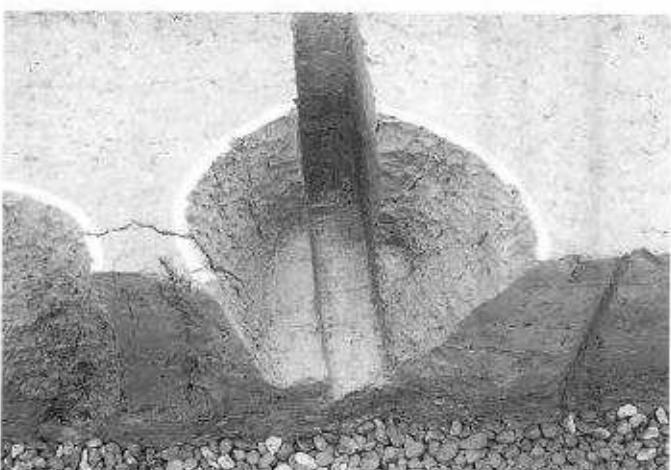
SK1041 土層断面 西から



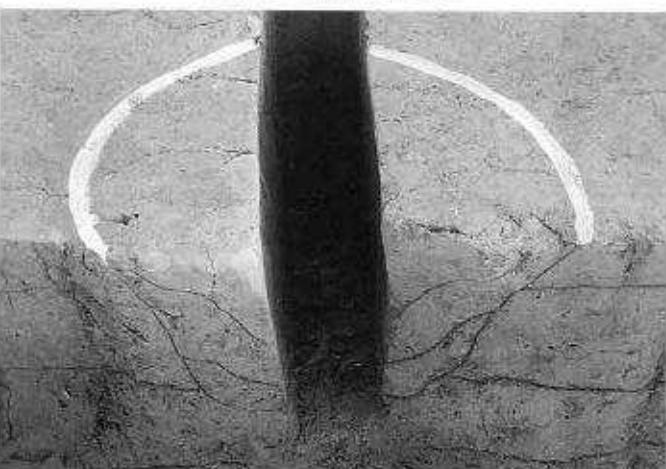
SK1042 完掘状況 北から



SK1042 土層断面 西から



SK1043 完掘状況 東から



SK1043 土層断面 東から



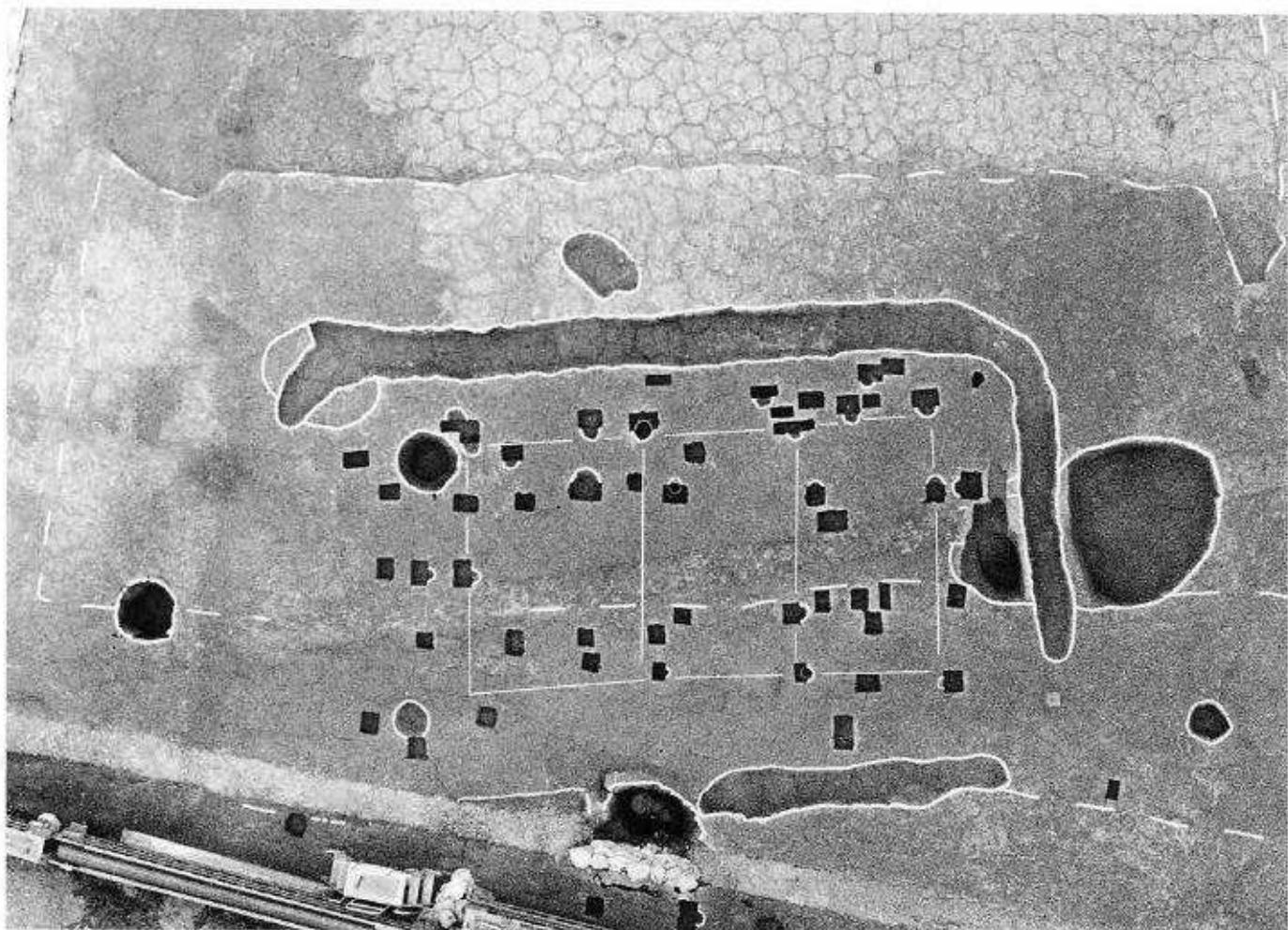
SK1047・1048 完掘状況 西から



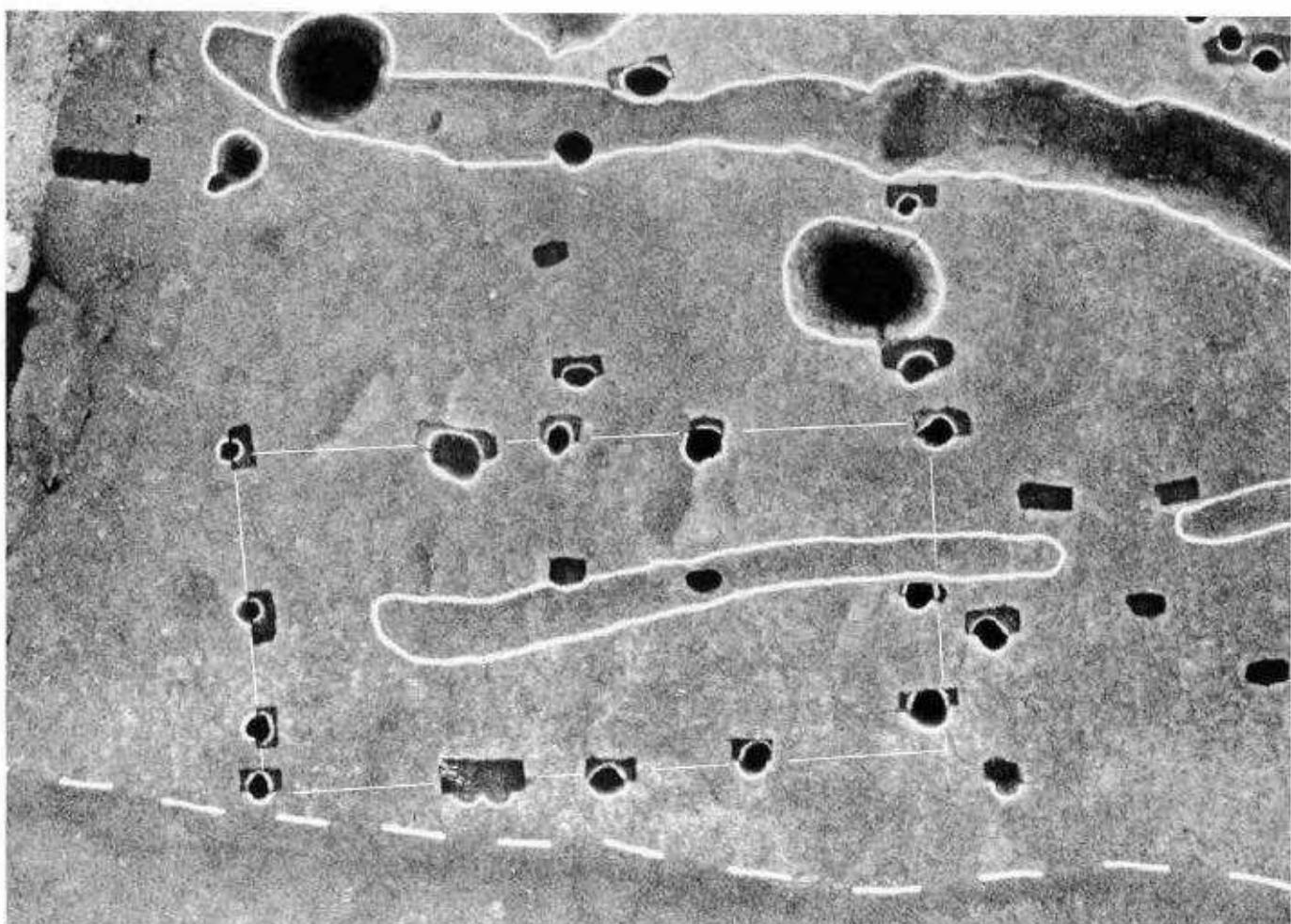
SK1047 土層断面 南から



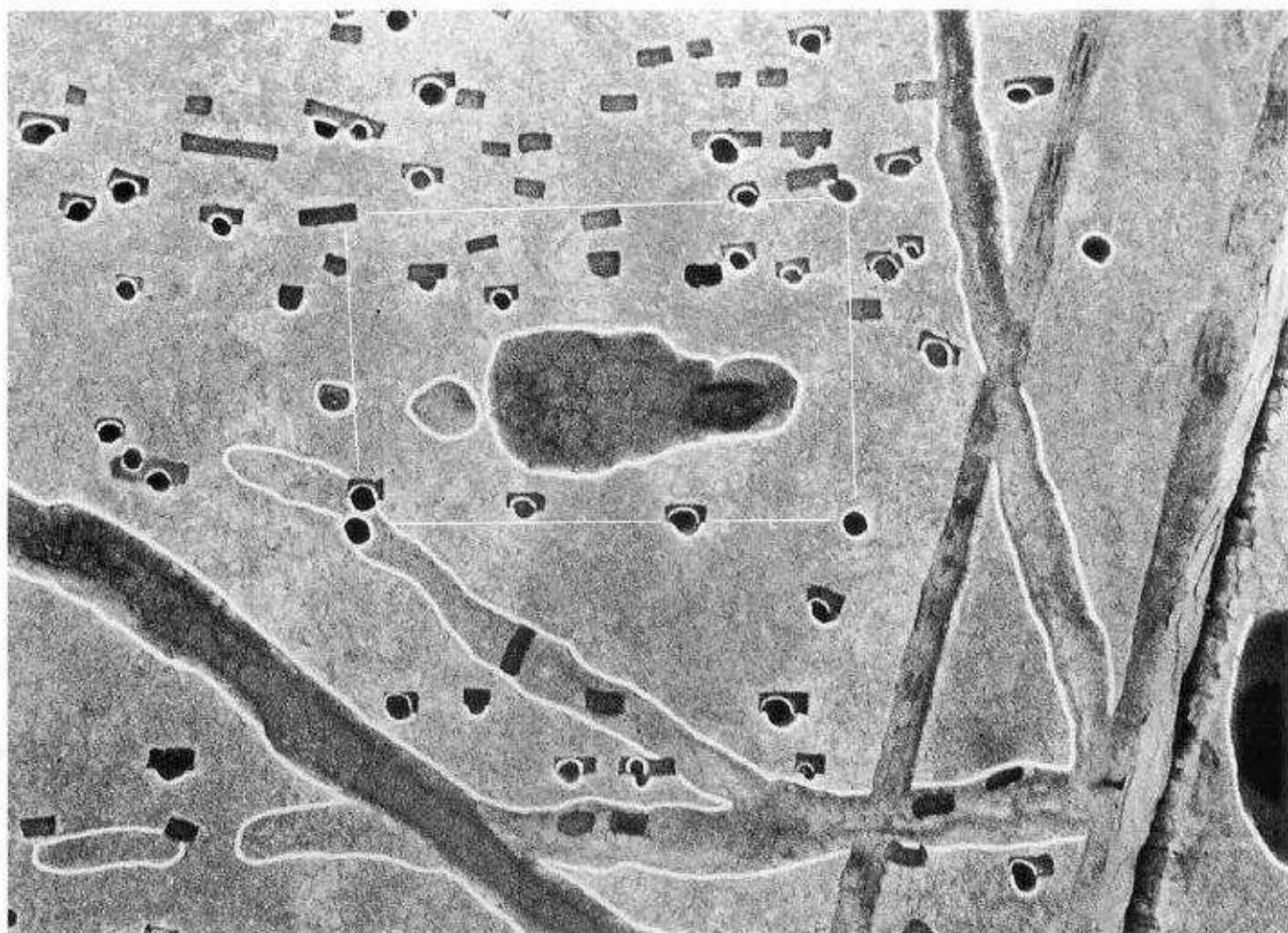
SK1048 土層断面 北から



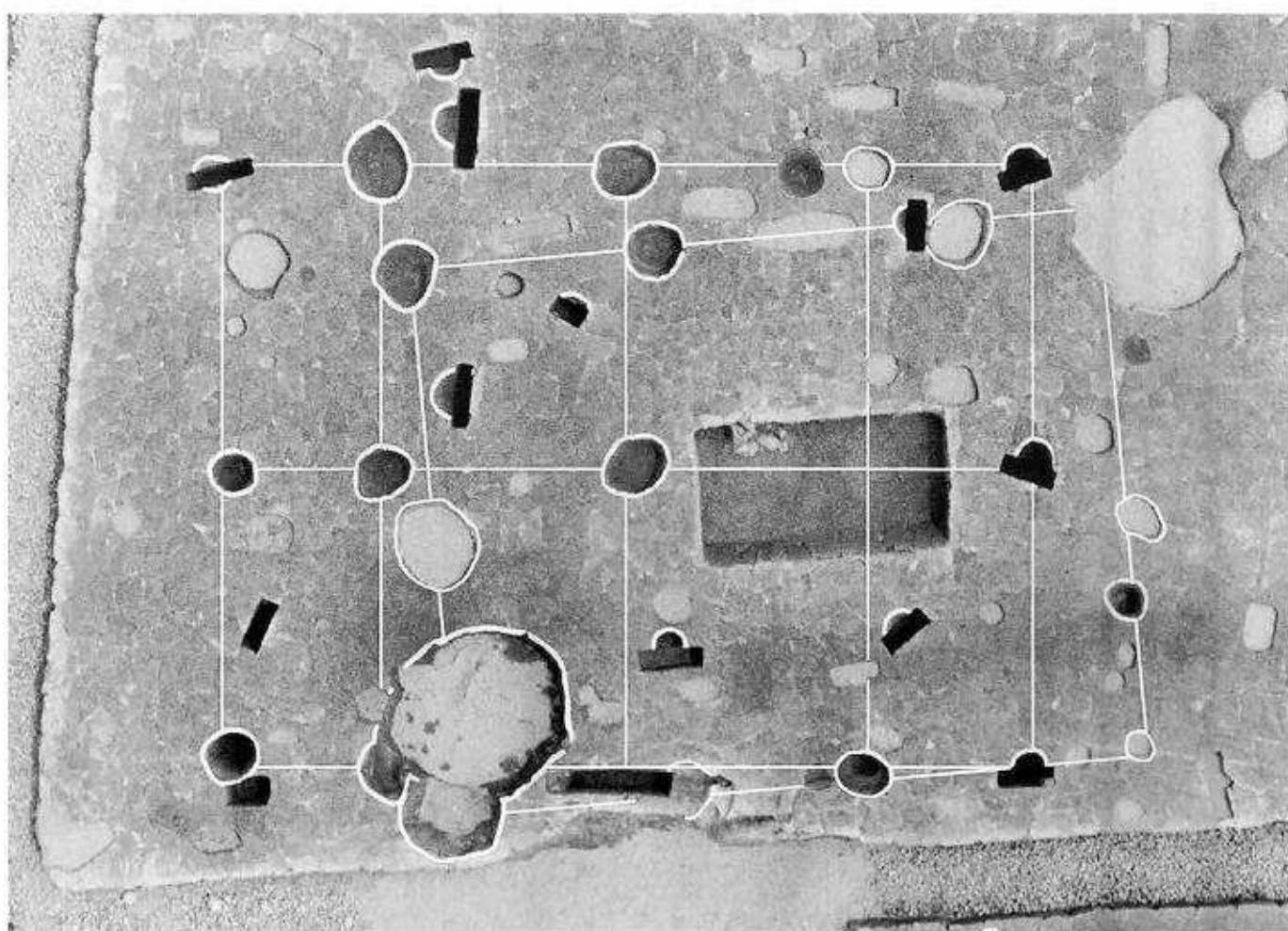
SB528 完掘状況



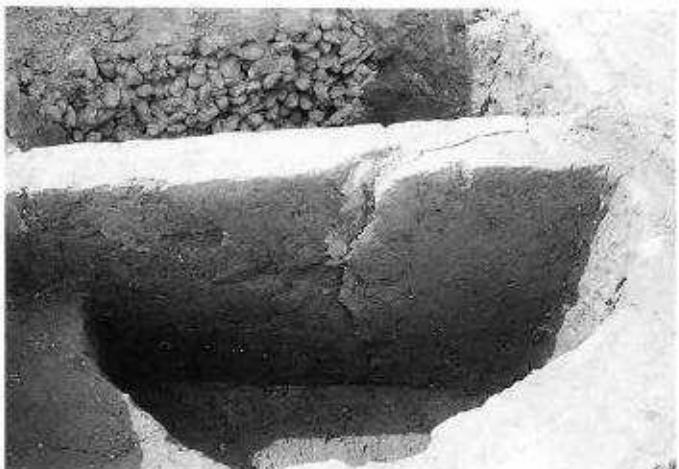
SB529 完掘状況



SB530 完掘状況



SB531・532 完掘状況



SE017 土層断面 西から



SE017 土層断面 西から



SE017 遺物出土状況 西から



SE019 完掘状況 北から



SE019 遺物出土状況 北から



SE019 土層断面 北から



SE021 完掘状況 南



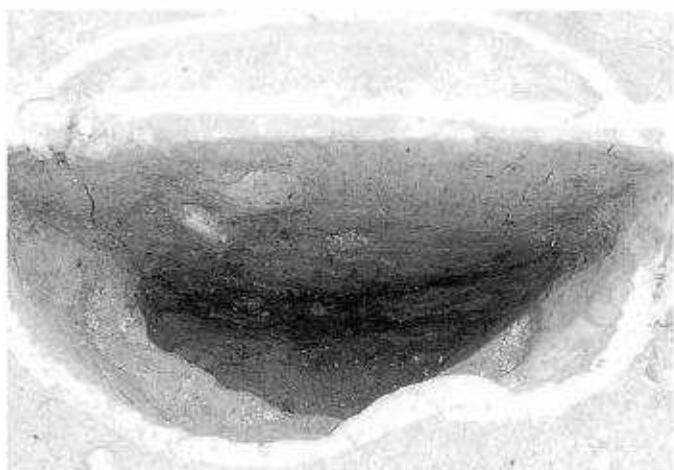
SE021 土層断面 西から



SE040 完掘状況 西から



SE040 遺物出土状況 西から



SE040 土層断面 西から



SE046 完掘状況 南から



SE046 遺物出土状況 北から



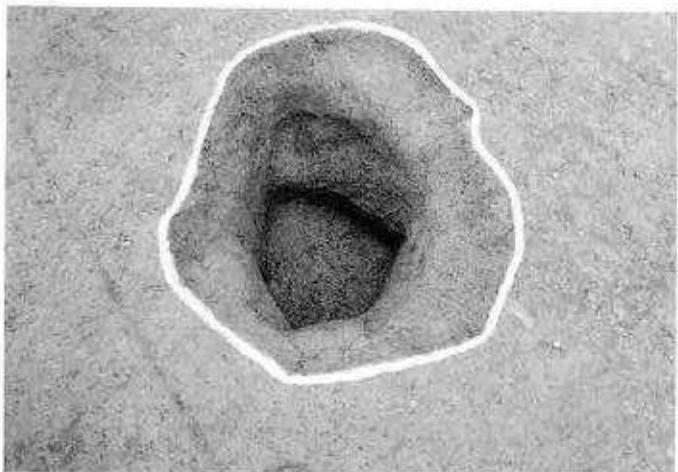
SE046 土層断面 南から



SE047 完掘状況 西から



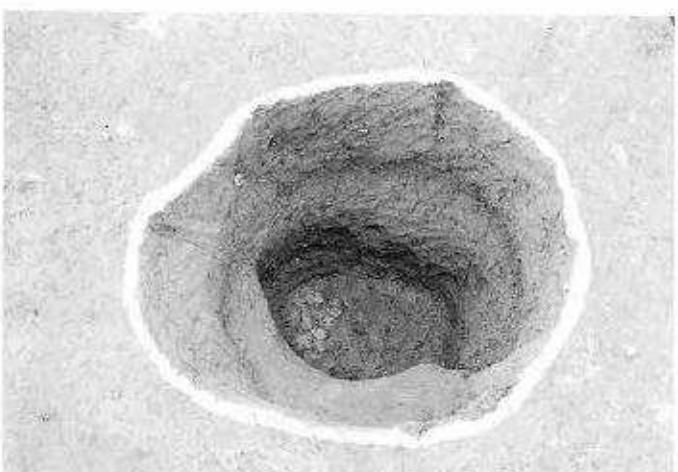
SE047 土層断面 西から



SE052 完掘状況 西から



SE052 土層断面 西から



SE053 完掘状況 南から



SE053 土層断面 北から



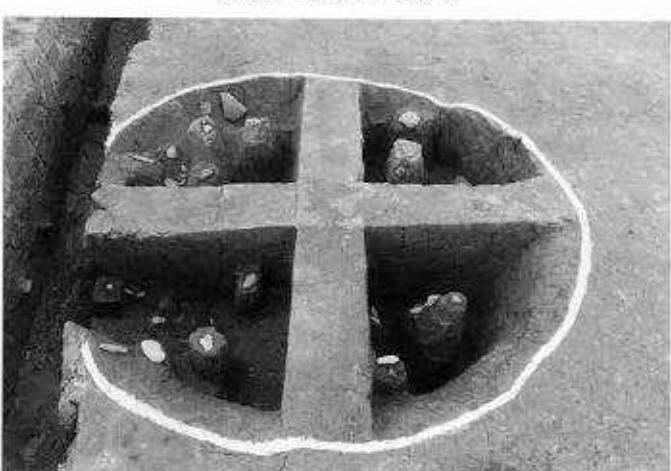
SE055 完掘状況 西から



SE055 土層断面 東から



SE057 完掘状況 南から



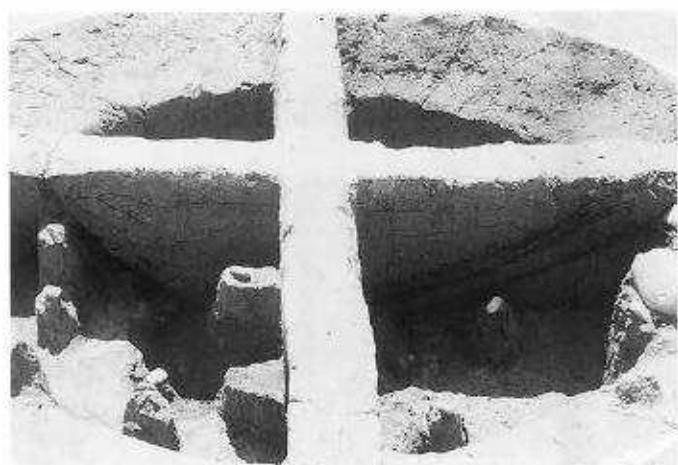
SE057 土層断面 南から



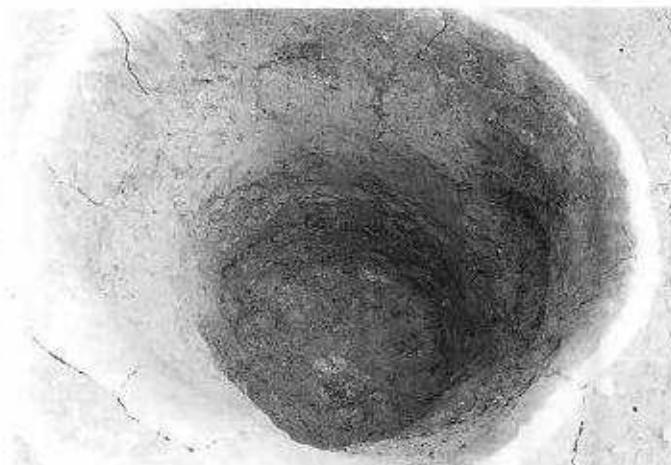
SE062 完掘状況 西から



SE062 遺物出土状況 東から



SE062 土層断面 南から



SE064 完掘状況 南から



SE064 土層断面 南から



SE068 完掘状況 南から



SE068 遺物出土状況 南から



SE068 土層断面 南から



SE070 完掘状況 西から



SE070 土層断面 東から



SE071・SK107 完掘状況 東から



SE071 土層断面 東から



SE077 完掘状況 西から



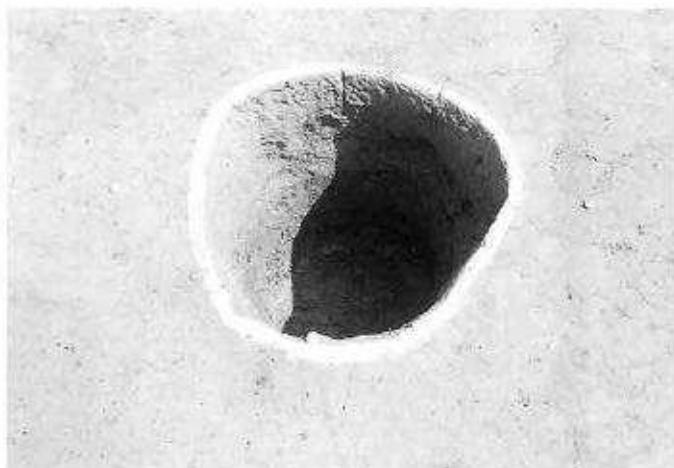
SE077 石数検出状況 東から



SE077 土層断面 北から



SE081 完掘状況 南から



SE082 完掘状況 西から



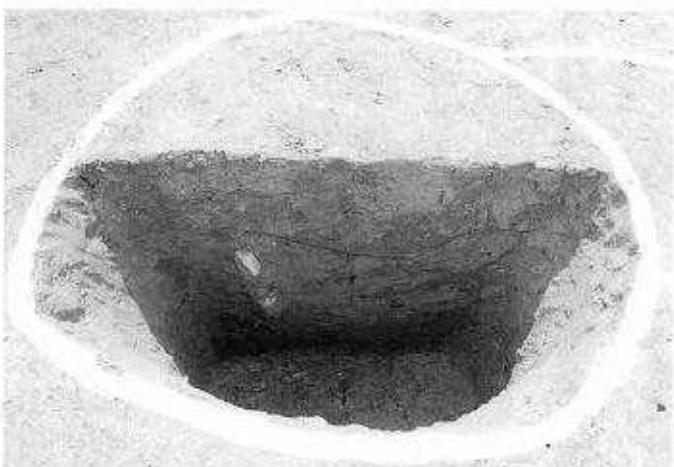
SE083・095 完掘状況 西から



SE083 土層断面 東から



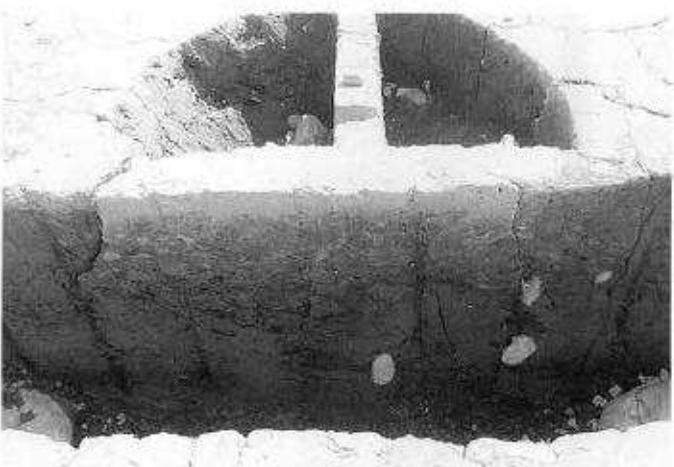
SE084 完掘状況 北から



SE084 土層断面 西から



SE085 完掘状況 南から



SE085 土層断面 北から



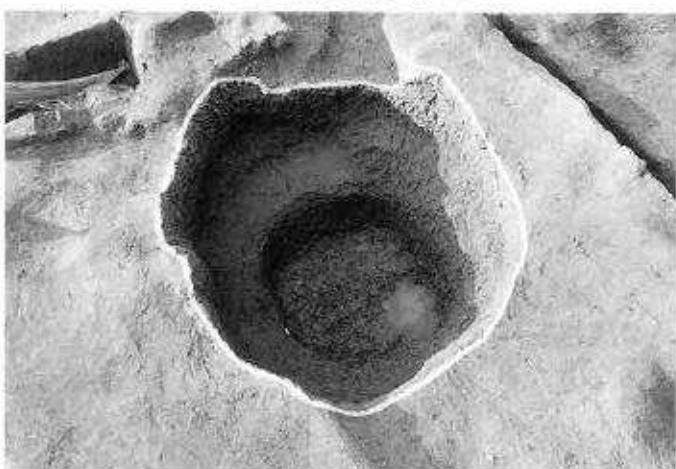
SE094 完掘状況 南から



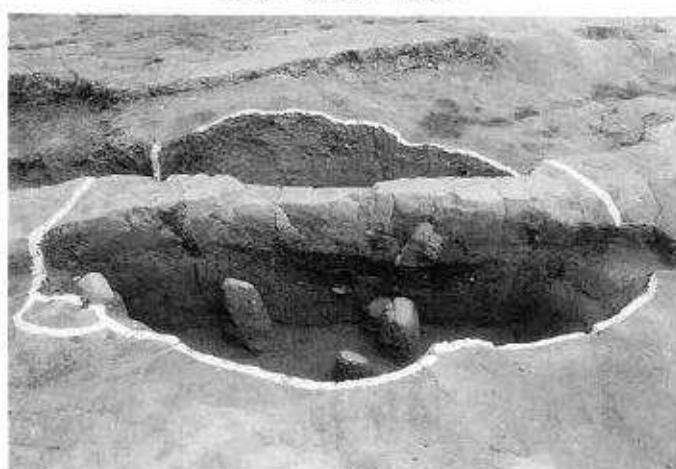
SE094 構出土状況 東から



SE094 土層断面 南から



SE097 完掘状況 東から



SE097 土層断面 南から



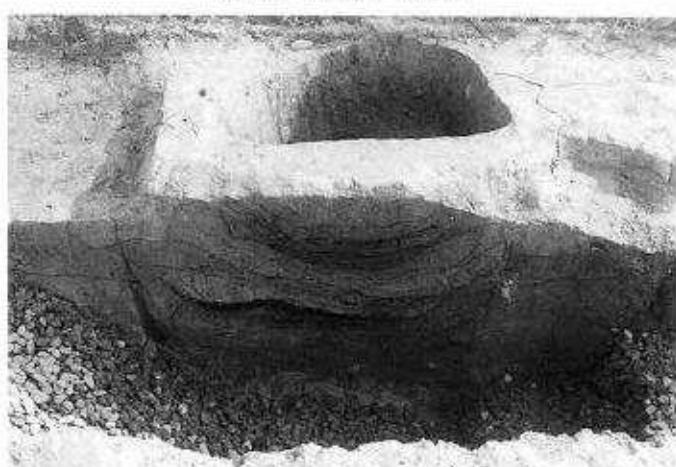
SE102 完掘状況 南から



SE102 土層断面 北から



SE104 完掘状況 北から



SE104 土層断面 北から



SE110 完掘状況 東から



SE110 土層断面 西から



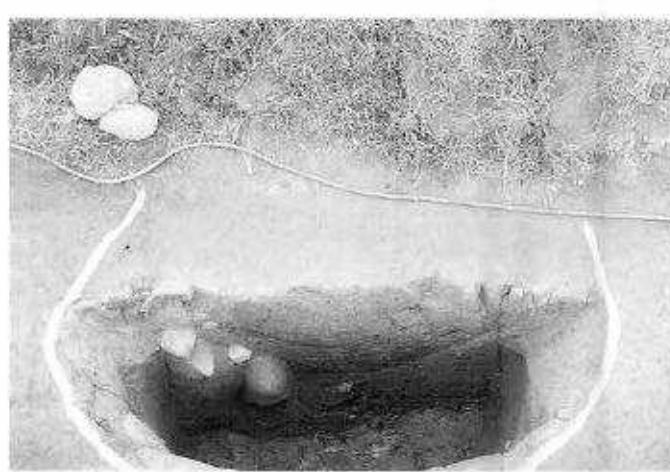
SE181 完掘状況 西から



SE229 完掘状況 西から



SE229 土層断面 西から



SE262 土層断面 西から



SE437 完掘状況 東から



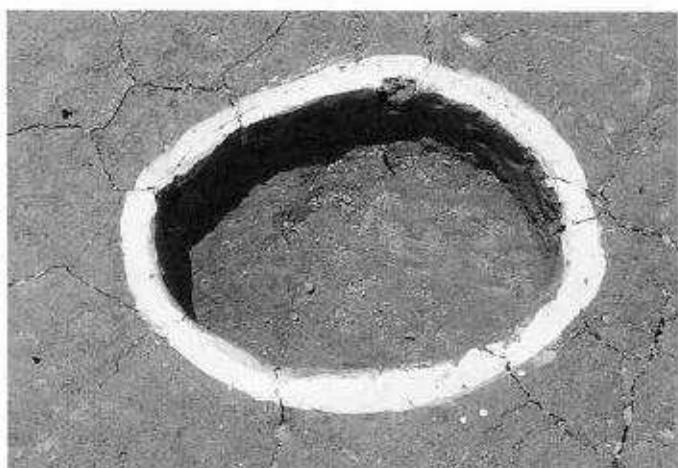
SE437 土層断面 西から



SE511 完掘状況 西から



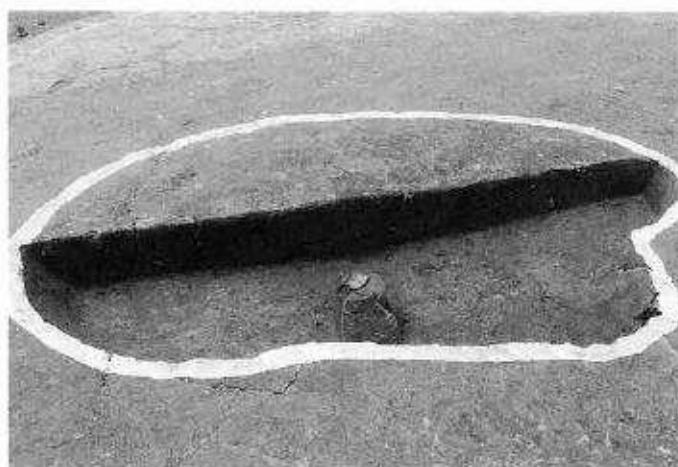
SE511 土層断面 西から



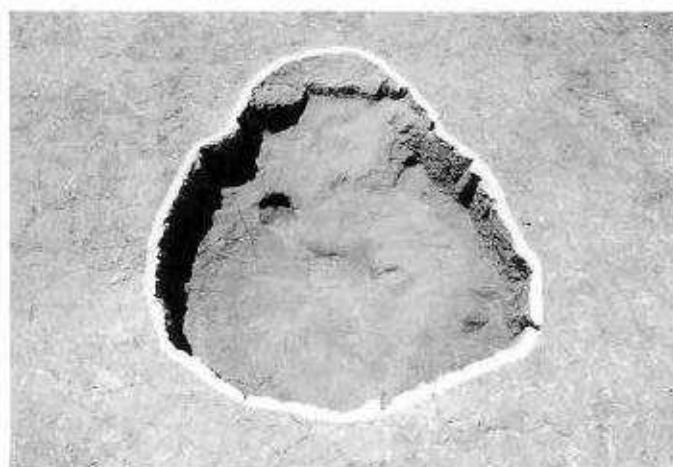
SK002 完掘状況 西から



SK003 完掘状況 南から



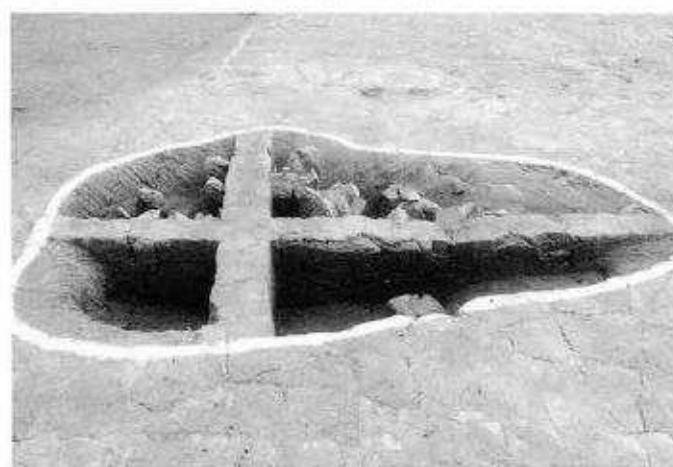
SK003 土層断面 北から



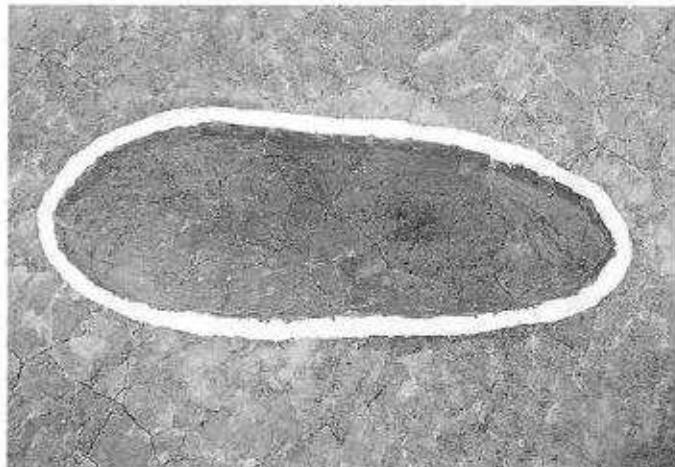
SK005 完掘状況 東から



SK005 通物出土状況 西から



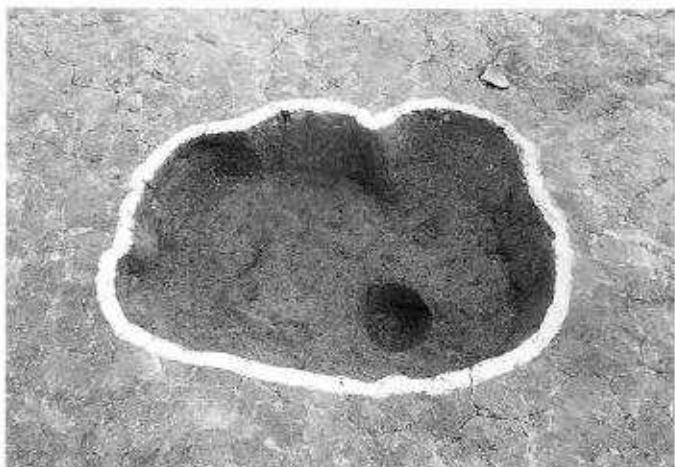
SK005 土層断面 北から



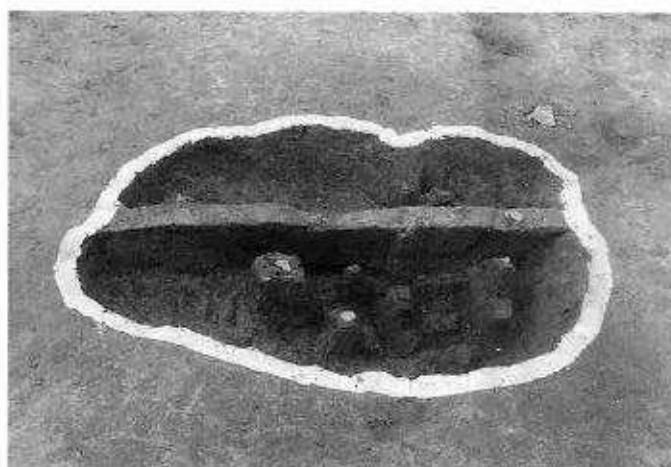
SK009 完掘状況 東から



SK014 完掘状況



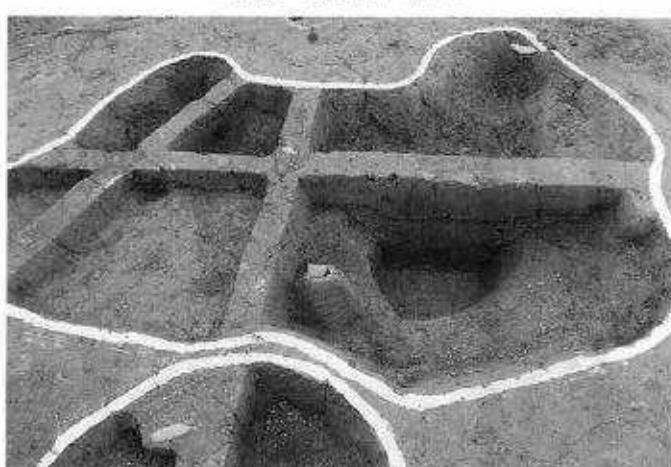
SK020 完掘状況



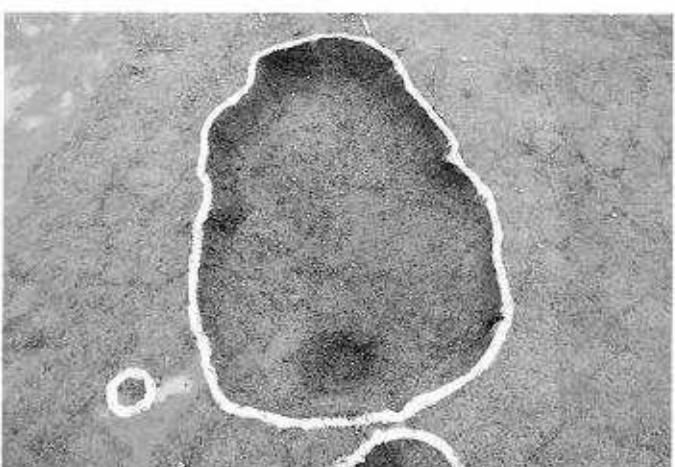
SK020 土層断面 北から



SK034 完掘状況 西から



SK034 土層断面 南から



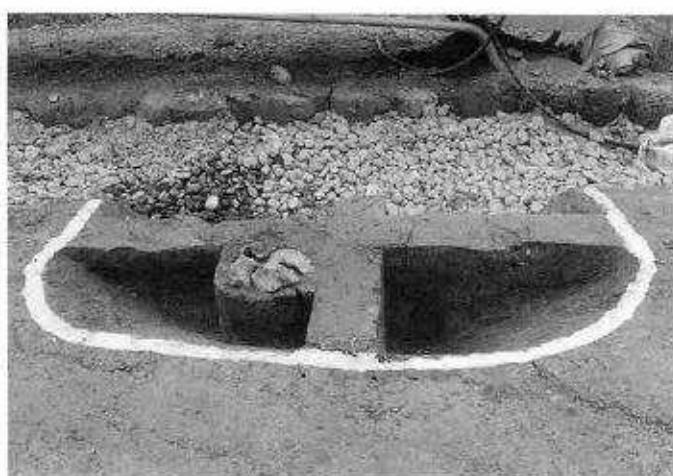
SK043 完掘状況 東から



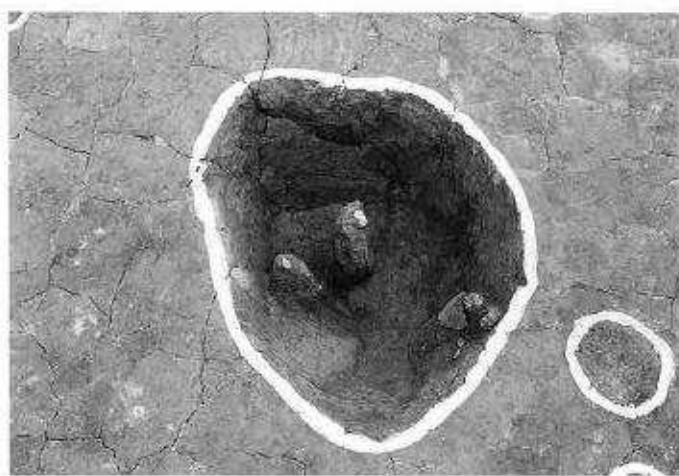
SK043 土層断面 東から



SK054 完掘状況 南から



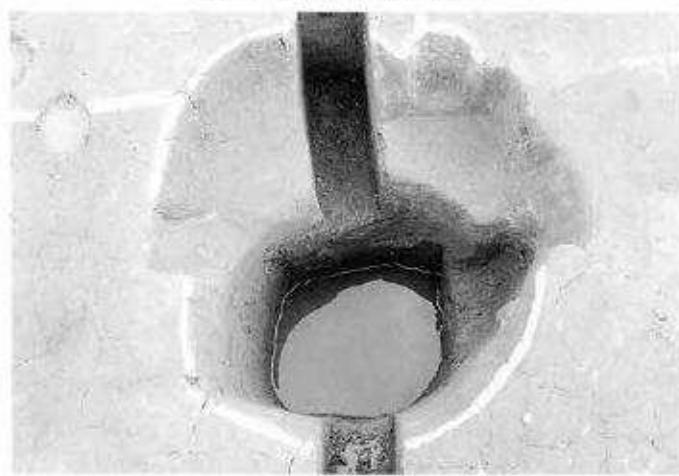
SK054 土層断面 西から



SE059 遺物出土状況 北から



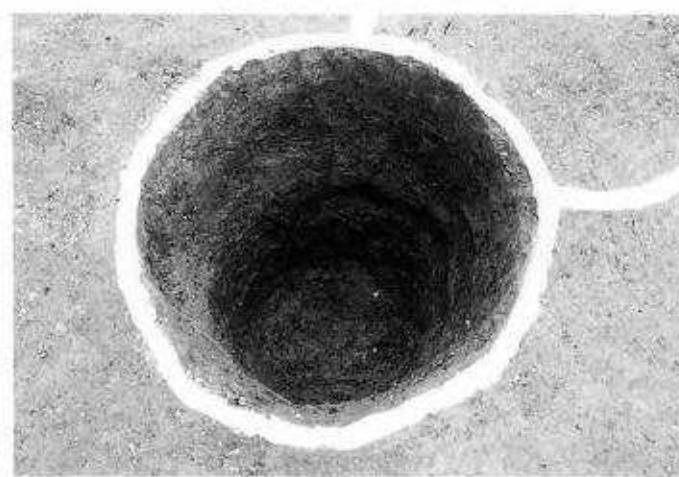
SE059 土層断面 東から



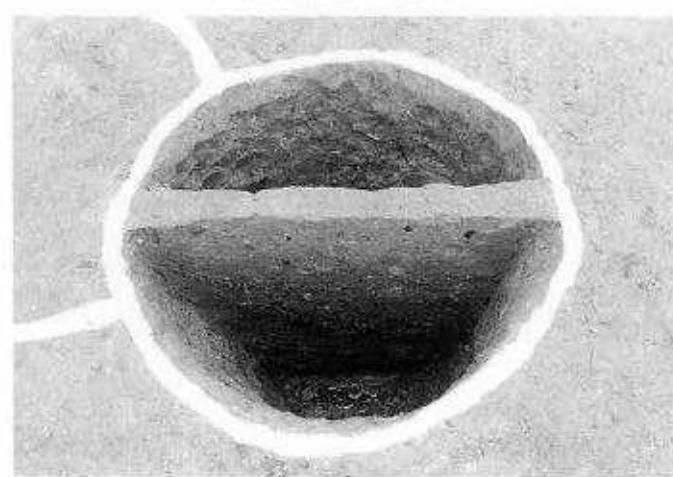
SE059 完掘状況 東から



SK066 完掘状況 東から



SK069 完掘状況 東から



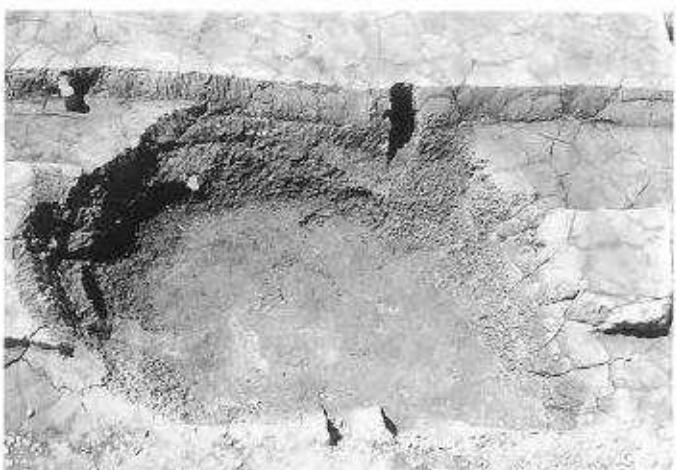
SK069 土層断面 南から



SK086 完掘状況 北から



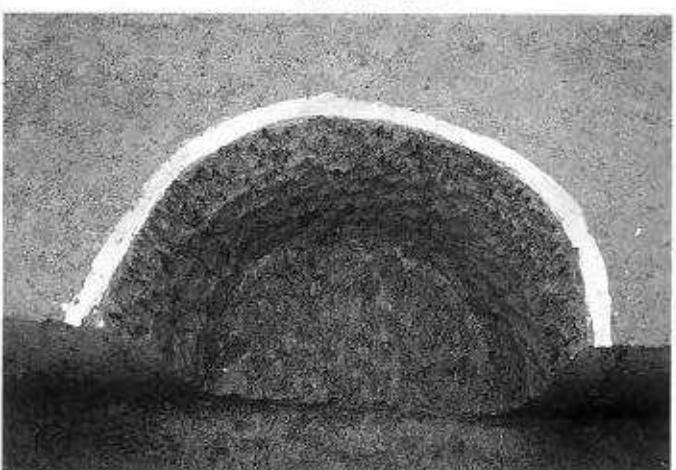
SK098 完掘状況 西から



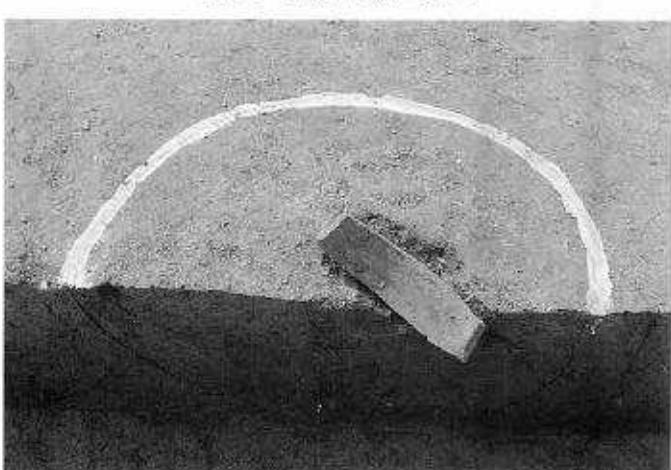
SK108 完掘状況 西から



SK108 遺物出土状況 西から



SK486 完掘状況 北から



SK486 土層断面 北から



SD006 土層断面 南から



SD016 土層断面 北から



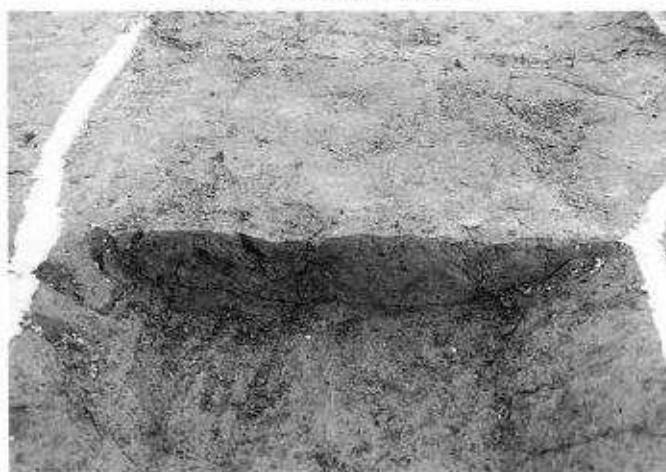
SD024 遺物出土状況 北から



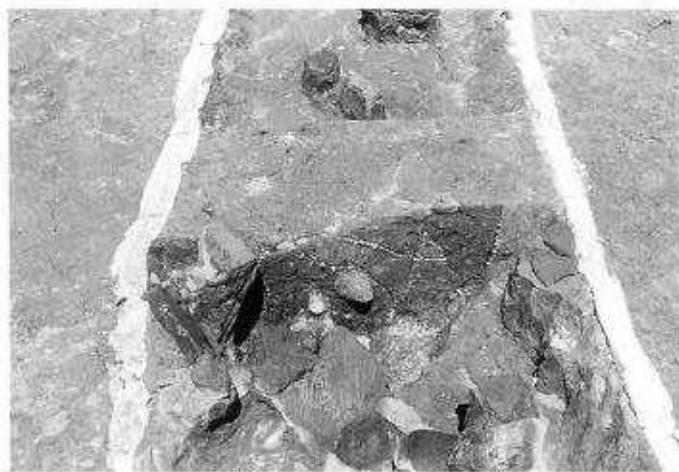
SD024 遺物出土状況 南から



SD025 土層断面 南から



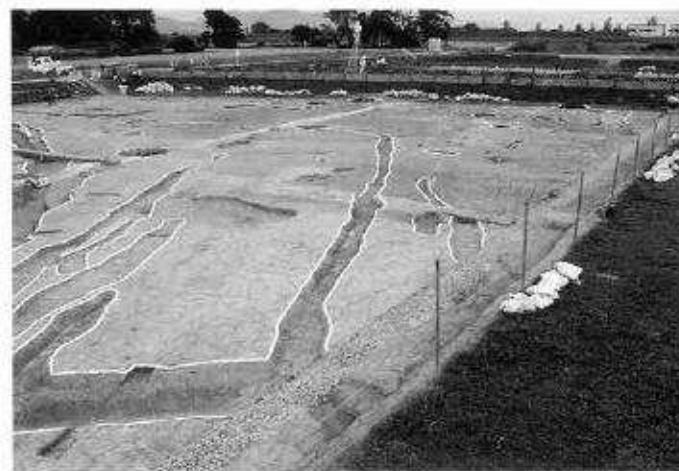
SD026 土層断面 南から



SD027 土層断面 東から



SD024・041 土層断面 東から



SD027 完掘状況 北から



SD027 遺物出土状況 南から



SD041・042 完掘状況 北から



SD041 完掘状況 西から



SD109 完掘状況 西から



SD490 完掘状況 西から



SD490 土層断面 西から



SD490 土層断面 西から



SD490 遺物出土状況 西から



SD490 遺物出土状況 西から



SD521 しがらみ 東から



SD521 しがらみ 東から



SD521 しがらみ正面 東から



SD521 しがらみ 南から



SE092 完掘状況 西から



SE090・SX099 完掘状況 北から



SE090 木枓 東から



SE090 稲り影 西から



SE090 木枠南西隅結合部 南から



SE090 木枠北西隅結合部 北から



SE090 木枠南東隅結合部 南から



SE090 木枠北東隅結合部 北から



SX520 完成状況 南から



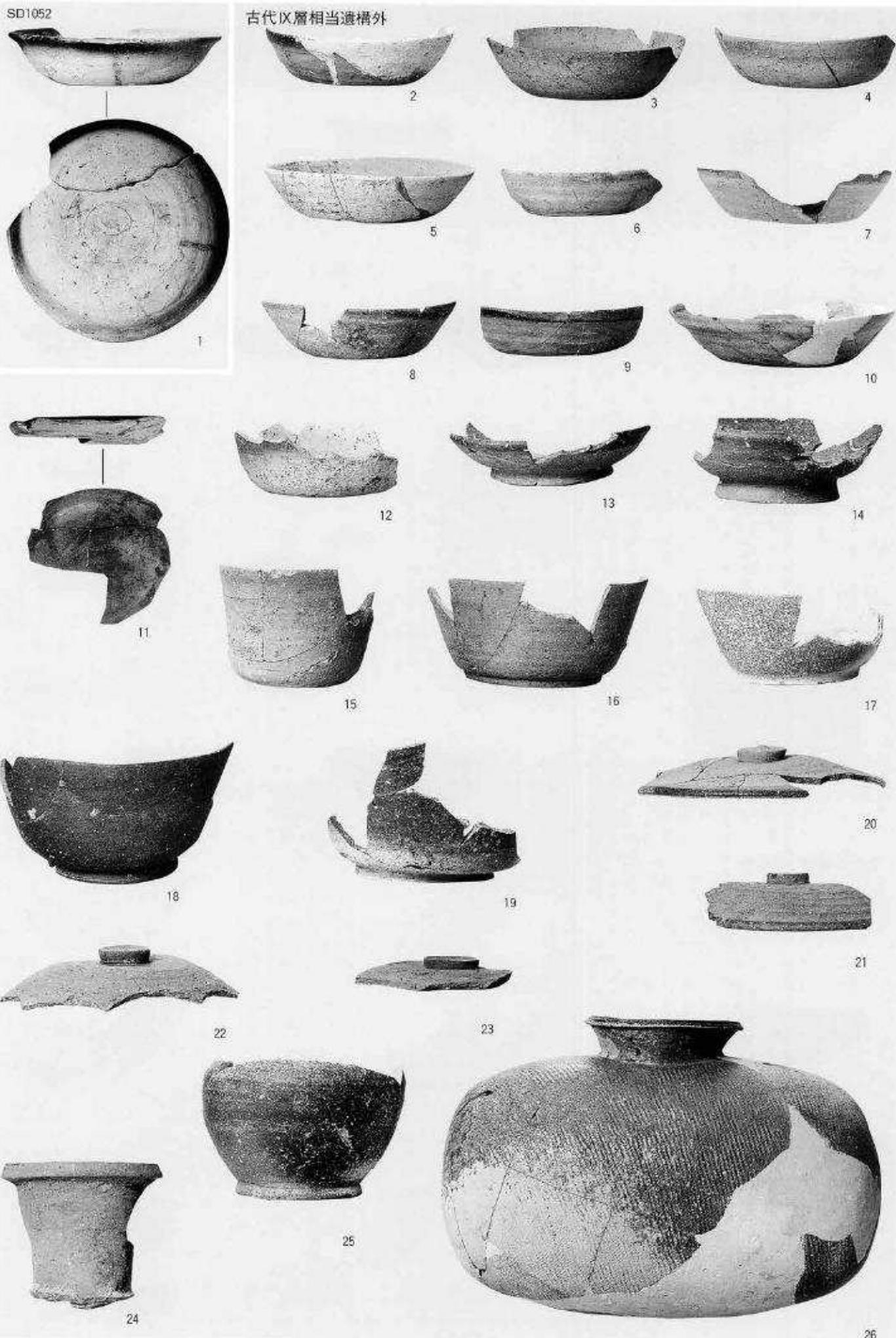
SX520 土層断面 南から



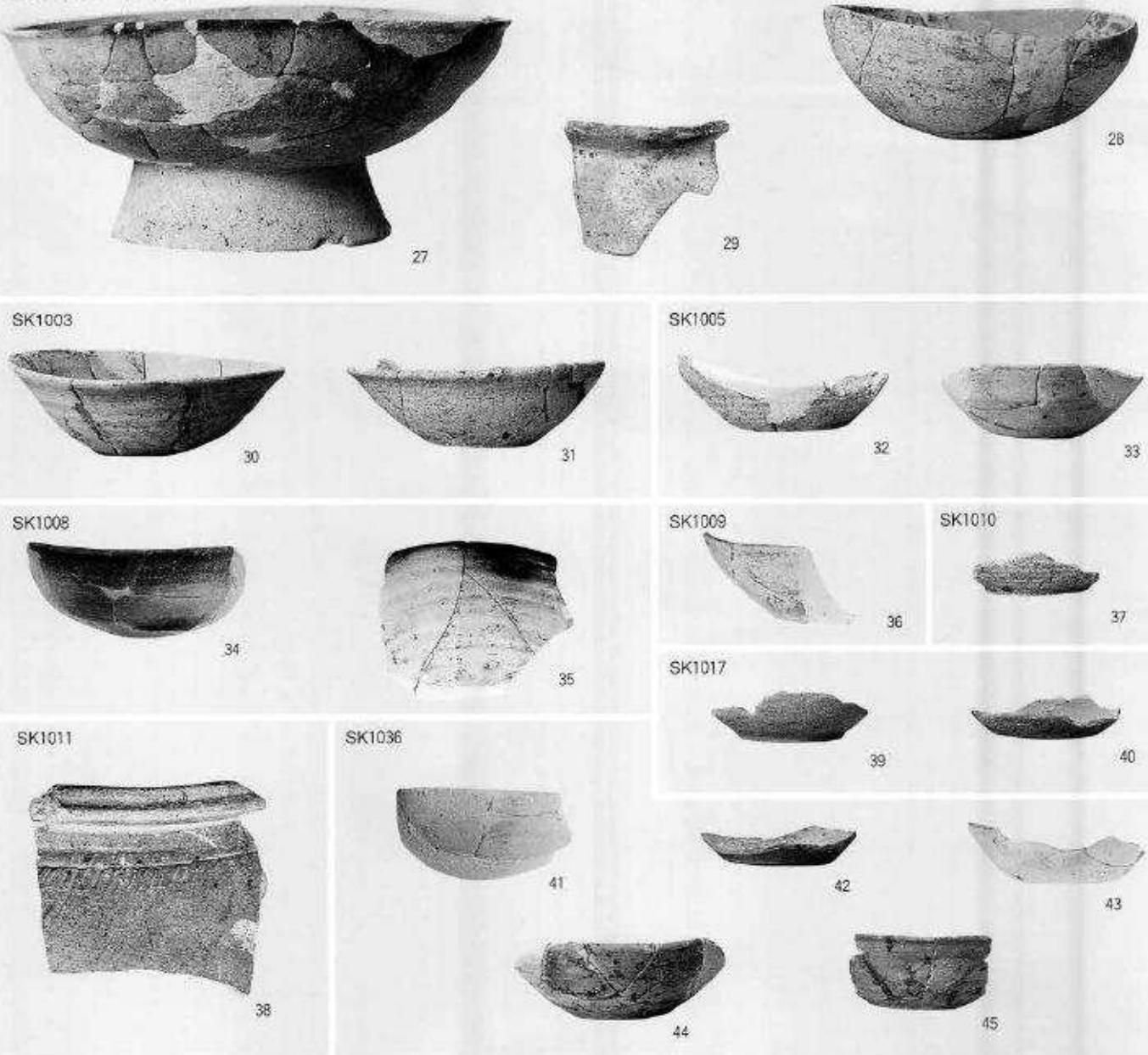
SX100 検出状況 南から



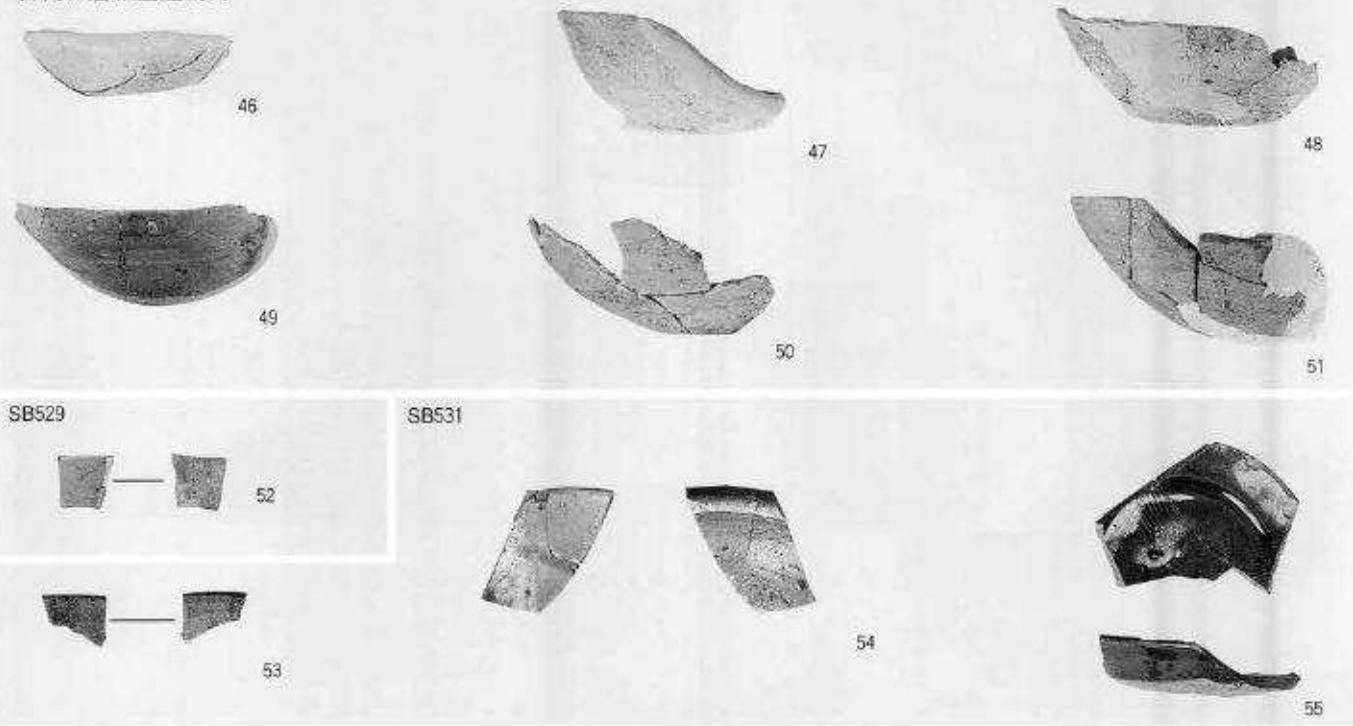
SX100 断面 西から

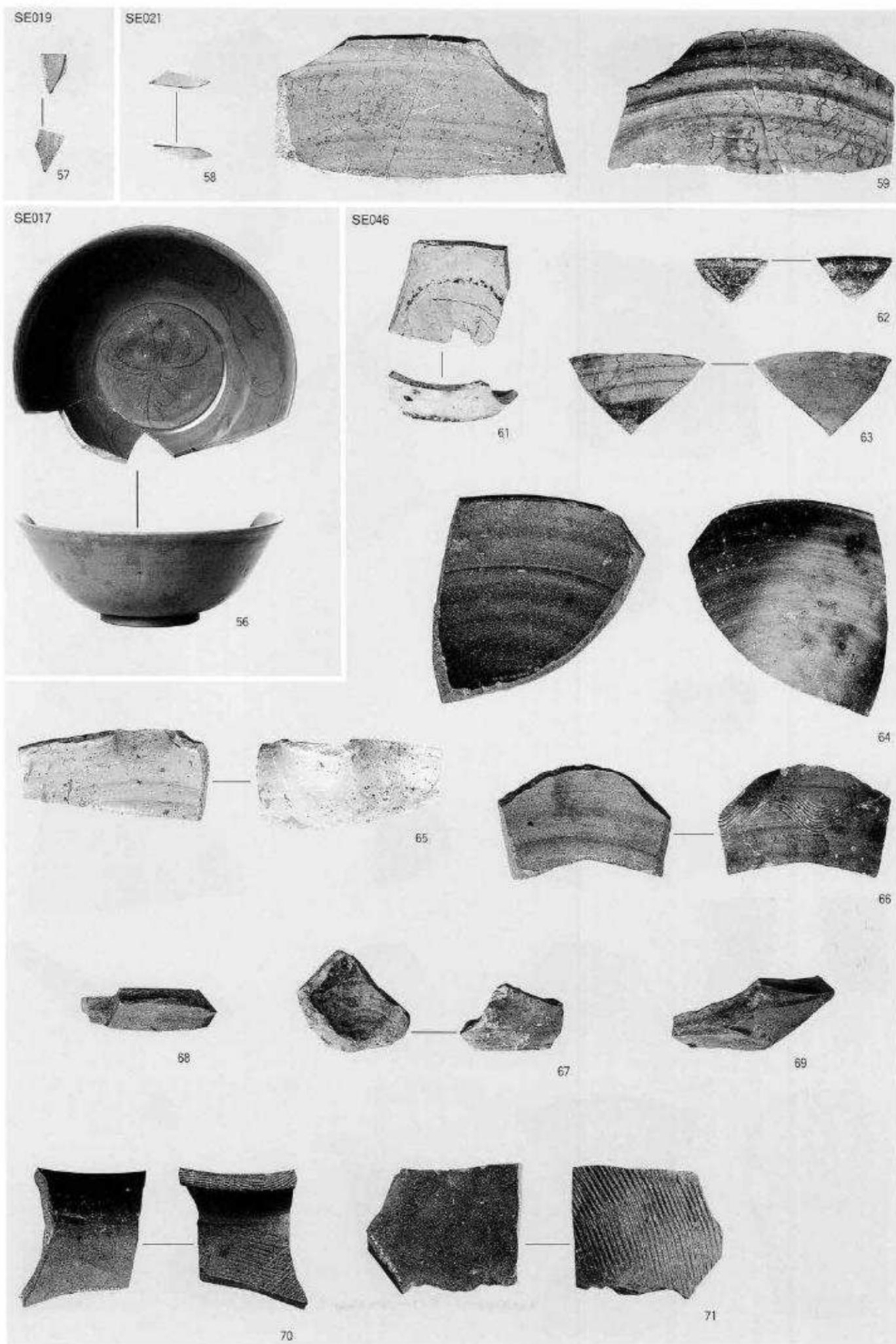


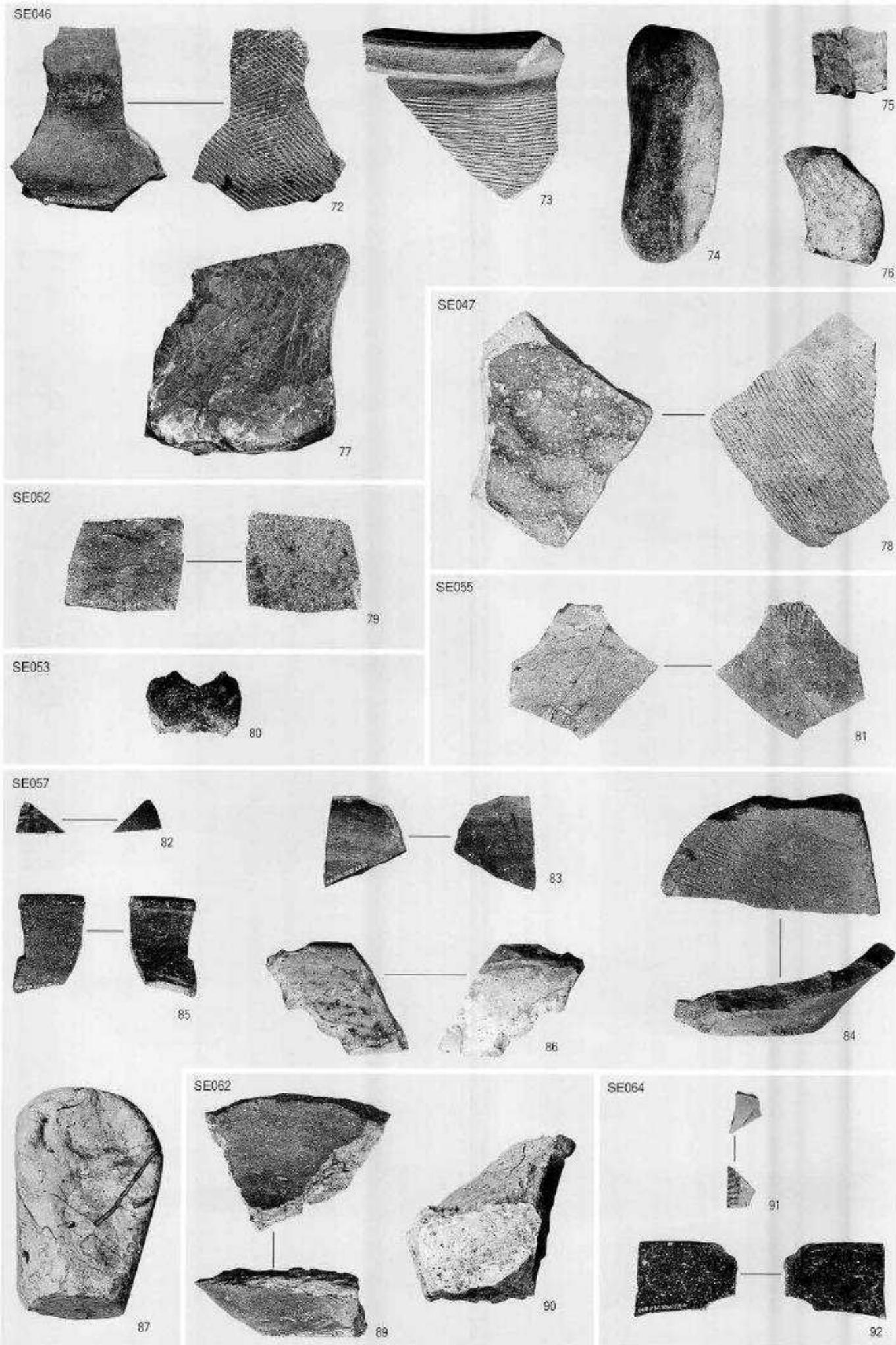
古代IX層相当遺構外

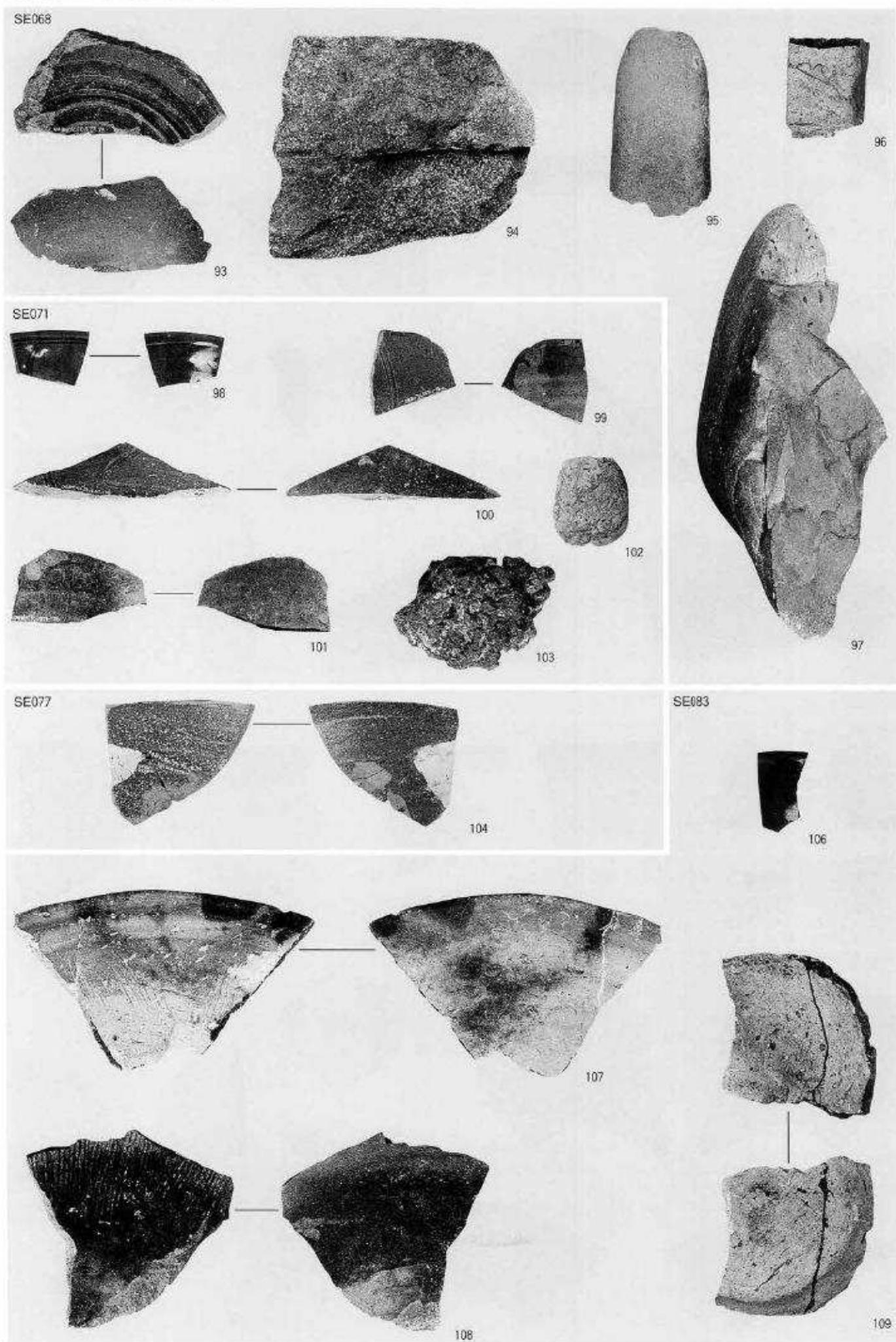


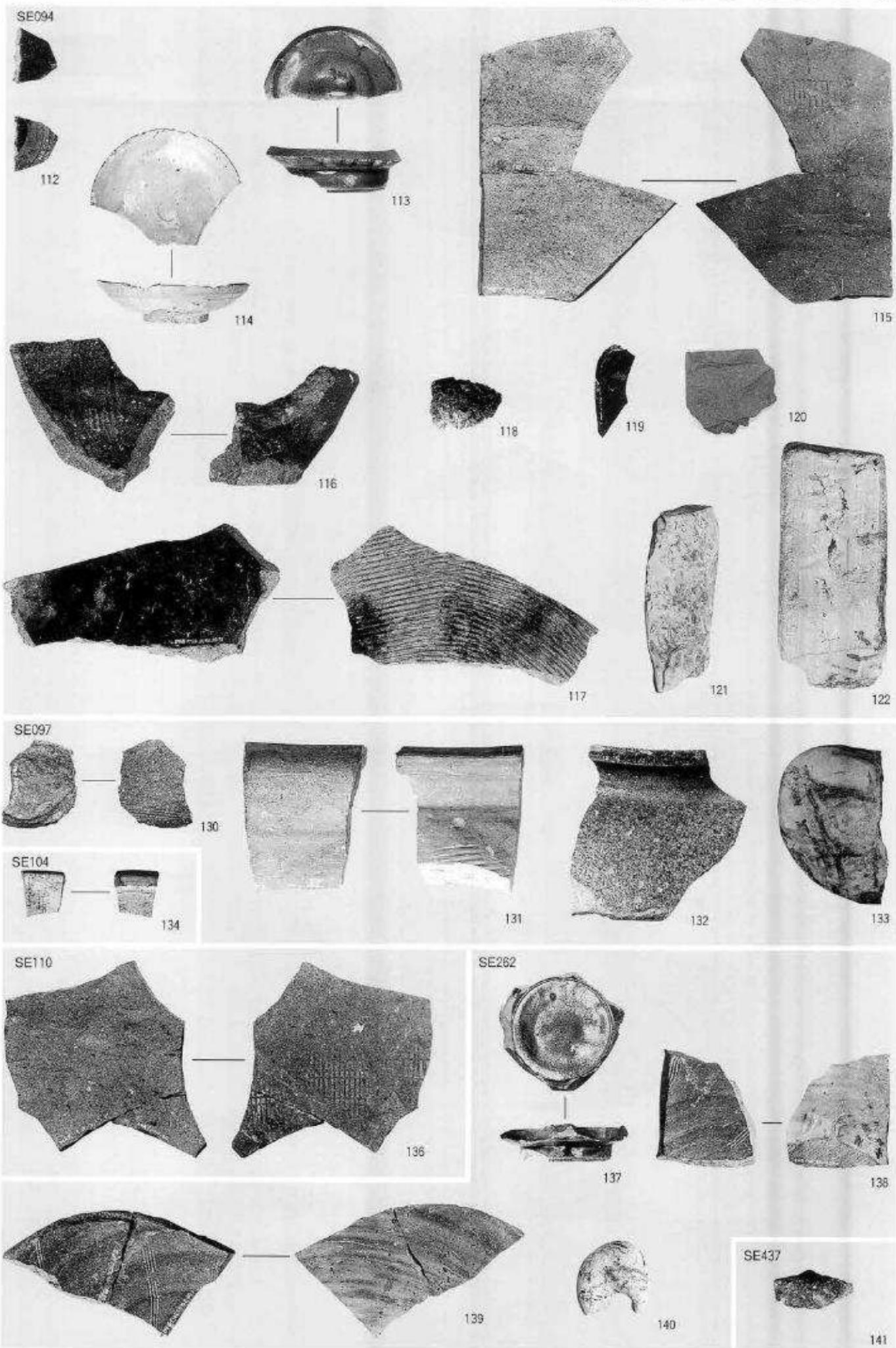
古代VII層相當遺構外

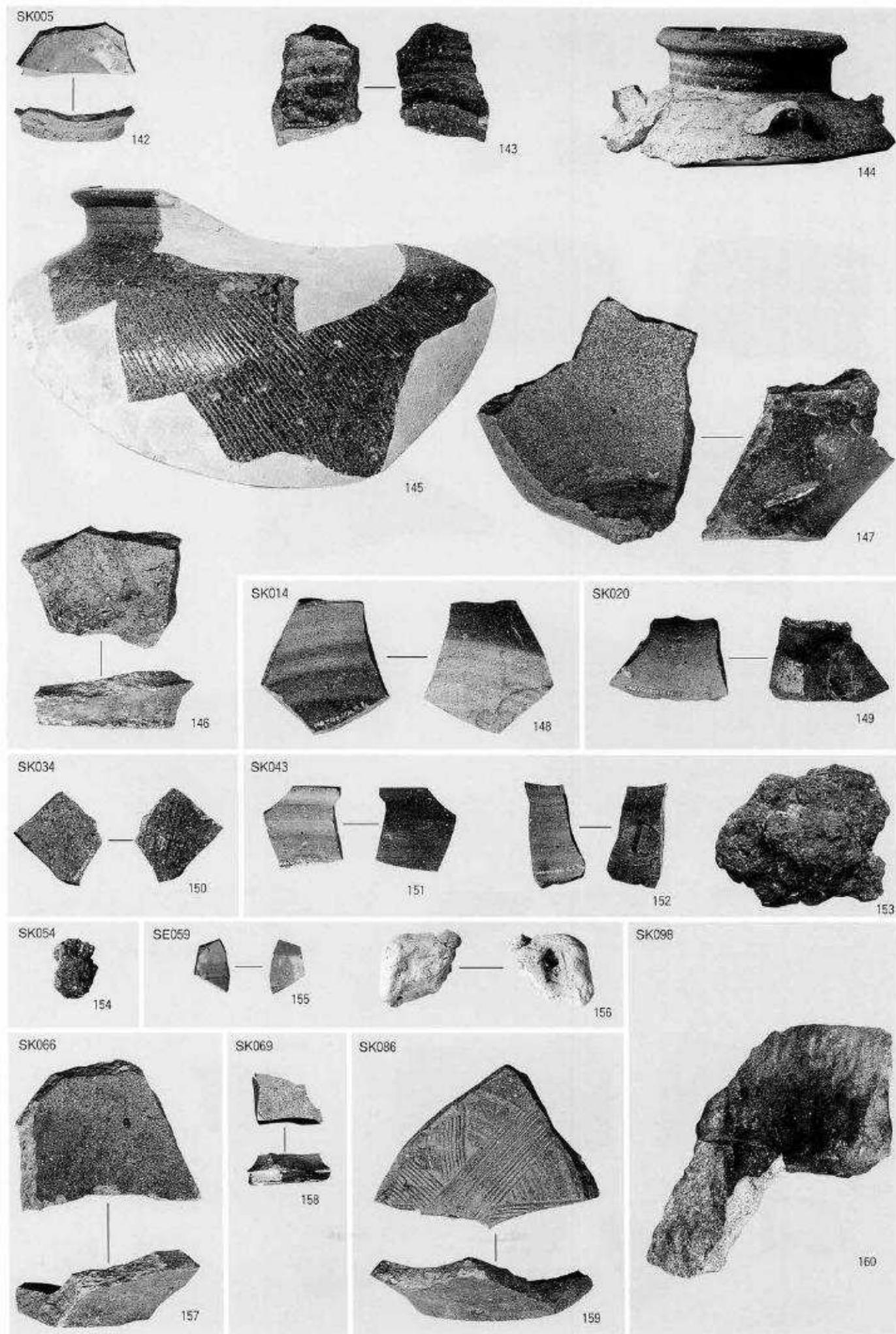


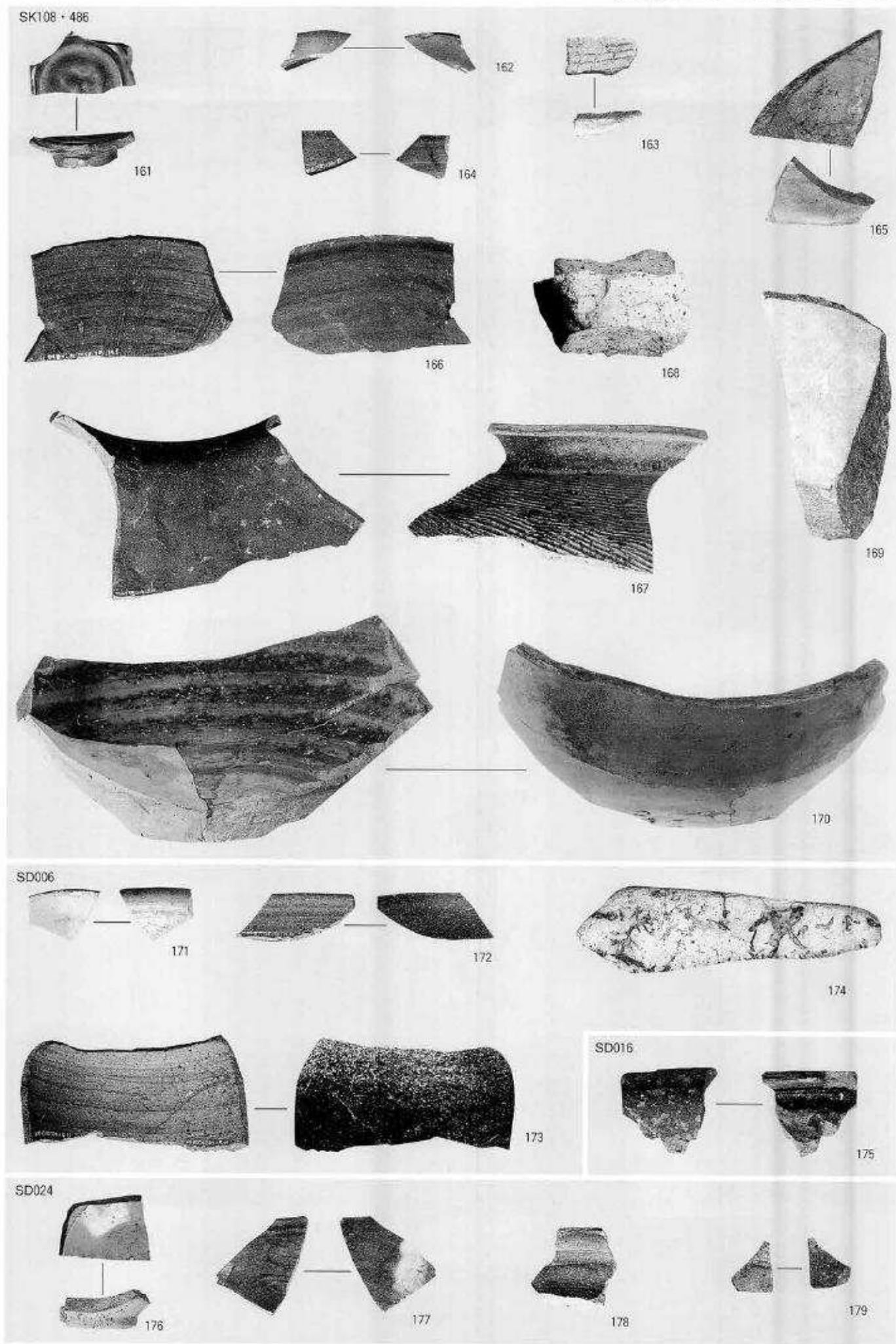




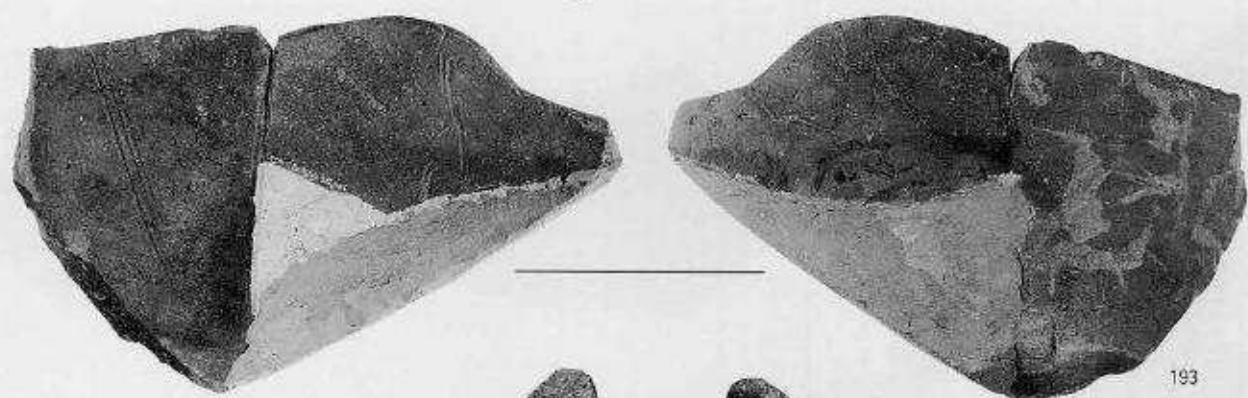
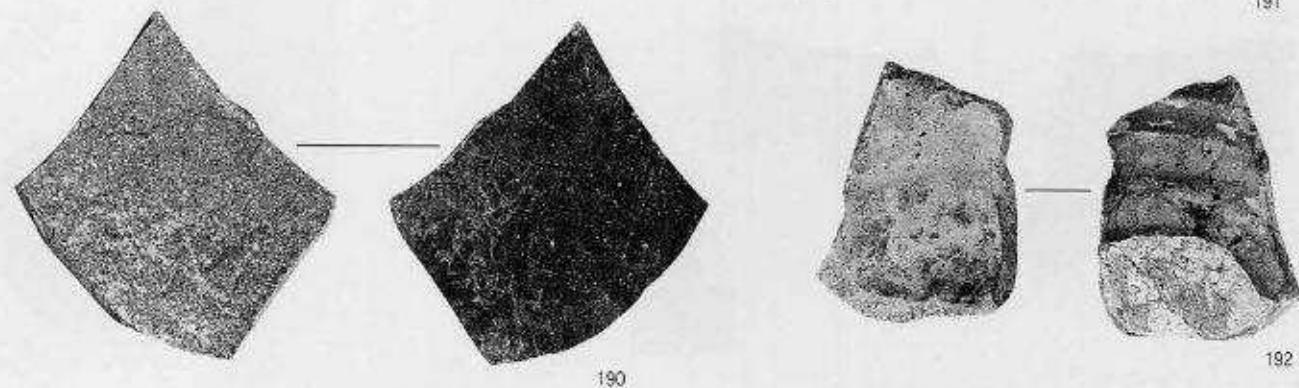
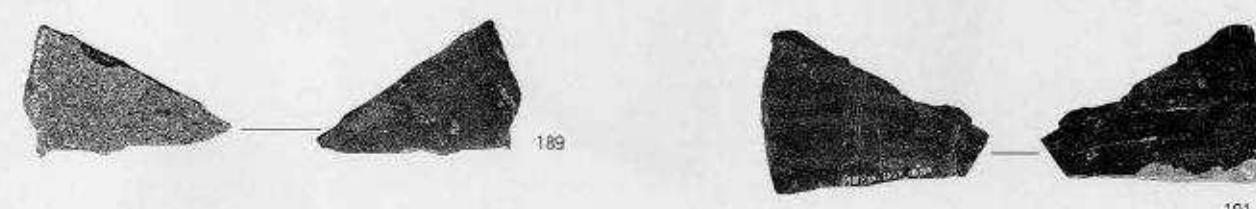
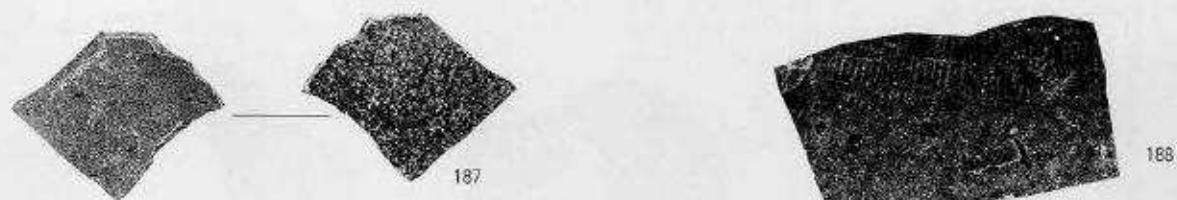
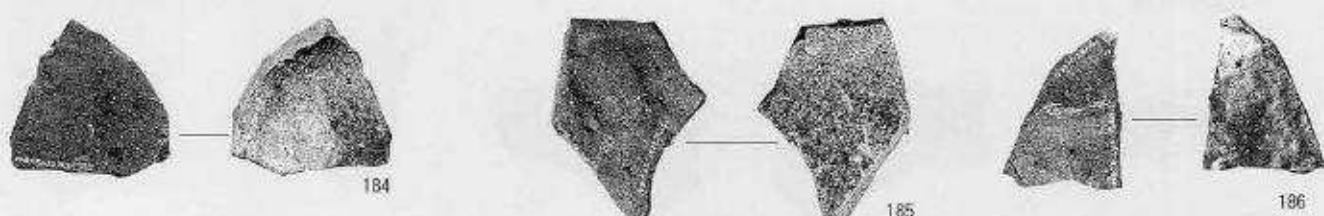


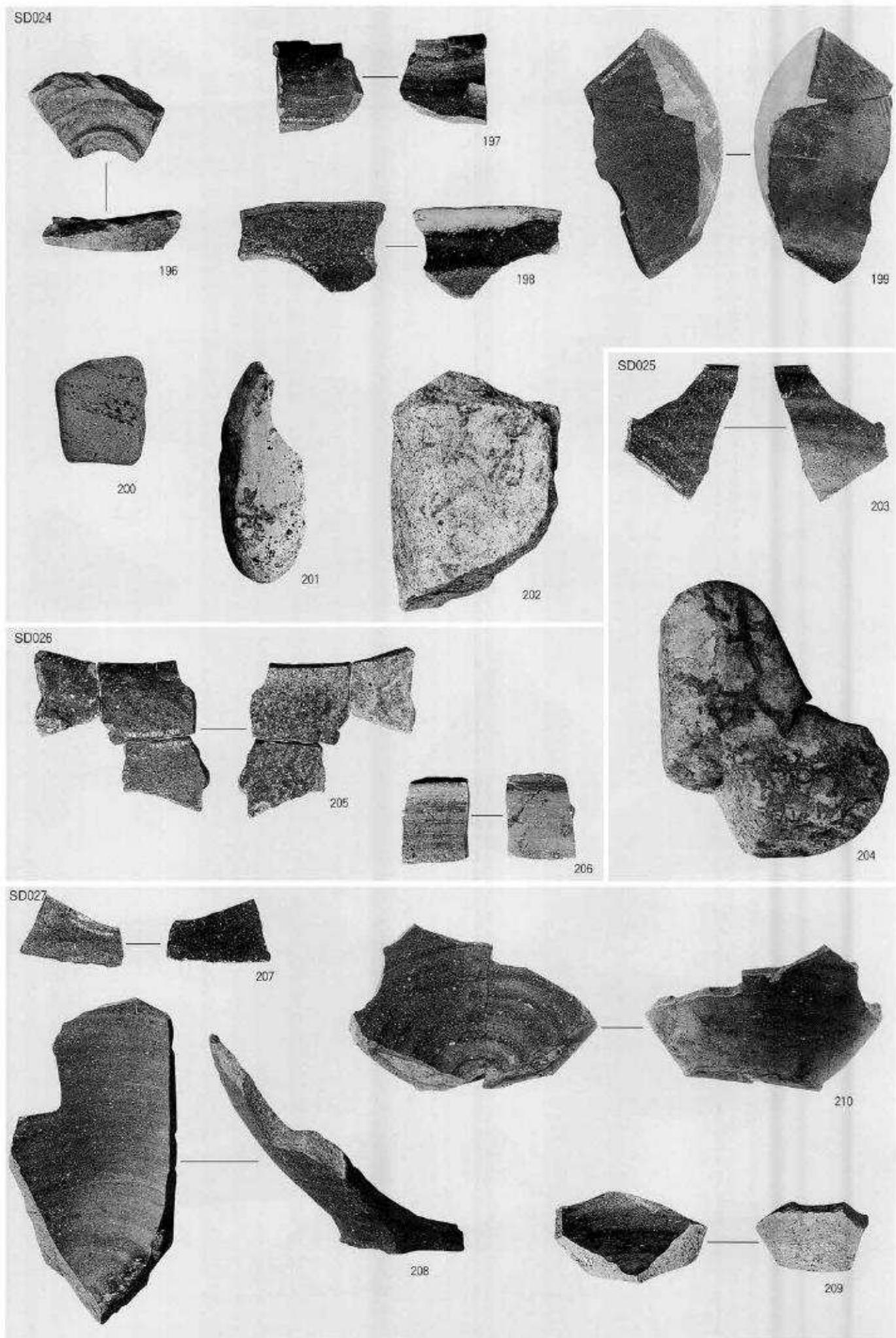




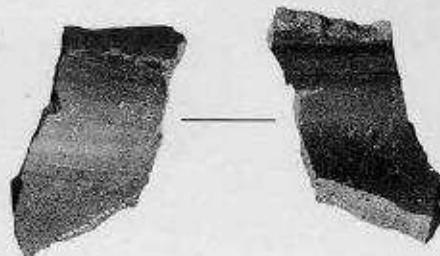


SD024





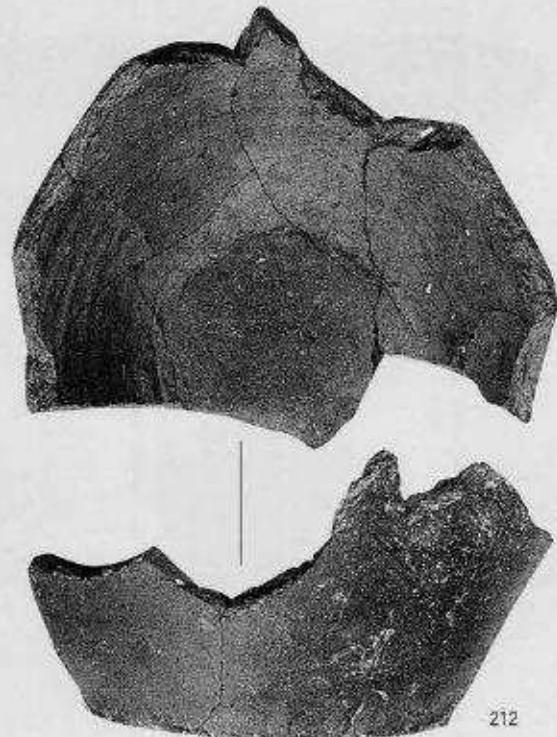
SD027



211

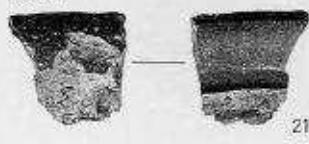


213

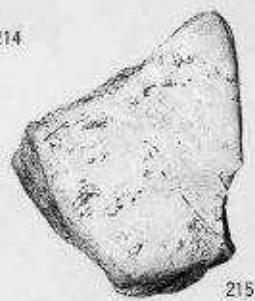


212

SD041

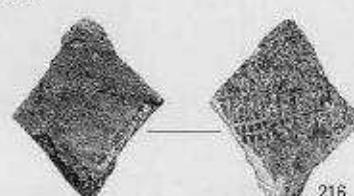


214

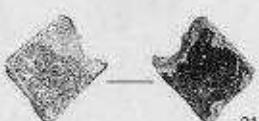


215

SD049



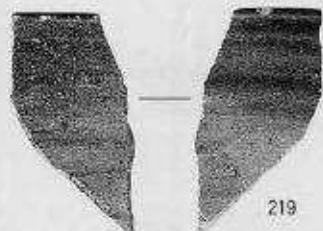
216



217



218



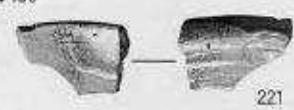
219

SD109



220

SD490



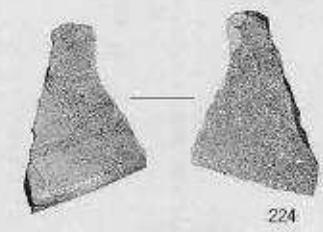
221



222



223



224



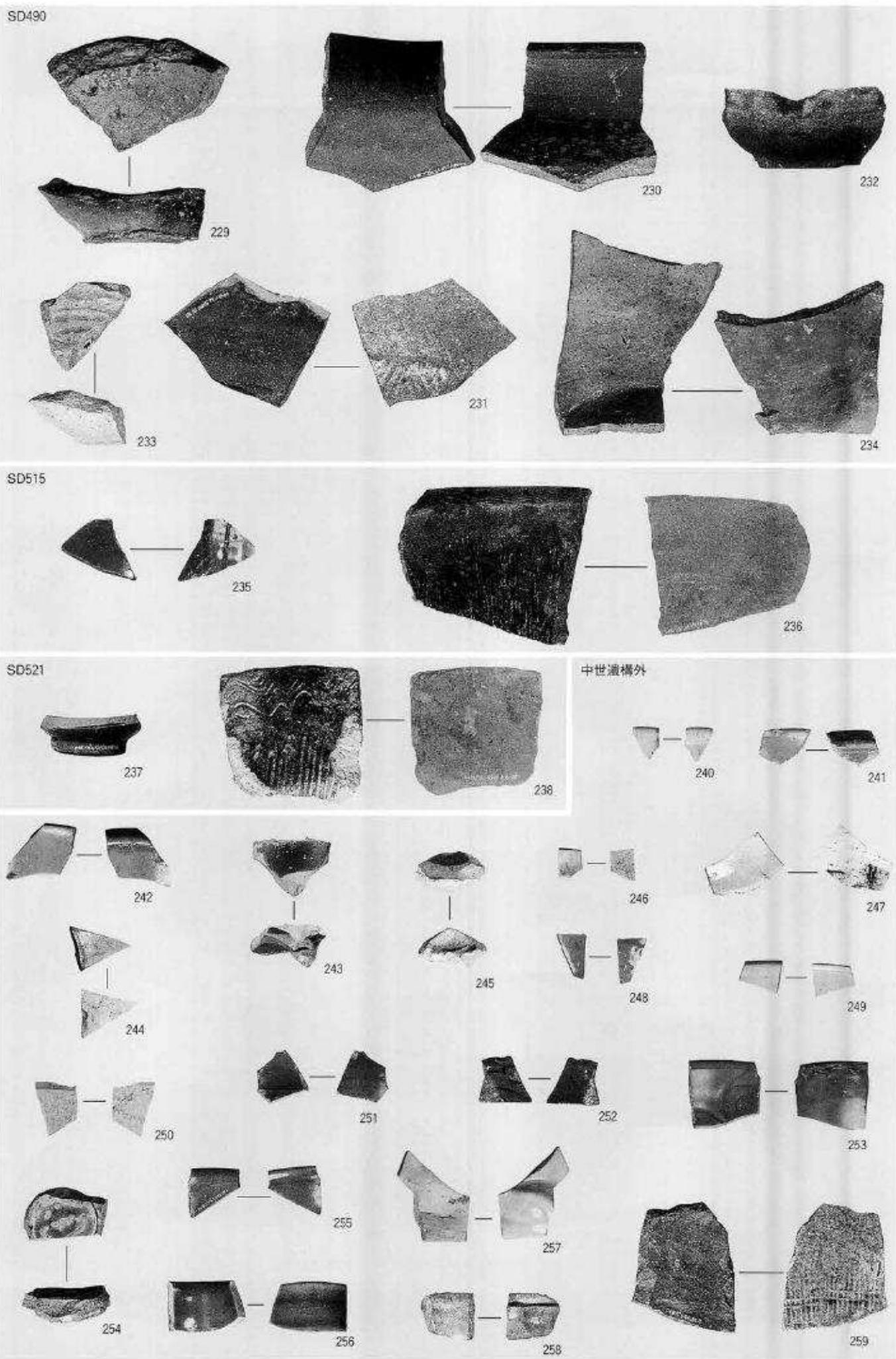
225



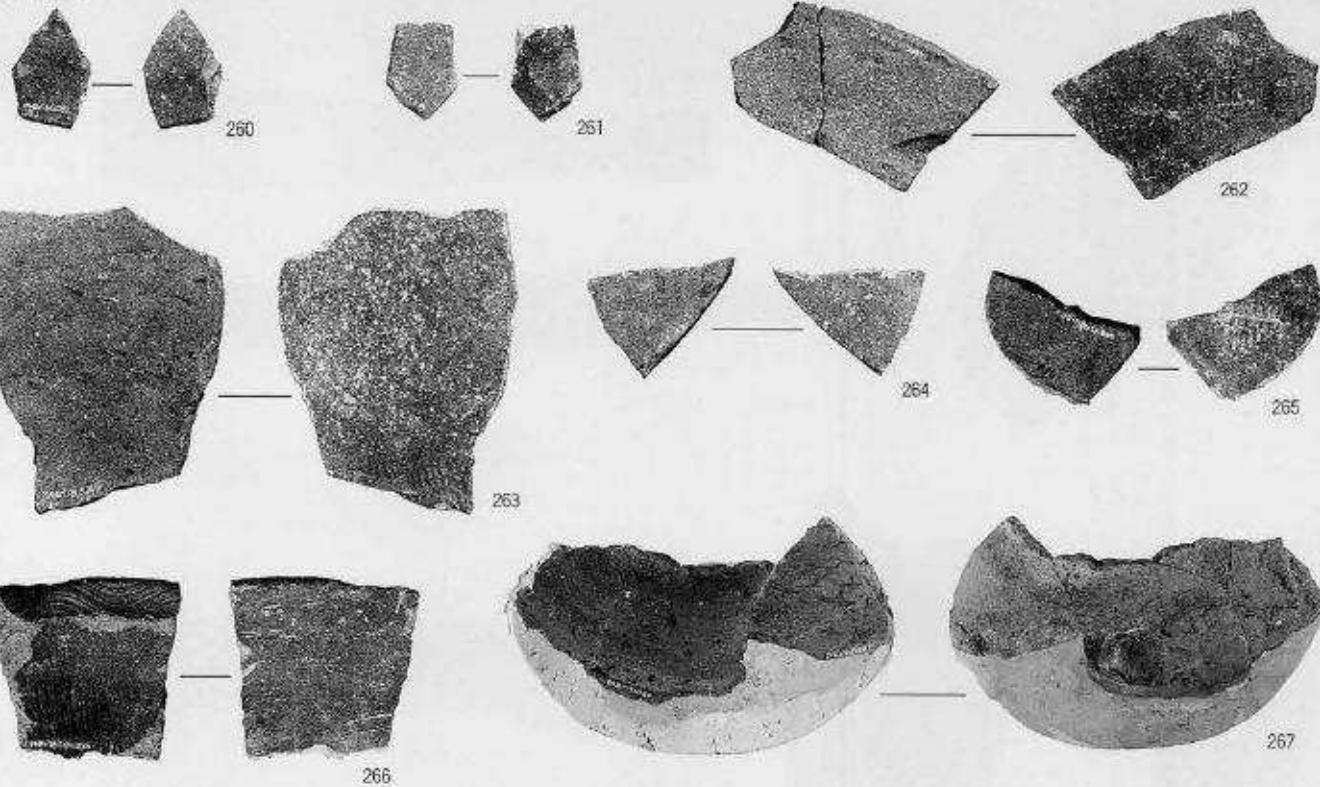
226



228



中世遺構外



SX001



273

SX010



274

SX023



275

近世遺構外



309



310



311



312

SX099



280



281



282

漆紙・木製品

SE040



SE083



110



111

SE057



88

SE077

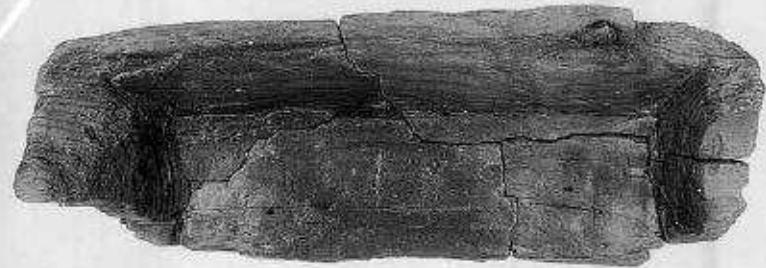


105

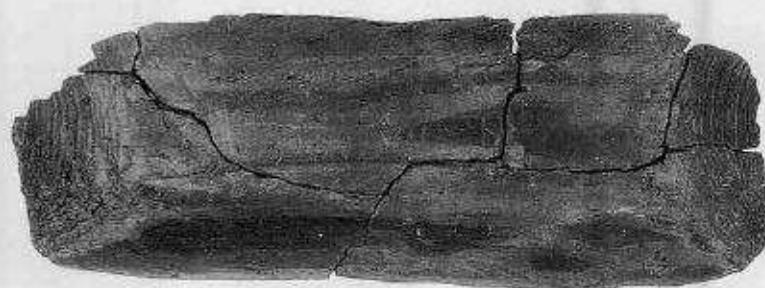
SE094



125



124



129



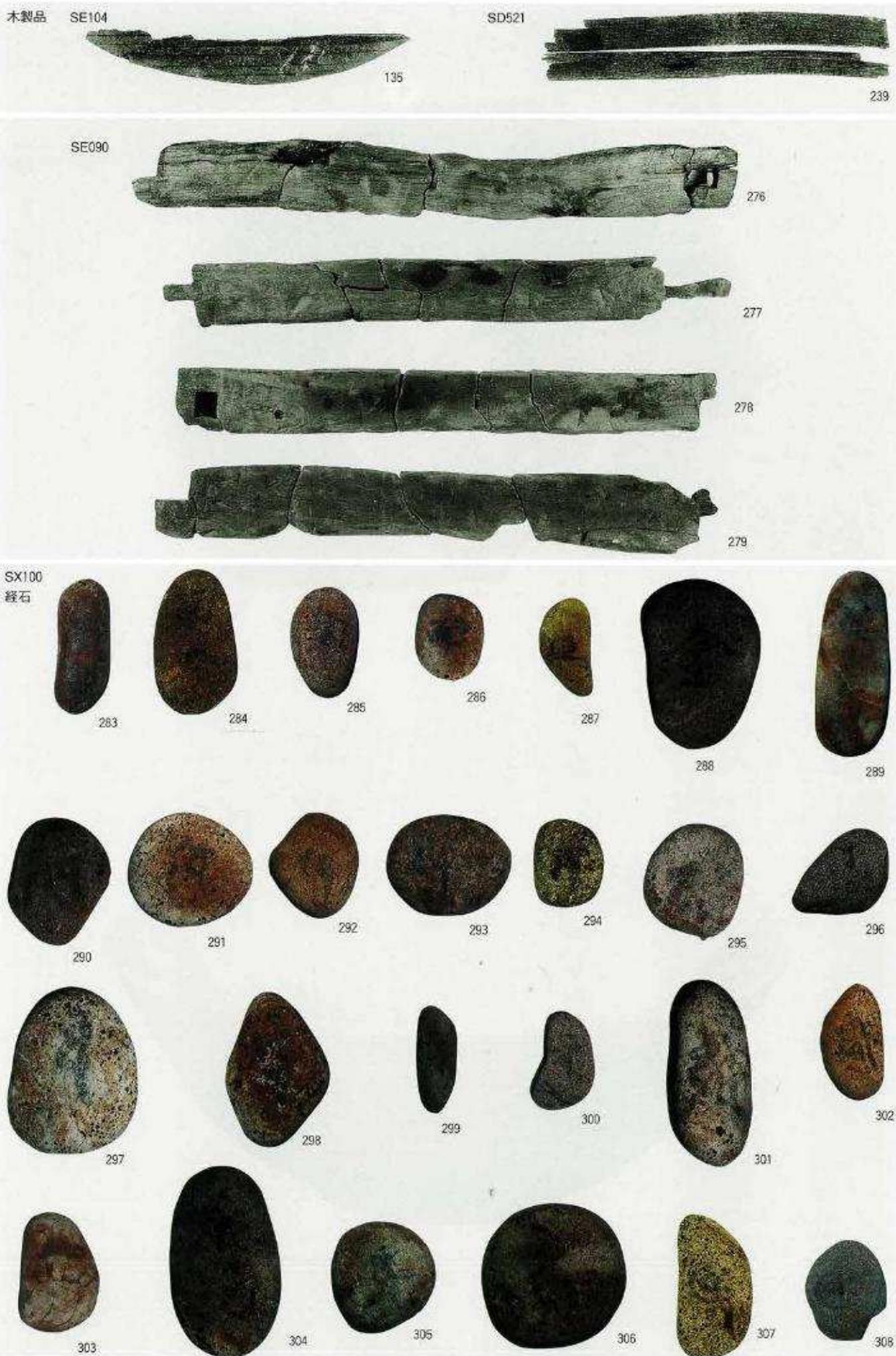
126



127



128





報告書抄録

ありがな	せいぶいせきいち							
書名	西部遺跡I							
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書							
巻次	XII							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	折原洋一・近江屋成陽・間宮政光・千葉孝之(以上、有限会社山武考古学研究所) 鈴木俊成(以上、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団)							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 有限会社山武考古学研究所							
所在地	〒956-0845 新潟市大字金津93番地1 TEL 0250-25-3981 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 TEL 0476-24-0536							
発行年月日	西暦2005(平成17)年7月29日							

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"/>	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せいぶいせき 西部遺跡	にいがたけいわるなじんかみはやくら 新潟県岩船郡神林村 おおと牛屋字 せいぶ 西部1192ほか	15583	112	38度 08分 51秒 (旧座標)	139度 26分 17秒 (旧座標)	2004.04.07 ~ 2004.12.22	11,410 m ² 中世5,530m ² 古代Ⅱ1,958m ² 古代Ⅲ1,958m ² 下層試掘1,964m ²	日本海沿岸 東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西部遺跡	集落	平安時代(9世紀)	土坑7基、溝4条、ピット5基	土師器、須恵器	2条が直線的に並行して走る溝を検出。
	集落	平安時代(10世紀前半)	土坑40基、ピット6基	土師器	土坑群
	集落	中世 12世紀中頃～後半 13世紀初頭前後 ～前半 15世紀前半～後半	掘立柱建物5棟、井戸41基 土坑60基、溝23条、ピット363基	珠洲焼、常滑焼、古瀬戸、中国輸入陶磁器、砥石、硯、羽口、鉄滓、漆紙、曲物、把手、椀、柄、槽	特に12世紀中頃から13世紀初頭にかけての遺物が多量に出土。
	集落	近世	井戸2基、集石遺構2基、溝1条 凹地遺構6基、畠状遺構23条	肥前系染付、石臼、経石、煙管、錢貨、釘	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第148集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XII

西部遺跡 I

平成17年7月28日 印刷
平成17年7月29日 発行

発行 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市新光町4番地1
電話025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 松本印刷工業株式会社
〒371-0025 群馬県前橋市紅葉町1丁目12番3号
電話 027(221)5015
FAX 027(224)8082

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第148集『西部遺跡Ⅰ』 正誤表 2019年9月追加

頁	位置	誤	正
図版71	左列 上から1枚目	S K 1 0 2 0	S K 1 0 2 5
図版76	左列 上から1枚目	S E 0 1 7	S E 2 2 9
図版81	左列 上から3枚目	西から	南東から
図版85	左列 上から3枚目	西から	南から
図版89	左列 上から2枚目	西から	東から
抄録	所在地	新津市大字金津	新潟市金津
抄録	東経（旧座標）	1 3 9 度 2 6 分 1 7 秒	1 3 9 度 2 6 分 1 3 秒